
ウラバン！～S F 好色一代男～

万墨人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウラバン！〜SF好色一代男〜

【Nコード】

N0919S

【作者名】

万墨人

【あらすじ】

井原西鶴の『好色一代男』に描かれた、但馬世之介七十七代目の世之介は、父親に「十八才の誕生日までに、童貞を卒業しないと、廃嫡勘当を申し渡す！」と言い渡される。何とか童貞を卒業するため、女だけの惑星「^{アマゾン}尼孫星」を目指すため、宇宙船に乗り込むが、到着したのはツツパリ・ヤンキーがうじゃうじゃ棲んでいる「番長星」だった！

世之介は、何とか地球へ戻るため、この「番長星」で思いもかけない、冒険を経験するのだった……。

この小説の世界観に疑問が出たら、『温故知新〜ウラバン前史〜』
をお読み下さい。世界設定を説明するための章ですが、人によって
は煩く感じるのではないかと、別の短編としてアップしています。

卒業式

「但馬世之介……！ 前へ出ませい！」

物憂げな校長の声が講堂に響き、世之介はさつと立ち上がると、慎重な足取りで前へ進み出た。

世之介、という珍しい名前に、講堂の背後の庭先に、ぞろりと控えている卒業生の親たちの物珍しげな視線が背中に集中するのを感じ、それでも真っ直ぐ前を見て世之介は校長の前へ進み出た。

但馬世之介、十七歳。今年、高等学問所を卒業である。手足が長く、色白で、どこことなく育ちの良さ故の頼りなげな印象を与えている。髪は短めにさっぱりと刈り上げ、きちんと櫛が入れられている。

高等学問所は、かつて高等学校と呼ばれていて、内容は変わらない。筒袖の上着に袴が制服で、講堂は百畳敷きほどの和風建築だ。男は筒袖袴だが、女子は振袖に袴穿きである。学制改革で、小学校は「初等手習い所」となり、中学になって「中等学問所」と変わったが、中身は旧制と同じである。

講堂は一面畳敷きで、全員正座をしている。

作法通り、世之介は足を滑らせるように前へ進み出ると、校長の前に一礼して着座した。

校長は卒業証書の替わりに羽織を着せ掛ける。これで世之介は卒業を認められたのだ。高等学問所で男は羽織が、女子は懷刀が卒業証書となっている。

東京が江戸となり、国会が幕府となって、世の中のあらゆる仕組みは江戸時代を規範に再現された。

だが、それまでの旧制を抵抗なく新たな仕組みに組み込むため、色々と奇妙な習俗が出現した。今の卒業式もそうだ。江戸時代には様々な学問所があったが、卒業式なるものは存在しなかった。幕末、一部の私塾でそのような儀式があったらしいが、一般的ではなかったという。

しかし、卒業式がないのは、どうにも落ち着かない。結局、こんな形になって残っている。

進路

羽織姿になった世之介は、再び自分の席に戻り、次々と卒業生の名前が呼び出されて式が滞りなく進行して行くのを、待ち受ける。

講堂の高い場所から開けられた連枝窓からは、暖かな春の日差しが差し込み、じっと身動きもせず待っていると、ついうとうとと睡魔が襲ってくる。

但馬世之介は同じ名前で七十七代目で、初代世之介は本物の江戸時代に生を受け、初代の活躍は井原西鶴によって「好色一代男」となつて有名になった。

あれのせいで世之介はさんざんからかいの対象になった。親爺もいい加減、世之介なんて名前付けるのを止めにすれば良いのに……。

卒業式の最中、ぼんやりと世之介はそんなことを考えていた。

これからの進路について世之介は五里霧中であつた。

本来なら卒業式の数ヶ月前から進路を決め、今頃は上の学問所に進むか、他の専門学校に進むか、それとも社会に出るか決めなければならぬのだが、世之介は何をするでもなく、ついウカウカと卒業式を迎えてしまったというわけである。

なにしろ世之介はお坊ちゃまだ。但馬家は幕府出入の御用商人で、世之介は何不自由なく育ってきた。御用商人というのは、幕府主導の国家計画に資材や、人員を提供するお役目である。当然、利潤も大きく、代々商売を手広くして、今に至っている。

遂に卒業式は終了し、居並んでいた卒業生たちから安堵の吐息が

漏れた。校長以下、師範たちが退席すると、一気に解放感が横溢し、会場はざわめいた。

大番頭

講堂の縁側に腰を下ろし、自分の履き物を探していると、目の前の地面に影が差した。

顔を上げると、一人の中年男と視線が合った。

着流しに渋茶色の羽織。商人らしく前掛けをしていて、前掛けには【但馬屋】の屋号が染め抜かれている。男は世之介に向け、深々と頭を下げた。

「ご卒業、おめでとう御座います。世之介坊っちゃん」

きちんと両手を膝に当て挨拶をすると顔を挙げ、にっこりと笑みを浮かべる。四角い、がっしりとした顎に、苦勞人らしく柔和な目付きである。世之介は頷き、返事した。

「ああ、有難う。省吾さん。出迎えに来てくれたんですね」

省吾、と呼ばれた中年男は「はい」と深々と頷くと、小腰を屈め先にたった。

木村省吾。但馬家の大番頭である。昔なら、筆頭重役とか、専務とか言われる役職だ。

省吾は、すたすたと先を歩いていく。後を従う世之介と省吾の足下は、商人らしく軽い雪駄履きだ。

世之介が通学していた学問所の建物を左手に見て、二人は卒業生とその両親でこったがえしている校庭を、正門へ向かって歩いてい

く。校庭には桜が植えられ、今を盛りと、咲き誇っている。

世之介の両親は出席していない。母親はどこかの辺境星域に慈善事業のため家を空けているし、父親もまた今頃は幕府のお役人と新たな契約で飛び回っている。出迎えたのは、大番頭の省吾だけだ。

イツパチ

正門を通り抜け、学問所付属の駐機場に踏み込むと、ずらりと重
力制御装置を利用した個人浮揚機フライヤが並んでいる。

但馬屋の家紋が浮き彫りされている浮揚機の前に近づくと、ぱく
んと外翼扉が開いて、中から小柄な杏荀紹偉童ガル・ウイングが、零れんばかりの
笑顔で飛び出してきた。

「若旦那！ お勤めご苦労様で御座います」

杏荀紹偉童は大きな碁盤のような顔に、太い八の字眉、垂れ下が
った目尻に、にたにた笑いを浮かべた大きな口をしている。見てい
るだけで、笑いが浮かんでくる奇妙な表情をしている。

省吾は顔を顰めた。

「イツパチ！ お勤めご苦労様とは何という言い草だね。まるで世
之介坊っちゃんが、寄せ場帰りのように聞こえるじゃないか」

イツパチと呼ばれた杏荀紹偉童は、手元の扇子を額にぱちんと音
を立てて当て、ひよつと首を竦めた。

「へへっ！ 申し訳ねえこつて！ イツパチ、一生の不覚……」

「いいから、浮揚機に乗せておくれ。今頃は旦那様が、お店にお
帰りになっておられるころだ。旦那様はお坊ちゃまとお会いにな
られるため、商談を急いで終わらせるおつもりだから」

省吾の言葉に世之介は驚いた。

「親爺が帰ってくるってのかい？ 珍しいこともあるもんだ」

省吾は真面目な顔で頷いた。

「はい。大旦那様は、お坊ちゃまのご卒業後について、何かお心積もりがあると推察されます。大事なお話があると思いますので、お坊ちゃまもその御つもりで」

ちよつと世之介は身構えた。省吾の言葉には、何か引つ掛かるものを感じたのである。

世之介の父親は大旦那と呼ばれている。幕府のお役人との打ち合わせで、家にはほとんど席を暖める暇もなく、実際に顔を合わせるのも年に数度くらいだ。それが、わざわざ世之介の卒業式に合わせて帰ってくるというのは、何か魂胆がある。

但馬屋本店

省吾と肩を並べ、世之介は浮揚機に乗り組んだ。

イッパチは操縦席に座ると、手早く操舵装置を操作して、浮揚機を浮かび上がらせる。

もともとイッパチは寄席で働くたいこ幫間杏荀紹偉童であつたが、何か寄席で失敗をやらかしていらなくなり、そこを世之介の父親に拾われたとか聞いている。杏荀紹偉童らしく、器用で、浮揚機の操縦でも何でもやってしまう。

微かな音を立て、浮揚機が斥力装置を働かせると、上向きの重力場がまわりの細かな埃を吹き上げる。すつと機体が上昇し、見る見る学問所の建物が小さくなった。替わりに窓外に、首都・大江戸の雄大な景観が広がる。

東京が江戸と変わって、範囲は急速に拡大した。かつての東京湾、今は江戸湾を埋め立て、人工島を作って、そこを征夷大將軍府としている。中央には將軍府の建物が聳え、江戸町民には「お城」とのみ呼ばれていた。

まさにお城と呼ぶに相応しい建物で、どっしりとした外觀の、百層に及ぶ大屋根が連なる巨城である。

お城の周囲には、但馬屋のような出入の商人たちの本店が密集するように立ち並んでいる。総て地上百丈以上はありそうな、巨大な店構えをしている。しかし但馬屋以上の建物は、ほとんど見当たらない。

イッパチの操縦する浮揚機が但馬屋本店の大屋根に近づくと、浮

揚機から送信された無線信号^{ビーコン}に応じ、屋根の一部が静々と開き、離着陸場が現れた。

床に発光信号が表示され、着地場所を示している。

浮揚機が着陸態勢になると、奥から但馬屋の手代、小間使いの娘、小僧たちが大慌てで飛び出し、出迎える。

浮揚機が着陸し、世之介が顔を出すと、使用人たちは一斉に頭を下げ、声を揃えた。

「ご卒業、おめでとう御座います！」

「ああ、有難う」

鷹揚に答える世之介だったが、ちょっと照れ臭く、顔が火照るのを感じる。うずうずと照れ笑いが浮かぶのを、必死に我慢する。こは若旦那として毅然としていなければ！

省吾は手早く先に立ち、離着陸場の専用映話装置で何か打ち合わせをしていた。打ち合わせが済むと、急ぎ足で戻ってきて、顔を寄せて囁いた。

「坊っちゃん。大旦那様がお待ちになっておられます。すぐ、お出でになれるよう、大旦那様がお命じになられております」

命令

世之介は無言で頷いた。省吾の態度は普通ではない。緊張感が、表情に表れている。

離着陸場から鋭励部威咤エレベーターに乗り込み、父親の部屋がある階へと下っていく。部屋は十階ほど下の階にある。

鋭励部威咤の扉が開くと、目の前に玄関があり、上がり框で一同は履物を脱いで廊下に入った。

しんと静まり返った廊下を、三人は歩いていく。内庭を眺めながら、長い廊下を歩く。

内庭の天井には、空を模した立体映像が投射され、様々な樹木が植えられ、一見すると、ここが巨大な但馬屋本店の内部であることなど忘れさせる。

父親の部屋の障子前に省吾が膝をつき、声を掛けた。

「大旦那様。世之介坊っちゃんがお出でになりました」

「ああ」と障子の向こうから父親の太い声が聞こえてきた。ついで「入っておいで！」と返事がある。

省吾は頷き、両手を伸ばして、すると障子を開く。世之介とIPPACHIは、棧の手前で膝を揃え、正座した。

十畳ほどの座敷に、父親である七十六代目の世之介が座っている。息子に似ず、河馬のように太っていて、色黒である。膝元には煙草盆が置かれ、父親は難しい顔つきで煙管を咥え、むっつりと煙を口から漂わせていた。

かん、と雁首を煙草盆に叩き付け、灰を落とすと、父親はぐいと首を捻じ向け、じつくりと世之介の顔を眺めた。

「世之介、お前、今年で幾つになったえ？」

「へい、数えて十七で御座います」

「ふむ」

怖ろしく機嫌が悪い。自分が何か、仕出かしたのだろうか、世之介は怪しんだ。

次に口を開いた父親の言葉に、世之介は仰天した。

父親は「お前の尻を見せなさい！」と命令したのである。

世之介の尻

がっしりと両肩を怖ろしいほどの力で押さえつけられ、世之介は身動きできなくなってしまうた。気がつく、背後からIPPACHIが世之介を羽交い絞めに行っている。IPPACHIは、奇妙な無表情で、世之介に話し掛けた。

「若旦那！ 堪忍しておくんなせえ。あつしには、大旦那様に助けて頂いた恩儀が御座います。大旦那様の命令は、絶対なんで」

IPPACHIが何で従ってくるのかと不思議だった、これで得心した！ 世之介を押さえつけ、拘束するためだったのだ。見かけによらず、杏菊組偉童は人間を凌駕する馬鹿力の持ち主である。

すつと立ち上がった省吾は、世之介に一礼して背後に回った。省吾さえ裏切った！ いや、初めから父親に命じられていたのだろう。

「世之介坊っちゃん。大旦那様のご命令です。失礼で御座いますが、下穿きを取らして頂きます」

「おい！ よしとくれ！ そんな無体な……！」

抗議の声を上げたが、無駄であった。背後から省吾は無言で世之介の袴を引き抜き、尻を捲り上げる。世之介の越中褌を剥がし、裸の尻を剥き出しにした。

ゆつくりと父親は立ち上がると、廊下に回り、上から厳しい顔つきで世之介の尻を睨みつけた。

世之介は泣き声を上げる。

「お父つつあん！ 何で、こんな真似をなさるんで？ まさか、お父つつあんにそんな趣味があったとは……？」

じつと睨みつけていた父親は、ふつと視線を逸らすと再び元の席へ戻っていく。はあーっ、と溜息を漏らし、首をゆっくりと、左右に振った。

「もういい」と父親が手を振ると、さつと押さえつけていたイッパチの手が緩んだ。そそくさと世之介は身支度を整え、息を荒げた。

「お父つつあん！ 説明して貰いましょう。なんで、こんな無体な真似を？」

特異体質

父親は腕組みをして目を閉じている。薄目が開き、世之介を流し目で見える。

「お前、初代の世之介様のことは、知っているかえ？」

「へえ、江戸時代の戯作者、井原西鶴ってお人が『好色一代男』つてえ本にお書きになったそうですね」

「わたくしたち但馬屋のご先祖だ。初代様は題名の通り、大変な好色で、なんと九つの頃に初体験を済まされたと、あの本には書かれている。それで、代々の世之介もまた、女好きで続いている」

上目遣いになって世之介は父親に尋ねた。

「お父つつあんも、そうなんで？」

父親は、ふつと苦い笑いを浮かべた。

「わたしは、そんな好色ではないよ。なにしろ、こんなご時世だ。初代様の真似をすれば、たちまち世の非難を浴びる。しかし、お前は記念すべき七十七代目だ。少しは違うと思ったが、やはり、世の習いらしいな。お前、まだ初体験は済ませていないんだろう？」

まともに尋ねられ、世之介の頬がかつと熱くなる。

「それが何です？ あっしの初体験が、そんなに大事なことなんですか！ 第一、どうして、そのことが判るんです」

「判る」

父親は短く答え、じろりと世之介を睨む。

「さつき、お前の尻を見せろと言ったのは、そのためだ。我が但馬家の男子には代々、ある特異体質が受け継がれている。

普通、赤ん坊の尻は青い。蒙古斑というやつだな。成長するに従い、自然に消えていくが、どういうものか、但馬家の男子の蒙古斑は成長しても絶対に消えない。消すには、女性と？そのこと？をしなければならぬ。だから判るんだ。お前、童貞だろう」

廃嫡・勘当！

ポカンと、世之介は目を丸くして、がっくりと顎を下げ、情けない息を吐き出す。袴の上から自分の尻を押さえる。

自分の尻など、見たことあるものか！

「そ、そ、そ、それが、な、な、何だってんです！ 童貞で悪うござんすか！」

父親は眉間に皺を寄せた。

「わたしは、お前が世之介の名前に相応しい男かどうか、学問所に通うお前を密かに調べていたのだ。学問所の師範、級友などに、お前の評判を調べさせた。そうしたところ、皆、異口同音に言うことには、真面目そのもの。女遊びなんか、これっぽっちも考えられないと、口を揃えて答えたそうだ」

世之介は激昂して抗議した。

「真面目でござんしょう？ 家は、代々の商人で御座います。商人が真面目でなくて、どうして務まりましょうか？」

父親は頷いて、言葉が続けた。

「世間では、そうだ。だが、この但馬家では違う。お前は世之介の名前の面汚しだ！」

ぐつと指を突きつける父親に、世之介はゆるゆると首を振った。

どうすればいいのだ！

「初代様、それに、代々のご先祖に、これでは申し訳がたたない。世之介の名前を汚さぬよう、お前、十八になるまで、何が何でも初体験を済ませるんだ。とにかく、お前の尻の青さを消しておしまい！ それでなければ、但馬家の長男ではない！」

世之介は驚きに仰け反った。

「そんな、無茶な！」

「無茶でも何でも、童貞を捨てるんだ。そうでなければ、お前は廃嫡、勘当だ！」

「はっ、廃嫡！ か、か、か、勘当っ！」

世之介は叫んでいた。

膝をにじらせ、省吾が世之介と父親の間に位置を変え、口を開いた。

「大旦那様……。世之介坊っちゃんも、初めて聞くお話で、大層な混乱をなさっております。ここは一つ、この木村省吾めにお預けになすつては、如何で御座いましょう」

父親は意外そうに省吾を見た。

「お前が？ 何か腹案があるのかえ？」

「はい」と省吾は自信ありげに頷いた。父親は顎を引き、何か考え込む視線で、大番頭を眺めた。

やがて重々しく「よかるう」と頷く。

「お前に任せよう」

省吾は深々と頭を下げ「有難う御座います」と礼を言った。

封書

いつの間に自分の部屋に戻ってきたのか、世之介は自覚がない。がつくりと頂垂れ、IPPACHIが淹れてくれた熱い番茶をふうふう吹きながら啜っている自分に、ようやく気付いた。

目の前には、省吾が膝を揃え、腕組みをしながら、端然と座っている。やや首を傾げ、省吾の視線には、何か試すかのような光が込められていた。

ようやく世之介の人心地がついたのを見透かしたのか、省吾は口を開いた。

「坊っちゃん。さぞかし、驚かれたこつてしょうな」

世之介は省吾を見上げて返事をする。声に、恨みがましい調子が混じるのを、どうしても抑えることはできない。

「お前、あたしの下穿きを無理矢理あそこで脱がしたね。あんな騒ぎになると、知っていたんだろ？」

いともあっさり「知っておりました」というのが、返事であった。

世之介は両膝を立て、伸び上がる。

「だったら、どうして……！」

「教えてくれなかった、と仰るのでしょうか？ 知っていたら、はい、そうですかと、素直に大旦那様にお尻を見せたでしょうか？」

ぺたん、と世之介は座りなおした。首を振る。

「いいや、そんなことできない……やっぱり、無理矢理お前たちに脱がされていたかも」

省吾は腕組みを解いた。

「でしようから、わたしも敢えて、お教えするのは止めたので御座いますよ。二、三日前から大旦那様の様子を窺って、こういう次第になるのでは、と密かに考えておりました。それで、わたくし八方に手を回して、あるものを手に入れて御座います」

「なんだい？」

省吾は懷に手を入れ、一通の封書を取り出すと、畳を滑らせるように世之介の膝元に送った。封書を取り上げ、世之介は開いた。

通行手形

中から出てきたのは、一枚の通行手形であつた。將軍府の割り印が押捺され、細かな字で、びっしりと何か書かれている。

「それは、^{アマゾン}尼孫星への通行手形で御座います。尼孫星のことはご存知で？」

世之介は、再び首を振った。

「いいや、知らない。尼孫星てのは、どんな星なんだね」

省吾の片頬に、さも得意そうな笑みがこぼれる。

「女だけの星で御座います。別名？女護が星？などと言われておりますな。どういう訳か、この星では、唯の一人も男の赤ん坊が産まれないそうで。生まれるのは全部、女の赤ん坊と決まっております」

世之介は思わず、目を瞬かせた。

「そんな馬鹿な！ 女しか産まれないんじゃ、どうやって子孫を増やせるんだい？ 赤ん坊が産まれるには、男と女が必要だって、あたしだって知っているよ」

省吾は身を乗り出した。

「さあ、そこで御座います。

何でも、この殖民星の最初の計画に、何か重大な間違いがあつたらしく、産まれて来るのは総て女の赤ん坊となつてしまいました。

女たちの遺伝子に何か間違いがあつたのかどうかは、今でも議論されておりますが、このままでは子孫が絶えるとなつて、幕府は救済策を施しました。

それが、冷凍精子を運ぶ特別便で御座います。男がいなくとも、精子があれば何とかなります。あそこでは男は、どんなヨボヨボの爺さまだろうが、目も当てられない醜男ぶおとこだろうが、モテモテになるそつで御座いますな」

自信

世之介の顔がかーっ、と火照ってくる。多分、耳まで真っ赤なのだろうと自覚する。

「それで、その星へあたしを行かせようというのだね？　尼孫星とやらへ行けば、こんなあたしでもモテモテで、すぐに童貞を捨てられるって算段だろう？」

省吾は鼻を擦った。可笑しそうに肩を揺する。

「若旦那なら、おもてになりますとも！　こう言っただけですが、若旦那は、男のわたしが見ても、良い見映えの殿方で御座います。足りないのは自信で御座いますよ。いきなり一年で童貞を捨てるなど、大旦那様は仰いますが、今の若旦那には少し、自信というのが足りないようで。ですから尼孫星へお出でになって、自分は女性におもてになる、という自信をお持ちになって頂きたいのです」

側で聞いていたイッパチが、にまーっと開けっ広げな笑顔になった。

「尼孫星！　よござんすなあ！　その星へ行けば、当たるを幸い、女どもを若旦那は撫で斬りになすって、たった一年で千人斬り、なんて素晴らしいことに……。いや、楽しみでござんす！」

省吾はイッパチを叱り付けた。

「イッパチ！　遊びじゃないよっ！　若旦那が廃嫡勘当になるかどうか、という瀬戸際なんだ。浮かれているんじゃない！」

IPPACHIは空気が抜ける風船のように、シヨボンとなった。

省吾は世之介に顔を向け、話を続ける。

「尼孫星の立ち入りは、幕府によって厳しく制限されております。特に尼孫星からの出星は監視されておりますので。

もし、尼孫星の女が一人でも外部に出たら、その子孫がどんどん女の赤ん坊を産んで、銀河系の男女の均衡が崩れるのではないかと危惧されております。

俗に？入り鉄砲に出女？などと称されております。この場合、入り鉄砲とは運び込まれる冷凍精子のことで御座いますな。出女とは、言うまでもなく、尼孫星からの女のことです。で御座いますから、入星手形の取得には、色々苦勞が御座いました」

省吾はそれ以上、口を開かなかったが、世之介はあれこれと想像した。多分、袖の下か何かを役人に掴ませたんじゃないか、と思った。

省吾は、じつと世之介を見詰める。

世之介は頷いた。

「お前の言うとおり、尼孫星とやらへ出かけよう……。とにかく、お父つつあんに、あたしの尻が普通になつたところを見せてやる」

一本締め

父親の七十六代目は、大いに喜んだ。

「初代様は？女護が島？とやらへ女道修行の旅に出たそう。尼孫星が別名？女護が星？と言われていることは、あたしも知っているよ。ああ、ご先祖と同じ旅に、お前が出てくれることになって、嬉しいよ！」

河馬のような丸顔に満面の笑みを浮かべ、ニコニコしている。脇に控えていた省吾の肩を、思い切りどんと叩いた。

「省吾！ さすが、大番頭のお前だ。あたしは、つくづく感心したよ！ それで、どう手筈をするつもりなんだえ？」

省吾は微かに頷き、説明を始めた。

「へい。尼孫星には定期便がなく、年に何度か近くを立ち寄る船に冷凍精子を積み込み、尼孫星の衛星軌道で向こうの連絡船シャトルに受け取らせる規約になっております。とはいえ、特別の学術調査の例外が御座いまして、それには尼孫星への立ち入り調査隊が入星することになっております。坊っちゃんはその調査隊の特別隊員という名目で加わる手筈になっております」

「成る程、成る程」と父親は納得している。

省吾はイッパチを振り返った。

「坊っちゃんのお供には、このイッパチをと、考えております。イッパチは杏菊紹偉童で御座いますから、忠実そのもので御座います。何か危険があっても、イッパチなら上手く処理してくれるのではな

いか、と期待しておりますが……」

省吾の指名に、イッパチは目を丸くしたが、すぐ首を縦にする。

「よござんす！ このイッパチ、一命を持ちまして、若旦那のために働く覚悟で御座いますぞ！ 若旦那！」

世之介に向かい合い、どんと自分の胸を叩いた。

「何があるつと、このイッパチを頼りにしておくんなせえ！ さあ、若旦那！ 若旦那の女道修行の門出だ。ここは目出度く、一本締めで……」

「およしよ」と世之介は首を振った。

「そんなに浮かれていちや、また省吾に叱られるよ」

イッパチは恐る恐る省吾を見上げる。省吾は苦く笑っている。

「良いでしょう。若旦那の門出に、一本締めでも何でも致しましう！」

イッパチは愁眉を開いた。

さつと両手を伸ばし、叫ぶ。

「それでは、若旦那の門出を祝して、一本締めを執り行います！」
父親と省吾は、笑いながら構えた。

イッパチは気合を入れる。

「よい……お手を拝借！」

しゃんつ、と一同の一本締め。

【滄海】

近づいてくる宇宙貨客船【滄海】は、葡萄の房のような形をした宇宙船だった。真ん中に通路用の中央柱が一本貫き、中央柱の周りを無数の客室が取り巻いている。客室は球状で、幾つもの客室が鈴なりになっているのは、まるで葡萄の房そっくりである。

世之介とイツパチは、連絡船の窓に顔を押し付けるようにして、近づいてくる【滄海】を眺めている。地球の衛星軌道上に浮かぶ宇宙船は、真空のくつきりとした光と影のせいで、距離感が判らない。すぐ近くに浮かんでいるように見えるが、全長一尋はあるうかと思われる宇宙船は、中々近づいては来なかった。

二人の乗り組む連絡船は、百人乗りという大きさで、真ん中の中央通路を挟み、両側に五十人がずらりと席を埋めている。服装は、宇宙旅行用に特別に仕立てられた作務衣である。光沢のある生地で、縫い目がどこにも存在しない。ぴっちりとした筒袖で、袂がなく、動きやすい。

「いよいよでげすな、若旦那。あれで若旦那は尼孫星へとお出ましになられるという算段でげすよ！」

イツパチに話し掛けられ、世之介は「うん」と生返事を返す。イツパチは不思議そうな顔つきになって、世之介を見上げる。

「どうなすったんで？ 若旦那、なんだか浮かない顔つきでござんすね？」

世之介は答えなかった。実を言うと、不安で胸が押しつぶされそ

うな気分だったのだ。

世之介が宇宙に出るのは、これが三度目。最初は中等学問所での修学旅行で、その時は月への旅である。

二度目は高等学問所の修学旅行で、火星へと旅をしている。どちらも、太陽系内で、恒星間旅行に必要な、超空間^{ワープ}歪曲転移は経験していない。歪曲転移については、色々と聞いてはいるが、これが初めての体験であった。

連絡船の内部は無重力状態のままだ。そのせいか、イツパチは普段よりウキウキしているように見える。いや、これが普通か？

無重力

ようやく【滄海】の船体が近々と見え始め、向こうの接続腔函エア・ロックが見分けられる状況になってきた。

その時、世之介は、【滄海】の陰から、もう一隻の連絡船が近づいてくるのを認めていた。

こっちよりかなり小型で、数人しか乗れない快速連絡船である。だが、こちらの連絡船の接続装置が【滄海】に合体すると、見えなくなった。

接続装置が合体すると、乗客係が宙に浮かびながら、乗客に対し注意を呼びかける。

「乗客の皆様、手荷物は片手にお持ちになり、片手は空けてもらいます。係員の指示に従い、ゆっくりとで宜しいので、確実な動作をお願いいたします。急がないで！」

慌てて立ち上がろうとする一人の乗客に鋭く声を掛ける。立ち上がろうとした乗客は、無重力であることを忘れ、勢いをつけて立ち上がったため、天井にごつんと激しく頭を打ち付けてしまった。

乗客係は連絡船の中央通路を飛び回り、慣れない無重力場で右往左往している乗客を手早く誘導していく。

世之介は高等学問所での修学旅行がつい最近であったため、うろたえずに済んだ。IPPACHも杏荀紹偉童アンドロイドらしく、無重力状態に適應している。

身体を真っ直ぐにし、乗客が腰の帯を持って押してくれるのを素

直に従えば、そのまま接続腔函をすーっ、と遊泳して向こうに辿り着く。向こうでも【滄海】の乗客係が待ちつけてくれるから、本当は自分で何もする必要はないのだ。じたばたするのが、良くない。

【滄海】に乗り込むと、こちらではちゃんと重力制御が働き、真っ直ぐ床に立っていられる。世之介の、無重力体験は、あつという間に終了した。

老人

「こんにちわ！ ご乗船、有難う御座います！」

鈴を転がすような美声に、世之介は顔を赤らめた。出迎えたのは西洋小間使いの格好をした杏菊紹偉童であつた。【滄海】は客船でもあり、乗客のために高級な女性型杏菊紹偉童を用意していたのである。

西洋小間使いの杏菊紹偉童は、素早く世之介とイッパチの手荷物を受け取ると、軽々と両手で持って、二人を船室へと案内する。

イッパチは世之介の脇腹を、肘でツンツンして、小声で囁く。

「若旦那！ なに赤くなつてんでげす？ 相手は杏菊紹偉童でげすよ」

「煩いなあ」

無然として世之介は答える。どうにも、女の子は、それもどきつとするような、可愛い女の子は苦手だ。出迎えた女性型の杏菊紹偉童は、まさにそれだったのである。

小間使い杏菊紹偉童は、二人の客室の前で立ち止まると「こちらで御座います」と片手を上げた。しゅつ、と溜息のような音が漏れ、扉が開き、二人は内部に足を踏み込んだ。

「おや」と、部屋の中で顔を上げた人物がいる。白い髭の、小柄な老人である。老人の周りには、二人の別の人物が控えていた。賽博^{サイボ}格らしく、艶のない顔色をして、がっしりとした身体つきである。

世之介は小間使いを見た。小間使いは顔色を変え、手で口を覆つ

た。

「まあ！ 確かにこのお部屋は、但馬世之介様のお部屋のはずなのに……」

「ああ、それで間違いないですよ。確かに、但馬世之介さんのお部屋で」

老人が手を挙げ、柔らかな態度で声を掛ける。

「わしが飛び込みで船に乗り組んで、それで特別に相席をお願いしたわけで……」

喋りながら立ち上がると、軽い足取りで世之介に近づく。

相当な年寄りだろうが、足取りはしっかりとっていて、腰は真っ直ぐであった。にこにこ柔らかな笑みを浮かべ、世之介の顔を見上げる。

「まことに相すみませぬ。わしは越後の呉服問屋『越後屋』の隠居で、光右衛門と申します。【滄海】の船頭さんとは顔馴染みで、無理を言つて席を取ってもらつたことになったのですよ。こんな爺いで御座いますが、我慢してご一緒して頂けませぬか？」

相席

「こちらこそ」と世之介は挨拶を返した。

旅慣れた光右衛門と名乗る老人の様子に、内心ほつとしていた。宇宙旅行が手軽になり、眼前の、光衛門のような老人の宇宙漫遊旅行が、流行っていると聞いている。

第一、イッパチと二人だけで顔をつき合わせていると、こつちがおかしくなりそうな気分だったので、この相席は救いであつた。

「そうそう、こちらの二人の紹介が、まだで御座いましたな」

老人はくりりと振り帰ると、二人の賽博格に顔を向けた。

「こちらの二人は、わしの供の者で、助さん、格さんと呼んでおります。まあ、わしの身の回りの世話と、護衛係で御座いますな」

「助三郎で御座います」

「格乃進と申します」と二人は短く挨拶をする。助三郎と名乗る賽博格はやや小柄で、痩せているが、格乃進と名乗った賽博格は、がつしりとした巨体の持ち主であつた。

「ちよつとお待ちを……」

小間使い杏菊紹偉童は呟くと、身を硬直させ、目を虚ろにさせた。
コンピュータ
船の主電腦に記録を照会しているのだ。やがて杏菊紹偉童の顔に安堵の表情が浮かんだ。

「確かに相席の指示が出ております！ お客さま、それで宜しいので御座いますか？」

世之介は頷いた。むしろ歓迎する気分が強い。老人に向かい、丁寧に頭を下げた。

「旅慣れぬ若輩者で御座いますが、どうぞよろしく……」

「おお、おお、これは慇懃なご挨拶、痛み入ります」

光右衛門は莞爾と笑みを浮かべた。

客室

「但馬世之介様と言えば、あの但馬屋さんの……？」

客室に落ち着くと、早速光右衛門は世之介に話し掛けてきた。客室は直径十尺ほどの球体で、三分の一程の部分が平たい床になっている。重力制御が効いているので普通に正座ができる。重力制御はあらゆる場所に使われ、大きな窓は一種の重力薄膜スクリーンとなっていて、硝子などの物質では不可能なほど大きな窓が実現できている。

老人の問い掛けに、世之介は頷いた。

「はい、わたくしは息子で御座います」

「ははあ！ 幕府御用達の、但馬屋さんといえば、商人仲間には有名なお店で御座いますな。それでは、あなたは気楽な漫遊旅と相成りましたのですな。行き先はどちらで？」

「アマゾンニ孫星で御座います」と世之介が答えると、助さん格さんという賽博格は顔を見合わせた。

ふつと光右衛門は笑いを浮かべた。

「これは驚いた！ あなたのような若い、それも水も滴る二枚目の若旦那が、ところもあるうに、ニ孫星へ向かうとは！」

老人の指摘に、世之介はもじもじと身動きをした。いかにも自分が、女に飢えているようで、決まりが悪い。

「はっはっはっはっ……」と、光右衛門は顔を仰向け、高笑いをした。

「まあ、宜しい、宜しい。お若いうちから何でも経験することで御座いますな。この爺いなど、やっとこの年で、諸国漫遊に出かけようかと思いい立った次第で……」

一瞬の緊張感が、光右衛門の高笑いでほぐれた。イッパチは身を乗り出し、口を開く。

「若旦那はこう見えて、ひどく晩生おくてなんでござんす。お父つつあんの大旦那様は、これではいけないと、女道修行の旅に送り出したつて次第で」

世之介の頬が熱くなる。

「おい、何てこと言うんだ。他人の前で」
光右衛門は膝をパンパン叩いて笑った。

「宜しい、宜しい！ 若いうちに何でも経験しておくことです！
女道修行、結構ではありませんか！」

超空間

イッパチは益々調子に乗った。

「若旦那って、色男でげしょ？ こりゃ、尼孫星に行ったら、もてて、もてて大変だあ！ 一步でも星に降り立ったら、あーら様子が良いわん……そこのお兄さん、ちよつと寄っていらっしやいよ……なんて引く手あまたで、上がりこむってえと、何も無いけど湯漬けでもどうぞ、なんてことになる。差し向かいに湯漬けを掻き込みますな。箸が茶碗に当たってチンチロリン！ 湯漬けをザークザクと掻き込みますってえと、見詰め合う目と目！ うふっ！ チンチロリンのザークザク！ 湯漬けの旨さに舌鼓がタットンと合いの手が入ります……」

踊り出す。

呆れて世之介は窓の外を見た。
ふわっ、とした感触に立ち上がると、見る見る窓外に奇妙な霧のようなものが掛かっていく。

驚いて光右衛門を見ると、頷く。

「超空間歪曲場でございますな。宇宙船が出発したのでしょう」
「これが……」

世之介は、ぼうつと窓外を見詰めた。
目をギョツと閉じたときに見える斑模様のような景色が一面に広がっている。見詰めていると、奇妙な感覚に捉えられる。斑模様の形が何か別のものに見えてくる。これが超空間で体験する未来予知なのだろうか？

超空間歪曲場に入ると、人間は未来を覗き込むことがあるそうだ。

女の子の顔が一瞬、見えた。髪の毛をポニー・テールにした、目つきの鋭い女の子の顔である。

IPPACHIは調子に乗って、なおも踊り狂っている。

「チンチロリンのザークザク！ ザークザクでタットン！ あ、それそれ！ 若旦那の女道修行ばんざーい！」

飛び上がり、IPPACHIは客室の一方に倒れ掛かった。どたん、ばたんと大袈裟な音がして、IPPACHIは客室の操作卓に身体ごとぶつかっていく。

がくん、と客室が揺れた。

わっ、と世之介は床に腹這いになる。顔を上げて窓を見ると【滄海】の船体が急速に遠ざかっていくのが見えた。

「何があつた！ 助さん、格さん！」

光右衛門が真顔になって叫んでいる。さつと二人の賽博格が立ち上がり、倒れこんだIPPACHIの側に近寄った。

客室の操作卓に近寄り、表示を覗き込む。

助三郎が顔を挙げ、叫んだ。

「ご隠居様！ この杏菊紹偉童が、客室の非常脱出釦を押してしまつたようです！ 客室は超空間に漂流しております！」

「何ですってえ……」

呆然と、光右衛門と世之介は眩き、顔を見合わせた。

漂流

虚ろな目付きで、イッパチは睨みつけている世之介たちを見上げ、ぶるぶるつと顔を何度も左右に振った。

「信じておくんなせえ！ わざとじゃねえんで……偶然、あっしの手が釦に触れたただけなんですよう！」

「偶然だと？」

格乃進は唸った。

「馬鹿なことを申すな。偶然で、客室の非常脱出釦を押せるわけがない。客室を本体から切り離す非常脱出の手続きは、ただ釦を押しただけじゃ発動しない。何段階にも分けて、ちゃんとした操作をしなければ、動くはずがないんだ！ 貴様、誰に雇われた？」

賽博格の顔が怖ろしげなものになった。問い詰める格乃進の勢いに、イッパチは真っ青になっている。

もう一人の助三郎という賽博格は、さっと世之介に向き直った。

「あんた、この杏菊紹偉童の主人だそうだな。本当に但馬屋の一人息子なのか？ 今のうちに正体を明かしたほうが、身のためだぞ」
世之介は驚きに口をパクパクさせるだけだった。

「し、し、し、正体って……何を仰います？ あっしは本当に、但馬世之介ってえ、ただの男でして……」

「まあまあ」

光右衛門は仲裁に入った。

「問い詰めるのは、そのくらいにして、これから先どうすれば良いか、考えねばな」

宇宙空間

そうだ、客室は超空間を漂流しているんだった！

世之介は窓にしがみついた。しかし【滄海】の姿は、どこにも見えない。客室が切り離され、あっという間に遠ざかってしまったのだ。

目の前の奇妙な霧が、急速に晴れていく。

【滄海】の空間歪曲場から離れたので、通常空間に転移したのだ。窓外を、見慣れた宇宙空間の眺めが回復してくる。真っ黒な空間に、星々が無数に点在している眺めである。

「ここは、どこなんだろう……」

世之介の言葉に、格乃進は客室の操作卓を覗き込んでいる。格乃進の指先が、操作卓の表面で素早く動いた。それを見て、世之介はびっくりした。

「あんた！ イッパチを責めたその口で、自分でやってるじゃないか！ そんな真似をして、また何が起きるか、判らないよ！」

「心配ない」

格乃進は顔を上げた。

「客室の客室は、それ自体が宇宙船として機能する。今、船室の縦装置を起動させた」

「へ？」

世之介はポカンと口を開け、ただただ格乃進の指先を眺めていた。さっきのIPPACHIの問い詰め方といい、今の自信ありげな様子といい、この賽博格は何者だろう？

「助さんと格さんは、わしの供になる前、宇宙軍の戦闘機乗組員だったので御座いますよ。除隊になった二人を、わしが声を掛け、旅のお供になって貰ったという訳でして」

光右衛門の説明に、世之介は納得した。宇宙軍にいたのなら、説明がつく。

現在位置

操作卓を覗き込む格乃進の顔が、不意に難しいものに变化した。

「まずいな……思ったより、状況は悪い。超空間から飛び出したとき、航路が思ったより大きく逸れたようだ」

「今いるところ、判りますかな？」

光右衛門の問い掛けに、格乃進は頷いた。

「はい、地球から五十光年ほど離れた星系にいるようです」

光右衛門は「ほう」と感心した声を上げ、質問を続けた。

「それで、地球へ戻れるのですか？ 格さんは、客室はそれ自体で宇宙船の機能をすると言いましたが」

格乃進は、ゆっくりと首を振った。

「いいえ、ご隠居様。宇宙船の機能を果たすと言いつても、ごく短距離のもので、非常用の動力があるだけです。一度でも航行すれば動力は切れますから、機会は一度しかありません」

「ただ一度だけ……」と世之介は格乃進の言葉を繰り返した。

光右衛門は腕組みをして首を捻った。

「それは、困りましたな。それでは、この客室で行けるところまで移動して、適当な殖民星に着陸して、地球に連絡を取る。それが一番の手立て、ということですか？」

「はい、わたくしも左様に思います」

格乃進と助三郎は、光右衛門の言葉に同意した。世之介は、こんな緊急事態に遭遇しても、なお光右衛門が冷静沈着に的確な判断を下すのに驚いていた。

問題

光右衛門は、きらりと目を光らせる。

「では、この客室で辿り着ける距離に、殖民星がありますかな？」

「御座います。ぎりぎりでは御座いますが、到達範囲に、一つ古い殖民星があるようです。なにしろ超空間航法が発明される前の殖民星ですから、記録がほとんどなく、名前だけが記載されております」

「なんとという星ですか」

「番長星、とあります」

「番長星……」

世之介は呟いた。殖民星の名称としては奇妙な名称である。

IPPACHIは早々と立ち直り、ちょこちょこと世之介に近づいて見上げ、口を開いた。

「なんだか、剣呑そうな名前でげすな。そもそも、番長って何のことでげしょ？」

「さあ、判らないよ」

世之介は首を振った。光右衛門は肩を竦めた。

「番長だろうが、番屋だろうが、それとも番所か判りませんが、ともかく行けるところがそれだけなら、仕方ありませんな。格さん、参りましょう」

「はい、ご隠居様」

格乃進は一つ頷くと、操作卓に向かい合った。素早く両手が動き、航路を決定すると、格乃進は再び光右衛門に顔を向けた。表情が真剣である。

「ご隠居様、一つ問題があります」

光右衛門は伸びやかに返事をする。

「何が問題ですか？」

「時間です。この客室には超空間歪曲場発生装置が搭載されておりません。ですから、通常空間を光速以下で移動しなければなりません。目的の星系は半光年ほど離れておりますから、どんなに早く移動しても、向こうに到着する頃には、六ヶ月が経過していることに相成ります。つまり地球に戻るにしても、半年後、あるいは、もっと時間が掛かってしまうかもしれません」

選択

「成る程」

光右衛門は髭をしごき、世之介を見た。

「困りましたな。地球に戻っても、半年も経っていは、その間あなたが行方不明となっていることになるのでしょうか？ ご両親の心配を思えば、ここでじっとして、救助を待つ、という選択もありうるのでは？ そうすな、格さん」

「はい」と格乃進は頷いた。

助三郎、光右衛門、 IPPACHI の視線が世之介に集中する。

「あ、あの…… どうしてわたしを、そんなに見るのです？」

世之介は、たじたじとなって口を開いた。

光右衛門は、じっと世之介の目を覗き込むようにして、説明した。

「わしは、これ、この通りの隠居の身。半年くらい行方不明になつても、漫遊の旅の途中ということで、騒ぐ人もおりません。供の助さん、格さんも同じです。そこにおられる、あなたのお供の IPPACHI も杏菊組偉童ですから、そうでしょう？」

しかるに、あなたは違う。

聞けば、高等学問所を卒業したばかりと仰るではありませんか。しかも、但馬屋の跡取りという大事な身体です。ですから、これらの選択はあなたに懸かっている、という訳です。お判りかな？」

世之介の額に、じつとりと汗が噴き出した。

「つまり、あたしに選べと仰るのです？」

決断

格乃進は頷いた。

「はい。このまま番長星へ行く、というのが一つの選択です。

客室の動力源は唯一度の航行で尽きてしまいます。番長星が救助を待つのに相応しくないと判っても、次はありません。

もう一つが、じつとこのまま漂流を続け、世之介様が行方知れずになったと気付いた地球や【滄海】側が探索の手を伸ばし、救助を待つ、という選択肢です。客室に備えられている生命維持装置は、私も総てを百年だろうが、千年だろうが、楽々と生かしてくれましょう。

ですが、救助がいつになるかは、判りません。

しかし一度どっちを選ぶか決めたら、他はありません。

じつとすることを選ぶにせよ、生命維持装置を完璧に動作させるには、航行用の動力を犠牲にしなければなりませんから。一度でも漂流を始めたら、番長星へ行く機会は永遠に失われます」

格乃進の説明に、世之介は足下がぐらぐらと崩れていくような感覚に襲われた。

総ては、世之介の選択に懸かっている！ しかも選択の機会は唯一度のみ！

格乃進は操作卓を覗き込み、表示をじつと見詰めて呟いた。

「あと一時間のうちに決めなければなりません。現在は客室の酸素は、通常循環によって再生されていますが、一時間も経てば、非常用の動力に継続されます。その時、どちらかに決めないと……」

世之介の口は、からからに渴いていた。必死に唾を呑みこみ、拳

を握りしめる。

全員の視線が集中している。

遂に世之介は、顫える口を開いた。

「番長星へ、参りましょう……」

移動

「それでは、唯今より客室の非常用動力を入れ、移動を開始します」
格乃進が宣告した。操作卓に向かい、ごつい指先で、幾つもの釦を同時に押す。

動いていく感覚はなかった。客室の航行装置は、重力制御技術を使って、空間それ自体に重力的な傾斜を作り出すものである。従って、客室全体に均等に加速が加わるため、一切の反動などはないのだ。

しかし、客室の窓に見える宇宙空間には、劇的な変化が表れていた。

窓の前方が進行方向で、一瞬にして星々は光行差現象によって青方偏移を起こし、赤い星は黄色に、白い星は青に、赤外線で見えない星は可視光線になって見え始める。もともと青白く光る星の光は、紫外線領域にずれこみ、見えなくなっていく。

星々は進行方向に集まっていき、目映い光を放っている。一瞬、集まった星々は強烈な光を放ち、世之介は星虹を目の当たりにしていた。
スター・ボウ

客室の窓が不意に真っ暗になった。紫外線領域の光が青方偏移でX線レベルまで高まったため、乗客を保護するための自動遮蔽が働いたのである。
シャッター

自動遮蔽が働いたのは、世之介が瞬きする一瞬のことであった。真っ暗になったと思ったら、すぐに窓の眺めは普通の、宇宙空間の

ものに変化した。

「到着しました」

格乃進が口を開いた。

亜光速

ぎよつとなつて、世之介は格乃進の四角い顔を見詰めた。

「もう？　だつて半光年も先だつて、言つたじゃないか？　数を数える間もなかつたくらいだよ」

格乃進は、にやつと笑つた。

「亜光速で移動したのです。客室は、光速の九十九分率^{パーセント}という速度で移動したので、時間の遅れというやつで、我々にとっては、あつという間の出来事なのです。実際には、六ヶ月が外の世界では経っているのです」

格乃進の隣で、助三郎が操作卓の表示を覗き込んで感嘆の声を上げた。

「成る程！　客室に備えられている非常用動力の、ほとんどが消費されている。宇宙軍にいたころは、通常空間を亜光速で移動するなど、考えられなかったな。いや、良い経験をした！」

世之介は助三郎の呑気さに呆れた。ぎりぎりの選択だというのに、良い経験だとは、能天気な台詞である。

格乃進は、窓外に一際ぐんと大きく見える黄色い星を指差した。

「あれが、番長星の主星だ。もう番長星は目と鼻の先といつていい」

またまた問題発生！

光右衛門が立ち上がった。

「それでは、番長星とやらに、連絡を取りませんとな。ここに我らがいる、ということを報せない」と

助三郎が首を振った。

「ご隠居様。それが、さつきから番長星と思われる惑星に向け、こちらから緊急信号を発信しているのですが、いっかな返答が御座いません。こちらの信号は充分に強力で、向こうが普通の受信設備を持っていれば、聞こえるはずなのですが、うんでもなければ、すんでもありません」

光右衛門は眉を顰めた。

「それは、おかしい！ちゃんと宇宙図に記録されている殖民星なら、幕府の奉行所か、あるいは代官所があるはず。なのに、返答がないとは、面妖としか言い様がありません」

世之介は、じりじりと焦ってきた。

「それじゃ、こっちから出掛けよう！ここで立ち往生している時間、もうないんだろう？」

客室の動力は亜光速の航行で、ほとんどが消費されている。つまり、生命維持装置を働かせる時間が、残り少なくなってきたということだ。

格乃進は渋面を作り、首を振った。

「それが、そうはいかんのだ」

助三郎も同意した。

「問題がある」

また問題である！　よくも次から次へと、立て続けに問題が持ち上がるものだ……。

危険な方法

それでも世之介は焦燥を押し殺し、格乃進に丁寧に見つけた。

「何が問題なんですか？」

格乃進は世之介と、光右衛門の中間を見るようにして口を開いた。

「着陸装置がない、ということなのです」

世之介は虚を衝かれ、一瞬「えっ？」と仰け反った。格乃進の言葉を取り違えたのかと思った。

「着陸装置って？」

助三郎が説明する。

「客室は、宇宙航行をするための設計になっていません。非常事態が起きたら、救助の手を待ち、向こうの協力で曳航されるなり、接続されるなり、という方法を前提にしています。従って惑星に直接、着陸する状況など、考えられてはいないのです」

格乃進は腕組みをした。躊躇いがちに口を開く。

「残る手段は、一つのみ！　しかし、相当に危険ではありませんか」
光右衛門が静かに尋ねる。

「どのような方法なのですか、格さん」

格乃進は光右衛門に顔を向けた。

「墜落するのです、ご隠居様」

惑星

客室の窓一杯に、惑星が浮かんでいる。番長星である。窓から番長星を眺め、光右衛門は感嘆の声を上げた。

「不思議な色の惑星ですなあ！　なぜ、あのような色合いなのでしょう？」

番長星は全体に堇色がかった色をしていて、霞のようなぼつとした暈を纏っていた。時々、惑星の表面に奇妙な光が走る。助三郎が目を見光らせ、光右衛門の質問に返答する。

「分光観測スペクトルにより、大気の主成分は窒素と酸素で、地球とほぼ同じです。但し、微量物質が大きく違い、ネオン、アルゴン、ヘリウムなどの稀瓦斯が含まれております。主星の光も地球と違って御座います。それがあのような色合いを見せているのでしょうか。さらに表面重力がやや小さく、そのせいで成層圏が地球より広がっております。それで霞のような光を纏っているように見えるので御座います」

光右衛門が指を挙げ、さらに質問する。

「それでは、あの光はなんでしょう？　時々、虹色の光が走りますか」

「極光オーロラで御座います。先ほども申し上げた通り、番長星の成層圏は大きく広がり、地球で申せば電離層の外側まで達しております。大気圏に含まれる微量物質が太陽からの高速粒子と衝突し、励起して電子を放出させます。それで光って見えるのです。地球では、極地

方でなければ見られない極光が、ここでは赤道付近でも見物でき
ます」

助三郎が窓際に陣取り、目を光らせながら、滔々と捲し立てる。

墜落

世之介が疑問の表情を浮かべたのを見てとり、格乃進は笑いながら説明した。

「我らは賽博格^{サイボーグ}だという事実を忘れては困るな。助三郎の人工眼球は、様々な波長の電磁波を感知できるのだ。分光観測など、お手の物なのだ」

側で聞いていたIPPACHIが、ちよつと拗ねたような表情になって呟いた。

「そんなことくらい、杏菊紹偉童^{アントロイド}のあつしだって、できまさら！
ただ幫間^{たいこ}というお役目柄、しゃしゃり出ることを控えているだけで
げすよ」

IPPACHIの口数が多い。不安に駆られている証拠である。もちろん、世之介も同じだ。これから、格乃進の説明した最後の手段を採らなければならないのだ。

さすがに光右衛門は最長老だけあって、表情には何の不安も、一欠片だつて表れていない。しっかりと床に立ち、片手に旅の杖を軽く握りしめている。

「それでは格さん、助さん。そろそろ参りましょうか」

光右衛門の皺枯れた声が、意外とはつきりと、世之介の耳に届いた。

はっ、となつて世之介は光右衛門を見た。いつの間にか、ボケッ

と番長星を眺めているだけの自分に気付く。

格乃進は「では」と、軽く頷いた。格乃進の指先が操作卓の上で踊った。

待つて！　と言いかけた世之介の口がぎりぎりで止まった。もう、遅い。

ぐーっ、と番長星が近づいてくる。いや、こちらから近づいていくのだ。

窓が真っ赤に燃え上がった。大気圏に突入したのである。もちろん客室の温度調節は完璧で、熱さなど全く感じることはない。

窓の外の大気が白く輝いた。高温で、空気中の原子から電子が遊離している。もう、惑星の表面は見分けることができない。

さらに

不時着

どどつ、と不意に床が傾斜し、世之介は立っていられなくなつて壁に叩きつけられるように転げ落ちた。「ぐぎゃっ!」と、世之介の身体の下でイッパチが悲鳴を上げた。

真つ白な光が、窓から差し込んでくる。窓は天井になっている。つまり客室が傾いているのだ。床が傾斜しているのは、客室の重力場発生装置が働きを停止しているのだ。非常用の動力を使い果たしたのだ。

客室は、最後の役目を果たした。

「皆、無事ですか!」

しつかりとした光右衛門の叫びが轟いた。

格乃進と、助三郎の返事が聞こえる。

「はい、大事ありません!」と格乃進。

「こちらもご同様で……」と助三郎の、ややのんびりとした返事。

「若旦那……ご迷惑でしょうが、あつしの身体からのおくんなせえ」

身体の下から、イッパチの弱々しい声が聞こえる。世之介は慌てて立ち上がった。

「ふいーっ!」と息を吐き出し、イッパチが目パチクリさせ立ち上がった。急いで身につけている着物の衣紋を繕う。

番長星に到着する前、一同は普段の着物に着替えていた。

世之介は高等学問所の制服である筒袖に袴。

光右衛門は辛子色の着物に袖なし羽織、野袴に頭巾という装束であつた。

助三郎に格乃進もまた手甲脚半、振り分け荷物という旅支度を整えている。IPPACHは、いつものように手に扇子を握っている。

凍結時間

「何とか、皆、無事のようですな。いや目出度い！」

ニコニコと笑顔になって光右衛門が皆の無事を寿いだ。床が斜めになっているので、足下が大いに不安定で居心地が悪い。

世之介は窓を見上げた。窓の外が燃え上がったと思えば、一瞬の後、こうなった。何がどうなったのか、さっぱりだ。いや、理由は判っている。客室の最後の保護装置が働いたのである。

フリーズ・タイム
凍結時間装置である。

客室の外部が、乗客の生命に危険と判断されると自動的に働く装置で、時を停止させる被膜を作り出す。この被膜の内側では、どのような変化も起きない。つまり、外部のどのような変化も受け付けないのだ。凍結時間が働くと、超新星爆発の真っ只中でも、一原子も傷つくこともない。

客室が大気圏に突入し、そのまま、まっしぐらに落下して、装置が働いたのだ。怖ろしいほどの衝撃と、熱が見舞ったはずだが、それは凍結時間に守られ、遮られた。

格乃進の説明に、世之介は理屈では判っていても、いざ体験するとなると、足が震えたものである。だが、それも済んだ。もう安心だ。

いや、そうだろうか？

隕石孔

ぐーっ、と客室が反対側に傾いている。わっ、わっと一同は反対側に傾いた床を滑っていく。

ごろり、と客室は転がり、さらにごろり、ごろりと何度も転がっていく。転がっていく球体の客室の中で、世之介たちは絹毛鼠ハムスターのように、ころころと転がった。

「なっ、何で転がっているんだい！」

世之介が叫ぶと、格乃進は叫んだ。

「黙っていなさい！ 舌を噛むぞ！」

どーん、と大きな音を立て、客室の転がりはいよいよやく止まった。濛々と細かな土埃が室内で舞い踊っている。

けほけほと咳き込みながら、世之介はよろよろと立ち上がった。下を見ると、IPPACHIが情け無さそうな顔で仰向けに引っくり返り、世之介の顔を見上げている。目が回っているらしく、大きな目玉がぐるぐると際限なく回転していた。

「怪我はありませんか！」

心配そうな光右衛門の声に、全員「いいえ」と返事をする。客室は完全に上下逆さまに転倒していた。

「ご隠居様、外へ出ましょう」

助三郎が叫んで光右衛門が頷くのを待ち、上下逆さまの扉を開け

る。さつと外光が差し込み、世之介は助三郎の後ろから出口に顔を突き出し、外を窺った。

巨大な擂鉢のような地形が目に見え込む。客室は擂鉢状の真ん中に鎮座していた。擂鉢の表面は焼け爛れ、あちこちから焦げ臭い匂いと煙が立ち上がっていた。世之介の背後から外を眺めた格乃進は、呆れたように呟いた。

「なんと！ これは、客室が墜落したときに穿った大穴に違いない。つまり隕石孔というわけだ」

「本当に、この客室がこんな大穴を開けたと申されるのですか？信じられません」

世之介が問い返すと、格乃進はゆっくりと外へ一歩足を踏み入れ、地面を触る。

「まだ暖かい……。衝突の熱が、残っているのだ。相当に大きな音が響いたことだろうな」

乗り物

格乃進の後から外へ飛び出した世之介は、顔を仰のかせ、空を見上げた。

董色の空。雲は微かに薄桃色がかって見える。確かに宇宙から眺めた番長星の大气の色と同じである。擂鉢の縁あたりに太陽が顔を出し、辺りに董色の光を投げかけている。

空を素早く、極光が横切る。^{オーロラ}真昼間から、しかも、極地でもないのに、はつきりと見える。

用心深く光右衛門が、続いて光右衛門を守る体勢で助三郎が外へ出てくる。最後にイッパチが怖々と外へ出てきた。

うおおおん……と、遠くから騒音が近づいてくる。

はっ、と見上げた一同は、擂鉢の縁にきらきらと何か、金属質の反射光を認めていた。

「人です！ 何か乗り物に乗っています！」

助三郎が指さし、叫んだ。世之介も真剣に目を凝らす。

だが、細部まで見ることはできない。さすがに賽博格の視力は大したものだ。

一斉に縁から雪崩落ちるように、乗り物はこちらに近づいてくる。うおおおん……と辺りにけたたましい騒音が満ちた。

ごつごつとした岩がちの地面を、跳ねるように近づく乗り物の細部が見分けられ、世之介はあんぐりと口を開け、叫んだ。

「あれは……二つの車輪で走っている。どうして転ばないんだろう？」

前後に二つの車輪を持った乗り物の中心に座席があり、そこに人が跨り、操縦するための把手ハンドルを握っている。たった二つの車輪だけで走行しているのに関わらず、ちゃんと走っているのを見るのは、不思議な眺めであった。

二輪車

光右衛門が大きく頷いた。

「あれは、二輪車オートバイというものです。大昔の乗り物で、今では誰も使ってはいません。わしも、初めて見ました」

二輪車は数十台を数えていた。次々と縁から出現すると、見るからに危なっかしく地面を跳ねるように走行し、客室を中心に、渦を巻くようにぐるぐると回っている。

ほとんどが一人乗りであつたが、二人が前後に乗り込んでいる二輪車もあつた。二人乗りの後部座席に乗っている乗客は、なぜか旗を手に持ち、こちらを威嚇するかのように睨みつけてくる。

旗は日章旗だったり、文字を大書きしたものやら、とりどりである。文字は「御意見無用」とか「世呂死苦」とか「撫血霧ぶちきり」など一目だけでは、何を書いているのか判らない漢字があつた。

その頃になつて、世之介は二輪車を操縦しているのが、総て女性であることに気付いていた。

しかし、相当に奇妙な格好をしている。

まず、着ているのが、着物ではない。上下が繋がった、作業衣のようなものである。白が多かったが、真っ赤なの、青いの、あるいは黄色と様々な色の作業衣を纏っていた。

髪の毛も、赤、黄色、茶色、中には緑とか、紫色など見ているだけで目がクラクラしてくるような派手な色に染めていた。

二輪車の群れは、かなりの時間、客室を中心にぐるぐる回っていた。

だが、やっと動きが止まり、一台の二輪車が全速力で近づくと、ざざつと横滑りするように停車した。

少女

「あんたら、いったい何者だい！」

甲高い、まだ少女と思われる声が響く。髪の毛は真っ赤に染め、前髪を垂らし、後頭部でぎゅっと縛って纏めている。

後になって、世之介はその髪型が「ポニー・テール」と呼ぶのだと教えられた。

少女の顔を見て世之介は思わず「あっ」と叫んでいた。超空間歪曲場で垣間見た、少女の顔であった。

少女は、きりつとした眼差しで世之介を睨んだ。ポカンと口を開けてまじまじと見つめる世之介を、少女は訝しげに見つめ返す。

「なんだい……」

ぴくりと眉が持ち上がる。

「ガンつけようってのかい？」

さつと二輪車の支柱スタンドを立て、降りると大股で世之介に近づいた。両手を腰に当て、ぐつと下から見上げるように睨み付ける。

「文句アヤつけようってのか？ 面白い、やっтарうじゃないか！ タイマンはできるんだろっね？」

世之介には少女の言葉が、一言半句も理解できない。一応は日本語であるが、まるで外国語である。

その場の状況を見て取り、さつと格乃進と助三郎が前へ出た。格

乃進が落ち着いた口調で話し掛けた。

「まてまて、我らは宇宙から墜落したばかりで、ここの状況は、さっぱり判らぬ。知らぬ間に失礼をばしたら、許されよ」

「へえ？」

少女は虚をつかれたように目を見開いた。くるりと背後の仲間を振り向くと、叫んだ。

「お前たち、こいつら、何を言っているのか判るけえ？ 何だか、妙だよ」

ざわざわとその場に立ち止まっている二輪車の仲間たちは顔を見合わせ、首を捻っている。皆、格乃進の言葉を理解できていない。

二人乗り

「まずは、自己紹介と行こうではないか」
杖を握り、光右衛門が口を開いた。

「最初に、わしから紹介させて貰おう。わしは、越後の呉服問屋の隠居で、光右衛門と申す爺いじゃよ。諸国遊樂の漫遊に出たのじゃが、妙なことで、番長星に墜落する仕儀にあいなった。できれば、この星のこと、教えてもらえれば有り難いのじゃが」

少女は困惑しているようだった。視線がきよときよと落ち着きなく動く。唇を舐め、何か考え込んでいる。

「ふーん。あんたらの言うことは、さっぱり判らないけど、敵じゃないみたいだね。それに、妙な格好をしているし、ここいらの人間じゃなさそうだ。困っているみたいだし、あたいらのヤサに連れて行ってあげよう！」

前後の口ぶりからヤサというのは住处、という意味らしい、と世之介は推測した。

「あんたら、あたいらのバイクの後ろに乗りな！ だけど、助平な根性で厭らしい真似をしたら、すぐ振り落とすからね！」

後ろに乗る？ つまり、女性の後ろに乗って……！
世之介の頬が熱く火照った。少女は世之介の顔色を見て「ちつ」と舌打ちした。

「なに、赤くなってるんだい！ まったく、男つてのは……！」

さつさと自分の二輪車に跨ると、顎を上げ、叫んだ。
「乗りなったら！ 愚図愚図してるんじゃないよっ！」

把手を握りしめる。二輪車から猛然と、音が響き渡った。おずおずと世之介は少女の背後の座席に跨る。
「行くよっ！」

少女は宣言して、右手をぐいっと捻った。

途端に、弾かれたように二輪車は前方に飛び出した。

「ひえっ！」と悲鳴を上げ、世之介は思わず運転している少女の腰にしがみついていた。

農地

けたたましい騒音を立て、世之介たちを乗せた二輪車の群れは、巨大な播鉢の穴から一斉に飛び出した。

飛び出したところは、どこまでも広がる畑である。

【滄海】の客室は、農地に墜落したのだ。

世之介は人家に墜落してなくて、幸いだったと改めて思った。

畑の真ん中を、二輪車は突っ切っていく。

風に揺れる穂先の間に、ずんぐりとした形の傀儡人ロボットが、黙々と農作業を続けていた。

傀儡人たちは、騒音を立てて二輪車が通過しても、ちらりとも視線を動かさない。ひたすら、目の前の作業に従事している。

型式から推測して、三世紀は前の型である。

最低限の自己判断と行動指針しか組み込まれておらず、好奇心のような余分なものは一切、備えられていないのだろう。

数台の農作業傀儡人たちは、地面に穿たれた隕石孔に集まってくると、土を運び、元通りに修復するための作業を、早くも始めていた。

二輪車は畑を突っ切ると、舗装された道路へ駆け上がった。舗装路面に車輪が乗ると、さすがにそれまで酷かった上下の震動はぴたりと止まり、快調に二輪車の速度は上がっていく。

世之介が振り返ると、隕石孔の上空に、仄かに埃が棚引いているのが確認できる。まだ巻き上がった埃が風に吹き払われていなかったのだ。衝突の物凄さが、これ一つではつきりと見てとれる。

光右衛門、格乃進、助三郎の三人は、各々二輪車の後席に泰然と席を取り、落ち着いた物腰で跨っている。しかし、IPPACHは顔を俯かせ、死に物狂いで、操縦する女性の腰にしがみついていた。

便利店舗

道路はどこまでも真っ直ぐに伸びている。

舗装面はきわめて平坦で、まるで出来立てのように見えた。道路の左右は広大な農地で、豊かな実りが一面に続いている。地面は平坦で、遠めに微かな隆起が続き、時々ふつと単調さを破る森や丘が盛り上がるだけで、人家は一つも見当たらない。

いや、道路脇に平屋建ての店舗が見えてくる。

店舗には広々とした駐車場が設置され、数台の二輪車が停車していた。

【紺美尼楼尊^{コンビニローン}】と大書された店舗の看板は、二十四時間営業を謳っていた。

「便利店舗か！」と世之介は感心した。

こんな惑星にも、便利店舗は進出しているのだ。

停車していた二輪車の持ち主は、今度は若い男性であった。女性たちと同じような格好で、頭髪は金髪や茶髪に染めているのは同じだが、髪型は違っている。

ぐつと盛り上がった前髪部に、蟬谷あたりを青々と剃り上げている。後で知ったことだが、それは「リーゼント」という髪型だそうだ。髪の毛はちりちりに縮まる「電髪^{パーマ}」にしている。

男性たちは近づいてくる女性たちの二輪車の群れに気付くと、慌てて自分たちの二輪車に跨り、動力を入れた。

わんわんと野良犬の遠吠えのように騒音を蹴立て、二輪車は女たちの二輪車に追いつがる。

「茜！^{あかね} どうした、そいつらは？ どこで拾った？」

男たちが併走して矢継ぎ早に質問を投げかけてくる。

声を掛けたのは、頭をつるつるに剃り上げた、十代の終わりのころと思われる歳格好の男性である。

茜

男は、やや上目遣いに、少女の後ろにしがみついている世之介を睨んでいる。視線には険悪な雰囲気漂っていた。

「茜」と呼びかけられたのは、世之介が跨っている二輪車を操縦している少女であった。

「火の玉が畑に落ちたのを見ただろう？ あそこで見つけたんだ。困っているようだから、助けてあげようって訳さ！」

「へえーっ！」と話し掛けた男は、馬鹿にしたように叫び声を上げる。ぐっと二輪車の速度を上げ、前に飛び出した。

尻を振るように後輪を滑らせ、見るからに危なそうな運転を始める。茜は叫んだ。

「何すんだい！ 危ないじゃないか！」

茜の叫びを男は完全に無視して、酔っ払いのような運転を続けている。明らかに嫌がらせとしか、思えない。

うおおん！ と爆音を蹴立て、男たちの二輪車が女性たちの二輪車の行く手を塞ぐように前へ飛び出し、同じように蛇行運転を始めた。ちらちらと後ろを振り返り「きゃほほほほ！」と奇声を上げていた。

道路を進むと【瀬文偉礼文】セフンイレブンだの【紗渥瑠恵燦楠】サークル・ケイ・サンクスだの、同じような便利店舗が次々と見えてくる。

店舗前の駐車場には決まって十数台の二輪車が屯していて、茜た

ちの二輪車に気付くと飛び出してくる。そんなことを二度、三度ほど繰り返えすと、走行している二輪車の群れは忽ち百台近い数になった。

世之介はそれらの二輪車をじっくりと観察した。

どれもこれも、世之介には理解できない改造を施されており、把^{ハシ}手のひん曲^{ドル}がったの、やたら大きな車輪^{タイヤ}を嵌めたの、あるいは、どうやって跨るのか想像もつかない奇妙な座席をくつつけたのやら、色々であった。どの二輪車も、目に突き刺さるような原色の塗装で、おのれの存在を誇示している。

また、操縦している男女も、世之介には絶対に理解しがたい扮装をしていた。髪型もそうだが、身につけている服装も、ひらひらする布切れや、でかでかと書かれた文字、何の象徴かも判らない様々な紋章。

文字は漢字で書かれているのが多いが、たまにアルファベットで書かれているものもあった。地球上で日本語以外の言語が死語に近くなって長く、世之介にはそれらのアルファベットが何を主張しているのか、まるで判読できない。

実を言うと、それらのアルファベットは、どれ一つとして意味のある綴りを示してはいない。長い年月、代々住民によって伝えられた間に、間違いが積み重なり、単にアルファベットが出鱈目に繋がっているだけになっている。しかし誰も元の英語を理解していないから、気にはしない。

健史

さっきの頭をつるつるに剃り上げた男が二輪車を寄せてきて、茜に話し掛けた。

声は奇妙な囁れ声で、がらがらなのに甲高いという親不孝な声であつた。

「おい、茜！ そいつら、どうすんだよ？ 教えるよ！」

男の口調は粘つくく、しつこかった。

じろじろと世之介を見る視線には、はっきりと悪意が見てとれる。

「煩いねえ！ 健史^{たけし}、あんたの知ったことじゃないだろう？」

茜はうんざりしたような口調になった。茜の返答を耳にして、健史と呼びかけられた男の目付きがさらに険悪さを増した。

健史は跨っている二輪車を急加速させ距離を取り、道路の真ん中に後輪を滑らせ、急制動をかける。

ききーっ、と歯が浮くような音が響き、健史の二輪車は道路を占拠する格好になって止まった。それを見て、健史と一緒に飛び出した他の二輪車の乗り手も同じように道路を塞いだ。

茜たちは道路を塞がれ、二輪車を次々と停車させる。

がちやり、と支柱を下げ、茜は素早く二輪車から地面に降りると猛然と喚いた。

「健史！ 何を考えてんだ！ 死にたいのかい？」

二輪車に跨ったまま、健史は顎を襟にうずめるように引いて、じろりと後席に跨ったままの世之介を睨みつけた。

挑発

「気に食わねえな！ 茜、いつか俺は、お前に言つたよなあ……。
二人で二輪車に乗って旅でもしないかって！ あんときゃ、考えて
おくって返事で、そのままだったが、いつの間にか、こんな訳の判
らないオカマ野郎を後ろに乗っけやがって！ そいつの、どこがい
んだよう？」

茜は溜息を吐いて肩を竦める。

「馬鹿じゃないの？ 何であたしが、あんたとそんな頓狂な約束し
なければなんないの？ 本当に、あんたって馬鹿ねえ……」

呆れた、という様子で、首をゆっくりと左右に振る。

健史の顔が見る間に真赤に染まった。世之介はまるで茹蛸だ、と
思った。

黙ったまま二輪車の支柱を立てると、ゆっくりと地面に降り立ち、
身体を揺するような独特の歩き方で、よたりながら世之介に近づく。

「おい！」

押し殺した声を掛けてくる。目は陰険に光っている。

近づいた健史の口から、ぷん、と薄荷ハッカのきつい匂いが漂った。口
の中に何かくちやくちや噛んでいて、それが薄荷の匂いを漂わせて
いるのだ。健史は顔を擦り付けるように近々と寄せてきた。

世之介は思わず身を引くと、健史はさっと手を伸ばしてきて、世

之介の襟首を掴んだ。

「お前……勝負しろ！」

「健史！ あんた、何、馬鹿なこと……」

茜が叫ぶと、健史はさつと顔をねじ向け喚いた。

「うるせえっ！ お前は黙ってるい！ これは男と男の話し合いだ！」

？男と男？という言葉に、茜はぎくりと押し黙った。この言葉は、番長星では絶対の価値を持つ。この言葉の前では、どんな論理も太刀打ちできない。

健史は無理矢理ぐいぐい世之介の身体を引き摺り、二輪車から降りた。世之介の両膝は全く力が入らず、健史の思うままになっている。

「俺か、お前か、どっちが茜と一緒に二輪車に乗るのが相應しいか、勝負だ！ タイマンだぞ！」

剣道

世之介は震える唇から、必死に言葉を押し出す。

「しょ、勝負って、どういことですか？　なぜ、あたしがそんなこと……」

世之介の言葉を耳にして、健史の表情が変わった。
ぶつ、と口の中で息を詰め、全身が細かく震え出す。

「だあーっ、はっはっはっはっ！」

身を折り、爆笑した。ひとしきり笑った後、健史は周りの人間に向け、大声で宣言した。

「聞いたか！　このオカマ野郎、あたしだってよ！　こいつあ、本当のオカマ野郎だぜ！　こんなオカマ野郎を、茜の後ろに乗せる訳には金輪際いかねえなあ！　ぶつとばしてやる！」

どん、と思い切り健史は世之介の胸を突いた。よろよろと世之介は踏鞆を踏み、背後に倒れ掛かる。

地面にしたたかに倒れこもつとした世之介の背後を支えた手があった。

はつと世之介が振り向くと、格乃進の頼もしい顔があつた。

「しっかりしなさい！　怯えるのはよくない」
「へえ？」

格乃進は真つ直ぐ世之介を立たせると、さつと後ろに引き下がる。ぽかんと口を馬鹿のように開けた世之介に、格乃進は言葉を区切るように話し掛けた。

「この星では、腕力で総てを解決する習慣のようだ。降りかかった火の粉は、避けるだけでは解決しないぞ！」

「で、でも……格乃進さん。助けては下さらないので？」

「わたしは、賽博格^{サイボーグ}だ。人間と本気で争うことはできない。そんなことをしたら、相手に大怪我をさせてしまう。君がやるんだ！」

世之介は首を振った。

「無理です！ あたしは今まで、唯の一度たりとも、喧嘩なんかしたことはないんです！」

格乃進は、にやっと笑いかけた。

「高等学問所で剣道の授業はしたはずだな？」

世之介は頷いた。剣道の修行は、中等、高等の学問所で必須の修行である。

格乃進は言葉を続けた。

「だったら、大丈夫だ。学問所で習った、剣道の授業を思い出せ！」

一本！

世之介はおずおずと健史の方向を振り向いた。

健史は、馬鹿にしたような笑いを浮かべ、獲物を前にした獣のような気配を漂わせていた。やや俯かせた顔には、ニタニタ笑いが浮かび、今にも涎がタラタラ糸を引きそうである。

剣道の修行を思い出せ！

そんなことを言うが、格乃進は竹刀を持っていない。それに、今では、学問所の剣道修行の時間は、遠い昔の夢物語に思える。

「やんのか？ オカマ野郎！」

「そのオカマ野郎とは、なんのことで御座います？」

こんな状況でも、世之介の言葉遣いは相変わらず丁寧である。どんなに頑張っても、乱暴な口調は金輪際、どうにも使うことができないのだ。

「お前のようなナヨナヨした奴のことだよっ！ ああ、気持ちが悪い！」

ぺっぺと健史は唾を吐き散らした。

世之介の胸に、勃然と怒りが湧いてきた。自然と両手が上がり、竹刀を握る構えを取る。

「おっ！」と小さく健史は身構え、再びよたひながら近づく。ぐいっと身を沈め、下から世之介の顔を見上げる。

「やんのか、こら！」

「お面　っ！」

世之介は叫ぶと、両目を閉じ、両手を竹刀を握り締めた形のまま突き出した。無我夢中の世之介の右手に、何か手応えを感じていた。

「ぐぎゃっ！」

悲鳴に、世之介は「はっ」と目を見開いた。

見ると、健史が地面にぺしゃりと大の字に寝転がり、二つの目玉を虚ろに見開き、口をあんぐりと開いて世之介を見上げている。顔色は真っ青で、鼻っ柱だけが真っ赤である。

世之介の夢中で突き出した右手の拳が、健史の鼻っ柱を打ったのだ！

健史の見開かれた両目に、見る見る涙が浮かんでくる。

「ぐええええ……！」

世之介は呆れた。

なんと、健史は泣き始めたのだ。

号泣

「うおおおん、うおおおん……」

あたり構わず、健史の泣き声は響き渡っている。両目から滂沱と涙を噴き出させ、身を振るようにして泣き喚いていた。その様子は、まるで幼い子供のものであった。

「痛えよお！ こいつが、俺をぶったあ！ ひどいよお！ なんてぶつんだあ！」

健史はいやいやをするように、激しく首を振る。困った世之介は、宥めるように両手を上げ、健史に近づいた。

「あの……まことに相済みませぬ。つい……」

近づいた世之介に、健史はびくつと身を震わせ、尻をぺたりと地面につけたまま、両手を使って後じさった。

「来るな！ 厭だあ！ 怖いよお！」

世之介は助けを求める視線を茜に向けた。しかし茜も、世之介をまるで怪物を見るかのような視線で見つめているだけである。

目に恐怖の色を一杯に浮かべた健史の仲間たちは、ぎくしゃくとした動きで健史の周りに集まってくると、手を伸ばして助け起こし、二輪車にそそくさと戻っていく。

無言で動力を入れると、振り返りもせず、二輪車に乗ったまま去

っ
ていく。爆音は心なしか控えめで、あっという間に見えなくなっ
てしまった。

称号

静寂のみが支配していた。

世之介は一步、茜に近づいた。説明を求めたのである。

「どういふことなのでしょう？ わたくしには、さっぱり……」

茜の唇はからからに乾いていた。茜は唇を舐め、目を一杯に見開いたまま、呟いた。

「本当に殴ったなんて……！ 信じられない」

イツパチが首を捻った。

「でも、喧嘩を仕掛けたのは、あの健史ってお人なんでしょう？
だったら偶然でも、殴られることは覚悟していたはずじゃあ？」

「違う！」と茜は首を振った。

「喧嘩で、本当の殴り合いになることなんて、今まで一度もないわ
！」

「ええっ！」

今度は世之介は本当に驚いた。

「だって、だって、あの人たち見るからに本当の不良で、あたしに
喧嘩を売ってきたときだって、本気だと……」

「ここらで喧嘩というのは、口喧嘩のことよ。お互い、相手を凹ま
せるために色々と言い合うけど、手を出すことは絶対しない。そん
なことになったら、怪我するでしょ？」

茜の説明に、世之介はがつくりと両手を下ろした。茜の両目に、尊敬の色が浮かぶ。

「もし、本気で殴りあう覚悟ができる人がいれば、その人は【バンチヨウ】って呼ばれるでしょうね。ここでは、そんな【バンチヨウ】の称号を持っている人間は、数えるしかない……」

茜は、にっこりと笑みを浮かべる。

「あなたは【バンチヨウ】よ！ 今日から【バンチヨウ】って名乗っても良いんだわ！ 凄いじゃないの！」

世之介は周りを見回した。

茜以下、二輪車に乗った女性たちは賛嘆の表情を浮かべている。

世之介は呆然と、いつまでも立ち尽くしていた。

仁義

茜は一步さつと引き下がると、腰を沈め、両足をがばつと蟹股に広げた。左手を後ろに構え、右手を前に突き出す。

「お控えなせえっ！」

ぐつと下から世之介の顔を見詰め、叫ぶ。

世之介は訳が判らず、ただ、ぼんやり呆然と、茜のきりつとした顔を見返しているだけである。

もう一度、茜は叫んだ。

「どうぞ、お控えなせえっ！」

叫んだ後、世之介を見上げたまま待っている。何を待っているのか？

「若旦那……」

イッパチが話し掛けてくる。世之介はイッパチに向かい、囁いた。「イッパチ、あの茜って娘のしていること、判るのかえ？」

「へい！ あつしは、あのお嬢さん、若旦那に向けて仁義を切っているんだと、考えておりやす」

「仁義？ なんだい、そりゃ？」

「挨拶でござんすよ。若旦那も真似されたらいかがで？ 茜さん、困っておられるようですよ」

言われて世之介は、茜の仕草をぎこちないながらも、真似をすることに決めた。腰を沈め、右手を覚束なく突き出す。

さつと茜の頬が紅潮した。

「早速のお控え、有難うござんす！ 手前、生国と発しますは、番長星にござんす！ 番長星、と言つても広うござんす。北番長星は常陸の国、大宮村に生を受け、那珂川にて産湯を使い、姓は勝かつまた又名前は茜と申す、不束者でござんす！ 此度は奇遇なことに、あんさんの……」

茜の言葉が途切れ、困惑の表情になる。

自己紹介

「あの……、名前を覚えてくれない？ 仁義を切る前に、名前を覚えて貰ってなかったこと気がつかなかったの」

蚊の鳴くような細かい声になる。顔は恥ずかしさに、真っ赤になっている。頷き、世之介は顔を近づけ、小声で答えてやった。

「但馬世之介だよ、茜さん」

さつと茜は元の位置に戻って仁義を続けた。

「……但馬世之介様の知己を有り難くとも頂き、ただただ、恐悦至極にござんす。今年、十と八歳になる若輩者でござんすが、どうぞ皆々様のお引き回し、ご鞭撻、よろしうお願いいたしやす！」

ぱちぱちと周りから女たちの拍手が湧いた。茜は、明らかにほつとした表情になって立ち上がった。

「ああ、よかった！ ちゃんと仁義が切れたわ！ 何しろ世之介さんは本物の【バンチョウ】だもんね！ こっちも正式の仁義を切らないと、失礼だもん」

「さて」と光右衛門が口火を切った。

「少し寄り道したようですが、これから茜さんは、わしらをどこへ連れて行ってくれる、お積りなのでしょう？」

光右衛門の言葉を耳にして茜は「あつ」と口を押さえる。ばかり、と自分の頭を打ち、舌をぺろりと出した。

「いつけなあい！ 肝心なこと忘れてた！ あのね、お爺ちゃん…」

光右衛門は、にこやかに答えた。

「越後屋の隠居、光右衛門で御座います」

茜は頷いた。

「ああ、そう、光右衛門さん。それに……」

問い掛けるように、助三郎と格乃進、 IPPACHI に目を向けた。

「格乃進で御座います。格さん、とお呼びくだされば結構！」

格乃進は、それでも堅苦しく、真っ直ぐ茜を見詰めて口を開く。

「助三郎で御座います。助さんでよろしいですよ」

助三郎は、にっこりと柔らかな笑みを浮かべている。

同意

助三郎の背後から、イッパチがひょこりと顔を出し、喋り出した。扇子をぱちりと鳴らし、軽く襟元を調える。

「イッパチです！ 軽くイッパチ、と呼び捨てになっておくんなせえ。間違えてもイッパチさん、なんて？さん？付けは、ご勘弁を……。色っぽい声音で『イッパチさん』なんてえ呼ばれた日にゃ、あたしやもう……」

イッパチは一人で照れている。

茜は呆れて見ていたが、それでも頭をぶるつと振って立ち直ると、改めて口を開いた。

「【集会所】に案内しようと思ってたの！【集会所】には、あたしの両親もいるし、ここにいるみんなの家族も揃っているから、大丈夫。ね、是非とも寄ってくれない？ 本物の【バンチョウ】を連れてきた、ってことになれば、あたしは鼻が高いわ！」

茜の両目はきらきらと輝いていた。

「そうよ！ 絶対に【集会所】に来て貰わなきゃ！」

二輪車の女性たちが一斉に賛意を表した。

世之介は意見を求めるように、光右衛門を見た。

光右衛門は頷く。

「よろしいではありませんか！ わしらも、少しはこの星のこと、勉強になるはずです。まずは、自分たちの今いる場所のことを知る

「ことが肝心でしょう」

道路

【集会所】に近づくにつれ、道路の両側に様々な施設がぽつぽつと増えてきた。一番はつきり目立つのは、給油所である。

とはいえ、本物の燃料油脂ガソリンを補給するわけではない。

番長星で使用されている二輪車などの動力源に使用されているのは、超強力な弾み車である。シュヴァルツシルト半径一ミリ以下の黒穴ブラック・ホールに回転を与え、磁場が回転して電力を発生する。給油所では黒穴に新たな回転力を与えるための偏向重力場を掛けるのだ。

他に目立つのは、四輪車や二輪車の整備工場、車輪や装飾品ドレス・アップを売っている専門店、日用品や食料品を取り揃えている大規模店、家族食堂ファミレス。

どれもこれも赤、青、黄色、桃色などの原色で彩られている。

道路には、二輪車以外四輪の車も走っていた。

世之介は地面をこのような動力車が走っているのを見たことがなく、物珍しかった。世之介の育った大江戸では、乗り物といえば公共のものも、個人の所有のものも総て空中を飛行するものばかりだった。

空を見上げた世之介は、飛行する乗り物を見ないことに気付く。番長星では飛行する乗り物は存在しないか、ほとんど使用されていないらしい。

そろそろ二輪車の後席に座った尻が痛み始めたころ、やっと目的の、茜たちの【集会所】が見えてくる。

母親

【集会所】は幾つかの建物が組み合わさった複合施設であった。

中心にあるのは量販店で、一階部分は家族食堂、その食堂の向かい側には遊戯施設ゲーム・センターが付属している。

住居は中心の施設を取り巻くように建てられ、広々とした駐車場があつて、そこには二輪車や、四輪の車がずらりと駐車されていた。住居同士は渡り廊下や、通路で繋がれ、まるで一つの巨大な建物のようなだった。住居同士を繋げている廊下や階段は後から無理矢理くつつけたかのように、様式や素材は統一されておらず、全体に継ぎ接ぎ細工のようである。

驚くのは建物と建物の間にほったからしになっている塵コミの山だ。うず高く積まれた塵には、遺棄された電化製品とか、食糧の容器、雑誌がごちゃごちゃと固まり、間からは食糧を養分に植物が根を張り、枝を伸ばしている。

番長星を支配しているのは、混乱そのものであった！

駐車場に二輪車が次々と停車すると、建物の扉が開き、中から人々が顔を出してくる。

現れたのは家族連れで、老若男女様々な年齢層で、多くは幼い子供の手を引いていた。中には腰の曲がった老人もいる。

ただし老人とはいえ、身につけているのは派手な色合いの上着や、作業服、学生服で、薄い頭髪を整髪料で固めてリーゼントにしているのがご愛嬌だ。

「お帰り。早かったね」

茜に中年の、やや太った女性が声を掛けてきた。太っていることを除けば、茜に似た顔立ちをしている。何か台所仕事をしていたのか、女性はしきりと手を厚手のタオルで拭いていた。女性は茜の二輪車の後席に跨っている世之介を見て、尋ねかけるような表情になる。

「その人たちは？」

茜は一つ頷くと、説明を始めた。

「畑の真ん中に火の玉が落ちたって話は聞いてるよね？ 空から落ちてきた玉の中に、この人たちがいたんだよ。困っているようだから、連れてきた」

「ふうん」と相槌を打った女性は、世之介を見て愛想笑いを浮かべた。

「それはまあ、大変でしたねえ」

父親

茜は苛々した顔つきになった。

「母ちゃん！ 話はそれくらいにして、食事の用意しなきゃ！ この世之介さんは【バンチョウ】なんだよ！ 凄いだろ？」

茜の【バンチョウ】という言葉に、女性は驚きの表情を浮かべた。やはり茜の母親だったかと、世之介は一人うんうんと頷く。

「あらまあ、大変！」

母親は口をポカンと開け、ぱつと両手を挙げると、急ぎ足で家中へ駆け込んだ。家の中から母親の叫び声が聞こえる。

「父ちゃん！ 父ちゃん！ 茜が【バンチョウ】さんを連れて帰ってきたよ！ 挨拶しな！」

どたばたと足音が近づき、さっきの茜の母親が父親と思われる同じ年頃の男性の手を引いて表れた。父親は対照的にひどく痩せていて、度の強い眼鏡を掛けている。

「【バンチョウ】だって？」

眼鏡の奥からまじまじと世之介を見つめてきた。世之介は眼鏡を掛けた人間を見るのは初めてで、ひどく驚いた。この番長星では視力矯正は一般的でないのだろうか？

母親は顔を顰める。

「父ちゃん、そんな眼鏡を掛けていたら【バンチョウ】さんをよく見ることができないだろ！ 外しなよ」

「ああ」と頷き、父親は眼鏡を外した。眼鏡のレンズ面に、何かの番組が映し出されている。

これは、テレビなのだ。眼鏡を外し、父親は目を皿のようにして世之介を観察する。

「初めまして。但馬世之介で御座います。茜さんにお世話を頂き、恐縮しております」

世之介は丁寧な頭を下げ、挨拶する。父親は吃驚した表情になった。

食堂

「ああ、そのう……ええと……」

ぱくぱくと口は動くが、虚しく言葉は出てこない。茜はさつと父親の手を引き叫んだ。

「それより、食事、食事！ 皆、腹を空かせているんだから、何か食べよう！」

ぱつと世之介を振り向き、輝くような笑顔になる。

「世之介さんも、お腹は空いているよね？」

言われて世之介の腹部から「ぎゅうーっ」という音がしてくる。

そうだ、あれから何も口にしていないんだ！

世之介の腹の音を耳にして、茜はころころと転がるような笑い声を上げた。

「じゃ、決まりね！」

どん、と勢い良く、世之介の背中を叩いた。

手を伸ばし、今度は世之介の手を引いた。

行き先は家の中ではなく、中心部の建物の家族食堂である。てつきり世之介は家の中で食事するのだと思っていて、戸惑った。

茜はその場にいた全員に叫んだ。

「飯だよ ! 皆、おいで !」

「飯だ」「飯だ」と全員が叫び交わし、ぞろぞろと集まってくる。

どやどやと騒がしく、家族食堂へと歩いていく。

食堂に入ると、杏菊紹偉童アンドロイドの女給ウェイトレスが出迎えた。大江戸で使用されている杏菊紹偉童に比べると、大幅に旧型の形式で、人造皮膚がはつきりと見てとれた。

杏菊紹偉童は歌うような口調で「いらっしやいませ〜！」と頭を下げると、手馴れた様子で全員を席へ案内する。

大きな卓に案内された世之介の隣に茜が座り、年長の光右衛門が奥まった席へと座る。助三郎、格乃進は光右衛門の両隣で、世之介の両隣には茜とIPPACHIが陣取った。

席につくなり、全員は口々に注文を叫ぶ。杏菊紹偉童の女給はてきぱきと受け答えをして、注文を受けていく。

女給が下がるなり、すぐに食事が運ばれてきた。出来合いの料理を温めるだけのものらしく、全員は目の前に運ばれた料理を飢えた狼の群れのように、ががつと食べ始めた。

予感

茜は興奮した様子で、世之介と健史の対決の場を大袈裟な誇張を交え、話し出した。時々「ほう」とか「ああ!」とか聞き手の間から感嘆の声が上がった。

茜の描写を聞くうち、世之介は自分が仕出かした顛末が、まるで英雄物語の一場面で、自分のこととは、とても思えなくなった。

「それでねえ……世之介さんがびしつと健史の鼻っ柱を打つと、奴はびゅーんつ、とこーんなに吹っ飛んで……血が、こーんなに……」

頬を真っ赤に紅潮させている茜に、世之介は肘を掴んで口を挟んだ。

「あのう、茜さん。ちょっと大袈裟なんじゃないでしょうか？ あたしは、そんな力持ちじゃ御座いませんよ」

茜は「はっ」と息を吐き出した。

「いいじゃない！ あたし、本物の喧嘩を見たの、初めてなんだもん！」

「えらいっ！ さすが本物の【バンチョウ】だっ！ 自分の手柄を誇らないなんて、実に見上げたもんだ！」

ぱしつ、と自分の膝を叩き、茜の父親が叫んだ。隣で母親も「うんうん」と相槌を打っている。

世之介は全員の顔を見渡した。

皆、憧憬の眼差しで世之介の顔を熱っぽく見詰めている。たかが喧嘩をしただけで、これほどの尊敬を受けるとは、思いがけないことである。

ここは腕っ節がものを言う世界なんだ。

世之介としては、一刻も早くこんな世界から逃げ出し、もとの大江戸へ戻りたくなっていた。

偶然とはいえ、喧嘩に勝利したことを、世之介は全く誇るべきことだとは思えなかったのである。逆にこれから、ひどい厄介ことが持ち上がりそうな予感を覚えていた。

経済

食事が終わり、支払いはどうするのだろうかと思っていると、茜はまるで頓着せず、堂々と外へ出て行こうとした。

「あの、茜さん。支払いは？　もしかして、ツケですか？」

意外なことを聞く、といった表情で茜は世之介の顔を見詰めた。

「支払いって何？」

茜は大真面目で尋ねている。世之介はイッパチと顔を見合わせた。

「そのう、お金のことですよ。こんなに飲み食いしてタダとは思えません」

茜は首を捻っていた。世之介の言葉が、一言も理解できていないらしい。

「お金？　支払い？　だって、この食堂は、うちのもののなのよ。そんなの、したこと一度もないわ！」

世之介は驚いた。

「そ、それじゃ、あなたがたの乗り物は？　着る物は、どうなんです？　それに、住むところの家賃は？」

茜はゆっくり首を振った。

「知らない。欲しい物があれば取りにいくし、新しい二輪車が欲しければ、言えばくれるもん！　お金って、何のこと？」

「うーむ……」

唸り声に振り向くと、光右衛門が眉を寄せ、難しい顔つきになっ

ている。

「もし茜さんの言うことが本当なら、これは由々しき事態ですな！
この星では、まともな経済活動が行われていない、ということになります。総てが無料だとすると、その代償は、はて、何なのでしょうか？」

光右衛門は、じつと茜を見詰めていた。

兄

食事が終わり、茜は一同を【集会所】の空き部屋へ案内した。時刻は夕方近く。太陽は地平線に傾き、夕日が差し込んでくる。

番長星の夕日は、地球と違い、琥珀色をしていた。空は珈琲色に霞み、黄土色の雲が掛かっている。

「ここは兄ちゃんの部屋だったんだけど、今は留守なの。もう、半年くらい家を出て、行方不明もいいところだから、あんたら勝手に使ってもいいわよ」

部屋を見回した世之介は、床が板張りで、畳ではないことに気付いた。壁は漆喰で、和風ではない。全体に殺風景で、家具は洋式寝台と、あちこち放り出されている鉄亜鈴、芭亜鈴、バーベル、エキスバンダー、発条鍛錬器、室内走行器などが部屋の持ち主の性格を現している。

「お兄さんが、いたんですか？」

世之介の質問に、茜は頷き、壁にベタベタと貼られている写真を指さした。

「そ、あれが兄ちゃんの、一番新しい写真なんだ」

指さされた写真をしげしげと覗きこんだ世之介は、それが奥行きのない、完全な二次元の映像であることに気付いた。しかも静止画である。

今どき、こんな古めかしい画像は珍しい。番長星では、立体動画記録は一般的ではないのだろうか？

写真には、茜と肩を並べ……いや、男のほうで遙かに背が高く、茜より頭二つ分は飛びぬけている。身長はおそらく、六尺……いや、六尺五寸はあるだろう。古めかしい学生服に、ぼろぼろの帽子を被っている。

顔には満面の笑みを浮かべているが、あらゆる箇所古い傷跡が走っている。顎が張り出し、首はひどく太く、身体つきは格乃進と比べても遜色ないほど逞しい。隣に全身を写したものがあって、足下は齒の高い下駄を履いている。写真の男が、茜の兄であろう。

「お兄さんの名前は？」

「勝又勝^{またかつ}」

答えて、茜は「ぷっ」と吹き出した。

「おかしな名前でしょ。かつまたかつ、って読めるから、兄貴はひどく気に入っているの。俺は誰にも負けない最強の【バンチョウ】になるって宣言して、家を飛び出したの。今頃、どこで何しているか。まあ、兄貴のことだから、滅多なことじゃ、くたばるタマじゃないけどね」

茜は一息に喋り終わると「じゃあね、後で皆の分の布団を持ってくるから！」と手を振って、部屋を出て行った。

追記

あとに残された世之介たちは、無言でお互いの顔を見合わせた。

「やれやれ、少し疲れましたな」

光右衛門が呟き、部屋の窓際に置かれた巨大な寝台に腰を掛けた

「格さん。ちょっと尋ねますが」

ぼつり、と光右衛門が呟く。格乃進はさっと前へ出ると、光右衛門の前に膝まづいた。

「何でしょう、ご隠居様」

「うむ」と一声上げ、光右衛門は何か考え込んでいるらしく、腕組みをしている。やがて眉を上げ、きらりと目を光らせた。

「格さん。あの船室で番長星を探したとき、記録に何か別の資料なり、追記なりを見ませんでしたかな。単に番長星の、位置だけが記録されておったのですか？」

格乃進は、肩に担いだ振り分け荷物を解き始めた。

「実は、船室の記録ですが、万一のことを考え、複写^{コピー}を取っておきました」

格乃進の答えを耳にして、光右衛門は嬉しそうに破顔した。

「でかした！ それでこそ格さんです！」

格乃進は荷物から、携帯型の立体映像投影装置を取り出す。手の平に収まるほど小型であるが、機能は充分で、格乃進が操作すると部屋の中央に立体的な星図が投影される。

「これが番長星の主星です。主系列のK型に属し、表面温度は四百度。地球に比べ、やや小型で……」

滔々と並べ立てる格乃進を、光右衛門は慌てて制止した。

「格さん。講義は後にして、まずは番長星のことを教えてくれませんか」

格乃進は「はっ」と顔を赤らめた。「賽博格でも、顔が赤くなるんだ」と世之介は妙なところに感心した。

「申し訳ありません。それでは、これが番長星で御座います。星図には概略のみしか記載されておりませぬが、一つ妙な追記が……」

番長星を示す印に、光右衛門は身を乗り出した。

「これは……銀河遺産を示す印です！ 成る程、これで得心しましたぞ！」

布団

「銀河胃酸？ そりゃ、どんな胃の薬でげす？」

イツパチが頓珍漢な質問をする。

光右衛門は「むっ」となって答える。

「胃酸の薬ではありません！ 銀河の遺産なのです！ 何です、不真面目な……」

光右衛門の怒りに触れ、イツパチは「うへっ」と首を竦める。光右衛門は息を整えると、再び説明を始めた。

「初期の殖民星の中には、奇妙な風習、文化を保持した星があつて、幕府はそれらの特殊な殖民星の文化を守るため、銀河遺産を制定しました。独特の文化を保持するため、観光客などの立ち入りを禁止しました。この番長星が銀河遺産なら、我らの救難信号に答えなかったのも理解できます。銀河遺産に指定された殖民星には、正式な代官所、奉行所は設立されておりませんからな」

世之介は、沈み込むような絶望感を味わった。

「そ、それでは、わたしたちは、一生この番長星に囚われたまま、地球に戻ることは叶わないのでしょうか？」

世之介の必死の訴えに、光右衛門は首を振った。

「諦めてはいけません！ 確かに幕府の手が及んでいないことは認めます。それでも、保護されていることは確かです。恐らく、無人の監視所か、地球への非常通信手段は確保されていると思つても良

いでしょう。だが、それがどこにあるか……」

光右衛門の言葉が途切れると、扉を叩く音がした。光右衛門が「お入りなさい」と返事をする、と、扉が勢い良く開き、茜の顔が覗いた。

「お布団、持ってきたわよ。狭いけど、今夜はこの部屋に泊まって頂戴。明日になれば、皆の部屋を用意するから」

茜の背後から、布団を抱えた両親がにこにことした人の良い笑顔を見せている。

眩き

光右衛門は深々と頭を下げ、口を開いた。

「それは丁寧に痛み入ります。それはそれとして、茜さん。一寸、あなたに尋ねたいことがあるのですが、宜しいかな？」

茜は「へえ？」と眩くと、部屋に入ってきて光右衛門の前にどっかりと座り込んだ。正座ではなく、胡坐である。

世之介は、もしここが地球だったら、茜のような仕草をする女の子は、とくに説教されている場面だなと思った。

光右衛門の隣に膝について控えていた助三郎が何か言いたげに微かに口を動かしたが、それでも我慢して、ぐっと堪えている。

「何が聞きたいの？ 光右衛門さん」

光右衛門は穏やかに茜に尋ねた。

「地球のことを知っておりますか？」

「地球……？」

眩き、茜は首を捻った。茜の表情は、光右衛門の口にした「地球」という言葉に何の反応もないものだった。茜は「分かんない」と眩くと、首を振る。

その時、布団を運び入れた茜の両親が、もじもじして立っているのに世之介は気付いた。

「あのう……」と父親が口を開く。

光右衛門の視線が茜の父親に向けられた。

「何か、ご存知なのですか？」

茜の父親はぺこりと頭を下げた。

「はい。昔々のことで、何でも番長星にやってきた最初の人たちは、地球から運ばれたそうです。何百年も前の話だそうですが、それ以来、我々は地球と連絡が途切れ、今では昔話になってしまいました。若い者の中には、地球という言葉すら知らない連中もおります。中には、地球というのは、ただの伝説だと主張する者もいるくらいで……」

光右衛門は高らかに笑い声を上げた。

「はっはっはっはっ……。伝説ではありませんよ。わしらは、その地球からやって来たのですから」

「ほおーっ！」と茜の両親は感嘆の声を上げ、床に仲良く座り込んだ。光右衛門は、誰にともなく、話し掛ける。

「番長星にやって来たのは、不時着したからです。ですから、何とかして、わしらは地球へと戻りたい。それには、地球と連絡の取れる場所に行きたいのです。何か、あなたがたで、それについてのお知恵があれば、拝借したいのですが」

茜と両親は顔を見合わせた。両親はしきりに首を捻っている。茜は何かを思い出そうとするように、視線を天井にさ迷わせた。

「ウラバン……」

茜はふと、呟く。茜の呟きに、両親はぎくりと身体を強張らせた。

憧れ

「茜！ それは……」

父親が言いかけ、口を噤む。

光右衛門は目を鋭くさせた。

「ウラバンと仰いましたな。それは何のことです？」

両親は黙り込み、顔を俯かせる。光右衛門は茜に向き直った。

「茜さん、聞かせて貰えんでしょうか？」

茜は一つ、頷いた。目が真剣である。

「ウラバンってのは、この番長星にいる総ての【バンチョウ】を取り仕切っているの。でも、誰も姿を見たことはなくて、裏から支配するから？ウラバン？って、言うようになったの。ウラバンは、番長星の？暴走半島？のド真ん中にある、【ツツパリ・ランド】にいるって噂よ。その【ツツパリ・ランド】には、時々空から光るものが降りてくるって話なの。それが地球からの連絡なのか、どうなのかは、知らないけど」

光右衛門は大きく頷いた。

「空から降りてくるものがある、とは聞き捨てなりません！ どう思います、助さん、格さん？」

供の二人に向けて尋ねると、助三郎、格乃進ともに頷いた。

「ご隠居様、これは一つの手懸りですぞ！ 是非とも、茜さんの仰る【ツツパリ・ランド】に出掛けるべきです！」

格乃進が力強く答える。

「拙者……いえ、わたくしも、そう思います」
助三郎も同意した。

世之介は助三郎がすっかり「拙者」と言いかけ、慌てて言い直したのを奇妙に思った。

しかしすぐ、地球への帰還に希望が出てきたことに、不審の思いは忘れてしまった。

「【ツツパリ・ランド】って、どんな場所なんです？」

世之介の質問に、茜はにっこりと笑った。

「ツツパリだったら、一度は【ツツパリ・ランド】の門を潜りたいと思ってるよ！ 何しろ、そこには根性の入ったツツパリたちがウヨウヨいるって話だよ！」

茜の瞳はキラキラと輝いている。

ツツパリたちの憧れの場所……。

世之介は茜の言うように、素晴らしい場所だとは、とてもじゃないが、思えなかった。

素振り

夕焼けの中、世之介が立っている。周りには誰もおらず、世之介は一本の棒を持ち、素振りを繰り返していた。

ぶんっ！

木の棒が唸りを上げ、空を切る。世之介は両手でしっかりと握りしめ、渾身の力を込めて振り下ろす。

ただ振り下ろすだけでは駄目だ。振り下ろした棒を、ぴたりと静止できなければ、修行とは言えない。

中等、高等学問所の六年間、世之介は剣術の修行を続けていた。

真夏の暑い日盛りも、真冬の厳寒の日々も、修行は一日も欠かさなかった。

番長星では腕っ節がものを言うことをつくづく思い知らされ、世之介は学問所を卒業してから怠っていた修行を、再開する決意を固めたのである。

振り下ろすうちに、世之介の全身に汗が噴き出し、蟬谷から滴った汗は顎からぽたぽたと垂れている。

「お見事！」の声に振り向くと、助三郎が立っていた。

軽く腕を組み、面白そうな表情を浮かべている。

「いい素振りだな。よくよく修行を重ねたと見える。良い心がけだ」
誉められ、世之介は頭を掻いた。

「いや……お恥ずかしい限りです」

助三郎は一步前へ出、傍らの茂みから小枝を一本ぽきりと音を立て、折り取った。

「一丁、手合わせをして進ぜようか？」

「助三郎さんが？」

世之介の驚きの声に、助三郎は一つ頷いた。手に持った小枝を片手で構える。

「さあ、どこからでも懸かってきなさい」

ニヤニヤ笑いを浮かべている。手に持っているのは、ちっぽけな小枝一本。箸ほどの細さで、長さもそれくらいだ。

世之介は少し腹を立てた。助三郎はからかっているに違いない。あんな、小枝一本で、勝負になると思っているのだろうか？

ようし、それなら……。

世之介は棒を正眼に構えた。気合が高まるのを待つ。

「いやーっ！」

高く叫ぶと、世之介は棒を握りしめ、真っ向微塵に振り下ろした。

夕日

と、助三郎の姿が世之介の視界から消えた。

はっ、と世之介の動きが止まる。

いつの間にか、助三郎は世之介の握った木の棒の先端に、さっきの小枝を押し当てている。

ただ、それだけなのに、世之介は自分の木の棒を持ち上げられなかった。軽く小枝が押し当てられているだけなのに、びくとも動かない。

世之介は、さっと棒の先端を下げた。つい、と助三郎の小枝も従いてくる。横に払うと、助三郎の小枝はびつたりと寄り添い、どうにも振り払うことができない。

焦りに、世之介の息が荒くなる。

助三郎がさつと棒から小枝を離すと、先端を世之介の首元に押し当てた。

「真剣なら、勝負あった、だな」

世之介はぜいぜいと喘ぎ、恨みがましい声を上げた。

「ずるい……ですよ。助さんは、サイボーグ賽博格じゃないか！ 人間のあたしが、敵うはずない！」

「そうかな」

助三郎はばい、と小枝を投げ棄てた。

「確かに、俺は賽博格さ。人間にはできない、色々な能力があることは否定しない。だが、剣術の基本は同じだ。要は、体捌きってやつさ。無駄な動きをなくし、相手との間合いを常に把握する。これが大事なんだ。お前さんだって、六年間、必死に修行したんだ。それは、きつと身に染み付いていると思う。それを思い出せ！」

助三郎の言葉は胸に落ちた。

その時、背後から茜の声が掛かる。

「風呂に行くよ！ 汗を流しな！」

世之介は振り返った。夕日の中に、茜とイッパチが立っている。茜はにやっ、と笑いかけた。

世之介は茜の言葉を鸚鵡返した。

「風呂？」

風呂だって？

番長星の風呂とは、いったい……？

風呂

番長星で風呂といえば、それは銭湯だった。

【集会所】の近くに、銭湯の建物はあった。どっしりとした瓦屋根、高々と空を突き刺す煙突。【集会所】からは、住人が各々洗面器と入浴道具を携え、続々と集まってくる。

助三郎と格乃進の姿はなかった。茜と連れ立ってやってきた光右衛門の話によると、賽博格は入浴の必要がないのだそうだ。

それに、賽博格の身体を他人に見せるのは、かなり厄介な事態を引き起こすとかで、二人は遠慮したのであった。

イッパチは相変わらず扇子を一本握り、ぺちんと自分の額を叩く。

「そんなもんですかねえ？ あっしや杏菊^{アンドロイド}紹偉童^{トイ}でげすが、別に、裸を他人に見せるのは恥ずかしくはござんせんよ」

イッパチの言葉に、茜は眉間に皺を寄せる。

「あたしだって、別に見たかないよ！」

「へっ、これはご挨拶……」

イッパチは、ギョロリと目を剥き出した。

番台で世之介はイッパチ、光右衛門とともに男湯に入る。男湯には【集会所】からの客が一斉に湯口に向かって、身体を洗っていた。

世之介は銭湯は初めてで、どうにも決まりが悪い。早々に身体を洗うと、湯船に浸かることにした。イッパチは嬉々として三助の役目を買って出て、湯口に向かってにいる男たちの背中を威勢良く流し

ている。

湯船に浸かり、じっと目を閉じていると、 IPPACHI が入ってきて横に並んだ。

「若旦那、ちよいとお話が……」

「なんだい？」

世之介は用心して目を開けた。IPPACHI の顔はいやに深刻で、こんなとき、とんでもないことを言い出す傾向がある。

「番長星に来るとき、確か格さんは通常空間を亜光速で航行した、と仰いましたね？」

「うん」

世之介は湯の中で、ぐるりとIPPACHI に向き直った。

IPPACHI の口調は、いつものふざけたものではなかった。何を言い出そうとしているのか。

「確か半光年を亜光速で航行した、と言っていましたから、あれからあつしらは、半年も経ってしまってる、そうだな？」

「ああ、そうなるな」

いよいよIPPACHI の顔つきは真剣である。

「お忘れですか？ 大旦那は、一年以内に童貞を捨てると仰ったんです。もう、半年が過ぎております。あと半年しか余裕はないんですよ！」

湯当たり

「ああっ！」

世之介は小さく声を上げた。そうだ、イッパチの言葉はもつとものだ。イッパチは湯の中で顔を怖いほど真剣にさせ、言葉を重ねた。

「どうすんですよ、若旦那。こんな星で愚図愚図していちゃ、大旦那の仰った廃嫡、勘当が、本当の話しになってしまいまさあ！ 尼孫星に行けなくなった今、なんとか番長星の女の子と、ナニしないと……」

「ナニしないって、何のことだい？」

世之介の頭に血が昇った。心臓がどくん、どくん鼓動を早め、血管に血流がぐわん、ぐわんと流れるのを感じる。

イッパチは世之介の耳に口を近づけた。

「とぼけちゃいけません！ 若旦那だって一切、承知でげしょ？ あの茜さんって娘は、どうなんでげす？ 若旦那が【バンチョウ】ってことになって、茜さんどうやら若旦那にホの字らしいでげすよ」

ぶくぶくと世之介は湯の中に顔を沈めた。今の顔色を、誰にも見られたくない！ 今の世之介の顔色は、多分、真っ赤を通り越して猩々緋か、あるいは、どす黒く鬱血になっているだろう。

イッパチは、おつかぶせる。

「若旦那！ 男になるんです！ あっしは一肌、脱ぎますぜ！」

「お前が？ どうやって？」

世之介は「ぷはっ！」と息を吐き出し、顔を湯から上げる。 IPPACHI は心得顔になって一人頷き、にやつと笑った。

「任せておくんなせえ！ きつと、若旦那が茜さんとナニできるようにしますから！」

ぽん、と胸を叩くと、IPPACHI はその場を離れていった。

茜とナニする？

ナニって、つまり……。

「世之介さあん……」

わあん、と反響した茜の声が、女湯から聞こえてくる。

「そろそろ上がるわよお！」

向こうに茜がいる……。女湯にいる、ということは、つまり何も着ていないということだ！ 要するに裸だということだ。

茜が裸で……！

「世之介さん、茜さんの仰るとおり、そろそろ上がりましょうか？ あんまり長いと、湯当たりしますぞ」

光右衛門がさっぱりした顔つきになって、声を掛けてくる。

世之介は湯から上がれなくなってしまった自分に気付いていた。

騒音

わんわんと耳を劈く騒音に、世之介はぱつちりと目を開いた。

がば！ と寢床から起き上がり、窓の外を眺める。窓からは番長星の主星が投げかける董色の朝の光が眩しく室内に差し込んでいた。

「なんですか……まるで野犬の吠えるかのごとき、騒音ですが」

光右衛門が不機嫌そうな顔つきで寢台から起き上がる。供の助三郎と格乃進は、すでに起きていて、窓の側に油断なく身構えている。

ここは……？

世之介は記憶の混乱に、一瞬はつと戸惑う。

「あゝあ……、朝飯は、まだなんですかい？」

隣でIPPACHIが呑気そうな声を上げた。IPPACHIの顔を見て、世之介は「ああそうか、茜の兄の、勝の部屋だ」と自分のいる場所を確認する。

あれから世之介は湯船で逆上せ、引っくり返り、素っ裸のままIPPACHIに担ぎ上げられて部屋へと戻ったのだった。

その時の情景を思い出し、世之介は一人で顔を火照らせた。当然、目を回しているから、完全に裸で、その裸を茜に目撃されている。

「朝飯どころではありませんぞっ！」

光右衛門は鋭い声を上げた。窓の外を眺めていた格乃進は緊張した表情を浮かべる。

「ご隠居様、無数の二輪車が見えます。その他に四輪の車も数台ほど混ざっております。どうやら、周りを取り囲んでいる様子です」

世之介は立ち上がり、格乃進の側へ近寄った。一同がいる部屋は一階にあり、道路に面している。その道路を、無数の二輪車、四輪車が埋め尽くしていた。

二輪車、四輪車は壮んに動力機関エンジンを全開にして、辺り構わぬ騒音を撒き散らしている。

時々「ぱばら・ぱばぱ・ぱば・ぱばぱ」と聞こえる、奇妙な音階の音が混じる。後で聞いたところによると「名付親愛情曲《ゴッド・ファーザー愛のテーマ》」という、ツツパリにはお馴染みの音楽だそうだ。

悪態

二輪車の操縦者の一人に、世之介は見覚えがあった。

つるつるに剃り上げた、鬼灯ほおずきのような頭。すこぶる陰険な目付き。そうだ、あれは最初に世之介に喧嘩を吹っつけた、健史である。

健史は二輪車を止めると、例の甲高いガラガラ声を張り上げた。聞いていると、苛々してくる耳障りな声音である。

「オカマ野郎！ 出てきやがれ！ こらあ、卑怯者……」

世之介は IPPACHI に尋ねた。

「オカマ野郎って、何だろう？ 昨日も、あいつは同じ言葉を言っていたけど」

IPPACHI は頷いた。

「もしかして、陰間のことじゃねえですかねえ……」

世之介は IPPACHI の推測を耳にして「ははあ」と感心した。

しかしすぐ、じわじわと怒りが込み上げる。自分をあんな、ナヨナヨした連中と一緒にされてたまるか！

どんどんどん！ と扉が外から叩かれ、一同はぎよっと硬直した。

「世之介さん！ 大変……健史が！」

扉から聞こえたのは、茜の叫び声だった。

ほっとなつて、世之介は大腿で扉に近づき、開こうとする。ところが、扉は固く閉じられ、びくとも動かない。

いけない！ この扉は大江戸とは違い、？片観音開き？で、蝶番で開くんだった……。つい、慌てて横に滑らそうとしていた。

取っ手を掴み、開くと、茜の青ざめた顔が目飛び込んでくる。

「見た？ 健史が乗り込んで来たわ！」

前置き抜きでいきなり喋り出す。世之介は頷いた。

「ああ、今度はだいぶ、お仲間を連れてきたようだね」

茜は両目をまん丸に見開き、世之介の顔を見上げている。恐怖に、茜の瞳孔は、ぽっかりと開いていた。

「どうすんの？」

無言で、世之介は履物を突っかけると、外へ出た。ぞろぞろとイッパチ、光右衛門、助三郎、格乃進らが従いてくる。【集会所】を回って、表の道路へと向かう。

「おっ！」

姿を表した世之介を見て、健史が身構え、やや怯んだ表情になった。が、すぐに自信たっぷりな態度に豹変する。

「出てきやがったな、オカマ野郎！」

「そのオカマ野郎はやめませんか？ わたくしは、そのような趣味はありませんから」

世之介は穏やかに話し掛けた。だが、怒りが語尾を僅かに震わせる。

「けっ！」

健史は毒々しく舌打ちすると、背後を振り返った。

「風祭さん！ 出てきやがりましたぜ！ あいつが偽者の【バンチ ヨウ】でさあ！」

健史の背後には、真っ黒な塗装の、四輪車が停車していた。がちやりと扉が開かれ、むくむくと内部から一人の人物が姿を表した。

風祭

出てきた人物を一目見て、世之介は驚きに口をあんぐりと開いて見上げる。

大きい。

いったい、あの四輪車のどこにどうやって納まっていたのかと思われるほどの、途方もない巨躯が白日の下に曝されている。

身長は六尺……いや七尺はある。体重も五十貫はありそうだ。薄汚れた学生服に、学帽を目深に被り、のっそりと立っている。

「おめえが【バンチョウ】だと？」

洞窟の奥から轟くような、低い、軋るような声が零れ出る。ぐいと学帽の底を撥ね上げ、下から覗く瞳を光らせた。

男の視線を目の当たりにして、世之介はなぜか怖れを感じていた。なんと言うか、非人間的な冷酷さを内包した目の光である。

「おめえが【バンチョウ】なんかじゃ、あるもんけえ！ この騙り野郎！」

健史が憎々しく喚く。さっと巨人を振り返り叫んだ。

「風祭さん！ この野郎に、本当の【バンチョウ】の恐ろしさを、たっぷり教えてやってくださいよ！」

風祭と呼ばれた男は、重々しく頷いた。ごろごろとした声を上げ、ゆっくりと喋る。

「【バンチョウ】の称号は、ウラバン様だけが与えるものである！お前は勝手に【バンチョウ】と名乗っている。その罪は万死に値する！」

風祭の言葉は、単調で、何か背後からセリフをつけられているかのようにだった。声には全く、感情というのを感じられない。

ずしり、と風祭の足が一步、前に踏み出した。ぐっと腰を下ろし、両手を蟹のように広げ、戦いの態勢をとる。

「世之介さん！ これ！」

ばたばたと慌しく茜が駆け寄り、一本の木刀を世之介に押しつけた。世之介は木刀を握りしめ、剣道の構えを取る。

義歯

ニタリ……と、風祭が獲物を前にした狼のごとく歯を剥き出して笑った。ぎらり、と朝日に風祭の前歯が光る。

世之介は呆れた。

なんと、風祭の上下の歯は、総て白銀色に輝く義歯であった。鋼鉄製と思われる義歯に、ずらりと金剛石ダイヤモンドが輝いている。あの歯で噛みつくつもりか？

かちかちかち……。

細かな音が世之介の耳に聞こえている。

気がつくと、世之介は恐怖に震え、奥歯をかちかち噛み鳴らしていたのだった。全身に恐怖が走り、手にした木刀の先端が揺れていた。じつとりと背中に汗が滴るのを感じる。

「行くぞ！」

宣言して、風祭は猛然と世之介を目がけ、突進してくる。まるで闘牛の突撃だ！ 風祭の動きは、巨軀に似合わぬ素早いものだった。世之介は無我夢中で木刀を握りしめ、横に薙ぎ払った。

がつん！

異様な衝撃が世之介の手の平に伝わった。確かに風祭の胸を払ったはずなのに、まるで固い岩を殴ったような手応えを感じる。

ぶわっ、と風祭の右手が世之介の肩に当たる。ただ一振りで、世

之介の身体は宙に浮き、したたかに地面に叩きつけられていた。

たったそれだけで、世之介はじーんと頭に霧が掛かったようになり、視界が揺れる。一瞬、気絶していたのかもしれない。

「待て！」

その時、世之介の前に、助三郎と格乃進が立ちはだかった。

「どいていなさい。世之介さん。どうやらこいつは、あんたに手の負える相手ではなさそうだ」

助三郎が油断なく身構え、叫んだ。

「どういうことですか？」

世之介の質問に、格乃進が呟く。

「あいつは人間じゃない！ 我らと同じ、サイボーグ賽博格。それも、戦闘用の殺人兵器だ！」

加速

賽博格！ 風祭が賽博格だって？

世之介はようやく、さきほどからの疑問が氷解するのを感じていた。さっきの木刀での手応えは、賽博格体ゆえのものだったのか。

風祭は、ぐりぐりと肩の関節を動かし、立ちはだかった助三郎と格乃進を舐めるように睨みつけた。

「そう言う、お前らも賽博格らしいな……」

ぐつと腰を沈め、風祭は目を光らせる。実際、風祭の両目は、不気味な青白い光を放っていた。

ぶーん……。

風祭の全身から、奇妙な甲高い機械音が聞こえてくる。ぶるぶるぶるつ、と風祭の全身が細かく震え出した。

世之介は木刀を杖にして立ち上がった。

いったい、何事が起ころうとしているのか。

助三郎と格乃進は顔を見合わせ、頷き合った。その瞬間、二人の姿は世之介の眼前から一瞬にして掻き消えていた。

「あっ！」

世之介は驚きに目を見開いた。

何と対峙しているはずの、風祭の姿も突然、消滅していた。

しゅっ！ しゅっ！

空中を、何か切り裂くような音が聞こえてくる。

「何事ですか！」

側にいた光右衛門に尋ねる。光右衛門は、今の出来事を承知しているような表情を浮かべていた。

「助さん、格さんの二人が、加速状態に入ったのです。常人の、数倍から数十倍、恐らく数百倍の速度で動き回り、音速を超え戦っているのです。そのため、わしらには、三人の姿を見ることは叶わないでしょう」

音速の戦い

ごんっ！

音に顔を向けると、建物の角が爆発したように飛び散った所だった。

ばさっ、と立ち木の枝が揺れ、めきめきと音を立て幹が折れ曲がる。

ばあんっ！ という爆発音に似た音が響く。

多分、音速を超えて動き回っているための、衝撃波だ。

音速を超えると、空気は一瞬にして圧縮され、爆発音に似た音を響かせるのである。

べこっ、と四輪車の外板が凹み、ばあんっの一瞬にして窓硝子に細かな亀裂が走る。

世之介の全身に、冷たい汗が流れる。こんな相手と、自分は戦おうとしていたのか！ 知らないこととはいえ、何て無茶だったのだろう。

目の前を、黒い影が何度も一瞬で通りすぎる。多分、どれかが助三郎で、格乃進、風祭の三人なのだ。あまりに素早すぎ、網膜に像を結ぶ暇がない。

「ぐわあああっ！」

魂消るような叫び声、いや、咆哮とも言える雄叫びが世之介の耳朶を打った。道路の真ん中を、巨大な何かが、路面をががつと音

を立て袂り取り、濛々とした土煙を立てる。

土埃が収まると、風祭の巨軀が、長々と大の字に寝そべっているのを認めた。その両側に、助三郎と格乃進の二人が立っている。

三人の身に纏っていた着物は、完全にぼろぼろに千切れ、僅かな布切れだけが纏いついている。超高速の動きに、ぼろぼろに千切れてしまったのだ。

さらに三人の身体からは、ぶすぶすと燦る白煙が立ち上っていた。音速を超える動きで、空気との摩擦熱が発火点を越えたのだ。

助三郎と格乃進の身体を見て、世之介は二人が風呂に入りたがらなかった訳を、ようやく納得した。

顔と腕など、露出した部分はかろうじて、人間らしい人造皮膚で覆われているが、その他の部分はまさに戦闘用といっていい、ごつごつとした表面の、昆虫の甲羅のような素材で覆われている。恐らく、防弾、防熱素材でできているのだ。

その姿は、傀儡人^{ロボット}といっても間違いではない。

敗北

「ぐううっ！」

横たわる風祭は、必死になって起き上がろうと藻掻いている。手の平を地面に支え、上体を起こそうとする。

だが、そのたびにガクリ、ガクリと寝そべってしまう。

「無理に起き上がろうとしてはいけない。お前の制御装置を破壊した。新たな装置を入れ替えなければ、動けないぞ」

助三郎が横たわる風祭を見下ろし、痛ましげな表情になって声を掛けた。見上げる風祭は、視線で助三郎を殺してしまいたいというような、物凄い形相になる。

「なぜだ……。なぜ、俺が負けた？俺は最強の【バンチョウ】に生まれ変わったはずなのに！」

風祭が呻く。ぐいつ、と顔だけをネジ向けて叫ぶ。

「お前ら、何者だ？ただの賽博格じゃないだろう！」

「いいや」と格乃進が首を振った。

「お前と同じ、賽博格だが、俺たちはこの身体になってから長い。加速状態になってからの戦い方も、慣れている。加速状態になってからは、人間の脳は超高速の反応に対応でききれない。そのため、予備電子脳に交替させ、身体を制御するのだ。だが、充分な期間、行動を慣熟させていないと、その能力を発揮できない。お前は賽博格体になってから、そう長くはないのだろう？」

「ふっ」と風祭は苦く笑った。頷く。

「そうさ、ウラバン様にこの身体にして頂いたのだ……。【ツツパ
リ・ランド】でな。そこにいる健史が……」

ギョロリと立ち竦んでいる健史を睨む。健史は風祭の視線に「ひ
っ！」と小さく悲鳴を發し、飛び上がった。

「ここで新たな【バンチョウ】が出現した、と報告してきてな。そ
れで、ウラバン様が俺に調査するよう命じた。ウラバン様の任命さ
れない【バンチョウ】など、存在を許すわけにはいかん！」

覚悟

世之介は、ぐつと風祭に近づき、声を掛ける。

「そのウラバンとは、何者です？ どうして、わたくしが【バンチヨウ】だといけないのです？」

風祭は嘲るような笑いを浮かべた。

「それが知りたければ【ツツパリ・ランド】に行くことだ！ ウラバン様とは、そこで会える。ウラバン様がお前を前にしたら、どうするか……。楽しみだ！」

光右衛門が厳しい顔つきになって、その場にいた、健史の仲間に命令する。

「あなたがた！ さあ、何をしているのです。あなたがたのお仲間の風祭とか申す男が難儀しているのです。助けるのが人情ではありませんか？ さっさと連れ帰りなさい！」

光右衛門の命令は威厳があり、咄嗟には逆らうことができないほどの重みがあった。

健史が連れてきた仲間たちは青ざめた顔を見合わせた。

ぎくしゃくした動きで恐る恐る風祭の周りに集まり、手に手を取って、巨大な身体を持ち上げようとする。

が、風祭の身体は賽博格であるためか、よほど重く、びくともしない。助三郎と格乃進は歩み寄ると、風祭の脇に手を入れ、ひよいと持ち上げた。そのままずるずると引き摺って、風祭が乗り込んでいた黒い車に運んでいく。

呆然と見送っていた健史は、世之介の視線に顔を真っ白にさせた。赤くなったり、白くなったり、忙しい男である。

世之介は怒りに燃えていた。

たかが喧嘩に強くなりたいだけの馬鹿な欲望で、自分の身体を賽博格にさせる、この番長星の人間の思慮のなさに、腹を立てていたのである。

かくかくと全身を震わせ、健史はよたよたと後ろに下がった。ぽたぽたと股間から黄色い液体が洩れている。

失禁しているのだ。

「お……お助けっ！」

悲鳴を上げると、転げるように自分の二輪車に跨った。じたばたと、みっともなく動力を入れ、後を見ることなく一散に逃げていく。

逃げ散っていく連中を前に、世之介は静かに【ツツパリ・ランド】を目指す覚悟を固めていた。

番長星の現状

朝食の席で、世之介は【ツツパリ・ランド】をを目指すことを宣言した。

世之介の言葉に、一同ぎょっとした顔を上げ、まじまじと見つめてくる。イッパチは世之介の隣で、首を振った。

「若旦那……。【ツツパリ・ランド】ってのは、あの風祭ってえ賽博格野郎が言っていたウラバンとやらがいる場所なんですよ。そんなところへノコノコ自分から行くなんで、どうかしてらあ！ 飛んで火に入る夏の蜚蜋ってな仕儀になりやすぜ！」

光右衛門は用心深げな口調になり、話し掛けた。

「本気なのですか、世之介さん。どうやら【ツツパリ・ランド】とは相当に危ない場所のようですよ」

「本気です！」

世之介はキツパリと頷いた。茜を見て言葉を続けた。

「茜さんの話では【ツツパリ・ランド】に行けば、地球への連絡が叶いそうではありませんか。わたくしは、何としても地球へ帰りたい！ 併せて、この番長星の現状を、地球の幕府へと訴えたいのです。このような無法が罷り通るのは、我慢できません」

「成る程……。判りました」

光右衛門は、世之介の決意に感心したように何度も頷いていた。「わしも同じ考えですよ。いくら銀河遺産とはいえ、この星の人間が哀れです」

光右衛門の言葉に、茜はポカンとした顔になって尋ねてくる。

「何が哀れなの？ あたしたちが、どうして光右衛門さんに同情されるの？」

光右衛門は何度も首を振った。

「それ、その言葉です。あなたがたは、自分たちがどんなに酷い状態にあるか、自覚すらしておらぬ……。茜さん、あなたは学問所へ通った経験が御座いますかな？」

「学問所……」

茜はポツリと光右衛門の言葉を口の中で反芻していた。明らかに、てんで理解していない。

勉強

「昔は学校、と呼んでおりましたな。つまり、勉強をする場所です。どうです？ 茜さんは、今まで何かを学びましたか？」

「勿論よ！」

茜の頬が紅潮した。

「仁義の切り方や、舐められないようなガンの飛ばし方とか、二輪車の乗り方とか……。先輩に教えてもらったわ！」

「やれやれ……」

光右衛門は嘆息した。

「やはり、そうでしたか。案じておった通りです。人間として必要な学問は、この番長星では一切、学んではいけないのですな。『女大学』すら知らないのでしょうか？ あれは一人前の女性になる必読の書ですよ！」

「だって、そんなの知らなくても、構わないもん！」

茜は、かなり気分を害している様子だった。腕を組み、眉を寄せ、怒りの表情を浮かべている。

そんな茜を見て、世之介は光右衛門の『女大学』はともかく、番長星の人間が、もっとマトモな状態になるべきだと思っていた。少なくとも、喧嘩だけが価値の総てであるという現状は、断固として正さなければならないと感じていた。

茜もきつと判ってくれる……。世之介は茜のためにも、銀河幕府にこの星の現状を通報しなければと思っていた。

「それで、どうやって【ツツパリ・ランド】とやらへ出かけるのしょう?」

格乃進が口を挟んだ。

茜は機嫌を直し、ニンマリと笑みを浮かべた。

「それには、乗り物が必要ね!」

「乗り物?」

世之介たちは顔を見合わせた。茜は強く頷く。

「そうよ、まさか、テクテク歩いて行くつもりなんかじゃないでしょう? あんたたちの目指す【ツツパリ・ランド】は、とーっても遠いんだから!」

店主

茜の案内したのは、新品の二輪車がずらりと並び、店だった。

「ここで気に入った二輪車があれば、すぐ使えるようにしてくれるわ！ どう、乗ってみたいのは、ありそう？」

快活に喋る茜に、世之介は正直かなり戸惑っていた。

助三郎と格乃進は、興味深そうに並べられた二輪車の細部を仔細に眺めている。二人の着衣は風祭との戦闘ですっかりボロボロになっ
てしまい、今は番長星の人間の着衣を身につけている。

イッパチはあまり興味がなさそうで、しきりと鼻糞をほじって指で弾いて飛ばしたり、空を見上げたりしていた。

先程から、店の奥から「ぐわん！　ぐわん！　ぐわん！」と、何かを叩き付けるような、騒音が響いている。突然、騒音が「がきんつ！」と、金属製のものが折れるような音に変化した。同時に「ちゃりーんっ！」と地面に転がる音がした。

「ちえっ！　やっちゃった……。おいっ！　後で、直しておけよ！」と命令する声。声は中年の男のものだ。男の命令に「へえーい」と返事が聞こえる。

呆然と世之介が店先でうろろしていると、奥から中年の太った男が、胡散臭そうな目付きで現れる。多分、店主だ。店主の後に、古臭いデザインの傀儡人が従いてくる。これが、さっきの会話の主だろう。

が、店主は茜の顔を見て、嬉しそうな表情に変わった。

「いよう！ 茜じゃねえか！ どうしたい、また新しいのが欲しくなったのけ？」

「叔父さん。今日は、あたしじゃなくて、この人たちがお客なの。初めて二輪車に乗るのよ！ だから、良いの選んであげて！」

「ほほお……」

店主は目を丸くして、しげしげと世之介たちの顔を見詰めた。

「あんたら、見たことない顔だなあ。どっから来たんだ？」

世之介は丁寧にお辞儀をすると、口を開いた。

言葉

「わたくし、地球からまいりました、但馬世之介と申す者で御座います。今日は茜さんの紹介で、二輪車を求めることになりましたので、どうぞ宜しくお願いいたします」

店主はパクリと口を開け、仰け反るような姿勢になった。

「ひゃあ！ よっくもスラスラと、くっちゃべるもんだっぺ！ おりゃ、一っ言も判んねえだべっちゃ！」

なぜか店主は、茜とはガラリと口調を変えて話し出した。まるでわざと田舎臭い口調を意識しているようだった。

しきりと「だっぺ」だとか「だっちゃ」などを連発する。破裂音の多い言葉は聞き取りにくく、店主の顔には「どうだ、判らないだろう」とでも言いたそうな表情が浮かんでいる。

茜とさつき喋っていたときは、銀河標準語である現代日本語に近い言葉つきだったのだが、世之介が話し掛けた瞬間、がらりと豹変したのだ。

店主は、世之介の言葉は充分に理解できるし、喋れるのだが、それが何だか自分の恥であると固く思い込んでいると見える。

茜は肩を竦めた。

「叔父さん！ この世之介さんは【バンチョウ】なのよ！ そんな喋り方じゃ、失礼じゃない？」

「【バンチョウ】！」

店主は、さらに頓狂な声を上げた。

さっと赤らんだ顔が青ざめ、ぶるぶると全身が震えだす。

ぺたりと地面に座り込み、世之介の顔を見上げ身を擦るようにして声を上げた。

「す、すみません！ 知らないこととはいえ、申し訳ねえ！ どうぞ、ご勘弁を！」

世之介は往生した。まったくこの星の人間は、どうなっているのだ！ 店主は両手をべったりと地面につけ、土下座の態勢である。「お手をお上げ下さい。わたくし、妙な成り行きで【バンチヨウ】などと言われておりますが、ともかく二輪車を求めただけの話ですから」

「へえ？」

店主の顔色がもとに戻った。ひよい、と顔を上げると、さつさと立ち上がる。あっという間の変わり身に、世之介は少々呆れた。

提案

店主は生き生きとした顔色に戻り、二輪車を次々と指さし、喋り出した。

「うちでは、あらゆる形式の二輪車が揃っていますよ！ こっちはオフロード・タイプ荒地走行用で、あっちに並んでいるのが、ツアラー・タイプ長距離走行でさあ！ で、どんな目的でお使いになられるんで？」

店主の口調は、すっかり滑らかになっている。言葉は標準日本語に近く、やはりさっきの田舎ばい喋り方は、わざとだったのだ。

茜が店主の質問に答えた。

「【ツッパリ・ランド】に出かけるの」

店主は「ぎくり」と身を強張らせる。

「まさか、本当けえ？」

茜が頷くと、店主は気味悪そうに世之介の顔を見詰めた。

「あんだ、だけかい？」

格乃進が一步、ずい、と前へ出て、一同を代表して答える。

「わたしたち、全員だ。だから、良いのを探してくれ」

「ふうん」と店主は顎を上げ、片手で胸元をこりこりと搔いた。さつさと先に立ち、先ほど長距離用と説明した二輪車の列に立つ。

「【ツッパリ・タウン】は、途轍もなく遠いぜ。だから、この型タイプの二輪車にしなくちゃな！ ところで……」

不思議そうに光右衛門とイッパチを見詰めた。

「そちらの二人も、運転するのかね？」

光右衛門は首を振った。

「いえ、わしは、見ての通りの老いぼれ。ですから、助さんか、格さんの後ろに乗らせて貰おうと思っております」

イッパチはぺちん、と額を扇子で叩いた。

「あつしゃ、浮揚機フライヤーの運転はできますが、こんな地べたを走る車は、生憎と不調法でござんして、やっぱり若旦那の後ろに乗らせて貰いてえ！」

店主は首を振った。

「二人乗りより、もっといいのがあるぜ。側車サイド・カーつてのがある！」

側車

「成る程！ 店主の言葉は嘘ではありませんでしたな！ これは気持ちのいいものです」

光右衛門は上機嫌になって、格乃進の運転する二輪車の横に装着された側車サイドカーに乗り込み、風に髭を靡なびかせ、目を細めていた。

助三郎の二輪車にも同じ側車が繋がれ、こっちはイッパチが陣取り、物珍しそうに地面すれすれの景観を楽しんでいる。

世之介は一人で二輪車の把手ハンドルを握りしめ、目を一杯に見開いて、前方を見詰めている。全身に緊張が溢れ、今にも転ぶのではないかという恐怖に慄おそれている。

世之介の隣の車線では、茜が自分の二輪車を運転して従っている。茜の二輪車は荒地走行用で、全体に軽快な形をしていた。

茜の提案で、まず【集会所】に戻り、旅支度を整えることにしていた。【集会所】に戻る前に、その辺をぐるりと散策し、二輪車の運転に慣れる目的で、わざと遠回りをしている。

今にも転ぶのではないか、という恐怖に、世之介は口の中がからからに乾き、関節が鳴るほど全身の筋肉を強張らせている。

だが、世之介は知らないが、転ぶ事態など絶対ありえないのだ。

世之介の乗っている二輪車は、見かけは二十世紀の旧式だが、中は最新である。電子頭脳が制御する、自立走行機構セグウェイ・システムが組み込まれた二輪車は、操縦者がどんな素人であろうが、無茶な運転をしようが、常に安定した走行を約束する。周囲の状況を把握し、事故が起

きそうになると寸前で回避し、的確な運転を保証する。

したがって、操縦者が眠っていてさえ、手が把手を握りしめている限り、道路上を安全に走行するのだ。把手から操縦者の手が離れると、自然と停止し、支柱が勝手に出て、路上で静止する。完全無欠の安全車なのである。

番長星の住民は、誰一人この絶対安全機構についての知識は持ち合わせていない。一度も二輪車や四輪車で事故を起こした経験がないので、全員「自分は運転が上手い」と錯覚しているのだ。

しかも、この星の二輪車は故障というのが、絶対にならないのだ。機械の調子が悪くなると、二輪車に装備されている人工知能が自動的に修理を行うし、所々に設けられているサービス・ステーションでも傀儡人^{ロボット}が整備をしてくれる。

手に入れた二輪車店でも、修理、改造などはすべて傀儡人がしてくれる。人間が必要とされる場面は、本当は何もない。

世之介が立ち寄った店で、何かの修理をしていたような音は、店主がハンマーでただ、ぶっ叩いていただけだ。

番長星に伝えられていた地球からの映像資料に、よく二輪車店が登場し、店主が二輪車の修理や改造をしている演技がある。それを見て、番長星の人間は、とにかく大きな音を立てて、ハンマーやバールをぶっ叩けば良いのだと思い込んだのだ。

当然、そんな真似をすれば二輪車はぶっ壊れるが、文句も何も言わぬ傀儡人たちが、黙々と修理してくれるのでやっていける。

本当の修理を学ぶのは、じつくりと根気の要る仕事だが、番長星ではとにかく、がさつで、粗雑、大雑把、粗暴が尊ばれる傾向にあり、壊れるほどぶっ叩くのが格好いいということになっているのだ。

美湯灰善

それはともかく、ようやく【集会所】に到着した。

世之介は二輪車を停止させ、強張った指を無理矢理どうにか把手から引き剥がした。関節が白くなるほど握りしめていたので、まるで接着剤で貼り付けたように、手を開くことすら苦痛だった。

助三郎、格乃進は軽やかな動きで二輪車から地面に降り立つ。世之介は二人を羨ましく眺めた。二人とも、宇宙軍兵士としての経験があるため、どんな乗り物でも即座に乗りこなせるのだ。

「？美湯灰善？^{ミユンヒハウゼン}だったら、旅支度が全部、何でも揃うよ！ さ、行こう！」

茜が朗らかに声を掛けてくる。茜の目の色に、初めて二輪車に乗って、ヘトヘトになっている初心者への軽い同情が浮かんでいるのを見て、世之介はむっとり押し黙ったまま頷いた。

何だか知らないが、不機嫌である。

？美湯灰善？は【集会所】の真ん中に聳えている大規模量販店の名称である。丸い砲弾に跨った西洋の貴族らしき男性が、にっこり笑い掛けている看板が掛かっている。

「ちょっと、世之介さん！ 何を怒ってんの？」

黙ったまま歩き出した世之介を、茜は慌てて追いかけてくる。イッパチが袂を指先で掴み、少し前屈みになって、世之介の隣に並んだ。

「若旦那！　そうツンケンしなくても……。初めて二輪車に乗って怖かったのは判りますがね。茜さん、臍を曲げてまさあ！」

小声に囁くイッパチを、世之介はぐいと眉を上げ、睨みつけてやった。

「怖くなんかないよっ！　二度と言っな！」

「へえ……」

世之介の叱責に、イッパチはひょいと首を竦めた。

世之介は、とつと歩いて、量販店を目指す。

とにかく早急に旅支度を整えなくてはならないのだ。

女店員

？美湯灰善？の店内は迷路のようだった。ゴタゴタとあらゆる商品が堆く積まれて壁を作り、客を案内するはずの案内板は、むしろ迷わせるためにあるかのように思えた。しかも、意味不明の文句が、読みづらい書体で書かれている。

「ねえ、世之介さん」

茜が慎重な口ぶりで話しかけてくる。世之介が振り返ると、ちょっと言い方を考えているのか、目を落ち着かなく彷徨わせた。

「着ているもの、変えるつもりは全然ないの？」

「これを、かい？」

世之介は自分の着物を摘んだ。茜は頷く。

「ええ。世之介さんは【バンチョウ】なんだから、それらしい格好をしたほうがいいと思うんだけどな」

「【バンチョウ】らしい格好？」

「そう」と頷くと、茜は店内の一角を指差した。

「例えば、あんなの……」

指差された方向には、様々な学生服の見本が展示されている。

大江戸にも、学生服を制服に定め、身につける学問所はあるから、世之介はそれ自体には戸惑いはなかった。だが、あまりにも番長星の学生服は、今まで見知ったものとは違っていた。

ひどく裾の長いことや、短くなっているもの（長ラン、短ランというのだそうだ）、太いズボン（ドカン）、裾がぎゅっと絞られているもの（ボンタン）などの奇妙な形の学生服が飾られている。また、学生服の上着の裏地には、様々な刺繍が施され、思い切り派手な色合いのものもあった。

「いらつしゃい……」

掠れた女の声が聞こえた。声の方向を見ると、年齢二十代半ばと思われる、毒々しい化粧をした店員が乱雑に積み上がった商品の間をすり抜けるように近づいてくる。髪の毛は金色に染め、指先の爪は緑色に塗られていた。

案内

「何か、お探でしょうか……」

店員の声は囁くようで、よく聞き取れなかった。
 IPPACHIがニタニタ笑いを浮かべ、大声で尋ねかける。

「火炎太鼓、なんてえのは、ござんせんかい？」

店員はそつけなく首を振って答える。

「御座いません。他に……？」

茜は頷いた。

「うん！ この人に【バンチョウ】らしい格好をさせたいんだけど」

茜の言葉に、女店員の唇の両端がきゅっと持ち上がり、微笑を形作った。しかし、目は笑っておらず、逆に爛々と光っている。

「【バンチョウ】……この人が？」

ちよろりと唇の間から舌が覗き、舌舐めずりをする。

さつと世之介の全身を、上から下までじろじろと眺めている。顎に手をやり、何か考えているのは世之介の寸法を目見当で測っているのだろう。

やがて大きく頷くと、片腕を挙げ、指先を招くように、くいくいと動かした。

「こちらへいらして下さい……」

相変わらず女店員の声は溜息が漏れるような、力が抜けた口調である。

世之介は女店員の声に誘われたように、ふらふらと歩き出した。ちらりと背後を振り返ると、助三郎と格乃進、光右衛門たちは商品を熱心に見ているところで、世之介の動きには気付いていない。

どうしようか……と世之介は迷ったが、結局は声を掛けることなく、女店員に誘われるまま歩き出す。

伝説

「？伝説のバンチョウ？について、何かお聞きになっていますか？」

店員は世之介の目の前の通路を、積み上がった商品の間をすり抜けながら歩いていく。

世之介、茜、 IPPACHI の順で迷路のような店内をぞろぞろと連れ立って歩いた。店員は何度か角を曲がったところで、前述の台詞を口にしていたのだった。

「？伝説のバンチョウ？？」

世之介が呟くと、茜が勢い込んで口を開いた。

「あたし、知っている！ この番長星で最初に【バンチョウ】の称号を得た人よ！」

「そうです」と店員は、ちらりと世之介を振り返ると、一瞬、意味ありげな笑いを浮かべた。

「？伝説のバンチョウ？は番長星を統合したあと、ある言葉を残しました……」

「それって……」

店員の言葉に、茜の声が高くなる。

世之介は段々、不安が高まった。いったい、この店員は何を言っているのか？

世之介を時折ちらちら振り返る女店員の両目は、きらきらと輝き、唇を舐め回す舌先の動きが激しくなってくる。

とうとう女店員はくるりと振り向き、後ろ足になりながら、両手を高く差し上げる。

「？伝説のバンチョウ？は、こう言い残しました。『いつか、天空から番長星を救いに、真の【バンチョウ】がやってくる！』と」

ぴたり、と女店員の足取りが止まる。差し上げた両手を今度は世之介に向けた。手の指が内側に曲がり、猛禽類の爪のように何かを掴むようにしている。

「いま？伝説のバンチョウ？が予言した人が現れたのです！　そう！　あなたです！」

扉

世之介の額にじつとりと汗が噴き出る。店内は充分ぎんぎんに空調が効いていて、暑くなどないはずなのだ。なのに、なぜか、むっとくるような熱気を感じていた。

女店員は世之介に近々と顔を寄せ、大きく見開いた両目で世之介の両目を見詰める。女店員の黒々とした瞳に、世之介の怯えた表情が映っていた。

さっと女店員は、店内の一角を指差した。

「わたくしはここで、？伝説のバンチョウ？が予言したあなたを待っていたのです。？美湯灰善？の店長は、代々言い伝えを守り、待ち続けました。今、あなたが現れたのです！ さあ、あそこの扉を御覧なさい」

いつの間にか世之介は、森閑とした店内の、どこか倉庫のようなところに連れ込まれている自分に気付いた。積み上がっている荷物は梱包が解かれる前の、段ボールのままで、静けさとともに、少し黴臭い匂いが混じっている。

荷物の隙間に、一枚の扉があった。相当に古びていて、取っ手の辺りには、赤茶色の錆がべっとり浮き出ている。

女店員は震える両手で、ガチャガチャと煩く鍵束を持ち出した。その中から、もっとも大きく、もっとも古びた一本の鍵を取り出した。店員はぐつと唾を飲み込み、鍵の先を扉の鍵穴にこじ入れる。ぐりっ、と女店員は力一杯、鍵を回した。

ガチャツ……と、鍵が開く音がする。

店員は両手を使って取っ手を引っ張り、扉を開く。

ギイイイ、と軋み音とともに、扉が開かれた。開くと女店員は誇らしげに世之介を振り返る。

「これを御覧なさい！」

世之介は好奇心に駆られ、女店員の指し示した扉の内部に顔を突き出した。

ガ克蘭

扉の内部はごく狭い部屋になっていて、こちらも外と同様、色んな荷物が梱包されたまま積み上がっている。その真ん中に、一組のガ克蘭が衣紋掛けに吊るされていた。

どきり……と、世之介の鼓動が跳ね上がる。

思わず世之介は目を見開き、我知らず目の前に吊るされているガ克蘭に近づいた。

ガ克蘭の裾は長く、膝ほども達している。いわゆる「長ラン」と呼ばれる形式だ。襟は高く、肩はぐつと張り出している。もし身に着ければ、堂々とした姿になるであろうと思われる。

それより世之介の目を引いたのは、ガ克蘭の布地の色だった。真っ赤である。

すなわち血潮の色。見ているだけで何か、胸の鼓動が高鳴りそうな、燃えるような赤。

世之介は目を離すことすらできなかった。ただ、魅入られたように、じっと目の前のガ克蘭を見詰めている。

背後から、女店員が囁いた。

「その者、赤き衣「あかぎぬ」を纏まといて、金色「こんじき」の野に降り立つべし……！」

「へえ！ それも、伝説でげすか？」

IPPACHIがまぜつかえすと、女店員は首を振った。

「いいえ、今思いついたんです」

IPPACHIはズッコケた。

世之介は、女店員の囁きを無視して、そつと手を伸ばし、ガ克蘭の布地に指を触れさせる。

その瞬間、突き刺さるようなある？意思？が、指先を通じ、世之介の脳裏に天啓のように閃いた。

我を纏え！

我は、そなたと共にある！

囁きは、まるで命令のようだった。ガ克蘭の命令に、世之介は必死に抗った。自制心を振り絞り、世之介は全身の力を込めて腕を引く。指先が離れ、先ほどの強烈なガ克蘭の？意思？は去った。はあはあと世之介は息を荒げていた。

「これは、いつたい……」

言いかけたその時、イッパチが呆然と部屋の中を覗き込んでいる茜の背中を思い切り「どん！」と押し込んだ。

茜は「きゃっ！」と叫んで、勢い良く世之介の胸に飛び込んでくる。

イッパチはそれを見て、扉を力一杯、閉めてしまった。

ガチャーン！ 虚ろな扉の閉まる音が部屋の中に響く。

そして。

ガチャリ！ と外側から鍵が閉められる音が響いていた！

「イッパチ！」

世之介は叫ぶと扉に取り付いた。ぐつと押すが、びくとも動かない。その時、世之介は扉の鍵は外側しか掛けられないことを思い出していた。

世之介と茜は、閉じ込められたのだ。

密室

「イッパチ！ 何を考えているんだ？ 開ける！ 今すぐ、ここを開けてくれ！」

世之介は鉄の扉を遮二無二ガンガン叩き、隙間に口を押し当てるようにして喚いた。耳をぴったり押し当て、外の気配を探る。

「若旦那……」

扉の向こうからイッパチの声が微かに聞こえてくる。分厚い鉄の板に遮られているため、はっきりとは聞こえない。世之介は唇を噛みしめ、苛立った気持ちを抑えて耳を澄ませる。

「若旦那……。茜さんとそこでナニを……」

聞こえてきたイッパチの言葉に、つくづく世之介は呆れ果てた。

「イッパチ！ 何、馬鹿なことを考えているんだ。そんなこと、できる訳ないだろう？」

くくく……、とイッパチの含み笑いが聞こえてくる。

「大丈夫…… イッパチ、全て心得てござんすよ……茜さんだって、若旦那にはホの字だってこたあ、承知してまさあ……」

女店員の声が聞こえてきた。相変わらず掠れ、囁くようなので、耳を澄ませないと聞こえない。

「いったい、どうした訳なんです？ 二人を閉じ込めたのは、なぜ？」

イッパチが何か答えている気配だが、恐らく耳の近くでコソコソ

囁いているらしい。こちらの声は、まるっきり、聞こえない。

「ぷぷぷぷ……！」

女店員の笑い声が聞こえてくる。

「成る程、判りました。お二人のお邪魔は、野暮ですね……」

「さようです！ それじゃ、あつしらは当分 二時間ばかり、ここから離れて……」

「そうですね……。少し、二人きりにさせてあげますわ……」

「うふふふ……」「けけけけ……」と、 IPPACHI と女店員の笑い交わす声が遠ざかる。

「馬鹿野郎！」

ぐわんっ！ と世之介は力一杯、扉を拳で叩きつけた。じーん、と手の平が痺れる。

「ね、どうなっちゃったの？ IPPACHI さん、何であたしたちを閉じ込めたの？」

茜の声に、世之介は振り向いた。茜は不安そうではあるが、割合と冷静な態度を保っている。

世之介は大きく息を吐き出す。

どうすべきか？

茜に、全部ぶちまけてしまおうか？

世之介は唇を湿し、茜に向き直った。

「実は、これには訳があるのです」

世之介は、そもそもの始まりから話し始めた。

言い訳

「信じられない！」

世之介の告白に、茜は開口一番、吐き捨てるように叫んだ。

「世之介さんとあたしが出会ったのは、二日前のことよ！ それで、もうあたしたちが恋人同士？ 馬っ鹿じゃない？ そんなこと、本気で考えているの？」

頬は赤らみ、目は一杯に見開き、怒りを抑えかねるかのように小部屋を歩き回る。

「きつ！」と茜は鋭く世之介を睨みつけた。

「で、あんたは、どうなのよっ？」

今までの呼びかけの「世之介さん」が「あんた」に戻っている。世之介は、びくりと飛び上がった。

「あ、あたしですか……。あたしは、その、つまり……」

かーっ、と頭に血が昇って、へどもどと上手く答えられない。ごくりと唾を呑みこみ、言い訳を開始する。

「イッパチって奴は、別名『早飲み込みのイッパチ』と呼ばれるほどこで、自分でこうだと思い込むと、他人の意見なんかお構いなしなんです……。今回も同じことで……。まことに茜さんにはご迷惑をお掛けして、汗顔のいたりです」

深々と頭を下げると、茜は「ほっ」と息を吐き、どすんと勢い良く床に座り込んだ。頭を片手で支え、眉間に皺寄せる。ちらり、と世之介を見上げた。

「それで、世之介さんは、どうなの？」

茜はぼそり、と呟くように声を掛けてきた。

「どう……とは、何がで御座いますか？」

「知らないっ！」

ぷいつ、と横を向く。

なぜか世之介の顔に汗がダラダラと噴出した。異常に気まずい沈黙が流れる。

おろおろと部屋の中を見回す世之介の視線が、衣紋掛けに吊るされた？伝説のガ克蘭？に釘付けになった。

一旦、視線が留まると、もう動かせない。

世之介の視界一杯に、真っ赤なガ克蘭が広がっている。じりじりと世之介は、一步、また一步とガ克蘭に近づいていく。

そろそろ腕が上がり、指先がガ克蘭に吸い寄せられた。

駄目だ！ 触ったりしたら、またあの？意思？に取り込まれる。

必死に自分に言い聞かせるのだが、指先は磁力のようなガ克蘭の吸引力に捉われ、何としても引き戻せない。

背後で茜が顔を挙げ、世之介の背中を見詰めている気配を感じている。

「世之介さん……」

茜も立ち上がった。

遂に世之介の指先がガクランの布地に触れた！

ガ克蘭の意思

我を纏え！ 我と共に戦いに臨め！

強烈なガ克蘭の？意思？が世之介の脳裏に流れ込んでくる。

ぐいつ、と世之介はガ克蘭の布地を掴み、引き寄せた。

くるり、とガ克蘭が回転して、背中側が顕わになる。

世之介の両目を、目映い金色の光が覆った。

小さく悲鳴を上げ、世之介は手を離す。

ガ克蘭の背中には「男」の一字が、燦然と輝く金色の刺繍で縫い取られていた。

「これは……何です？」

呆然と呟く世之介の背後から、茜がガ克蘭を見詰めて答えた。

「これこそ？伝説のガ克蘭？！ 背中の『男』の縫い取りが証拠だわ！ 本当にあったんだ……！」

振り返ると、茜の両目は感動のあまり、キラキラと輝いていた。

もう、先ほどの一件など、完全に忘れ果てている。

茜の顔が、世之介の顔に触れそうになるほど近づいている。この接近遭遇に、世之介の心臓は爆発しそうに「ドッキドッキ」と早鐘のように打っていた。

ところが、茜のほうは、まるで無頓着といってよく、目はガ克蘭に吸い寄せられていた。

「ね、世之介さん。着てみてよ」

思わず世之介は茜の顔を見詰めた。

「わたくしが、ですか？ この学生服……いや、ガ克蘭を身に着けると？」

茜は世之介を横目で見ると、強く頷いた。

「そうよ！ 世之介さんが本物の【バンチョウ】なら、着るべきだわ！ もう、誰にも、【バンチョウ】じゃないなんて、言わせることなくなるわ！」

世之介は健史の「オカマ野郎」という悪罵を思い出した。他人から言われるのは構わないが、茜もそう思っているのではないかと考えるだけで、顔から火が出そうになる。

大きく息を吸い込むと、世之介はガ克蘭の布地を強く握りしめる。

茜が慌てて声を掛ける。

「着替えるなら、あたし、後ろ向いているからね！」

もう、茜の言葉すら耳に入ってこない。ぼんやりと意識はしているが、世之介の関心は、ただ目の前の？伝説のガ克蘭？だけに集中していた。

変身

袴を脱ぎ、ガ克兰のズボンに足を入れる。上着はそのままに、袖を通した。

無意識に上着の釦を嵌めようと手が動いたが、ぴたりと止まった。何だか、このガ克兰で、釦をきちんと留めるのは似合わないという判断が働いたのだ。

暫く、じっとしている。

轟きのように、ガ克兰の意思が世之介の脳裏に染み渡ってくる感覚に耐えた。

ガ克兰は世之介の潜在意識、体力、反応速度などあらゆる側面を調査している様子だった。そろそろとガ克兰の見えない触手が世之介の全てを探り回り、やがて何らかの結論に達したようであった。

「！」

いきなりの衝撃が世之介の全身を貫いた。まるで電流のように、世之介は自分が変化していることを悟っていた。

今、自分は別の何かに造りかえられている！

恐怖はあったが、それは同時に甘美な感覚でもあった。世之介は叫んでいた。

「あああああああ　！」

筋肉が、骨格が、血管が変化していた。世之介の神経細胞が、あらたな配置に繋ぎ直されている。

世之介の血液が、細胞一つ一つが、新たな相に変わっていく。世之介の叫びは、赤ん坊の産声のようであった。

「世之介さん！　どうしたの！」
茜が叫んでいる。

喜び

ぐいつ、と世之介は茜を見詰めた。世之介の表情を見て、茜は身を強張らせた。

戦闘能力平均以下、脅威ではない。

世之介は一目ちらつと見ただけで、茜の敵としての評価を下していた。世之介にとって、全てが自分に対しての脅威か、そうでないかという価値基準だけであつた。今の世之介は、戦士の判断だけで全てを理解していた。

世之介は自分と、閉じ込めている鉄の扉に目をやった。

出し抜けに世之介の胸に、激しい怒りが湧き上がってくる。

自分は、自由である！

閉じ込められるのは我慢できない！

世之介の足が上がり、全身の力を込めて、扉に向けて蹴りを入れる。

ぐわんっ！

怖ろしい音を立て、鉄の扉の蝶番が吹き飛んだ。ばあんと激しい音とともに、鉄の扉は前方に倒れ込む。

「何だ、今の音は？」

叫び声が聞こえる。

あれは助三郎の声だ。

積み上がった商品を掻き分け、助三郎が走り寄った。顔を上げた助三郎は、仰天した表情を浮かべる。

「世之介さん！ あんた……」

戦闘能力、平均以上。賽博格と認められる。戦いには、非常手段が必要。

一瞬にして世之介は助三郎が強敵であると結論付けていた。

世之介はぐつと腰を沈め、戦いに身構えた。助三郎が自分に戦いを挑むかどうかは関係がない。ただ相手が強敵になるかどうかは肝心で、常に備えている。

今の世之介は、戦いを欲していた。それは、ガクランの意思でもあった。

世之介は全身の筋肉を引き絞るよう力を溜めると、一瞬にして放出させた。だつと足の裏が床を踏みしめ、世之介は頭を先に、一本の槍のように助三郎へと向けて飛び掛かる。

助三郎はポカンとした顔のまま、世之介の攻撃を受け止めていた。どんつ、と世之介の頭突きが、助三郎の胸に炸裂した。

ただだつ！ と助三郎の身体が後方に吹っ飛び、積み上げられた商品の山に突っ込んだ。雪崩のように商品が崩れ落ち、助三郎の全身が埋まる。

がらがらと音を立て、助三郎は商品の山の中から這い出す。

驚きに、助三郎は呆然としていた。

「どうしたんだ、世之介さん？」

世之介は応えず、雄叫びを上げていた。

全身の細胞が、戦いの予感に喜悦を上げている。

戦いだ！

喧嘩だ！

これこそ、俺の生き甲斐！

世之介は宙に飛び上がり、更なる攻撃を助三郎に加えていた。

打撃

世之介の前蹴りが、助三郎の胸元で炸裂する。助三郎の身体は、世之介の前蹴りを受け止め、宙に浮いて、再び商品の山へと突っ込んだ。

商品の山を掻き分け這い出す助三郎の顔には、苦痛の色は欠片も見当たらない。賽博格^{サイボーグ}の助三郎にとって、世之介の前蹴りなど何ほどもなかった。

しかし、重い、賽博格体の助三郎を、ただ一度の蹴りで吹き飛ばす威力は、只事ではない。助三郎の顔には、疑念と同時に、信じられないものを見た驚愕に歪んでいた。

世之介は無言で素早く近づくと、肘を、手刀を、更には回し蹴りを、続けざまに叩き込む。

どれも必殺の気合が込められた、怖ろしいほどの威力を持っている。もしも助三郎が、ただの人間なら、ほとんど即死に近い攻撃であった。

ところが、助三郎には効果がない。助三郎は黙って、世之介の攻撃を受け止めているだけである。

世之介はさつと一步、後ろに下がると、ふーっと大きく息を吐き出した。助三郎に加えた攻撃が、まるきり効いていない事実を確かめ、戦法を変えることにした。

さつと両手を横に広げる。

ガクランの袖が伸び、世之介の手首から先を包み込む。生地が見る見る変化し、世之介の手にぴったりと合った手袋の形になる。

両足の足首から下が同じように包まれ、靴の形に変形する。

襟が広がり、世之介の顔を覆う。

ガ克蘭の裏地から無数の繊維が伸びて、世之介の上半身を包み込む。

一瞬にして、ガ克蘭は世之介の全身を纏う鎧になっていた。これこそ、？伝説のガ克蘭？の秘密であった。

世之介は再び攻撃を開始した。

ぐわんっ！ と音を立て、世之介の拳が助三郎の顎を捉える。助三郎の顔は衝撃に横を向き、踏鞴を踏んだ。

ぶるっと助三郎は頭を振り、まるで眩暈に耐えているかのように、腰を沈ませ、踵に力を入れる。

世之介の拳が助三郎の顎を捉えた瞬間、物凄い衝撃が賽博格体の電子回路に、僅かではあるが、打撃を与えたのだ。^{ダメージ}

助三郎の唇が引き締まった。

先ほどまでの、呆然とした、間抜け顔は拭い去ったように消え去り、代わりに現れたのは、熟練の戦士の厳しい表情であった。ようやく、世之介が侮りがたい強敵であったことを悟ったらしい。

会話

「どうした、助三郎。物凄い音が聞こえたが。何かあったのか？」

助三郎の背後から格乃進が現れる。

格乃進は、助三郎と対峙する世之介を認め、立ち竦んだ。

「あんた、世之介さん……だろうな？」

ガクランの襟が世之介の顔を半ば覆っているため、一瞬、誰か判らなかったのだろう。助三郎は世之介を見詰めたまま、答えた。

「ああ、間違いなく世之介さんだ。だが、気をつける！ 今の世之介さんは、普通じゃない！」

「何？」

尋ねかける格乃進に、世之介は猛然と突進した。一跳びで、格乃進に体当たりを食らわす。

爆発音に似た衝撃音が響き渡り、格乃進の身体は十間近く吹っ飛んだ。背後の壁にぶち当たると、格乃進の身体は壁に大きな罅割れを作ってめり込む。

格乃進は、ばらばらと壁の破片を飛び散らせながら立ち上がる。格乃進の顔には呆然とした驚きが浮かんでいた。

助三郎は、さっと身構えた。

格乃進！ 加速しろっ！

助三郎は圧縮言語で格乃進に話し掛ける。賽博格同士が戦闘の間に使用する、高速言語である。

数分の一秒という一瞬の間に、言葉を圧縮して会話する。当然、超音波で、普通の人間には聞き取れない賽博格専用の会話方法である。

穴

が、世之介には、はっきりと聞き取れていた。

なぜだ、助三郎？ 加速状態になる理由は？

格乃進が高速の会話で尋ねかける。

さっきの体当たりを受け止めたろう？ あんなの、普通の人間にできることか？

助三郎は、すでに加速状態に入っていた。その助三郎に対し、世之介は攻撃を加えている。

完全装甲された世之介の拳は、ほとんど砲弾の威力を秘めていた。固く握りしめられた拳が助三郎の身体にめり込んで、助三郎は衝撃に耐え切れず、後方に引っくり返った。

助三郎、大事無いか？

格乃進が心配そうな声を上げる。

心配するな。多少、応えるが、機能には異常はない。が、自分の賽博格体をあまり過信するな！

助三郎は立ち上がり、油断なく身構える。

格乃進は頷いた。

ああ、さっきの正拳突きは只事じゃないな！ しかし、あれほどの打撃を与えて、世之介さんの身体には何もないのか？

判らん。世之介さんの着ている学生服が変化して、今こうして見ている鎧のような形になった。多分、戦闘用の形態だろう。

格乃進の口調に、憂慮が滲んだ。

どうする、助三郎。このまま世之介さんを好き勝手にさせておくのか？ 何があつたか知らないが、これは異常だ！

助三郎は頷く。

ああ、危険だ！ 俺たちだけじゃなく、世之介さんにとっても危険だと言える。何しろ、俺たち賽博格と互角に渡り合えるほどだからな。しかし、このままでは埒があかない。少し、お相手をしてみようじゃないか！

格乃進も賛同した。

そうだな。だが、あまり調子に乗るなよ。何しろ世之介さんは生身の人間だ。それを忘れるな！

判っている……！ だが、この店内では狭すぎる。何とか外へ誘い出そう！

よし！ 俺が出口を開ける！

格乃進は叫ぶと、一番外に近い壁に向かって、まっしぐらに突き進んだ。格乃進は両手を水車のように回転させ、壁に向かって機関銃のごとく拳を叩き込む。

一瞬にして壁の真ん中に無数の窪みが出現した。格乃進は足を拳げ、賽博格の力を最大に解放して壁に大穴を開ける。

加速状態にあるため、壁が破壊される音は聞こえない。破片が空

中にゆっくりと漂う中を、格乃進は外へと身体を投げ出す。それを見て、助三郎は世之介を誘い込むように後じさる。

助三郎の顔に、驚きが弾けた。

素早く格乃進を振り返り、声を掛ける。

格乃進、気をつけろ！ 世之介さんは俺たち賽博格の速度に従ってきているぞ！

何だとっ！

対応

助三郎と格乃進が、店の壁に穿たれた大穴から飛び出すと、世之介も追いかけて、跳躍する。

穴は、店の二階部分に空けられた。二人の賽博格は空中に飛び出すと、回転して足先から着地する。

世之介は壁を蹴って加速し、前転して【集会所】前の駐車場に降り立った。

賽博格たちは目配せしあった。

格乃進がずい、と前に出ると、世之介の動きを止めるために両腕を横に広げた。

つつ、と助三郎が世之介の背後に回りこむ。無論、二人とも通常の人間の数倍から、数百倍もの速度で動き回る、加速状態にあった。

普通の相手なら、充分に対応できる。が、世之介は助三郎の動きを目で追い、格乃進にも気を配って身構えている。

格乃進の眉が顰められた。

どういうことだ？ 世之介さんが俺たちと同じ賽博格であるはずがない！なのに、俺の動きを見切っているぞ。

あの真っ赤な学生服が、鍵を握っているに違いない！世之介さんの身体の熱分布を見ると、以前と違った模様パターンが現れている。

格乃進の口調に、決意がこもった。

ひと当て、してみよう……。危険ではあるが、しかたない！

格乃進の言葉に、世之介は身構えた。明らかに自分たちの高速言語が世之介によって聞き取られていることを知り、格乃進の顔に真剣な表情が浮かんでいた。

軽く跳躍した格乃進は、空中で素早く前蹴りを繰り出し、世之介に殺到した。

世之介は僅かに仰け反り、格乃進の第一撃をすれすれで躲す。

逡巡

しかし、格乃進のほうが加速状態での戦いには熟練している。空中で浮かび上がったまま、格乃進は前蹴りによって慣性がついた身体をくるりと回転させた。

頭を下にした逆さまの態勢で拳を突き出し、世之介の胸に叩き込む。

普通なら世之介の全身の骨という骨は一本残らずへし折れ、内臓破裂の衝撃で即死しているはずであった。

格乃進の突きを受け止めた世之介は、手足を大きく広げた態勢で後方に吹き飛んだ。地面に横転して、ごろごろと転がっていく。

格乃進は案じ顔をしている。自分の攻撃が、強すぎたかと懸念しているのだろう。

世之介は身体の回転が止まると、むくりと起き上がった。素早く体勢を整え、身構える。

歓喜に、世之介は吠えるように笑い声を上げる。格乃進の攻撃など、微塵も感じない！

格乃進は、あんぐりと口を開け、叫んだ。

信じられぬ！ あれほどの衝撃を受け止め、しかも平気の平左とは！

助三郎が声を掛ける。

先ほどの攻撃を解析したところだ。驚くべきことに、あの学

生服の生地は、お前の攻撃が当たった瞬間、硬化したぞ！ おそらく、世之介さんのあの爆発的な力は、学生服が筋力を倍化させているに違いない。まさしく硬化装甲戦闘服と呼ぶべきだ。
プロテクト・アーマー・バトル・スーツ

格乃進は唇を噛みしめた。

摩擦

うーむ、どれほど打撃を加えれば良いのだ？ 俺たちの力を全力で攻撃するわけにはいかぬであろうが……。

助三郎は頭を振った。

格乃進！ 躊躇っている場合ではないぞ！ どう考えても、世之介さんの今の状態は普通じゃない。戦いが長引けば、世之介さんの身体にどんな悪い影響が出るか、さっぱり判らん。早めに決着をつけるべきだ！

世之介の胸に、賽博格たちに対する軽蔑の念が湧き上がる。

奴ら、戦士としての適性は欠片も持ち合わせていない！ 戦いに必要なのは、躊躇いのない決意だというのに、奴らといたら、相手を傷つけてしまうかもしれない思いに、充分に戦うことすらできないのだ。

だが、自分は違う。

世之介は猛然と賽博格に向けて駆け出す。

が、つるりと地面で滑ってしまう。

なぜだ？ 何が自分の身に起きた？

世之介はガクランによって加速状態にある。普段とは違う、猛速度で動くことが可能な状態である。

が、その加速状態は通常とは違い、摩擦係数がひどく少なくなっ

ている。摩擦に必要な時間を経過させないためだ。充分、地面を把握しないと、まるで氷の上に立っているかのように、ツルツル滑ってしまうのだ。

助三郎と格乃進は、地面に身体を投げ出すようにすれすれに傾け、爪先を蹴り出して空中に飛び出す。これが加速状態での、最も効果的な動き方である。

罨

助三郎と格乃進は、動けなくなっている世之介の周囲を、素早く旋回し始めた。

世之介は油断なく身構え、二人の変化を見守っている。

二人の賽博格は世之介を中心として、円を描くように動いている。その速度が徐々に速まっていく。円を描く半径が縮まっていく。

行くぞ、格乃進！

おう！

二人が素早く高速言語で叫び合い、急速に世之介に接近してくる。

ガクランで加速状態にあるとはいえ、世之介は生身の人間である。賽博格である助三郎と格乃進の加速状態との速度の差は、如何ともしがたい。

助三郎と格乃進は必殺の気合を込め、世之介の急所を攻撃し始めた。

世之介は二人の攻撃を、的確な動作で受け止める。一撃されれば、骨が折れ、筋肉が弾け飛ぶような打撃も、ガクランによって防護される。

それでも、完全に防護されるわけではない。助三郎と格乃進の狙いは、単純な打撃だけにあるのではなかった。狙いは世之介が生身の人間である、という前提にある。

世之介は、不意に自分が危地に陥っていることを悟った。すでに自分は、賽博格たちの罨に陥っているのだ！

怒りに駆られ、世之介は賽博格らの囲みを脱出するため、遮二無二、突進を懸ける。

しかし、遅かった！

ぱくぱくと世之介は呼吸困難に口を開き、酸素を取り込もうと大きく呼吸する。

空気が足りない！

二人の賽博格が高速で動いたため、気流が突然の竜巻を作り出していたのである。竜巻の中心は気圧が下がり、酸素が少なくなっている。世之介はその中心にいたのだ。

世之介はがくり、と膝を地面についた。

ゆっくりと上体が倒れ掛かる。

気が遠くなり、世之介の加速状態が無くなり、通常感覚が戻ってくる。

遠くで、爆発音に似た破壊の音が聞こえてくる。やっと格乃進がぶち壊した量販店の壁の破壊音が到達したのだ。

世之介は目を閉じた。

声

「世之介さんは、どうですか？ どこにも怪我は、ありませんか？」

皺枯れた、老人の声が聞こえてくる。光右衛門の声だ。光右衛門の質問に、格乃進の応える声が聞こえてくる。

「ええ。幸いなことに、多少の擦り傷はあるようですが、それ以上の怪我はないようです。まあ、無事でなによりです」

光右衛門の溜息が聞こえた。

「いったい、何事があったのですかな？ 突然、怖ろしいほどの音が聞こえたと思ったら、格さん助さんの二人が消えてしまって、壁には大穴が空いて、外の駐車場に世之介さんが倒れていた、こういうわけです。実際、肝を冷やしましたぞ」

助三郎の声が聞こえた。

「世之介さんが突然、人が変わったようになって、わたしどもに攻撃してきたのです。しかも、賽博格サイボーグのわたしどもと同じくらいの攻撃力で……。止むを得ないこととはいえ、加速状態になって戦う羽目になってしまいました。あの場合、そうでもしなければ、世之介さんを止めることは全然できなかったでしょう」

光右衛門の口調に、疑念が滲む。

「信じられませんな。世之介さんは、ただの人間でしょう。なぜ、

あなたがた賽博格と互角に戦えるのです。やはり、あの学生服に原因があるのですかな？」

意識

世之介は起き上がった。

イッパチの叫び声が聞こえる。

「若旦那が！ お目覚めでござんす！」

ぱちぱちと瞬きして、世之介は辺りを見回した。どうやら茜の兄の、勝の部屋らしい。

勝の寝具に、世之介は寝かされていた。起き上がった世之介に、イッパチが心配そうな顔を近づける。

「若旦那、大丈夫でげすか？ どこか痛みますかね？」

世之介はぶるん、と顔を振った。無言であちこち、自分の身体を触ってみる。大丈夫、どこも痛まない。

自分の身体を確かめるとき、世之介は？伝説のガ克蘭？がそのまま着せられていることに気付いた。

「ああ、どこも痛まねえよ！」

世之介の返事に、イッパチは「ぎくり」と身を強張らせた。イッパチの背後に光右衛門、助三郎、格乃進が座っている。茜は部屋の隅に両膝を抱えて座っていたが、世之介の返事を耳にして吃驚したように顔を上げた。

「なんでえ……。皆、知らない相手を見たような顔しやがって……。俺の顔に、何かついているのか？」

「い、いえ……」

IPPACHIは目を逸らした。

茜は立ち上がった。

「世之介さん、本当に何ともないの？」

「当たり前だ！ ピンシヤンしてるぜ！ 前より調子がいいくらいだ。本当にお前ら、どうかしてるぞ！ どうしたってんだ？」

光右衛門が目を光らせた。

「自分の変化に気がつかないのですな。世之介さん、あなたは、すっかり変わってしまった……」

頭髮

「俺が？」

世之介は指を挙げ、自分の顔を指差した。

茜がゆつくりと頷く。

ポケットから小さな手鏡を取り出し、世之介に押しつける。

「自分の顔を見てみなさいよ。あんた、本当に別人だわ！」

世之介は茜から手鏡を受け取り、開いた。

鏡面に自分の顔を映してみる。

「な、なんでえ、こりゃ！ 誰だ、こんな悪戯しやがったのは？」

大声で叫んだ。顔は元のままだが、頭髮がまるつきり変わっていた。

黒々とした頭髮は、なぜか金髪に変わり、庇が張り出したリーゼント・スタイルになっている。念入りにパーマを当てた髪形は、番長星の住人とまったく同じであった。

「誰がやったんだ……」

世之介の呟きに、全員が首を振った。茜が腕組みをして口を開いた。

「誰もやっていないわ。あんたがガ克蘭を身につけた時、なぜか、

髪が勝手に金色に染まり、自然にその髪型になったのよ」

世之介は手を上げ、自分の髪の毛に指を突っ込んだ。くしゃくしゃと猛然と髪の毛を乱す。

ところが、暫くすると、じわじわと髪の毛は元に戻って、リーゼントになってしまう。

「どうなってんだ……」と頭を抱えると、ぼん、とイッパチが膝を叩いた。

「そのガ克蘭でさ！ 若旦那がガ克蘭を着たらそうなった、ってんでしょう？ だから脱げば、元通りになるんじゃない……」

皆まで聞かず、世之介はガ克蘭を脱ごうとした。が、どうしても手が動かない。うろつろと両手がガ克蘭を探り回るが、脱ぐ気配はなかった。

変化

「脱げない！」

世之介は苦渋の声を振り絞る。 IPPACHIが唇を舐め、世之介の背後に回った。

「あつしが手伝いまさあ！」

ぐい！ とガ克蘭の生地に手を掛ける。が、ガ克蘭はまるで世之介の身体に密着しているかのようで、どんなにIPPACHIが渾身の力を込めようが、張り付いて動かない。

どたり、とIPPACHIは尻餅をつき、せいぜいはああと息を荒げた。

「信じられねえ！ あつしの杏^{アントロイド}萄紹偉童の力でも剥がせねえなんて……！」

助三郎がじつと目を光らせ、世之介のガ克蘭を舐めるような視線で見つめている。

「世之介さんの学生服の繊維を拡大して観察しています。どうやら、ただの繊維ではなさそうで、極小部品^{ナノ・マシン}が組み合わさって繊維状になっております。それが世之介さんにかつちり絡みつき、剥がせないのでしょうか。無理に脱がそうとすれば、世之介さんに怪我が及びますぞ！」

世之介は、がっくり首を振った。

「どうすりゃいいんだ……」

光右衛門が声を掛けた。

「多分、世之介さんが本気で、学生服を脱ぐ決意を固める必要があるでしょう。世之介さん。何が何でも、脱ぎたいとお思いでしょうか？」

世之介は首を捻り、自分の胸に尋ねてみる。
顔を上げ、真っ直ぐ光右衛門を見詰める。

「それが、そうでもないんで……。妙なことだけど、何だかこれを着ているのが当たり前だって気がしているんだ」

光右衛門は頷いた。

「成る程。無理に脱ごうと思わず、時間を掛けるべきでしょうな」

暫し沈黙が支配した。イッパチがおずおずと世之介に話し掛ける。

「それで若旦那、他には何も異常はござんせんか？」

世之介はもう一度、首を捻った。

「そういえば……」

イッパチが急き込む。

「何でげす？」

「腹が減ったな！」

ぐきゅうつうつ！ と、世之介の下腹部から腹の虫が盛大に空腹を訴えていた。

食欲

一同は家族食堂^{ファミレス}に移動して、世之介の食欲を満たすため、料理を大量に注文した。

がつがつと、手掴みで世之介は出される料理を、次から次へと口へ運び、無心に咀嚼して飲み込んでいた。

いくら食べても食べても、空腹が収まる気配がない。際限のない世之介の食欲に、全員呆気にとられ、ぼんやりと見守っていた。

「糞！ 面倒だ！」

がらがらと目の前に積み上げられた料理の皿や器を薙ぎ倒し、世之介は立ち上がった。せかせかと料理場に足早に近づいていく。

イッパチが仰天した表情になって従ってきた。

「若旦那、どうなさるつもりでებს？」

「煩いっ！」

苛々と世之介は怒鳴ると、調理場に入り込み、目の前に並んでいた瓶を取り上げた。

中には、オリーブ・オイルが詰まっている。ぼん、と蓋を弾くと、瓶の口を逆さにして、どぼどぼと食用油を垂らしこむ。

ぐび、ぐび、ぐびと喉を鳴らして油を飲み干し「ういーっ！」と呻いて口元を拭った。

一本を空にすると、次の瓶を鷺掴みにして、これもあつという間に空にしてしまう。数本分の食用油を飲み干し、ようやく空腹が収まった。食用油はカロリーの固まりである。

足音高く自分の席に戻ると、ふつと息を吐き出した。

ぼけつと世之介の所業を見守っている仲間たちに向け、唇を捻じ曲げ皮肉な笑みを浮かべて見せた。

「なんだよ、お前ら。文句あるのか？」

「いいや……別に」

ようやく助三郎が答える。格乃進が首を振った。

「大変な食欲だな。多分、着ている学生服が、世之介さんの代謝を変えているのだ。爆発的な体力を与える代わり、大量の食糧を必要とさせるのだろっ」

禁制

「ふん！」と世之介は卓にどかんと両足を投げ出した。

「それが、どうした！ 俺は、俺だよ」

「世之介さん……」

光右衛門が用心深げに、声を掛ける。世之介はぐい、と光右衛門に首をねじ向けた。

「なんでえ、爺さん！」

「こら！ 何てことを！」

助三郎が目を丸くして身を乗り出す。顔には怒りが差し上っている。光右衛門は助三郎を抑えて、言葉を続けた。

「まあまあ……。世之介さん、それより【ツツパリ・ランド】を指す、という当初の目的は、どうになりました？ まだ、同じお気持ちですか」

「当たり前だ！ こんなチンケな星に、いつまでもいられるかつ！ 何とかして地球へ戻って、今度こそ尼孫星を^{アマゾン}目指すぜ。あそこじゃ、俺を待つてる女たちがウジャウジャいるって話じゃないか」

吠え立てた世之介は、天を仰いで「けけけけ！」と笑い声を上げる。

呆然と、一同は世之介を見詰めた。
「成る程」と光右衛門は頷いた。

「まあ、世之介さんの目的はともかく、わたしも【ツツパリ・ランド】については、気になることがあるのです。あの、風祭と申す、賽博格……」

「はっ」と格乃進が顔を上げた。

「やはり、ご隠居様も同じことをお考えでしたか？」

光右衛門は重々しく頷いた。

「はい、あの風祭と申した賽博格は、明らかに戦闘用の改造を受けておりました。事故などで、やむを得ず賽博格手術を受ける人間はありますが、戦闘用の加速装置の装着は、幕府によって禁じられております。いったい、どこからあの賽博格は、加速装置を手に入れたのでしょうか」

格乃進も同意した。

「まったく、その通りです。戦闘用の加速装置をなぜ、風祭が装備しているのか、不思議です。加速装置は御禁制の品のはず」

光右衛門は厳しい目付きになった。

「？ 抜け荷？ の疑いがありますな。何か、よからぬ企みが匂いますな」

目的

それまで黙っていた茜が、顔を上げた。

「あの……」と躊躇いがちに声を上げる。

光右衛門は素早く茜の躊躇いを見てとり、優しく声を掛けた。

「何ですかな、茜さん」

茜は大きく息を吸い込んだ。

「あたしも、【ツッパリ・ランド】に行きたい！」

「茜さん！」

助三郎と、格乃進が同時に声を上げた。

茜は決意を秘めた表情をしている。

「風祭つて人は、最強のバンチョウを目指して賽博格になったって
言ってた。あたしのお兄ちゃん 勝又勝^{まさる} も、やっぱり最強の
バンチョウを目指すって言って、家を出て行った。もし、お兄ちゃん
が【ツッパリ・ランド】を目指していたら……」

助三郎は「わが意を得たり」とばかりに大きく頷く。

「茜さんの言うとおりです。わたしも助三郎と格乃進は、戦闘で
身体の半分以上を失い、やむを得ずこのような身体になりましたが、
失ってみて初めて、生身の身体が貴重なものか悟りました。この星
の人間は、ただ強くなりたいという単純な理由で、遊び半分で賽博
格手術を受けるなど、許せません！ 茜さんのお兄さんのためにも、

【ツツパリ・ランド】を目指すべきでしょう」

世之介は立ち上がった。

不意の世之介の動きに、全員が注目する。

「それじゃいつまでも、ここでボケツとしていねえで、さつさと二輪車に乗り込もうぜ！ さあ、出発だ！」

さつと茜に近づくと、手を伸ばし、茜の顎に手をやった。世之介の仕草に、茜は目を丸くした。

「茜！ 俺がお前を【ツツパリ・ランド】に連れて行ってやるぜ！」

ニタリと笑い掛ける。茜の顔は、見る見る真っ赤に染まった。

さつさと外へ出て、世之介は空気を吸い込み「うーん」と大きく伸びをした。

なんだか、やたら気分が良かった。

何でもできそうな、そんな自信が津波のように押し寄せる。

【ツツパリ・ランド】か……。

世之介は、ひどく楽しみだと感じていた。

出発

二輪車に跨り、世之介は一杯に梶棒アケセルを握りしめ、動力機関エンジンを全開にした。

ばるるるん！

けたたましい騒音が、突き出した排気管マフラーから響き渡る。

本来、番長星で使用されている二輪車も、四輪車も、燃料を燃焼させる形式ではないから、排気音が出るわけがない。だが、まるで音がしないというのは気分が出ないとかで、無理矢理うるさい人工的な音を立てる装置を内蔵している。

世之介は辺りを圧する音に、うっとりとなっていた。なんだか、自分が一段偉くなった気分である。

背後の仲間の二輪車を振り返って「行くぜ！」と叫ぶ。二輪車に跨る助三郎と、格乃進は無言で頷いた。

蹴飛ばされるように世之介の二輪車は【集会所】の駐車場から舗装路へと飛び出した。

茜の説明によると、目的地の【ツツパリ・ランド】は目の前の道路を真っ直ぐ、どこまでも進むと、辿り着くらしい。茜は世之介の隣の車線に自分の二輪車を並んで併走してきた。

ぴったり横に近づくと、茜は世之介にさかんに何か話し掛ける。

「スイッチを……して……が……できる……」

茜の言葉は風きり音のため、途切れ途切れである。把手ハンドルの部品をしきりに指さしている。

世之介は自分の二輪車の把手を見詰めた。

中央の目立つところに、スイッチらしきものが一つ、ある。どうやら、茜の指さしていたのは、これらしい。世之介は片手を把手から離し、スイッチを押した。

障壁

「ああ、良かった！ やつとちゃんと話せるようになったわね！」

途端に、今までびゅうびゅう音を立てていた風きり音がぴたりと止まり、隣の車線で二輪車を走らせている茜の言葉が、はっきりと聞こえてきた。

世之介は最初に番長星に到着して、茜の二輪車の後ろに乗せてもらったとき、やはり同じように風きり音が全然、聞こえていなかったことを思い出した。

「なんで騒音が止まったんだ？」

世之介の背後から、格乃進が声を掛けてきた。

「二輪車の周りを、超音波の障壁シールドが取り巻いている。同時に、われわれの声も、自動的に無線機で発信できるようになっている。だから、お互いの声が、はっきりと聞き取れるのだ」

成る程、と世之介は感心した。

と、前方から、工事作業車がゆっくりとした速度でやってくるのに気付く。運転しているのは総て傀儡人ロボットである。

作業車は世之介の目の前を通り過ぎた。世之介は側鏡サイド・ミラーで作業車が【集会所】に向かっているのを認めた。

「ありゃ、なんだい？」

茜に叫ぶと、すぐ答が返ってくる。

「あんたらが空けた壁の穴を、修理に来たのよ。珍しくもないわ」

茜は無関心であった。世之介は密かに頷いた。そうか、番長星ではあらゆる修理や、修繕は、傀儡人が担っているのだろう。

辺りを注意深く眺め渡すと、あちこちに傀儡人の姿が散見される。畑の真ん中で農作業している傀儡人。道の両側に並んでいる様々な店先で、人間の店員に混じって立ち働いている傀儡人……。

舗装路を修復している傀儡人もいた。道路が、常に新品同様になっているのも、傀儡人が倦まず弛まず、修復作業を続けているせいだ。

番長星は傀儡人によって成り立っている……。

世之介はふと、奇妙な考えを弄ぶ自分に気付いていた。

B o r n t o b e w i l d !

どこまで直つ直ぐ伸びる道路を、世之介たちの二輪車が快調に飛ばしている。しかし、単調な景色が続く旅に、世之介はやや飽き飽きしてきた。

ぼんやりしていると、うとうとと眠くなってくる。

出し抜けに音楽が鳴り響き、世之介は驚いて回りを見回す。

G e t y o u r m o t o r r u n n i n !
H e a d a u t o n t h e h i g h w a y !

歌詞は英語だった。少なくとも、そう聞こえる。内容はさっぱり判らないが、ひどく音量が大きく、怖ろしく粗っぱい歌い方であった。

「な、なんだっ!」

「目が覚めた?」

隣の茜が、含み笑いをして話し掛けて来た。

「二輪車^{ツーリング}で遠征するときは、今こつやって聞こえている音楽を鳴らすのが決まりなんだ!」

二輪車には、音楽を鳴らす装置が組み込まれているらしい。

世之介の聞いているのは『ステッペン・ウルフ』の『ワイルドに行こう！(Born to be wild)』であつた。

だが、この曲が使用された『イージー・ライダー』という二十世紀の映画など、見たこともない世之介には、初めて聞く音楽である。

工場

格乃進の側車^{サイド・カー}で座っている光右衛門は顔を顰めていた。

「何だか、荒々しく、好ましくない楽曲ですなあ！ 歌なら小唄や、端唄の類はないのですかな？」

「知らない、そんなの！」

茜は光右衛門のぼやきに呆れて叫び返した。

イッパチが調子に乗る。

「ご隠居様！ 一つ、あつしが小粋なところを披露いたしましたしょうか？ 何、こう見えても、あつしは寄席で前座を務めていたこともござんして、都々逸くらいならお手のものでさあ！」

「イッパチ、やめておけ！」

世之介はイッパチを制止した。世之介の言葉に、イッパチは「へえ」と首を竦めて見せる。

世之介も荒々しさは感じていたが、それほど好ましくないとは思わない。むしろ、今の世之介の気分にはぴったりだと思った。？伝説のガクラン？を身につける以前なら、光右衛門に同意したろうが、今の世之介は、これくらい粗っぽい調子の歌のほうが、好ましかった。

我知らず、世之介は茜の流している音楽に合わせ、全身で拍子^{リズム}を取っている自分に気付く。

道路の右に、今まで見たことの無い建物が近づいてくる。番長星

で見た建物は、毒々しい原色に塗られ、派手派手しい看板が掲げられた自己の存在を思い切り主張しているのが普通だったが、近づいてくる建物は無愛想な立方体で、やや灰色に近い白に塗られ、看板の類は何一つ見当たらない。

「なんだい、ありゃ？」

世之介が指先を上げて示すと、茜は首をかしげた。

「あれは？工場？よ」

「工場？ 何を作っているんだ」

「知らない」

茜の答は素っ気ない。まるきり関心がなさそうだった。

しかし、二人の遣り取りに、光右衛門はひどく興味を持ったらしく、身を乗り出して話し掛けてきた。

「茜さん、後学のため、見学などできませんでしょうか？」

意外な光右衛門の言葉に、茜は首をねじ向け、唇を丸く窄めて見せた。

「そりゃ、まあ……。別に構わないけど」

世之介は二輪車の向きを、前方の？工場？へと変えた。さて、何が光右衛門の興味を引いたのだろうか。

見学

工場の正門に近づいていくと、傀儡人の守衛が一同を出迎える。ひよろりとした姿の傀儡人は、ぶかぶかした保護帽ヘルメットを被り、両手をゆつくりと動かして、入口へと誘導した。

「ようこそ、いらっしやいませ！ 何か、御用でしょうか？」

傀儡人はざらざらした声で話し掛けてくる。あまり優秀な発語回路が組み込まれていないと見える。口調はぎこちなく、途切れがちであつた。

光右衛門が側車から顔を突き出し、声を掛けた。

「我々は旅の者ですが、後学のため見学をしたいのです。どなたか、責任者のお方に、通告いたして貰えませんか？」

「見学……」

傀儡人は、明らかに面食らった態度をとった。両目のレンズがぴかぴかと瞬き、頭部がぐるりと三百六十度、一回転する。

そのまま、ぴたりと静止した。傀儡人の内部で「じー、じー」という微かな音がしている。多分、体内の無線装置を働かせているのだ。

静止したのは一瞬で、ぎくしゃくと傀儡人は頷いた。

「失礼致しました。ただ今、工場の？支配頭脳？と連絡を取りましたところ、皆様方を案内するよう、指示がありました。では、二輪

車をお降りになり、こちらへどうぞ」

「？支配頭脳？？ なんですかな、それは」

よっころしよと側車から外へ出て、光右衛門が質問する。傀儡人は考え考え、ゆっくりと答える。

「この工場の総てを監督する、頭脳です。工場の最も奥深くに位置し、自分では動けません。私も総てを監督します。私もは支配頭脳を？バンチョウ？と呼びます」

活動

傀儡人の言葉に、一同は仰天した。

「バンチョウ？ それは、人間のことでしょう？ ここに人間がいるの？」

茜が叫ぶと、傀儡人は否定するかのように首を振る。

「ここには人間は、一人もいません。すべて私どものような、被^{クリ}創造物^{チャー}が作業を行っております」

格乃進が呟いた。

「おそらく、規模の大きな電子頭脳なのでしょう。工場の生産を監督するため、自分で動く必要がないのでは？ しかし、なぜバンチョウなのでしょう？」

格乃進の説明に、光右衛門は頷き返す。

「その疑問は、後にして、実に静かですな。工場というのに、稼動していないのでしょうか？」

格乃進の背後から助三郎が目を奇妙に光らせ、口を開いた。助三郎は、両目の分析装置を働かせているらしい。

「あの工場の換気口などを観察しておりますが、人間の呼気に含まれる二酸化炭素の排出を全く感知しません。多分、工場は無人なのでしょう。しかし中性微子^{ニュートリノ}放射は壮んです。間違いなく、稼動しております」

「成る程」と光右衛門は二人の説明に頷き、世之介を見上げ、口を開いた。

「あなたは、どう致します？ わしは、一緒に案内して貰いますが、世之介は二輪車から降り立ち、返事をする。

「俺も行くさ、爺さん！」

世之介の返事に、格乃進と助三郎の、人工皮膚が真っ赤に染まった。眉が上がり、目尻が吊り上がった。助三郎は、怒りに、声が軋る。

「せめて我らと同じように、ご隠居様と呼び掛けられないのか！ 何だ、爺さんとは！」

光右衛門は二人の賽博格を宥めるように両手を上げた。

「格さんも、助さんもそう、怒るべきではありませんぞ！ わしは、旅の爺い。世之介さんが爺さん呼ばわりしたところで、その事実が変わりありませんからな！」

にこにこと話し掛ける光右衛門に、格乃進と助三郎は肩の力を抜き、慇懃に頷いた。

光右衛門は守衛の傀儡人に顔を向けた。

「それでは、案内して貰いましょう」

傀儡人は頷き、かくかくと手足を動かして、工場の建物に向かった。

液体

世之介は、工場というものは、様々な機械が犇き、絶え間ない騒音の只中にあるものと想像していた。

ところが、まったく違っていた。工場内は完全に無音であつた。

さらに、真つ暗でもあつた。

光は背後の入口からの外光だけで、いきなり内部に踏み込んだ一同は、瞳孔が暗闇に慣れておらず、戸惑っていた。

しかし二人の賽博格と、杏菊紹偉童のイッパチは平気な様子で、物珍しげにあちこちを見渡している。

世之介たちがうろろ狼狽しているのに気付き、守衛傀儡人は済まなそうに声を掛けてきた。

「ああ、すっかりしていました。工場内は人間の視覚に合わせた照明をしていなかったので、暗く感じているんですね。今、明かりを点けます！」

言葉が終わると、出し抜けに工場内が、白い光に目映く照らし出される。

「こつ、これが、工場？」

世之介は思わず叫び声を上げていた。

茜はポカンとした顔で、世之介の驚きに反応してはいない。おそらく、工場が何をするところなのか、そもそも言葉の意味すら判っていないのだろう。

「プールみたいね」

茜の感想に、世之介は同意する。

まさしく、プールである。だだっ広い、巨大な水槽が、建物のほとんどもを占めている。

しかし、プールに満々と湛えられたのは水ではなく、別の何かであつた。どろりとした真つ黒な液体が、盛んな波紋を湧き立させている。

色からすればコール・タールのように見える。黒光りして、ところとした光沢を放っていた。

プールの上には、幾つかのタンクが並んでいる。タンクの下方には注ぎ口があつて、そこからドボドボと、大量の液体がプールに注がれていた。

作業

「これは、何ですか？」

静かに、光右衛門が質問を投げかけた。
傀儡人は腕を挙げ、水面を指し示す。

「現在、この工場では、二輪車と四輪車の生産を行っております。
月産、千台もの二輪車と四輪車が生産されています。プールの中身
は、生產品のための原材料です」

言葉が終わると、ごぼりと水面が泡立ち、一台の四輪車が浮上して
きた。ど派手なピンクの塗装の、無蓋車である。オープン・カー奇妙なことに、
プールに湛えられている真つ黒な液体は、一滴もついていない。

水面に浮かび上がった四輪車は、プールの縁に設けられた車廻し
に車輪を載せ、するすると無音で、搬入口らしき方向へと進んでい
く。

ごぼりとまた水面が泡立ち、今度は二輪車が姿を表した。二輪車
もまた、誰も操縦していないのにも関わらず、自走して搬入口へと
進んでいく。

すべて無音で作業は行われている。

訳の判らないという顔つきで光右衛門は助三郎と格乃進を見やる。
二人の賽博格は両目を光らせ、しきりに大きく頷いていた。
助三郎が口を開く。

「ご隠居様。この工場は、微小機械工場ナノ・マシンなのです」

格乃進が後を続けた。

「そうなのです。あのプールに湛えられたのは、液体ではありません。
ん。

目に見えないほど小さな、無数の微小機械が、一杯に犇むしいており
ます。

タンクから注がれた原材料は、金属、希少金属、レア・メタル各種有機重合材
料クなどが混ぜられた液体でして、プールの微小機械は原材料を分子
や原子の大きさで選別し、組み立てます。

ですから、タダの一人も作業員を必要としないのです。何しろ直
径一万分の一以下という、おそろしく細かな微小機械が、一斉に
分子や原子をそのまま組み立てるのですから、いきなり完成品が出
現してしまうのでしょうか」

ストレス

工場内を見詰める光右衛門の表情は、険しかった。痩せた顔には、ふつふつと大量の汗が噴き出している。

光右衛門は何度も頷いた。

「成る程、よく判りました！」

そのまま髭の下の唇を噛みしめ、何か考え込んでいる。顔を上げ、傀儡人に向き直った。

「それで？支配頭脳？とやらには……あなたがたの言い方では？バンチョウ？ですか？ 面会は、できませんかな？」

守衛傀儡人は驚いたように、身体をぎくしゃくと動かせた。

「バンチョウに？ そ、それは……！」
「できませんか？」

言葉を重ねる光右衛門に、ロボットの動きがぴたりとまる。再び体内から「じー、じー」という作動音が聞こえてくる。多分、連絡しているのだろう。

傀儡人は再び動き出した。

かくかくと細かく震えながら、喋り出す。

「？支配頭脳？は、皆さんとお会いになるそうです。わたしが案内します……」

どこか故障したような動きで、先に立った。傀儡人の人工頭脳に

は、
酷い^{ストレス}圧力が掛かっているかのようにあつた。

通路

守衛の傀儡人は、ふらふらと頼りない足取りで、工場の通路を歩いていく。床はぴかぴかに磨き上げられ、塵一つ落ちていない清潔さであった。

世之介は番長星に来て以降、こんな清潔な環境は初めてだと感心していた。なにしろ今まで目にした番長星の建物といえば、あちこち乱雑なゴミが堆積し、壁は落書きで埋まっているのが普通であった。

隣を歩く茜は、緊張しているようだ。目をきょときょと落ち着きなく彷徨わせ、一步一步どこかに落とし穴があるかのように、慎重に歩を進めている。

「なんでえ、茜。怖いのか？」

世之介は、わざと大声を上げて声を掛ける。茜はびくつと飛び上がった。

「な、なによつ……。脅かさないでよ。こ、怖くなんかないもんね！」

無理矢理どうにか引き攣った笑顔を作るが、唇は強張り、強がっていることは一目瞭然だ。

前方を歩く光右衛門の背中を見詰め、世之介は首を捻った。

「あの爺さん、いったい何を気にしているんだろうな？」

茜は、しげしげと世之介を見上げる。世之介は茜の視線を感じて「何だよ？」と問い掛ける。

茜は、ふっと視線を逸らし、首を振った。

「あんたって、本当に変わったわね。口調も変わったし、性格も別人だわ。最初に会ったときの、あんたとは思えない」

茜に向かい、世之介はぐいっと眉を持ち上げて見せた。

「俺が？ 変わった？ 俺はちつとも、変わったなんて思っちゃいないが」

茜は大きく頷いた。

「それよ！ 自分の変化に全然、気付いていないんだわ！ やっぱり？ 伝説のガ克蘭？ のせいだわ……」

「ふむ」と生返事して、世之介は自分の着ている学生服を見下ろした。燃えるような真っ赤な生地は手触りも良く、着ているだけで自信が盛り上がる気分がする。

確かに、自分は変わったようである。

世之介はガ克蘭を身につける以前の自分の気持ち、思い出そうとしていた。しかしガ克蘭を身につける以前の記憶は模糊として、まるで自分とは思えない。懸命に思い出そうとするが、逆に非常な不安を伴い、苦痛すら感じる。

世之介は、ぶるつと頭を振った。

いいじゃないか！ 俺は、俺だ！ 別人になったとしても、良い

方向に変わったのだから、これでいいんだ……。

前を歩く守衛傀儡人が立ち止まった。

「こちらです」

通路の行き止まりに、一枚の扉があった。全員が立ち止まると、傀儡人は扉の取っ手に手をかけ、ゆっくりと押し開いた。

？支配頭脳？

？支配頭脳？が扉の向こうから全貌を現す。

「なんでえ、お前ら……。工場見学だなんて、物好きもいいところだぜ！」

口調は不良じみていたが、声は甲高く、子供が精一杯ぐんと背伸びしているような印象がある。

茜は「きゃっ！」と喜びの声を上げた。

「可愛い！」

茜の歓声を耳にして？支配頭脳？は顔を顰めた。

「やめろよ、そんな言い方……。舐めんなよ！」

茜は益々きらきら目を輝かせた。？支配頭脳？が苦りきればするほど、反対に可愛さが際立つ。

？支配頭脳？は、猫そっくりだった。しかも生後二、三ヶ月ほどの子猫である。

その子猫が、額に鉢巻を締め、ガ克蘭を着込み、なにやらチ力チ力、ピカピカ無数のパイロット・ランプが瞬く機械のコンソールに向かって、一心に作業をしている。

「そうだ、俺たちや、この工場が完全に稼働できるよう見張つているところだ。おめえらのようなド素人に邪魔されたかねえや！」

？支配頭脳？は一匹……というのだろうか、やはり、どう見ても子猫そっくりに見える……だけではなく、数匹いた。

数匹の子猫が、人間のガクランや、セーラー服を身に着けている。すつくと二本足で立って、分別臭く歩き回り、子猫の背丈に合わせた監視装置らしきコンソールの表示を覗き込み、あるいは幾つかのスイッチを操作して、忙しく作業していた。

賞賛

「申し訳も御座いません。わしら、旅の者で御座いまして、番長星の色々なことを学びたく思い、ご迷惑と思いましたが、押しかけました。何卒、ご教授願えましたら幸いです」

光右衛門はニコニコと満面の笑みを浮かべて愛想良く話し掛ける。光右衛門の馬鹿丁寧な口調に、最初に話し掛けてきた？支配頭脳？は明らかに狼狽した様子で、口元の髭がピクピクと震えている。

白と黒の斑模様で、顔の半分が黒く、両目は金色に輝いていた。

「うん……まあ、そう下手に出るなら、おいらも考えを変えてもいいぞ。おいらたちに聞きたいことって、何だ！」

光右衛門は腰を屈め、尋ねる。

「あなたがたは、そのう……猫そっくりに見えますが」

子猫は即座に、そっくり返った。

「へっ！ そう言うと思ったぜ！ そりゃ、俺たちや、猫そっくりに見えるのは判つてら。しかし、俺たちや、猫じゃねえぞ。こつ見えても、最優秀の猫型傀儡人ロボットなんだ！」

猫型傀儡人……。

世之介は内心、どこかで聞いたような文句だと思った。まさか、あの猫型傀儡人じゃあるまい。それが証拠に、腹の辺りには、ポケットが見当たらない……。

光右衛門は質問を続ける。

「わしら、この工場を拝見致しまして、大変、感服いたしました。素晴らしい生産設備で御座いますな。この工場を監督なさる、あなたがたは非常に重要なお仕事をなさっておられるのでしょうか？」

「支配頭脳？は、ひどく気分を良くしたようだった。口元の髭が、ピンと威勢良くおっ立つ。」

喉声

「うん、ま、まあな！ なんしろ、番長星の人間どもは浪費家だ。いくら二輪車や四輪車を供給しても、すぐ飽きて、次から次へ新車を欲しがる。だから、俺たちは、シャカリキになって、どんどん生産しなきゃならねえ……」

ジロリと、その場に立っている茜と世之介を睨む。

「その二人！ いくらタダだからって、ホイホイ新車を欲しがるんじゃねえぞ！」
「うふっ！」

茜はまったく応える様子がない。逆に嬉しがつている。
小走りに？支配頭脳？に近づくと、いきなり膝をつき、手を伸ばして、喉元を撫で上げた。

ゴロゴロゴロ……。

猫そつくりの？支配頭脳？は、うつとりと目を閉じ、喉を鳴らした。

隣のセーラー服を身につけた、もう一匹の？支配頭脳？が、ぴしやりと喉を鳴らしている仲間を叩く。

「あんだ、この女に舐め^{ニヤ}られてるわっ！」

喉を鳴らした子猫は、びくつと身を震わせ、両目をかっ^{ニヤ}と見開いた。

ふーっ、と猫そっくりに威嚇すると、喉を撫でる茜の手に猫パンチを繰り出し、払いのける。

「舐めんなよ……!!」

茜は「ぷっ」と嘔き出して、それでも謝った。

「御免……。でも、あたし、猫を飼いたいとずっと思ってたから……つい」

「だ〜か〜らっ！ おいらたちは、猫じゃねえって言ってるだろう！」

？支配頭脳？は苛々と、地団太を踏んだ。

懸念

？支配頭脳？に面会が叶い、光右衛門は次々と質問を投げかけ、工場を後に一同は再び二輪車の旅を続けた。

すっかり時刻は夕刻に近づき、空は緑色に染まっている。
緑色の夕空など、世之介は想像もしたこともなかった。

光右衛門は格乃進の操縦する二輪車の側車に収まり、ずっと押し黙ったまま、何事が真剣に考え込んでいる。

世之介は光右衛門の側に二輪車を近づけ、声を掛けた。

「なあ、爺さん……じゃねえ、光右衛門さん。そろそろ教えてくれてもいいだろう。何、深刻になってんだよ？」

光右衛門は「はっ」と顔を挙げ、目を瞬かせた。

「いや、すまん。つい、ぼんやりしておったようじゃ。あの工場がなぜ、気になるのか、教えて進ぜる」

咳払いして、光右衛門は説明を始めた。

「工場では微小機械による生産が行われていることは、目にしておるな。実は、微小機械を用いた生産技術は、地球でも以前に実施されたことがあったのじゃが、今は使用されておらぬ。地球では、とつくに禁じられている技術なのじゃよ」

話を聞いていた助三郎が、驚いたような声を上げる。

「それは、初耳です。わたしは工場で初めて目にしたものですから、地球でも行われたとは知りませんでした。しかし、なぜ禁じられておるのですか？」

光右衛門は頷き、目を細めた。

「微小機械は数万分の一以下という、分子の小ささの機械です。一つ一つの部品は単純な動作だけなのですが、数億、いや数兆という単位で集まり、あらゆる作業を実現するのです。しかし、重大な欠点がある！ 微小機械を制御する命令は、単位が原子に近づく^{プログラム}と、不確定性原理による誤命令^{バグ}が不可避なのです。もしも微小機械に新たな生産命令を与え、それが誤命令を引き起こした場合、爆嘯^{スタンビート}が起きる懸念がある」

横断幕

「爆嘯^{スタンビート}？ そりゃ、何だい」

世之介は問い返した。

「微小機械の、際限ない増殖です！ 周りのありとあらゆる物質を食いつくし、おのを増殖させ、あつという間に覆いつくす。実際、微小機械の爆嘯で、一つの惑星が丸ごと廃墟になった実例すらあります。番長星で使用されている微小機械は、ずっと同じ製品しか生産していないため、奇跡的に爆嘯は免れてきました。が、もしも、新たな製品を微小機械に生産させようと企む者がいたなら、爆嘯の危険は倍増します！」

格乃進は、険しい顔つきになった。

「新たな製品？ それは、もしかして」

光右衛門は大きく頷いた。

「そうです！ あの風祭なる賽博格！ この番長星で、最高度の技術が必要とされる賽博格がなぜ実現したのか不思議でしたが、微小機械が存在するなら、頷けます。微小機械ともに、賽博格処理を行うような命令を組んだ者がいるのでしょうか。戦闘賽博格が存在するなら、もっと進んだ技術の武器を微小機械に生産させようとするかもしれません。わしはこの番長星に、幕府転覆を企む悪人が密かに潜入しているのではと、疑っております」

それまで黙って光右衛門の長口舌を聞いていたイツパチが呟いた。

「そりゃ、大事^{おおい}でござんす！ まるで由比正雪の乱じゃねえですか！ それとも、天草の乱でげしょうか？」

光右衛門は暗い顔になった。

「【ツツパリ・ランド】に早く到着しないと……。手遅れにならないければ良いが！」

世之介は前方を見た。

真っ直ぐに続く道路の真ん中に、横断幕が掛かっている。

横断幕には「ここより暴走半島」とあった。

夜空

「これより暴走半島」と記された横断幕を通過して程なく、地平線にあつという間に太陽は沈み、深々とした藍色の夜空が広がった。

助三郎の説明によると、番長星の大気は分厚く、大気の成分は光の散乱が大きいため、真夜中になっても完全に暗くはならない。それに、番長星の夜空には月が昇っていた。

「月が見えらあ！」

世之介が思わず歓声を上げると、格乃進が含み笑いをして解説した。

「あれは、月ではない。番長星に到着した、最初の殖民船の光帆だ」
「光帆？」

世之介が尋ねると、格乃進は頷いた。

「そうだ、直径二百五十里（約一千キロ）もある、円形の帆なのだ。番長星に最初に到着した殖民星は、超空間航法ワープを採用する以前の型で、地球からレーザー光を受けて、光の圧力で推進する。その時の残りが、番長星の衛星軌道を周回して、夜を照らし出している訳だ。地球の月に比べれば、三分の一ほどの直径しかないが、反射能はアルベド一に近く、物凄く明るい。本来は昼間の太陽と同じくらい輝くはずだが、月と同じくらいの光量に抑えるため、表面をわざと汚して暗くしているのだ」

世之介は、格乃進の説明に納得した。

横断幕を通過してからは、家一軒、「コンビニ」便利店舗すら道路の両側には見えてこない。そろそろ今夜の宿を決めなくてはならない時刻だが、助三郎と格乃進の二人は、二輪車を同じ速度で走らせている。

世之介は、ちら、と隣を併走する茜を見やった。

茜は、明らかに疲労困憊した様子で、眠いのか、時折うとうと把ドル手を握んだまま座席で舟を漕いでいる。

助三郎の側車に乗っているイッパチは、すでに白河夜船で、がくりと顔を仰向け、大口を開けて、ごうごうと高鼾を掻いている。

二輪車の前照燈ヘッドライトのみが、道路を白々と切り裂いていた。

不思議と世之介は眠くならない。目は、ぱっちりと見開き、緊張感は一切、鈍っていない。

やはり？伝説のガ克蘭？のせいだろうか。ガ克蘭は、世之介の生理すら支配するのだろうか？

ふと、側鏡サイドミラーに目をやった世之介は、背後から数個の前照燈の光が瞬いているのに気付いた。前照燈はこちらへ向かって、ずんずん近づいてくる。

狂送団

ばらばらばら……ぐあああん……！

けたたましい騒音を撒き散らし、数台の二輪車、四輪車が集団となつて、猛烈な速度で接近してくる。

びくつ、と併走していた茜は目を見開き、慌てて背後を見やる。

茜の表情は、瞬間的に恐怖の色を浮かべる。

ミッド・マックス

「大変！ 狂送団だわ！」

「何だ、そりゃ？」

世之介は、茜の只ならぬ気配に、尋ねかけた。茜は唇を噛みしめ、早口に説明する。

「暴走半島のツツパリ・グループなの！ あいつら、あたしたちと違って、掟だとか、規律なんか一切合切、平気で無視する危険な奴らよ！ 縄張りを通る総ての二輪車や、四輪車に敵意を持っているの！ 追いつかれたら、何されるか判んない！」

世之介は茜の説明を聞いて、なぜだか、ひどく胸が高鳴るのを感じていた。

そう来なくちゃ！

「面白え……！」

世之介の呟きに、茜は呆れたように、あんどりと口を開けた。世之介の呑気さに苛ついたのであるうか、表情が真剣になった。

「面白いなんて、言ってられないわ！ あいつら、危険よ！ 超危険だわ！」

ぐわああああん！

怖ろしいほど大音量の騒音が、夜の路面に響き渡っている。

助三郎と格乃進は、二輪車の把手を握りしめ、表情は厳しく引き締まった。側車の光右衛門も、怖れの表情は欠片も見せず、眉を陰しくさせるだけである。

光右衛門の様子を目にし、改めて世之介は「この老人は何者なのだろう？」と思った。

ただの旅好きの隠居にしては、度胸が据わっているし、明らかに危険が接近しているにも関わらず、糞落ち着きに落ち着き払っている。

たとえ二人の賽博格による護衛があるとしても、考えられないほどの泰然とした様子である。

第一、賽博格を護衛にするなど、普通の老人では絶対に不可能だ……。

いったい光右衛門とは、どこの何者だ？

背後からの前照燈の光が、闇を切り裂き、世之介の顔を眩しく照らし出す。世之介は、それまでのまどろっこしい自問を忘れた。

狂送団が、ついに追いついてきたのだ。

得物

狂送団は、それまで世之介が番長星で目にした集団とはまるっきり、別の集団に属していた。

明らかに服装からも、違いは判る。

それまで番長星で目にした二輪車、四輪車の集団は、改造した学生服や、ツナギの作業服に派手な旗や幟を閃かせた連中ばかりだった。ところが、狂送団が身に着けているのは、鎧のように見える防護板^{テクター}や、肩当、脛まで達する長靴であった。

全員が何らかの武器を身につけている。

棍棒に弓矢、どうやら剣らしきもの、槍などである。弓矢の中には弩^{ボウ・ガン}らしき武器も見受けられる。極めて戦闘的だった。

ヘルメット^{ヘルメット}を被っている者もいた。防護帽は顔の辺りまで覆うもので、小さな覗き穴があつて、そこからジロリと剣呑な眼差しが、こちらを睨んでいる。

突き刺すような、あからさまな敵意が、世之介にはひしひしと感じられた。

ちい　　ん……！

一人の男が、手にした金属製の得物の先端を、路面に擦り付ける。路面に接触した刀と思しき武器の先端が、微かに接触すると、甲高い音を発して、閃々とした火花を散らした。

ちいいん……！
ちいいん……！

真似して、他の連中も同じように先端を路面に接触させる。身を危険なほど乗り出しているの、ほんの少しでも均^{バランス}衡を崩せば、あつという間に転落してしまうだろう。

が、威嚇する男たちは、世之介に自分たちの度胸を見せ付ける狙いがあつてか、壮んに示威行動を止める気配は皆無である。

すべて無言のままに行われている。

雄叫び

世之介には意外であった。今までの前例から、示威行動を取るまえに、何らかの挑発的な言動があると思っていたのである。

「オカマ野郎！」とか「アツカンベー」とか、そんな子供っぽい悪罵を浴びせるのかと思っていた。

だが、狂送団はそんな手間を掛けるほど呑気ではないのだろう。

「きああああっ！」

先頭の、全身に羽飾りをつけた、がっしりとした体格の男が、猿のような絶叫を長々と上げた。

「きいいいいいっ！」

「かああああっ！」

最初の雄叫びに呼応して、次々と狂送団の男たちから吠え声が上がる。

今ようやく気付いたのだが、狂送団には女は全然いない。すべて男ばかりだ。

ざっと見たところ、年齢は高めで、十代と思われる年頃の人間はいない。皆、逞しい身体つきを誇っている。

ざあっ、と狂送団の全員が武器を振り上げた。猿のような雄叫びを上げ、乗り物をぐんと接近させながら、武器を振り回す。

「格乃進！ 気をつけろっ！」
「おうっ！ 助三郎もなっ！」

助三郎と格乃進が、声を掛け合う。

光右衛門の頭上に一本の鉄棒が振り下ろされる。
が、格乃進は片腕を上げて、光右衛門を庇う。

がつき！ と格乃進の賽博格の腕が、振り下ろされた鉄棒を受け止める。

振り下ろしたのは、顔を真っ赤な塗料で染め上げた、半裸の男である。格乃進が鉄棒を腕で受け止め、平気な顔でいるのに、驚いた様子だ。顔にちらりと不審が浮かぶ。

格乃進はぐつと鉄棒を握りしめると、いきなり手前に引き寄せた。

鉄棒を振り下ろした男は「わっ！」とばかりに均衡を崩し、二輪車からずってんどうと大袈裟に転げ落ちる。

ぐるぐると路面を回転しながら、後方へ小さくなっていく。男の操縦していた二輪車は、誰も乗っていないまま、ふらふらと彷徨うように速度を落とし、がちゃんと大袈裟な音を立て、すっ転んだ。

蹴り

ぶうん、と音を立て、世之介に棍棒が殺到する。世之介は、ひよい、と首を竦めると、棍棒をやり過ごした。

「ばあああつ！」

棍棒を握っているのは、滑稽なほど太った大男で、乗っているのは危なっかしいほど小型の二輪車であった。大男の体重の、半分ほどしかないだろう。小さな車輪を支えるサスペンションは、大男の体重を受け止め、ぎりぎりまで縮んでいる。

大男は振り回した棍棒を、もう一度さつと構えなおし、ぐいつと把手を回して二輪車を急速に接近させてきた。どうあっても、世之介を叩き落とさねば気が済まないらしい。

待ち構えた世之介は、狙いを定めて足を挙げた。大男の小山のような土手っ腹に、渾身の力を込め、蹴りを入れる！

賽博格の格乃進を一撃で蹴り飛ばすほどの勢いが込められた世之介の必殺の蹴りは、大男の腹に、まともに命中していた。

ずしんっ！ と世之介の足首まで、大男の柔らかな脂肪に埋まる。

「ぐへえっ！」

奇妙な呻き声を上げ、大男の口から汚い涎が飛沫となって噴き上がる。

大男は乗っている二輪車もろとも、道路の外へ吹っ飛ばされている。

く。すでに蹴りが命中した瞬間から、意識は飛んでいる。白目を剥き出したまま、風船のように小さくなった。

ばちゃーんっ、と道路の横に広がっている田圃に、泥の飛沫が上がる。全速力で走っているため、あっという間に見えなくなった。

茜が背後を振り返って叫んだ。

「世之介さんっ！ 後ろっ！」

輸送車

茜の声に、世之介は振り向く。

巨大な輸送車^{トラック}が接近してくる。横幅は、二車線の道路をほぼ占領するほど巨大で、見上げる運転席は、まるで建物の三階ほどに相当している。

ぐああああんっ！

地響きとともに、巨大輸送車は押し掛かるように世之介の背後に接近する。夜目にも、輸送車のあちこちから鋭い鉄槍、剣山のような棘が突き出しているのが判る。

輸送車の前面には、巨大な丸い前照燈が威嚇するかのように光を投げかけていた。輸送車の屋根にも、何か動く影がある。

世之介は目を細めた。

と、ぐうーんっと注目する一角が、世之介の視界に拡大されて見えてくる。まるで双眼鏡を押し当てたかのような。多分、ガ克蘭によって、世之介の視覚が一時的に望遠に切り替わっているのかもしれない。

屋根の上に乗っているのは、全身に黒い羽根飾りをつけた、頭目らしき男である。身につけている甲冑は贅沢な造りだ。他の連中が薄汚れているのに対し、ピカピカに磨き上げられ、傷一つない。

男の右目に眼帯があった。残った左目で、男は薄笑いを浮かべて、辺りを傲然と見下ろしている。

世之介は一瞬にして、決意を固めていた。

こうなったら、あいつを仕留める！

ぐつと把手の梶棒アックスを緩めると、世之介はまっしぐらに巨大輸送車へと近づいていく。輸送車は前輪二対、後輪三対という、なんと前後合わせて十輪の車輪が轟々と路面を噛みしめている。

巨大な輸送車に併走した世之介は、二輪車から立ち上がった。

茜が悲鳴を上げる。

「世之介さん、何をするつもりなの？」

世之介は茜を見やり「へっ」と笑いかけた。全身の筋肉に力を込め、輸送車を見上げた。

やつ、とばかりに跳躍し、世之介は輸送車の側面に飛び上がる。側面には幾つかの突起が突き出し、手懸りとなる。腕の力のみで、世之介は素早く攀じ登っていった。

屋根に登った世之介は、猛烈な風に身体を斜めにして立ち上がった。

気配に、狂送団の頭目らしき男が振り返る。

「誰だ、てめえは？」

世之介はニヤリと笑いかけ、答えてやった。

「但馬世之介！ お前が狂送団の頭ヘッドらしいな……。勝負してやるよ！」

頭目は驚きに、左目を剥き出した。

舌刀

輸送車の屋根は、簡単な舞台のような構造になっている。木組みの床が延べられ、中央にどっしりとした椅子が床に直に据えられていた。

形からして、玉座だろう。床にはあちこち、食べ残しの容器やら、食いかけの果物、肉片、それに雑誌類が散乱し、とても玉座に似合うものとは思えない。番長星のいたるところで見られる、だらしなさが横溢していた。

頭目らしき男は、屋根の手摺に身をもたせかけていたが、世之介の声にギロリと残った左目を光らせた。ぐいつ、と唇がへの字に曲がり、肩を怒らせる。

「勝負、だと？ おめえ、正気か？」

頭目は、黒板を爪先で引掻くような軋み声の持ち主であった。聞いているだけで苛々してくる、悪声である。

年齢は世之介の見たところ、四十に手が届くくらい。がっちりとした身体つきに、皮膚には無数の傷跡が残っていた。真つ黒な鎧に、腰には太い腰帯ベルトをし、青竜刀のような武器をぶら下げている。

全身に纏う真つ黒な羽飾りが、猛烈な風にばたばたと音を立て踊っていた。

世之介は、わざと朗らかな声を上げて答えた。

「ああ、正気さ！ それとも、怖気づいたかな？」

世之介の舌刀に、頭目の顔色が夜目にも見る見る真つ赤に染まるのが判る。番長星では「怖気づいた」とか、「怖い」という台詞は絶対的な禁句であることを、世之介は悟っていた。

倫理観

案の定、頭目は冷静さを失った。さつと腰の刀を引き抜く。青白い刀身の光が、冴え冴えと世之介の目を射た。

一声「野郎！」と喚くと、頭目はだんつ、と床を蹴って宙に飛び上がる。両手で構えた刀を、拝み斬りに世之介に向け、振りかぶる。世之介は頭目の刀を、寸前で躲した。床に身を投げ、ごろごろと転がる。さつと立ち上がるところに、再び頭目の刃が殺到する。

しまった、武器を持っていない……。

何とか寸前で逃れたが、後先の考え無しに行動する自分の迂闊さに、世之介は内心むかつと臍^{ほそ}を噛む思いであった。

ガクランを身につける以前の世之介は、石橋を叩いても渡らないほどの慎重さで、愚図愚図とした煮え切らない性格であった。ところが、今の世之介は、完全に衝動的に行動する性格に変化している。頭目は中々の使い手であった。動きは素早く、間合いも正確である。世之介が何も得物を持っていないことに気付いたのだらう。左目に勝利の確信が浮かぶ。

なぜガクランは、助三郎と格乃進の二人の賽博格と戦ったときのように、世之介を加速状態にさせないのか？ あの状態になれば、こんな攻撃を躲すのは、百歳の老人や、赤ん坊を相手にする以上に簡単なのに。

そうだ！ それが理由だ！ 世之介は卒然と悟っていた。

ガクランは相手が賽博格^{サイボーグ}など、人間の力以上の敵の場合、世之介

に爆発的な体力と、加速状態を与える。多分、互角の立場で戦わせようとするのだろう。

だから逆に、明らかに人間相手の場合には、超人的な力を与えようとはしないのだ。奇妙な倫理観が、ガクランには備わっているようだった。

よし……！ 世之介は覚悟を決めた。

体捌きが肝心なのだ……。

助三郎の忠告が蘇る。

世之介は息を詰め、全身の神経を頭目が握る刃に集中させた。そうだ、学問所で習った、剣道の奥義を思い出すのだ……！

頭目は大きく振りかぶると、真っ向微塵に世之介に刀を振り下ろした。全身の力が込められた、必殺の気合であった。

世之介は動いた！

真剣白刃取り

「うおっ！」

頭目は驚きに身を仰け反らせる。

「ま、まさかつ！」

振り下ろした刃を引こうとするが、びくりとも動かない。世之介を睨みつける頭目の左目に、焦りが浮かぶ。

世之介の両手の掌がぴたりと合わさり、頭目の刃を受け止めていた。

真剣白刃取りである！

学問所の剣道の授業で、一度だけ高名な師範代が披露してくれたことがあった。世之介はそれを思い出していた。

まさか、やれるとは思っていなかったが、他に方法はなかった。

渾身の力を込め、頭目が握る刀の刀身を掌に押しつけている。それだけでなく、頭目が刀を奪い返そうと、押したり引いたりする動きを素早く察知し、力を逸らす必要がある。

どうすればいいんだ……。

白刃取りには成功したが、この後の処置に困る。もし刀に押しつけている掌の片一方だけに力が抜けたり、強く押しつけすぎたら、忽ちにして世之介の手は血だらけになり、あっという間に逆襲を食うだろう。

びゅうびゅうと吹きさらしの屋根に吹き付ける風が、世之介の耳朶を打つ。まさに千日手といっていい状況だ。

はあはあと頭目の息が荒い。武器を奪い返そうと、無理な力を使ってしまった結果だ。

世之介は声を絞り出し、話し掛けた。

「諦めろ……。その手を離せ！」

ひくひくと頭目の唇が動いた。歯を剥き出し、敵意を顕わにする。
「だ、誰がてめえなんかに……！　それよっか、おめえのほう危険えぜ！　今に、手下たちがここに来て、おめえを一寸刻みに切り刻んでやらあ！」

「それは、無理な話だな！　お前の手下は、全部われらが始末した！」

思わぬ声に、頭目はギクリと顔を上げた。

始末

世之介は背後から聞こえてきた声が、助三郎のものであることを認めていた。

「助三郎っ！」

助三郎の声には、驚きを感じとれた。

「世之介さん。あんたのしているのは、白刃取りかね？　よくもそんな芸当が、やれたものだ。俺だって、やろうと思ってもできない技だよ」

「くくっ！」

頭目はぱつと刀から手を離し、さっと身を翻す。ただっ、と屋根の先頭あたりに駆け寄ると、そのまま蹲った。

素早い動きで床の一部を持ち上げる。

撥ね上げ戸になっていたのだ！

頭目はするりと跳ね上げ戸に身を滑り込ませると、ぱたりと戸を閉めてしまった。

がくりと膝を突き、世之介は後ろを振り返る。助三郎の顔と、格乃進の顔が覗いていた。

格乃進は、ニヤリと笑いかけた。

「ちょっと手間取ったが、狂送団の連中は全員どうにか始末した。今頃、畑や田圃の中で伸びていることだろう」

世之介は「あつ」と気がつく。

「連中を始末したのはいいが、茜と光右衛門の爺さん、それにIPPACHIはどうなったんだ？ 爺さんとIPPACHIは、あんたらの二輪車の側車に乗っていたんだらう？」

「心配ない。あれを見る」

格乃進は道路を指差す。指された方向を見ると、茜の二輪車の前照燈が輝いていて、その後ろに三台の二輪車が誰も操縦していないのに、勝手に走っていた。

助三郎が説明した。

「番長星の二輪車には、追従機構スレイブが備わっている。茜さんの二輪車に、残りの二輪車を追従させておいたから、茜さんが運転している限り、ああして従ってくる。結構、便利だらう？ 世之介さんの二輪車も追従させておいたから、取りに引返すことも無い」

「そうか」

世之介は短く答えると、頭目の武器をがらりと床に放り投げる。気がつくと、全身から滝のように汗が流れ落ちていた。

入口

「そいつは良かった……。後は、あいつ……狂送団の頭目の始末だな」

鈍い疲労による苦痛が、世之介の頭の天辺から、足の爪先まで浸っている。しかし、世之介の闘志は、一欠片も鈍ってはいない。格乃進が心配そうな表情になった。

「大丈夫かね？ 相当に疲れているようだが。頭目は、我らに任せればいいぞ」

世之介は「厭だ！」と叫んで立ち上がる。

闘志が再び世之介の力を奮い立たせた。一旦は認めた敵を、あっさり見逃すなど、考えられなかった。

頭目が消えた床に膝まづくと、指先を手懸りに引っ掛け、持ち上げようとする。

固い！

びくとも動かない。恐らく、鍵を内部から掛けているのだ。

「どきなさい。俺がやるう」

助三郎が呟くと、世之介をどかせ、天板の僅かな隙間に、両手の爪先を引っ掛けた。

一声「むん！」と唸ると、天板の蝶番がメキメキと音を立てる。もう一度、助三郎が力を入れると、バキンと乾いた音を立て、弾けとんだ。

ぐわらりと、助三郎は天板を放り投げる。

深々とした闇を世之介と、二人の賽博格が覗き込む。

「誰から行くかね？」

助三郎の言葉に、世之介は勇んで答える。

「俺だ！」

世之介は穴に飛び込んだ！

唐変木

穴の内部は狭い通路になっている。

真っ暗で、何も見えない。手探りで両側の通路の壁を伝いながら、世之介は遮二無二、前進した。

ふと、指先が扉の取っ手のようなものを掴んでいた。世之介はぐいつと捻じると、脱兎のごとく、内部に飛び込んでいた。

「きゃあっ！」

何か柔らかいものに世之介は躓いていた。同時に上がる、鋭い悲鳴。

な、なんだ？

世之介はうろたえていた。鼻先に、きつい香水の香りが漂う。ぱちり、と音がして、さっと辺りに薄桃色がかつた光が満ちた。照明が点つたのだ。

「何よ、あんた！」

「うわっ！」

驚きに世之介は飛びのいていた。

目の前に、数人の女たちが群がっている。全員、肌も頭わな衣装を纏い、柔らかそうな敷布や、布団に寝そべっている。

全員が眠そうな表情を浮かべていた。が、目の前に現れた世之介の存在を認め、怒りに変わる。

「誰よ、この唐変木！ ターちゃんの留守に、押し入ろうったって、許さないからね！」

「タ、タ、ターちゃん？」

世之介は背中を壁に押し付けた。

頭目の輸送車の内部に女がいる！

それも沢山！

女たち

一人の女が立ち上がった。背が高く、金髪を高々と結い上げ、僅かな布きれの衣装を纏っている。胸元は大きく開き、盛り上がった乳房が零れ落ちそうだ。

「そうよ、拓郎ちゃんは、あたしたちの旦那様、それに狂送団の頭目だもん！」

もう一人の、こっちは小柄で、どこをとっても丸っこい身体つきの女が叫んだ。

「あんた、新顔ね。ターちゃんが留守だからって、忍び込んだんだろうけど、あたしたちは絶対、他の男には身体を任せるような軽い女なんかじゃないからね！ さ、とっとと出て行くんだ！」

やや年増の、長い髪をひつつめにした女が低い声を押し出す。全員凝視に、世之介の反発心が、むらむらと湧き上がる。

「俺は狂送団なんかじゃねえ！ おめえらの頭目と勝負しに来たんだ！ 野郎、俺に敵わないと怖気づいて、さっさとトンスラしやがったから、追いかけてきたんだ！」

「ターちゃんが……あんたから、逃げた？」

ぼつり、と最初に叫び声を上げた女が呟く。世之介は苛々と答えた。

「ああ、あの野郎、とんだ卑怯者だ。俺に武器を取り上げられて、スタコラ逃げ出しやがった……」

そこまで答えて、世之介は言葉を途切れさせた。女たちが奇妙な表情を浮かべ、じりじりと近づいてくる。

「な、何だよ、おめえら……」

「あんだ、ターちゃんに勝ったんだね……。て、ことは、あんだが新しい狂送団の頭目って順番だわ」

年嵩の女が、目をキラキラさせて近寄ってくる。両手が伸ばされ、世之介の顎にぴとりと触れた。

「わっ！ 寄るな！」

世之介は焦っていた。何だか、酷くトンデモないことが起きそうな予感がする。

旦那様！

「うふん……。あんたって、可愛い！」

まるまっちい身体つきの、肉感的な女が、身体を世之介に押しつけてくる。あちこちから手が伸ばされ、世之介の全身をまさぐる。

「今夜から、あんたがあたいらの、旦那様よう……！」

世之介は仰天した。

「何で、そんな馬鹿な話になるんだ！」

「だってえ」と、両目をいつもびっくりさせて見開いているような女が唇を尖らせた。

「それが？ 掟？ だもん！ 喧嘩の一番強い男が、狂送団の頭目で、あたいらの旦那様って掟に決まってるんだもん！」

「ねえ、あたいら、可愛がつてえ」

「きゃあ！」と、今度は黄色い歓声を発し、女たちが一斉に群がってきた。

「わあ！」と世之介は思い切り両手をつ突っ張らせ、女たちの柔らかな身体を押しやった。

ぜいぜい、はあはあと息を荒げ、世之介は大声で喚いた。

「そんな勝手な話、俺は知らねえっ！ 兎に角、頭目の……拓郎か？ そいつは、どこにいやがんだ！ 何としても、決着をつけてやる！」

世之介の反応が意外だったのだろう。女たちは吃驚したかのように、ポカンと口を開け、まじまじと世之介の顔を見上げている。

「拓郎ちゃんだったら、多分、運転席じゃない？ 一人になりたいときは、いつもあそこで過ごすから」

詰まらなそうに、大柄な女が答えた。

世之介は頷いた。

「運転席か。どう行けばいいんだ？」

「あっち」と、痩せた女が、長い指先を通路の奥へ指し示す。世之介は通路を覗き込んだ。部屋の明かりに、僅かに通路の先が見えている。

扉があつた。その先が運転席なのだろう。

世之介が部屋を飛び出そうとすると、女たちのリーダー格らしき年長の女が袖を掴んで引き止める。

「ねえ、行っちゃうの？ あたいたちを、どうすんのよ？」

「知るかつ！」

女の手を振り払い、世之介は突進した。

噉り泣き

足音を忍ばせ、世之介は通路をじりじりと進んでいく。目の前にあるのは、運転席に続く扉である。背後に、女たちの部屋からの光が零れ、何とか形を見分けることは可能だ。

ちら、と振り返ると、扉を開けて、女たちが首を突き出し、こちらを覗き込んでいる。

世之介と視線が合うと、どういづつもりか、ニコリと笑顔になって、壮んに手を振っている。一人の娘が、口だけで「ガンバレ！」と声援を送っていた。

そこへ、助三郎と格乃進が音も立てず、するりと天井の入口から降りてくる。

女たちは、二人の闖入に、ぎくりとなった。慌てて世之介は唇に指を押し当て、静かにするよう合図する。

助三郎は「承知した」というように、無言で頷いた。

すると二人が近づき、助三郎が顔を近寄せ、小声で「どうしたのだ？」と囁いてきた。世之介は扉を指し示した。

「ここに頭目の奴が隠れているらしい」

「そうか！」と、助三郎は小声で囁き返す。

世之介は耳を扉に押し当てた。二人も、世之介と同じように、扉に耳を押し当てる。

何か聞こえる。噉り泣きだ！

「ママ……ママ……！ 僕ちゃん、とっても怖い男に虐められたんだ……！ 悔しいよお……！」

すると何か宥めるような、低い声が応じる。こちらは、よく聞こえない。

世之介と、二人の賽博格は顔を見合わせた。

助三郎と格乃進は、口をへの字に曲げ、妙な表情で首を捻っている。

「おい、まさか……？」

格乃進が酸っぱいものを、口一杯に頬ばったような顔つきになって呟いた。助三郎は頷いた。

「間違いない！ あの頭目の声だ。声紋が一致している！」

世之介は扉に覗き窓があることに気付いた。蓋があり、滑らせるようになっている。指先で覗き蓋をすりと押し開けると、四角い小さな窓から黄色い光が零れてくる。

世之介は窓に目を押し当てた。

母親

運転席は広々としている。

大きな窓に、運転席と様々な計器が並ぶダッシュ・ボード。運転は無人で行っていると見え、席には誰も座っていない。

運転席の後ろに、数人が掛けられるほどの巨大な長椅子があつて、そこは小さな居間ほどはあつた。

天井からは、きらきらと輝くシャンデリアが垂れ下がり、車の震動に微かに左右に揺れている。

長椅子には、頭目がいた。頭目を優しく抱きかかえるように、母親らしき女が背中を見せて座っている。

頭目は母親の膝に顔を押し付けている。母親は頭目の数倍ほどの巨躯で、真っ黒な衣装を纏っている。まるで、打ち上げられた鯨である。

頭目は噉り泣きながら、母親に訴えている。

「僕ね、とっても良い子にしてたんだよ！ 女たちも、全員平等に愛してたし、手下にだって舐められないよう、メンチを切っていたし……なのに、なんで、あいつは僕を虐めるの？ 悔しいよう……！」

「おえっ！」と世之介の口中に、苦いものが込み上げてきそうになる。

明らかに四十代後半と見える頭目が、まるで小さな子供のように母親に甘えているのを見るのは、ぞっとする眺めである。

母親は頷きながら、頭目に話し掛ける。

「そうなの。悪い奴だねえ。そいつは、どんな男だったんだい？」
「若い奴さ！ ひよろひよろの、優男でさ。ところが、とっても強いんだよ！ 真っ赤なガクランを着ていて、背中に？ 男？ って刺繍がしていたよ！」

頭目の説明に、母親はギクリと身を強張らせた。

「何だつて？ ？ 男？ の刺繍がしてあった、真っ赤なガクランって言ったね？」

「そうさ、どうしたのママ？」

頭目は母親の態度の急変に、上体を持ち上げ顔を上げた。

無線

世之介は驚いた。

頭目の、右目の眼帯がない！

しかも、右目はパツチリと見開いている。

片目ではなかったのだ！

つまり、片目に見せかけ、歴戦の勇士に見せかけていたのだろう。

母親はぐつと顔を上げ、何か考え込んでいる様子だ。角度が変わり、世之介はハッキリと、頭目の母親の横顔を見ることができた。

ぐつと張り出した獅子っ鼻。真っ黒な眉毛は太く、ぴんと急角度に持ち上がっている。

分厚い唇に、巨大な顎の持ち主で、食い縛った歯は碁石のように大きい。岩だろうが鉄だろうが、平気で噛み砕いてしまいそうだ。

それに、ドギツイ化粧！

まるで、ありったけの化粧品を顔中に塗りたくったかのようなのである。

「それは？伝説のガ克蘭？ってやつさ！ そのガ克蘭を身につけると、信じられないような力を得ることができると噂だ。あくまで噂だと思っていたけど、本当に存在したんだねえ……」

母親は立ち上がる。が、巨大な身体つきのため、完全に立ち上がることはできず、中腰の体勢だ。その中腰のまま、運転席へと身体を捻じ込むように移動して座り込んだ。

運転席で、何か操作している。

マイクを握っている。ということは、どこかへ送信するのか？
母親は、ぐいっとマイクを握りしめ、話し掛けた。

「こちら？ビッグ・バッド・ママ？。緊急の要件あり！　？ウラバン？応答願います！」

？ウラバン？！

世之介は、二人の賽博格^{サイボーグ}と顔を見合わせた。
助三郎と格乃進は、真剣な表情になっている。

「こちら？ウラバン？。何だね、緊急の要件とは？」

拡声器^{スピーカー}から、ざらざらした返答が聞こえてくる。受信状態があまり良くなく、声の調子はよく判らない。母親は噛み付くようにマイクに話し掛けた。

「？伝説のガ克蘭？が出現しました！　うちの拓郎ちゃんが、そいつに襲われ、瀕死の重傷を負ってます！　仇を討ってくださいますか？」

瀕死の重傷だって？

世之介は、あまりに大袈裟な母親の表現に、真底あきれ果てた。

ようし、それなら本当に瀕死の重傷にしてやろうじゃないか！

世之介はドアの取っ手を握りしめた。

格闘

思い切り扉を押し開くと、その音に頭目と母親がギョツとなって世之介に顔をねじ向ける。

「ママ！ こいつだ！ こいつが、僕ちゃんを虐めたんだ！」

頭目が口を一杯に開き、目をまん丸に見開いて喚いた。顔には恐怖の表情が貼りつき、血の気は引いて、真っ青になっている。

運転席から身体を振り、母親は憤怒の表情を顕し、世之介を睨みつけた。母親の怒りの表情のほうが、頭目より数十倍も迫力があつた。

「お前かい？ あたしの可愛い拓郎ちゃんを虐めたのは！ 許さないよ！」

驚くほど身軽に、母親は一挙動で運転席から飛び出してきた。ぱつと居間に飛び降り、がばつと両足を開き、身構える。

「そつちから仕掛けたんだろう？ 売られた喧嘩は、買うのが筋つてもんだ！」

世之介の返答に、母親は益々かつかと熾き火のように顔色を燃え上がらせた。

化粧をたっぷり塗りたくっているのに関わらず、どす黒く鬱血した顔は、まるで仁王である。いや、むしろ歌舞伎の隈取のようで、凄い迫力だ！

頭目は、すでに運転席へ避難して、ぶるぶるガタガタ震えて隠れ

ている。

真っ黒な衣装を身に纏う母親の姿は、まるで大猩猩^{ゴリラ}そっくりである。母親は大猩猩々そのもののように大口を開け、一声がおーと吠え立てると、両腕を伸ばして世之介に掴みかかってきた。

母親の両手がぎりぎり世之介の首根っこを掴み、猛烈な速さで振り回す。ただだつ、と両足が動いて、世之介の背中を、運転席の壁に叩き付けた。

衝撃に、世之介は息が詰まった。

「死ねえ……！」

ぐいぐいと母親は両手を使って、世之介の首を締め付ける。世之介の両足の爪先が、床から浮き上がった。頸動脈が圧迫され、どこかんと血流が頭の内部で反響している。

必死の努力で、世之介は足を持ち上げ、ぐつと力を込めると、蹴り上げた。

梶棒

「うわあっ！」

母親の巨大な身体は、一蹴りで反対側の壁へと叩きつけられる。どすん、と大きな音が響き、天井のシャンデリアがチリチリと音を立て、派手に揺れた。

そこへ、二人の賽博格が飛び込んでくる。

「待て、それまで！　こんな狭い所で暴れるのは危ないぞ！」

助三郎が大きく両手を広げ、制止する。

母親は、ぐいっと二人に顔をねじ向けた。

「なあんだい、また新手かい？」

格乃進は穏やかに話し掛ける。

「われわれは、旅の者だ。走っていたところ、いきなり襲われ、やむなく反撃した。だが、それは本意ではない。われらは【ツツパリ・ランド】の？ウラバン？とやらの非常に興味を持っている。そなたが？ウラバン？と懇意なら、教えて欲しい。いったい？ウラバン？とは、何者なのだ？」

ひくひくと母親の唇が痙攣した。

「？ウラバン？の正体を知りたかったら、【ツツパリ・ランド】へ行くこった！　しかし、生きて帰れると思うなよ！　？ウラバン？は、あたしらの味方さ！　あたしが連絡したから、あんたらは？ウ

ラバン？にやつつけられる手筈になってるんだ！ いい気味さ」

運転席から頭目が叫ぶ。

「ママ！ その二人は、もっと手強いよ！ きつと賽博格なんだ！」
「何っ！」

母親は驚きの表情を浮かべ、頭目に尋ね返した。

「本当かい？ その二人が賽博格ってのは」
頭目は震えながら答えた。

「そうさ！ 隆志って？ウラバン？の手下が、そいつらのことを報告しているんだ。賽博格相手じゃ、いくらママだって敵わない。ねえ、逃げようよ！」

「くくくっ！」

母親は、ぐつと睨み返すと、さつと運転席に立ち戻る。

一声「おさらばだよ！」と叫ぶと、ぐいつと手元の梶棒レバーを力一杯引いた。

がくん、と衝撃が走り、目の前の運転席が出し抜けに離れていく。輸送車の前部分の接続を切断したのだ。

見る見る先頭部分が後部と離れ、前方へと小さくなっていった。世之介の立っている後部には動力源がなく、従って、どう対処することもできない。

三人は呆然と遠ざかる先頭部分を見送っていた。

暗闇

前部の、牽引する部分が離れた。

世之介の立っている後部車両は、惰性でいくらか進んでいたが、やがて当然のごとく停止した。

茜が全員の二輪車を引き連れ、止まった巨大な輸送車の後部に近づいてくる。茜が二輪車を停車させると、他の三台の二輪車も同じように静かに停まった。

格乃進の二輪車に接続されている側車から、光右衛門がゆったりと杖を片手に立ち上がった。

光右衛門は世之介の顔を見上げ、眉を顰め、心配そうな表情を浮かべた。茜は世之介に向かって、声を張り上げる。

「ねえ、何があつたの？」

世之介は手を口に当て、叫び返した。

「頭目がいたんだが、逃げられちゃった！　ちよっと待ってる……」

地面に飛び降りる。世之介の二輪車は、大人しく待っていてくれた。素早く跨る世之介に、茜は呆れたように声を掛けた。

「ちよっと、どこ行くつもり？」

世之介は怒鳴る。

「あいつを追いかける！　逃がしちゃおけねえ！」

茜は二輪車から飛び降りて、把手を握る世之介の腕を上から押さえた。

「待ちなさいよ！ あんた、ひどく疲れた顔をしているわ。少し休憩しなくちゃ」

さつと助三郎と格乃進が輸送車から飛び降りてくる。助三郎は茜の言葉に全面的に同意した。

「さよう。世之介さんは、自分では気付かないだろうが、ひどい疲労をしている。無理をすると、身体に悪い」

世之介は茜の言葉に、側鏡を覗き込んだ。鏡の向こうから、目の下に黒々とパンダ隈を作っている自分の顔が映っている。

成る程、確かに疲れているようだ。

だが、関係ない！ 世之介は意地になっていた。

「煩せえっ！ 俺は何があっても、奴を追いつめてやるんだ！ 舐められて堪るか！」

叫ぶ世之介だが、不意に視界がぐらっと揺れるのを感じる。側の茜の顔が、近づいたり、遠ざかる。

茜の背後から世之介の顔を覗き込む光右衛門の表情が、さらに厳しさを加え、憂慮を浮かべた。

なんだ、何がどうしたんだ？

世之介は狼狽した。

ぐおおおっ！ と、鼾が聞こえてきた。

見ると、助三郎の二輪車の側車で、イッパチがこの騒ぎの中、全く目を覚まさず、お気楽な顔を仰向け、爆睡しているところだった。

こいつめ……。

世之介は呆れてイッパチの鼾に聞き入っていた。

ぐおおおっ！

ぐおおおっ！

イッパチの鼾は、小さくなったり、大きくなったりしている。聞いていると、何だか世之介まで眠くなる。

ぶるっ、と世之介は首を振った。

寝ていられるかつ！

が、まるで眠りの妖精による棍棒の一撃のように、世之介に睡魔が襲い掛かる。二輪車の棍棒を握りしめる手から力が抜け、ぐらりと上体が泳ぐ。

「世之介さん！」

茜の悲鳴が、遙か遠くから聞こえた……ようだった。光右衛門が叫ぶ。

「いかん！ 気を失いそうじゃ……！」

足元の地面が、なぜかぐいぐいと世之介の視界に近づいてくる。

世之介には、近づく路面が、とても愛しいものに思っていた。

暗闇が、世之介を優しく抱きとめた。

目覚め

眩しい光に、世之介は目を瞬かせた。

がばり、と起き上がると、IPPACHIの香気そうな顔が近々と覗き込んでいる。

IPPACHIの杏菊紹偉童アントロイドの顔が綻んだ。

「よかった、若旦那がお目覚めでござんすよ！」

「おお」と応えがあり、助三郎が上から覗き込んでくる。助三郎の背後には格乃進の顔も見えた。

助三郎は世之介の顔を確認して、「うむ」と頷いた。

「血色が良くなっている。一晩、ぐっすり眠ったのが良かったのだ」
格乃進も口を開いた。

「さよう、世之介さんの？伝説のガクラン？は、確かに爆発的な体力を与えるものだが、同時に疲労も凄まじく蓄積する。あのまま無理をしていたら大変な事態になっていたな」

「一晩……？」

世之介は呟くと、周りをきよろきよろ見回した。天井があり、壁が周囲を取り囲んでいる。

つまりは、部屋だ。上体を起こすと、自分が柔らかな寝具に寝かされていたことに気付く。

壁には小さな窓があり、朝の光が差し込んでいた。壁一面には、べたべたと女性の写真が飾られている。ほとんどが水着で、中には水着すら身につけていない……つまりはヌードの写真すらあった。

部屋の隅には、刀剣や、棍棒、弩などが乱雑に置かれ、何着もの

服が、乱雑に脱ぎ散らかされている。床には一面、食べ物の容器が散乱している。見るからに薄汚いこの部屋で、一晩も過ごしたかと思つと、やりきれない。

世之介の顔色を見て、 IPPACH はすまなそうな表情になった。

「どうも、こんなところに若旦那を寝かせるなんて、気が進まなかつたんでござんすが、他に空いている部屋がなかつたんでやんす。ここは狂送団の、頭目が使っていた部屋なんでござんすよ」

そうか、狂送団の頭目の部屋だったのか。世之介は腑に落ちた。

「世之介さんが目を覚ましたの？」

黄色い女の歓声が、部屋を満たした。

なんだろうと、そちらを見ると、部屋の扉が開け放たれ、そこから頭目の女たちが、興奮した様子で覗き込んできた。

世之介の目と合うと、全員きやつきやと手を振つて、満面の笑みを見せている。何と、世之介に向かって投げキスを送っている娘もいた。

ヨノちゃん！？

「な、何だあ？」

世之介は叫んでいた。イッパチはニタニタと下卑た笑いを浮かべている。

「狂送団の頭目の奥さんたちでげすよ。しかし頭目を世之介の若旦那が懲らしめたので、今は若旦那がご主人つてことに……。ヒヒヒ！ 若旦那……おモテになりますねえ」

「ば……馬鹿っ！」

世之介の顔に、かっとな血が昇る。

しかし女たちは、まるで世之介の当惑にお構いなしで、どやどやと騒がしく部屋に踏み込んで、あっという間に周りを取り囲んだ。口々に騒がしく話し掛ける。

「あんた、世之介さんって、名前なのね！」

「世之介さんじゃ、堅苦しいわ。これからヨノちゃんって呼ぼうかしら」

「あっ！ ヨノちゃんって、可愛いっ！ 絶対、ヨノちゃんでしょう！」

「ねえ、ヨノちゃん、これからどうするの？ あたいたちと、ベッドに一緒に入る？」

「きゃああっ！ 今の大胆！ でも、ワクワクだわ……」

世之介は苛々してきた。

「うるさあ いっ！ 少しは静かにしたらどうだっ！」

力一杯、声を張り上げる。

女たちは毒気を抜かれ、目をパチクリさせている。

「説明してくれ……。いつたい、何が、どうなっているっていうんだ？」

世之介の質問に、年長の女が、当然とばかりに捲し立てた。

「だって昨夜、あんたが前の頭目の拓郎をやっつけたんでしょ？
つまりは、タイマン勝負に勝った、ってことよね。だから、あたし
たち、あんたを新しい、狂送団の頭目として迎えるって訳。当然、
あたしたちは、新しい頭目のスケって訳だから……」

ところどころ、理解できない単語が挟まれているが、それでもじ
わじわと、世之介の脳裏に女たちの言葉の真意が沁み込んできた。

頭目のスケ

説明をした女は、言葉を切ると、実に色っぽい表情を浮かべる。

「あたいら、全員、あんたのスケなんだからね……。平等に愛してくれるって約束しないと承知しないから！」

ずりつ、と世之介は寝具の上で後じさる。

「おい……。まさか、そんなこと……？」

「何がそんなことよっ！」

怒りを込めた声は、茜のものだった。

ぎくりとそちらを見ると、茜が部屋で腕を組み、軽蔑ありありの視線で、世之介を睨んでいる。

女たちは茜に見せ付けるように世之介の周囲に集まると、腕を回したり、身体を押し付けてきた。

目のパッチリとした、小柄な女が茜に向かって、挑みかかるような口調で叫んだ。

「何よ、あんた！ あたいら今日から、ヨノちんの女なんだからね！ それとも、あんたも、ヨノちんのスケの一人に加わりたいの？」

茜は、完熟トマトのように真っ赤になった。

世之介は女たちの腕を振り払うと、寝具から飛び降りた。指を上げ、取り囲んでいた女たちに命令する。

「いいか、良く聞け！ 俺はそんな与太話、金輪際、御免だからな！ 冗談じゃねえ……お前らの面倒なんか見られるかつ！」

「ヨノちゃん……」

一人の女が呼びかける。世之介は、ぶんぶんと何度も首を振った。
「そのヨノちゃんってのも止めろ！ 俺には但馬世之介って名前があるんだ！」

怒りに任せ、世之介はどすどすと足音を立て、部屋を飛び出した。

団員

「お早う御座いますっ！」

部屋を飛び出し、輸送車の後部の階段から外へ踏み出すと、出し抜けに大勢の男の声に出迎えられる。

眩しい朝の光の中、昨夜の狂送団の団員メンバーがずらりと勢ぞろいし、世之介を待ち受けていた。

世之介は、思わず戦いの構えになる。

「なんだ、てめえら、やるのか？」

拳を握りしめる世之介に、昨夜蹴り飛ばした海象セイウチのように太った男が、慌てて手を振って話し掛けた。

「ちっ、違いますって！ あっしら、新しい頭目に、朝のご挨拶をしにきただけで……」

意外な海象男の言葉に、世之介はポカンと全身が弛緩した。ダラリと口も開けっぱなしになる。

ようやく、言葉を振り絞って訊き返す。

「新しい頭目？」

「そうです。あんたが、新しい頭目ってことになりましたんで」「俺がつ？」

世之介は驚きに仰け反った。

「何で、そんな無茶苦茶な話になるんだ！ 俺は絶対、断固として、何が何でも、金輪際、そんな面倒臭いことは御免だからな！」

海象男は揉み手をして、話し掛ける。満面に作り笑いを浮かべ、必死に愛想を振りまいている。

「だって、世之介さんは昨夜、拓郎さんをやっつけたじゃないですか！ だから、世之介さんが、今では狂送団の新しい頭目になったんですよ！ ねえ、うんと仰って下さい。このままじゃ、あつしら、どうしていいか、判ないんで……」

世之介はブスリと唇をひん曲げ、肩を竦めた。

「お前ら、今まで狂送団だったので、道行く連中を襲っていたんだろ？ だったら、それを続けるなり、厭なら解散するなり、勝手にやればいいだろう。俺は知らねえ！ 第一、俺は【ツツパリ・ランド】を目指すって目的があるんだ。お前らなんかの、頭目など、やってられっか！」

望遠鏡

「【ツツパリ・ランド】！」

海象男以下、狂送団の全員が、目を輝かせた。

「頭目がそこを目指すってことなら、あつしらも、ご一緒いたしませんぞ！　そうかあ……頭目が【ツツパリ・ランド】をねえ……」

「ヨノちん【ツツパリ・ランド】に行くの？」

背後から声が振ってきて、振り返ると、さっきの女たちが顔を揃えて、出口近くの階段に犇いていた。

「わあ！　あたいらも一度、行って見たいと思ってたんだ！　素敵、素敵！」

きゃあきゃあと騒がしく階段を駆け下り、世之介の周りで飛び跳ねた。

助三郎、格乃進、茜、 IPPACHI の順で輸送車から外へ出てきた。

その顔ぶれを見て、世之介は首をかしげた。

助三郎に向け、尋ねかける。

「あの爺さんの姿が、見えねえようだが」

助三郎は「爺さん」という言葉に、一瞬むかつと眉を顰めたが、それでも精一杯の忍耐力を示して頷いた。

「ご隠居なら、朝早くからあそこで……」と、指を挙げ、道路の彼方を指し示す。

輸送車からかなり離れた道路の真ん中で、光右衛門がぼつりと立

っていた。腕を上げ、何か顔に小さな筒を押し当てている。

世之介は太股に歩いて近づき、光右衛門に向け、話し掛けた。

「朝から、何やってるんだい？ 爺さん」

光右衛門は世之介の言葉に振り向き、につこりと笑顔になった。手に持っていた筒を世之介に向ける。筒の先端は、レンズになっていた。

「これで、向こうを見ていたところです」

答えながら、筒を世之介に手渡す。

光右衛門の持っていたのは、電子走査望遠鏡らしい。祖先の光学望遠鏡とは、機能は同じでも、算盤とコンピューターほどにも性能に開きがある。

世之介は、光右衛門の見ていた方向に望遠鏡を向けた。

地平線近くに、何かゴチャゴチャとした建物の群れが見えている。距離が開きすぎているため、空気の揺らめきで、細部はよく判らない。世之介は調節輪を手探りし、映像に補正を加えた。

不意に画面がクツキリと確定した。内部のコンピューターが、レンズに捉えた映像に補正を施し、空気の揺らめきを取り去ったのだ。

色とりどりの建物が立ち並び、背後に大きな岩山が聳えている。手前に何か門のようなものがあり、そこに下手糞な字で、何か書いてあった。

望遠鏡を目から引き離すと、世之介は光右衛門を見詰めた。

「あれが……？」

光右衛門は大きく頷いた。

「そうです。あれが【ツツパリ・ランド】なのです！」

道路

世之介は二輪車に跨り、どこまでも真っ直ぐ伸びる道路を、ひた走りに走っている。

いよいよ彼方に大きく【ツツパリ・ランド】が見えてきた！

今までは単なる名前だけに過ぎなかったのだが、やっと目の前に現れたことにより、世之介は何か重苦しい気持ちから解放されたような気分であつた。

しかし……。

二輪車の側鏡を覗き込んで、世之介は内心、苦りきっていた。

結局、狂送団の全員と、以前の頭目 拓郎の女たちが世之介の後を従いてくる展開になってしまったのである。

輸送車の住居部分には動力源がないため、狂送団の全員が二輪車に引き綱ロープをつけ、牽引している。その様子はまるで西部劇の幌馬車ビッグ・トレイル隊である。

女たちは住居部分に集まり、あちこちの窓から顔を突き出し、風に吹かれて呑気そうな表情を浮かべている。中には引き綱を繋いでいる狂送団の仲間と、楽しげに談笑している女もいた。

世之介の隣には、いつものように茜が自分の二輪車を運転している。

が、茜は何が面白くないのか、朝から一切、世之介とは口を利こうとはしない。むすつ、と押し黙り、世之介が話しかけても、プライと横を向いて知らん顔を決め込んでいる。

まったく、女つてのは判らない……。

茜のそんな様子に、世之介は苛々していた。しかし、改まって仲直りなど、今の世之介には無理な相談だ。

そんな雑念をチラとでも考えると、すぐに「男の面目が立たねえ！」と反射的に思う精神構造になっている。知らぬ間に、世之介は番長星を支配する論理に、がんじがらめになっていた。

助三郎と格乃進の二輪車も道路を並走している。二人の二輪車の側車にはIPPACHIと、光右衛門が各々納まっている。右左にくっついていて側車同士、IPPACHIは道路を挟んで光右衛門と、のんびり話し込んでいる。

「へい、あつしは元々が、寄席で前座や、切符のもぎりなんぞをやっております、幫間杏菊紹偉童でござんす。本当はちゃんとした料亭なんぞで、旦那衆のお相手なんかを務めたいところですが、生憎あつしの芸能腑呂愚羅無が寄席向きだつてことで、前座などを務めさせて貰つてたんでげす」

「ふむふむ」と機嫌よく相槌を打ちながら、光右衛門が尋ね返す。
「それで、どうして寄席のお務めを辞めて、世之介さんのところで働く経緯になつたんですかな？」

IPPACHIは渋い表情になった。

「へえ、それが、失敗を仕出かしましてね。前座で面白おかしく客を沸かせたのは良かったんですが、その時やってたネタつてのが、お上をやりわり批判するものだったのが、運のつきでさあ。『杏菊紹偉童ごときが、お上を批判するとは怪しからぬ！』と、そりやあもつ、きついお叱りで。そのままだと、あつしは解体所送りになる

ところだったのが、世之介若旦那のお父つつあんが同情して、身元引受人になってくれましたんで、一命を取りとめた　と、こういう訳でげす。だから、あっしは、大旦那には足を向けて寝られねえ、って訳でして」

「成る程、成る程」と光右衛門はニコニコと柔和な笑みを浮かべて聞き役に徹している。

ちえ、呑気な奴らだ……。

世之介は前方を見詰めた。

いつの間にか目指す【ツツパリ・ランド】が、前方に大きく見えてきている。

正門

巨大な正門に【ツツパリ・ランド】の文字がでかかと貼り付けられている。文字は怖ろしく下手糞な字体で、なんとか判別できるほどである。

呆れたことに、近づいてみると、文字は膠合板ベニヤに油漆ペンキを塗りつけただけの、素人仕事であることが一目瞭然である。

正門自体も、素人のやつつけ仕事であることが良く判る。長さも太さもまちまちな材木を、釘や綱で大雑把に組み合わせ、そこに大慌てで色とりどりの布や、ボール紙を貼り合わせてある。ちよつと強めの風が吹けば、あつという間もなく倒れてしまいそうだ。

近づいてくると、わんわんと騒音が聞こえてくる。

いや、騒音ではない。音楽だ。ただし、拡声器スピーカーの限界近くまで音量を上げ、さらに無数の違った音楽を同時に流しているので、騒音にしか聞こえない。

正門近くには駐車スペースがあり、そこには無数の二輪車、四輪車が停車し、多数の男女が音楽に合わせ、手足を無心に動かして踊っている。よほど激しく踊っていたのか、全員、男も女も顔や手足にびっしりと汗を浮かべている。

男女の年齢はまちまちだ。下はほとんど小学生くらいにしか見えない若い男女から、上は杖の厄介にならないと歩けないくらいの老人まで、がんと音量を最大にした音楽に合わせて、踊り狂っていた。

食べ物の匂いに、世之介の食欲が刺激される。【ツツパリ・ラン

ド」に到着する前、世之介はすでに朝食を済ませていたが？伝説のガ克蘭？は通常の数倍の食糧を必要とするようで、すでに空腹を憶えていた。

建物

食べ物匂いは、駐車場のあちこちに張られている天幕テントから漂っている。天幕には様々な屋台が出店し、そこでは焼き蕎麦だの、鳥賊焼きだの、たこ焼きだの、お好み焼きだの、様々な食べ物旨そうな匂いを発散させている。醤油の焦げる匂いに、世之介の胃は「ぎゅーっ」と盛んに空腹を訴えている。

正門を通過すると、その場にいた全員が顔を挙げ、新来者に目顔で挨拶を送ってくる。

いや、茜の言い方に従えば「ガンを飛ばす」といったほうが正確である。

口々に

「何だ、この野郎……」

「やんのか、オウ！」

「かかってきな！」

と、わざとダミ声を作り、壮んに睨みつけ、挑発している。もっとも大半の連中は、ただ叫んでいるだけで、一步も近づいては来ない。

つまりは番長星の、通常の挨拶というやつで、もし世之介が本気で殴りかかったら、相手は吃驚仰天して、最初に出会った隆志のように泣き出してしまうだろう。その辺が世之介には段々、判ってきた。狂送団のような連中は、あくまで例外なのだ。

正門を潜り抜け、世之介は【ツツパリ・ランド】が遠くからゴチャゴチャとした幾つかの建物の集合に見えていたが、近づいて初め

て、一つの建物であることに気づいていた。

建物の壁が、様々な色に塗られているため、遠目からは幾つもの建物の集合に見えていたのだ。

真ん中に巨大な時計塔が聳え、その両側に翼を広げるように建物が左右に伸びている。階数は多い。数えてみて、世之介は建物の階数を三十以上と見積もった。

しかし、建物の形を見て、世之介は何かに似ていると感じていた。

岩山

ああ……！

世之介は合点が行った。

大きさはこちらの建物が遥かに大きいが、建物の形としては、学校の校舎である。やや離れたところにある大屋根の建物は、体育館か、講堂であろう。

とすると、この駐車場は本来は校庭なのだ。正門は校門ということになる。

その校門を狂送団の二輪車が通過すると、それまで壮んに示威行動を繰り返していた周りの連中が、ぴたりと鳴りを潜める。

全員の顔に恐怖の色が浮かんでいる。こそこそとお互い囁き合い「狂送団だ！」と言い合っている。

狂送団の男たちは、ジロリと周りを睨みつけ、齒を剥き出し、唸り声を上げた。まるで野犬の群れである。何人かは武器を抜き放ち、世之介が最初見たときのように、地面を力り力りと削ってドキドキするような刃を見せびらかせている。

茜は黙ったまま、真剣に周りの群衆に目をやり、何か探しているようである。

「茜、兄さんを探しているのか？」

世之介が言葉を掛けると、茜はびくつと身を震わせて目を向けてきた。今までの反抗的な態度は潜められ、どこか頼りない子供のよ

うな目になっている。

茜は一つ「うん」と頷いていた。

「【ツッパリ・ランド】に来れば、見つかるんじゃないかと思ってたけど……」

後は言葉を濁した。

茜の兄は、確か「勝^{まひる}」という名前のはずだ。「勝又勝」とは、何だか語呂合わせのようで、世之介には強い印象があった。

適当な空き場所を見つけ、世之介は二輪車を停車させた。校舎を見上げる。

校舎の背後に、岩山が圧し掛かるように聳えている。高さは五百メートル以上はあるだろうか。草木一本さえも生えていない灰色の岩山が、無愛想に居座っている。

奇妙な形をしている。とても自然の造型とは思えない。なだらかに立ち上がった裾野から、いきなり上部は別の形になっている。

情報

世之介は、そこらにいた学生服の若い男につかつかと近づくと、「ちよつと聞きたいことがある」と前置き抜きで話し掛けた。

話しかけられた若い男は、ポカンと口を開き、目を虚ろにさせた。

年齢は世之介より二、三才ほど年上か。これといって特徴のない、平凡な顔つきをしている。

特徴といえば、男の頬に一面に汚いニキビがところ構わず噴き出しているのが、特徴となっている。男はビクビクとした態度で、それでも精一杯の虚勢を示してぐつと背中を聳やかせた。

「な、なんでえ！」

「ここは【ツツパリ・ランド】だろう」

「へっ！」と男は嘯いた。

「当たり前だあ！ 他のどこ間違えて、ウロチヨロしやがったんだ？」

世之介はさつと腕を伸ばし、男の喉下に手をやって締め上げた。

「舐めんなよ……聞かれたことだけに答えればいいんだ！」

世之介の押し殺した声に、男は見る見る顔を青くさせた。忽ち態度が、塩を振った青菜のように、萎びて従順になる。

「な、なにを……お尋ねで……？」

「勝又勝^{また}つて奴を知らないか？ 背は六尺くらいあって、ひどく身体のでかい野郎だ」

世之介は胸ポケットから一枚の写真を取り出した。茜の兄の部屋に貼られたものを、一枚だけ拝借してきたのである。写真を見て、男の顔に変化が起きた。

「知っているのか？」

「あ、ああ……！」

男はガクガクと機械仕掛けの人形のように頷く。二人の遣り取りを耳にして、茜が素早く近寄ってきた。

「知っているの？ お兄ちゃんは、無事？」

男は盛んに唇を舐めていた。どう答えようか、計算しているようである。

ちら、と男の視線が、校舎の背後に聳える岩山に向かう。

「その男なら【ウラバン】に会いに行つたぜ」

世之介は、男の視線を追った。

「あの岩山か？ 【ウラバン】は、あの岩山にいるのか？」

「そうさ」と男は頷いた。怯えきつた表情で言葉を続けた。

「【ウラバン】は、あの【リーゼント山】にいる……！」

希望

【リーゼント山】！

男の教えた岩山の名前として、これ以上に相応しいズバリとした名称は、考えられないかもしれない。

ぐつと持ち上がった巨大な山塊は、砂岩でできている様子で、侵食で縦に深い溝が刻まれ、それが頭髪のように見えている。やや上部が平坦になっていて、ぐつと張り出した前半分と、ほぼ直角に立ち上がった後頭部は、まるでリーゼントの頭そのものである。

これが自然に出来上がった地形か、或いは意図的に作られたものか、世之介には判断できなかった。オーストラリアの「エアーズ・ロック」と似たような形成原因があるのかもしれない。

「岩山の、どこに【ウラバン】は、いるんだ？」

世之介の質問に、男は微かに冷笑を浮かべて、答えた。

「知らねえよ……」

世之介は「きつ！」と男を睨みつけた。世之介が浮かべた表情に、男は再び真っ青になって、慌てて答える。

「本当だ！ 【ウラバン】は【リーゼント山】にいるって話だ。でも、実際に会えるのは【ウラバン】が認めた？ バンチョウ？ か？ スケバン？ だけと決まってるんだ」

「それには、どうすればいい？ 何が【ウラバン】に会ってもいいと認めさせることができる？」

世之介の矢継ぎ早の質問に、男はたじたじとなった。唇が細かく震えている。あまり深い事情まで、知ってはいないのだろう。ゆっくりと首を振ると、じりじりと後じさりを始める。

「知らねえ……知らねえよっ！」

甲高い声で叫ぶと、くるりと背を向け、転げるように駆け出す。世之介は追いかけようかと一瞬ちらつと思った。でも結局、そのまま見逃した。

他にも、ここには沢山の人間がいる。もっと事情を知っている人間が、どこかにいるかもしれない。

茜が鞆ふところのような息を大きく、吐き出した。見ると、顔が興奮のために、真赤になっている。世之介の会話を、息を詰めて聞き耳を立てていたのだ。

「やっぱり、お兄ちゃんは【ツツパリ・ランド】に来ていたんだね……」

呟くと、茜は世之介の顔を見詰め、ニツコリと微笑んだ。

「ありがと、世之介……。これでお兄ちゃんを探す当てができたわ！」

世之介は何とはなしに、肩を竦めた。

茜の呼びかけが「世之介さん」から「世之介」と呼び捨てになっている。

それが何だか、くすぐつたい。

ぐうつうつと、と世之介の胃が、空腹で不平を訴えている。

空腹

手当たり次第に、世之介は【ツツパリ・ランド】の屋台を涉猟した。とにかく、目に入る食べ物を次から次へとひっ攫い、口に目一杯むしゃむしゃ詰め込む行為に専念した。

一抱えもありそんな大きな碗を見つけ、世之介はその中に食べ物を手当たり次第ぽんぽん放り込む。屋台で食べ物を提供しているのは、捻じり鉢巻の傀儡人や、杏菊紹偉童たちだ。

山盛りにした碗を「よつこらしよ」と持ち上げ、世之介は空き地を見つけて、座り込んだ。

巨大な碗を抱え込んで食べ始める。食べ物だけではなく、飲み物も同じくらい手にしている。

ガツガツと食らい始める世之介を、茜は感に堪えないといった表情で見詰めた。

「よく食べるわねえ」

「腹が減ってるんだ！」

世之介は短く叫ぶと、すぐ食事の続きに取りかかる。今は一瞬でも、食べる時間が惜しい。

世之介の胃は、際限ない食欲で、消化すべき食物を要求している。たちまち、碗が空っぽになる。

「次だ！」

立ち上がると世之介は【ツツパリ・ランド】を駆け回り、再び碗

に食物を山盛りにして戻ってくる。

助三郎は感心して見ていた。

「まったくもって、羨ましい……。我々は賽博格の身体になつてからは、人間らしい食欲を、とんと覚えなくなつて久しい。いや、世之介さんの健啖は、見ていて気持ちが良いですな」

同じことを、この場にいた他の人間も思つたようだった。世之介が次から次へと食べ物を読み込んでいくのを見て、次第に見物人が増えてくる。

あつという間に碗を空にする世之介に、狂送団の団員、女たちが氣を利かして食糧を手渡しで運んでくる。世之介は座り込んだまま、運ばれる食事をぺろりと平らげた。

顔見知り

ようやく空腹が満たされたところには、世之介の周りには、空の食器が山のようにうず高く積み重ねられていた。

げぷつ、と息を吐き出し、世之介は立ち上がった。充分に食事を詰め込み、もうこれで矢でも鉄砲でも、槍でも刀でも、蒟蒻問答でも酢豆腐でも、それに饅頭と熱いお茶でも怖くないという気分である。

見物人から賛嘆の声と、拍手が沸き上がった。

「凄えや！ 二十人……いや、三十人分は胃の中に収めたぜ！」

番長星では大食いもまた、尊敬の的となる。その場に集まった男女の瞳には、憧憬すら浮かんでいた。

世之介は何の気なしに、集まった連中の顔ぶれに目をやった。と、その視線がある一点に急速に集中した。

あいつは！

物も言わず、世之介は群衆を掻き分け、早足で見覚えのある顔に向かつて突進した。相手は、ギクリと身を強張らせる。

「お前！」

叫んで世之介は駆け足になった。相手は世之介の物凄い勢いに驚き、逃げ腰になる。キョトキョトと落ち着きなく視線が彷徨い、どうしようか思案しているようである。

しかし番長星特有の論理に支配され、ぐつと背を反らせると、世

之介を待ち受ける。

「なっ、何でえ……！」

声が掠れている。聞いているだけで、こちらが窒息しそうな、耳障りな声音。ツルツルに剃り上げた、まん丸な頭。

隆志であつた。

世之介の顔をまじまじと、穴の空くほど見詰める隆志の表情に、ふと疑念が湧く。世之介は鋭く質問する。

「お前、隆志とかいったな？」

世之介の言葉に、隆志はうつろたえた。

「何で、俺の名前を知っている？」

詰問

ははあ、と世之介は頓悟した。

隆志は世之介をまるつきり、見知らぬ相手と誤解している。無理もない、今の世之介は隆志が見知っている当時の世之介ではない。隆志が連れてきた風祭とかいう賽博格バンチョウを、助三郎と格乃進がやつつけたときは、世之介は？伝説のガクラン？を身に着けていなかった。

あの後、？伝説のガクラン？を身に着けた世之介は、頭髮が金髪に染まり、リーゼントの髪形になって、人相ががらりと変貌している。

隆志の表情に、微かに理解の色が浮かぶ。ゆっくりと首を振った。

「そんな、まさか……。おめえが、あいつな訳、あるもんか！」

「ところが、お前の言う、あいつなんだ。俺は、但馬世之介。思い出したか？」

世之介は一步、ぐっと隆志に近づいた。ゆっくりと声を押し出し、両目にあらん限りの力を込めて睨みつける。視線の力で、隆志の両足を地面に縫い付ける気迫である。

世之介の凝視を浴び、隆志の両足が、カクカクと震え出す。

「風祭ってやつは、どうした？　一緒じゃないのか？」

ぺろり、と隆志は分厚い唇を舐めた。顔一面に、大量の汗がぶあつ、と吹き出す。

「し、知らねえ……。あの後、風祭さんは、【ウラバン】に身体を元通りにしてもらったために、別れたんだ」

隆志の視線が、ちらりと動く。視線の先を追った世之介は、頷いた。

「【リーゼント山】か？ 風祭は、あそこへ行っただんな？」

「そ、そうだ……。おい、お前、いったいあの後、何があったんだ？ あの時のお前とは、まるっきり別人じゃないか？」

世之介はニヤリと笑いかけると、ぐいっと背中を廻して、金の刺繍を見せ付けた。

「こいつが何か、知っているか？」

隆志は、驚きに仰け反った。

「？ 伝説のガ克蘭？！ ま、まさか、おめえが、そいつを手に入れたとは！」

隆志の叫びに、その場にいた全員が凝固した。

「？ 伝説のガ克蘭？！」

その場の全員が、同じ言葉を呟いた。

世之介は隆志の胸倉を掴んだ。

「教える！ 【ウラバン】には、どうやって会えるんだ？」

「それなら、俺が教えてやろう……」

背後からの声に、世之介は隆志の胸倉から手を離し、さっと振り向いた。

咆哮

「【ウラバン】に会いたいのか？」

石臼の挽き音のような、ゴロゴロとした低音が、その場を支配する。ぺたりと地面に腰を抜かした隆志は、声の主に喜色を浮かべた。

「風祭さん！」

その通りだった。

ずっしりとした樽のような身体つき。まるで人間の形をした戦車
がその場に立っているかのような、異様な巨体である。

風祭は両拳を腰に当て、七尺あまりの高みから、世之介を冷ややかな表情で見下ろしていた。世之介は負けじと睨み返す。

「そうだ！ 【ウラバン】とかいう、こそこそ隠れるのが好きな、卑怯者に会いたいのさ」

風祭の顔に、僅かに怒りの色が浮かぶ。もともと風祭の顔は賽博格の人工皮膚で、感情を表すことが苦手であった。

「何だと！ もう一遍、言ってみろ！」

世之介は、せせら笑った。

「卑怯者と言ったんだ！ そうじゃないか！ 【ウラバン】だか、裏磐梯山が知らないが、誰も直接には会えない謎の存在らしいな、そいつは……。きっと、俺たちに直に会うのが怖くて、コソコソ震えながら隠れているんじゃないのか？」

「むづづづ！」

風祭は低く唸った。ごつごつとした岩を刻んだような顔面に、精一杯の怒りが浮かぶ。

世之介は、さらに嘲笑を浴びせかけた。

「悔しかったら、さっさと自分から、俺たちの前に出てこいってんだ！【リーゼント山】に隠れているんだろ？ はっはあ！ まるで相撲取りのような名前だなあ。ひっがしい！【リーゼント山】……。にっしい……隠れんぼ川なんてのは、どうだい？」

風祭はくわつ、と大口を開け、怒りの咆哮を解き放った。それは、まさに轟音といってよく、まるでジェット戦闘機の爆音であった。

わあっ！ とその場にいた全員が、ばたばたと見つともなく逃げ散っていく。びりびりと背後の校舎のガラス窓が一枚残らず、風祭の叫びに震動していた。

隆志は風祭の怒りの咆哮にまともに向かい合う羽目になり、地面をころころと、ピンポン球のように転がっていく。

世之介は風祭の咆哮に真正面から立ち向かった。一步も引かず、地面にしっかりと両足で踏ん張っている。が、風圧に、ずりずりと何寸かは動いたようだ。

風祭は、ほつと溜息を吐いた。目を細める。

「本当に【ウラバン】に会いたいのか？」

世之介は無言で頷いた。

巨人は、くるりと背を向けた。

「従いてこい！ そんなに会いたいのなら、^{テスト}験しをしてやる」
「験し？」

風祭は首だけねじ向け、ニツタリと笑いを浮かべる。

「そうさ、^{チキン・ラン}臆病試験^{チキン・ラン}って、ここでは呼んでいるがね」

縄張り

風祭は先にたち、校舎へと歩いていく。のしのしとゆったりとした歩を進めるが、見かけによらず、世之介が早足にならないと、追いつけない。身長が高く、歩幅も並みではないからだ。

背後から足音が聞こえ、世之介が振り向くと、茜、助三郎、格乃進、イツパチ、光右衛門という順番である。さらに加えて、ぞろぞろと狂送団の全員、物見高い野次馬たちが勢ぞろいをしている。

風祭はちよつと顔を捻じ向け、助三郎と格乃進に気付き、僅かに顔の表情を変えた。自分を打ちのめした賽博格を覚えていたのだ。しかし何も言わず、黙々と歩みを止めない。

世之介は校舎を見上げる。

中央の時計台には、巨大な文字盤の時計が設置されている。両翼の建物には、様々な塗料が塗りたくられ、下の階数にはふんだんに下手糞な文字が踊っている。

世之介は首を傾げた。

「なんのために字を書くんだ？」

隣でイツパチが、低い声で壁に書かれた落書きを読み上げる。

「？御意見無用？？仏恥義理？？愛羅武勇？？夜露死苦？……。はあ、随分と面白い書き方でやんすね。？奇瑠呂衣参上！？。奇瑠呂衣って、誰のこつてす？」

「ふうむ、なんだか動物行動学で言う、匂い付け《マーキング》に

似ておりますな」

髭をしごきながら、光右衛門が呟いた。

世之介は光右衛門の呑気な物言いに、内心ズッコケた。

「爺さん、何だ、そりゃ？」

光右衛門は悠然と言葉を続けた。

「野犬など、縄張りを主張するために、小便を引つ掛けて『ここは俺の縄張りだ！』と主張しますな。番長星で見られる、こういった落書きを見ていると、あれを思い出します。ほれ、落書きは色のついていない壁には、やたらとありますが、色のついていない範囲には、何も書かれておりません。多分、あの色がついている範囲は、何かの集団が仕切っているのではないですか？ それで落書きがないのです。野犬は、自分より強い相手が匂い付けをした場所には、自分の匂いをつけません。それと同じことです」

風祭はニヤリと笑いを浮かべ、返事をする。

「その爺さん、中々、穿ってるぜ！ 壁の色についてちゃ、当たりだ。【ツツパリ・ランド】には、何人ものバンチョウや、スケバンが集まっているからな。各々縄張りを主張して、いつしか壁の色を塗りあって、ああなった。色の付いている壁は、バンチョウ、スケバンの縄張りってわけさ」

教科書

そんな会話を続けているうち、入口に達していた。数段の段差があり、巨大な玄関をくぐると、広々とした吹き抜けになる。

煌々とした天井からの明かりに、出し抜けに巨大な立像が全員を出迎えた。

真っ赤なガクランに、厳つい顔つきの、高さ五丈（約十五メートル）はあるうかと思われる、巨大な男の姿である。IPPACHIは立像を見上げ、素っ頓狂な声を上げた。

「なんですかい、こりや？ 誰の像なんで？」

「この番長星で最初のバンチョウになった、伝説のバンチョウの姿だ。見る、あのガクランを。お前のガクランと同じだろう」

風祭の指摘に、世之介は内心「確かにその通りだ」と強く頷く。

しかし伝説のバンチョウのガクランを、なぜ自分が身に纏うことになったのか？ 新たな疑問が浮かぶ。

偶然とは思えない。あの場所、あの時間に自分は？ 伝説のガクラン？ に出会つべく、何らかの意思が働いていたのではないだろうか？

吹き抜けの壁には、ところどころ壁龕が設けられている。内部には何か、雑誌のようなものが展示されていた。

好奇心に駆られ、誌名を読んでいく。

「チャンプ・ロード」「カミオン」「レディス・ロード」等々、表

紙には二輪車や四輪車があしらわれ、番長星で見かけるガクランや、作業服を着た男女が、カメラを睨みつけ、精一杯に凄んでいる。

「これは？」

世之介の質問に、茜は目を輝かせて雑誌の表紙を見詰め、答えた。

「教科書よ！　格好良い二輪車や、四輪車の改造の方法や、ガクランやツナギの着方を教えてくれるの。勿論、正しいツツパリの方法もね！」

天井

一階部分の他の場所には、茜の言う「正しいツツパリ」のためのガクランや、ツナギが所狭しと展示されていた。気がつくと、何人もの男女が、熱心に展示に見入っている。

他には受像機があり、二十世紀らしき古い時代の映像が映し出されている。夜中の道路を疾走する改造二輪車の群れ、様々なツツパリたちが、何か争っている場面。

超指向性の音波で、受像機の一定の範囲内に近づかないと、音は一切聞こえてこない仕組みである。

近づくと「ぐわんぐわん」「うおんうおん」と喧しい騒音を撒き散らしながら、二輪車や四輪車が何かに駆り立てられたかのように、夜道を爆走している場面だった。

遠くから警告音サイレンを鳴らし、警察車両が追いつがる。拡声器スピーカーから暴走をやめるよう勧告する声が響くが、二輪車や四輪車の運転手は、全く聞く耳を持たない。却って勧告の声は、暴走に拍車を掛けるものだった。

世之介は風祭に向き直った。

「それじゃ臆病試練とやらをやるつか。どこでやるんだ？」
「あれだ！」

風祭は、ぐつと天井を指差す。
吹き抜けの中央辺り、空中に巨大な球が浮かんでいた。直径は優に六〜七間（約十二メートル）はある。

材質は金属製だが、網で編んだような作りで、内部が籠ワイヤーごしに透けて見えていた。球体自体は、吹き抜けの壁から繋がれた鋼網で固定され、球に入り込むための入口があり、板が差し渡されている。

「あんなところで、何をするんだ？」

風祭は嘲笑するかのような、表情を浮かべた。

「怖いのか？」

世之介の全身に怒りの血流が流れる。ぐつと足を踏ん張ると、風祭を見上げる。

「馬鹿を言え！ とつとと試練とやらを始める！」

球体

「本当にやるの？」

茜が心配そうな表情を浮かべ、世之介に話し掛ける。世之介は無言で頷いた。

もう引っ込みはつかない。

世之介は球体に繋がる板の端に来ていた。板の先は球体の入口に繋がっている。板の幅は二尺あまり。当然、手摺などない。

もし足を滑らせたら、空中にまっ逆さまに転落し、吹き抜けの床に落下して、命を失うのは明らかだ。

向こう側の板には、風祭が立っている。表情にはからかうような笑みを浮かべている。

風祭の横には、一台の軽快そうな形状をした二輪車があった。世之介の隣にも、同じような二輪車が控えてある。

これから二人は二輪車に跨り、板を突っ切り球体の内部へ飛び込む。内部に飛び込むと入口は塞がれ、完全な密室となる。球体の内側の壁を全力で疾走し、二輪車同士で決闘をするのだ！一寸でもアクセル梶棒を緩めると、二輪車の勢いは失われ、もし球体の天井近くを走っていた場合、直ちに落

下して運が悪ければ、いや確実に二輪車の下敷きになり、大怪我、ひよっとして落命すらありえる。

命懸けの勝負である！

世之介はさつと二輪車の鞍サドルに跨る。事前の説明では、この二輪車は純粹に競技用に設計され、番長星の二輪車に装備されている自立セグウェイ機構は組み込まれていない。従って、もし均衡バランスを一瞬でも失うと、すぐさま転倒する。

梶棒を握りしめ、世之介は二輪車の動力を一杯に噴かした。

二輪車の動力部分からは微かに「ウーン」という動力音が聞こえてくるが、番長星で見かけた通常の二輪車のような「ぐわわわーん！」という喧しい騒音は一切聞こえない。まさに競技用。余計な機能は、唯の一つも装備されていないのだ。

制動装置ブレーキを指から離し、世之介は二輪車を全速力で飛び出させた。反対側で風祭も同じ

ように飛び出す。車輪の下は、細い板一枚のみ。

ほんの少しでも車輪を踏み外せば、命はない！

回転

二台の二輪車は球体の入口に飛び込んだ。さっと入口が塞がれ、内部は完全な球になる。

たん、と軽く音を立て、世之介の二輪車は球体内部の床に着地した。ぎしつ、と一瞬、空中から落下した二輪車の衝撃吸収^{サスペンション}発条が落下の衝撃を受け止め、軋んだ。

ゆつくりと二台は、円を描きながら球体の内部を回り始めた。加速が充分ではないので、球体の下の部分を回っている。

風祭は大声で叫んでいた。

「この試練で、俺は何人もの臆病者をやつつけてやった！ 板を渡れない奴もいた。板を渡って、この中に入れた奴も、終いには臆病風に吹かれて、梶棒を戻しやがって、床に叩きつけられ、病院送りになった奴が大勢いる。お前はどうか？」

「余計なお喋りは無駄だぜ！ お前こそ、ブルってるんじゃないのか？」

世之介が叫び返すと、風祭は口を真っ直ぐに引き結び、真剣な表情になった。

「その言葉、後悔させてやる！」

ぐつと肩を張ると、風祭は二輪車を全速力で走らせる。怖ろしいほどの加速がついた二輪車は、球体の内側の壁を駆け上がり、あっという間に天井近くに達する。その加速のまま、風祭は世之介の二輪車に猛然と突っ込んでくる。

世之介は寸前に二輪車を加速させ、風祭の突進を避ける。世之介の二輪車も、球体の内側を駆け上がり、ほぼ地面と直角になって、ぐるぐると回転を続けた。

球体は壁に鋼鉄の綱で固定されているので、二輪車が加速するとぐらぐらと揺れる。

さらに二輪車は二台で思い思いの方向に回転しているから、揺れは複雑な踊りのように、思いもかけない方向に揺れるのだ。

球体の内部を駆け上がり、駆け下りる走行を何度も繰り返す。その度に天井の明かりがちらちらと瞬き、球体の籠から洩れる光が奇妙な光と影を作り出す。

世之介は歯を食い縛った！

下敷き

二台の二輪車は、ぐるぐると球体の内側の壁を全速力で走り抜け、お互いほんの少しの隙を見つけて相手を叩き付けようとしていた。

決闘の光景は、まるで優雅な舞を踊っているようだった。

だが、一瞬でも油断すれば、忽ち最後であるということとは、世之介には厭になるほど、判りきっていた。

二輪車の動力音が、低く、高回転の唸りを上げるだけで、車輪が内側の壁を噛む、微かな雑音だけが聞こえる。あとは物凄い速度で走り抜けるための風切り音だけが、世之介の聞こえる総てであった。いきなり風祭が二輪車の向きを変え、真っ直ぐに世之介に向かってくる。世之介はぎりぎりですくすくもりであった。

が、風祭はぐつと片足を上げ、何と蹴りを入れてきた！

どすん！ と風祭の蹴り上げた足が、世之介の二輪車の車体を横に揺らす。ざざつと後輪が滑る。

世之介は危なく横倒しになるところを、全身の力で押さえつける。

ちっ、と風祭が残念そうな表情を浮かべる。

世之介の顔に、汗が噴き出す。危ないところだった！ もし二輪車が、天井近くを走行していたら、そのまま落下して、世之介は下敷きになっていた。

くそっ！ それじゃ、こっちからだ！

世之介は梶棒を一杯に廻すと、わざと明後日の方向を目指し、二輪車を発進させる。風祭は予想外の世之介の動きに戸惑いを隠せな

い。

世之介の二輪車が、球体の内側の壁を駆け登る。天井近くまで達し、世之介は唐突に梶棒を緩めた。

すடன்、と二輪車の駆動音が静まる。世之介は力一杯ぐいっと、把手を手前に引く。くると二輪車は半回転し、二つの車輪を下にして、そのまま勢い良く落下した。

落下したその位置には、風祭の二輪車がある。風祭はポカンと顎を開け、落下する世之介の二輪車を見上げている。両目が、節穴になっっていた。

ぐわんっ！

世之介の二輪車の車体が、まともに風祭を下敷きにする。

やったか？

憎悪

一瞬、勝利を確信した世之介であったが、風祭は戦闘用賽博格である。

「うぬぬっ！」と叫び声を上げた。

風祭は、なんと世之介の二輪車を両肩に担ぎ上げ、そのまま放り投げる。

がちゃん！

と世之介の二輪車は球体の内側に激突して、横倒しになる。

が、すでに世之介は二輪車を空中で蹴り飛ばし、その勢いのまま飛び上がった。

両膝を抱え、全身を鞠のようにして世之介はくると回転すると、足を下にして着地した。

ちら、と世之介は自分の二輪車を見た。放り投げられ、内側の壁に激突した衝撃で、どこかが破損したのか、薄く煙が漂っていた。

風祭の二輪車も同じようにお釈迦になっていた。世之介の二輪車の落下で、完全にぺしゃんこになっていた。

球体の床で、世之介と風祭は睨みあった。

「どうするんだ。二輪車は、駄目になっちまったぜ」

世之介の問い掛けに、風祭はひくひくと唇の端を震わせるだけだった。学帽の底の下の両目が、青白い炎のような憎悪の光を放っている。

ぶーん……。

風祭の全身が細かく震え出した。
はっ、と世之介は身構えた。

あれは……！ 風祭は加速状態に入ろうとしている！

しゅんっ！ と微かな空気を切り裂く音がして、風祭の全身が世之介の視界から消え去った。

瞬間、世之介のガクランも対応を開始している。世之介の感覚が引き伸ばされ、全身の神経が加速される。筋肉が新たな相に変化し、世之介の人格は一変した。

世之介は加速された時間の中で、風祭の姿を目にしていた。

風祭はすでに空中に飛び上がり、天井近くの壁にまで達していた。壁に接触する寸前、くると身体を回転させ、両足を壁に逆さに押し付ける。そのまま両膝をぐっと踏ん張り、自分の身体を弾き飛ばす。

速度は音速を超えているだろう。

それが証拠に、風祭の頭部に、衝撃波による圧縮された空気の揺らぎが見えている。

風祭はまっしぐらに世之介を目掛け、自分の身体を送り込むつもりらしい。まともにぶつかれば、酷いことになるのは確実だ。

衝撃

世之介は両足を踏ん張り、身体をほぼ横倒しにして飛び出した。ガ克蘭はすでに加速状態に入った世之介の生身の身体を保護するため、装甲形状をとっている。

爪先を球体の籠の目に引っ掛け、ぐいぐいと内側を登っていった。

風祭は頭から世之介のいた位置に突っ込んでいた。

物凄い衝撃に、球体の金属の網の目がぐにやりと拉げる。

巨大な砲弾が、まともにめり込んだようなものだろう。球体がずしん、と揺れ、大きく上下左右に揺すぶられる。

風祭は、ぐいっとめり込んだ網の目から頭を引き抜くと、呆気に取られた表情で、内側の天井近くによじ登っている世之介を見上げた。

「てめえも賽博格なのかつ？」

風祭の声は、超高速に圧縮され、やや甲高く聞こえた。世之介は、かぶりを振った。

「違う！ このガ克蘭のせいだ。このガ克蘭は、俺をお前たち賽博格と対等に戦えるよう、変えてくれるんだ」

風祭の両目が考え込むかのように細くなった。

「成る程な……。それで？伝説のガ克蘭？か！ しかし、俺は本物の賽博格だ！」

叫ぶと、再びぐつと両膝に力を込め、床を蹴って飛び上がる。

世之介もぶら下がった体勢から、ぐつと懸垂の要領で身体を引き上げた。球体の天井を蹴って飛び出す。

超音速での衝撃に堪えられるのだろうか……。ちらりと、そんな考えが頭を掠めた。だが、すでに世之介の身体は、空中にあった。ガ克兰の襟がするすると伸び、世之介の頭部全体を包み込む。両目のところに内側に投影窓ディスプレイが開き、世之介の全身は完全に保護される態勢となった。

窓に映し出された風祭の顔が、ぐーっと接近してくる。世之介は歯を食い縛った。

ぐわんっ！

物凄い衝撃が、頭天边から足の爪先まで貫く。ガ克兰は世之介の身体を守るため、金剛石ダイヤモンドよりも硬く強張り、激突の衝撃を受け止めた。

しかし、加速度は風祭のほうが上回り、体重も世之介の三倍であった。空中で世之介は風祭に弾き飛ばされた。内側の壁に叩き付けられる。世之介はくらくらとなって、ぼうつと意識が霞むのを感じていた。

世之介は顔を上げた。ゆらり、と風祭が立ち上がり、のしのしと大腿で近づいてくるのを認めた。

風祭の顔に、勝利の喜びが浮かんでいた。

試練終了！

世之介は立ち上がろうと手足に力を込めた。が、動けない。なぜか全身が痺れ、ぴくりとも動けなかった。

ニツタリと、風祭が嗜虐的な笑みを浮かべていた。ぐいつと長い腕を伸ばし、世之介の胸倉を掴み上げる。

「待て！ それまでだ！」

不意に聞こえた声に、風祭はギクリと身体を強張らせた。

世之介も、声の方向に目をやった。

球体の内側の入口が抉じ開けられ、助三郎と格乃進が入ってくるところだった。

「貴様ら……」

風祭は齒噛みをする。表情が激烈な憎悪に歪んでいた。

格乃進は冷静な口調で、風祭に話し掛ける。

「すでに両者の二輪車は大破している。この時点で、臆病試練は終了しているのでないかな？ これ以上の戦いは私闘ということになる。【ウラバン】はそれを許しているのか」

助三郎も一歩ずつと前へ出た。腕を挙げ、指弾するように指先を伸ばす。

「そうだ。それに、風祭。お前は生身の人間の世之介さんに対し、賽博格の加速状態を使って打撃を与えようとした。世之介さんが加速状態に対応できるとは考えていなかったようだから、それは卑怯

な振る舞いとなる。そんなことで【バンチョウ】と名乗ることができるのか？」

助三郎の言葉は、痛烈に風祭の誇りを傷つけたようだった。「くくくく！」と唸り声を上げると、風祭はぐいつと世之介の身体を片腕一本で持ち上げ、無言のまま、物凄い勢いで助三郎に投げつけた。

「おっと！」

助三郎は空中で世之介の身体を受け止め、床に下ろした。

ようやく、世之介の全身に感覚が戻り、ふらつきながらも立ち上がることもできた。世之介の頭部を覆っていたガ克兰の襟が元に戻り、顔が顕わになる。すでに加速状態は解かれていた。

帰還

風祭は両手を開いたり、握り拳を作ったりしている。大きく何度か呼吸を繰り返し、激情を静めようと務めていた。

表情が水を打ったように静まり返る。世之介は風祭の表情を見て、怒りに駆られた先ほどより、今のほうが数倍危険だと感じていた。

すでに風祭はジロジロと、無遠慮な視線を助三郎と格乃進に当て、舐めるような、試すような目つきになっている。再度の戦いに備え、弱点を探っているようだった。

「いいだろう。【ウラバン】に会わせてやる！ こっちだ……」

風祭はブイと顔を背け、出口に向かって球体の内側の網の目を掴んで登り始める。

世之介は助三郎と格乃進を従え、後を追いかけた。

板を歩いて元の場所に戻ると、茜が心配そうな表情で出迎えた。茜の背後からイッパチがヒョイと顔を出し、世之介の姿を確認して喜色を浮かべた。

「若旦那！ ご無事で！ よかったですねえ、茜さん」

話し掛けられ、茜は見る見る顔を茹蛸のように真っ赤にさせ慌てた。

「な、なにがよかったのよ！」

イッパチの眉がぐいと持ち上がる。

「おや、さつきまで、若旦那が殺されるんじゃないかと気が気でなかったのは、どこのどなたさんで？ 助さん、格さんが現れなすつたのも、茜さんが必死で掻き口説いたからじゃござんせんか？」
茜は、くるつと背を向けて叫ぶ。

「知らないっ！」

助三郎と格乃進はニヤニヤ笑いを浮かべて、世之介の顔を見詰めてきた。

世之介の顔が火照ってきた。

階段

ぴりぴりとした緊張がその場を支配している。

先頭に立つた風祭は、明らかに背後に続く助三郎と、格乃進を気にしている。また、二人の賽博格も、風祭がいつ暴れ出すか、油断なく様子を窺っているようだった。

そんな緊張を感じとっているのか、イッパチは目玉をグリグリと動かし、時々ごくりと唾を飲み込む仕草を見せる。

堪らなくなつたのだらう、イッパチは甲高い声で風祭に声を掛ける。

「あのう、風祭の旦那！　いってえ、【ウラバン】は、どこにいらつしゃるんで？」

「【リーゼント山】だ！」

風祭は背中を見せたまま、短く答える。
イッパチは首を捻った。

「へえ……。それにしちゃ、あたしたち、校舎の階段を登っていますねえ。【リーゼント山】に行くのなら、一旦は外へ出なきゃならないんじゃないですか？」

「いいんだ、これで！」

怒つたように風祭は答え、イッパチは「へえ」と首を竦めた。

世之介も、疑問に感じていた。

確かに風祭は、一同を案内して、おそらく屋上へ通ずるであろう内階段を登っている。目の前の壁に、階数を表示する案内板が次々と表れ、下へと消えていく。すでに階数は、十回分は登っていた。杏菊紹偉童のIPPACHAや、助三郎、格乃進の賽博格。これくらいの階数を登ってもなんともないが、老齡の光右衛門が息も切らさず従いてくるのは、驚きだった。手には杖を持っているだけだが、軽い足取りで階段を登っている。

実を言うと、狂送団の団員、それに野次馬の連中も従いてこようとしていたのだった。

が、黙々と一同が階段を登るにつれ、一人減り、二人脱落し、ついにはこの顔ぶれしか残っていない。たった数階分だけ登っただけで連中は息が切れ、へたり込んでしまった。身につけている衣服に「根性」と刺繍されているにも関わらず、完全に根性なしである。

茜もまた息を切らし、途中で座り込んでしまった。だが、それでも、ぐっと立ち上がると、必死になって従いてくる。多分【ウラバン】に会って、兄の勝の消息を尋ねたい一心なのだ。

ふと、世之介は風祭に質問した。

「なあ、どうしてこれだけの建物に、昇降階段エスカレーターくらい、無いんだ？」「そんな物、ねえ！ そんな物に頼るなんて、恥知らずもいいところだ」

風祭は妙な所で力む。昇降階段を設置しないのも、番長星特有の論理なのだろう。

屋上

そのまま一同は、黙り込んで階段を登っていく。ようやく目の前に、屋上を示す階数表示が現れた。

がちやり、と扉を開き、風祭は屋上へと足を踏み出した。風祭の、樽のような身体つきの隙間から、番長星の董色の空が見える。

目の前には【リーゼント山】が聳えていた。

屋上には強い風が吹いていた。風が、世之介のリーゼントの髪を靡かせる。長い髪が踊り、茜は慌てて髪の毛を押さえていた。

屋上の端に歩み寄り、風祭は無言で山を見上げている。何かを待っている様子である。視線の先には【リーゼント山】の頂上があった。

黙って世之介も風祭の横に立ち、【リーゼント山】を見上げる。

山の頂上に、何かが日差しを受けキラリと輝いた。輝きは、すいと浮かび上がり、空中で方向を変え、こちらへ近づいてくる。

世之介は、目を見開いた。

あれは……！
フライヤー
浮揚機だ！

江戸で見ると、一般的な重力制御機構を備えた、浮揚機である！

茜を見ると、顔にはまるで驚きというものが浮かんでいない。世之介は話し掛けた。

「あんなもの、見たことあるのか？」

茜は「ううん」と、かぶりを振った。

「見たことないわ。何なの、あれ？」

つまり、知らないものを初めて目にし、驚くという感情が浮かばなかったのだ。世之介が番長星で見た初めての空中浮揚機に驚いたのは、今まで見た番長星の科学技術に、重力制御を使用した形跡が全く見られなかったからである。重力制御は、一度でも使用されると、隠し切れない影響を与えるものだ。

例えば、建物の形状である。重力制御技術を使えば、地上数百階、数千階だろうが、どんな奇抜な外見だろうが、思いのままに設計できる。江戸の建物には、総て重力制御機構が組み込まれ、通常なら建設することすら不可能なほど重心が偏った建物でも、建築可能にさせるのだ。

番長星には、重力制御を使用した形跡は一切、存在していないことは、確かである。しかし、こちらに近づいてくるのは、明らかに重力制御を使用した浮揚機だ。

ということは……。

世之介は腕を組み、待ち受けた。

招き

浮揚機は無人であつた。

無音で屋上にふわりと着地すると、世之介たちを出迎えるように
両側の羽根扉がぱくりと開く。ガル・ウイング座席は人数分、ある。

光右衛門が最初に口を開いた。

「それでは、参りますかな？【ウラバン】殿のお招きとあれば」

軽快に慣れた様子で扉を潜り、内部の座席に腰を落ち着かせた。
急いで助三郎、格乃進も潜り込む。

茜、イッパチと乗り組み、残るは風祭と世之介になった。

世之介は風祭を見た。

風祭は乗り込む様子を見せず、ただ突っ立ったまま、ニヤニヤ
笑いを浮かべている。目顔で尋ねる世之介に、風祭は肩を竦めて見
せた。

「俺は行かねえ。お前たちだけで【ウラバン】に会えば良い」

「そうか」と短く答え、世之介は最後により込んだ。何を考えてい
るのか知らないが、一緒に従いてこられるほうが剣呑そうだ。

世之介が席に腰を下ろすと同時に、扉が静かに閉まり、浮揚機は
再び空中に浮かび上がった。茜は初めての経験らしく、目をきよと
きよとと落ち着かなく彷徨わせ、窓に鼻をくつつけるようにして、
外を覗き込んでいる。

世之介は窓から屋上を見下ろす。風祭が顔を挙げ、こちらを見上げてゐる。浮揚機が向きを変えると、風祭はくるりと踵を返し、戻っていった。

浮揚機は静かに【リーゼント山】に近づくと、山頂に向かって進路を取った。日差しは夕暮れに近づき、ほぼ真横から差している。金色の光を浴びた【リーゼント山】は、金髪に染め上げられたリーゼントの頭髮そのものであった。完全に左右対称で、念入りに電髪を当てられた髪形である。

イッパチは興味深そうに、浮揚機の操縦装置を覗き込んだ。

「若旦那、こいつは大江戸で評判の、最新型の浮揚機でござんすよ。いったいなんで、こんな代物が、番長星にあるんでしょうね？」

「それも【ウラバン】とやらに会えれば、判ると思いますな」

光右衛門が静かに呟いた。世之介は身を乗り出し、目を細める。

「爺さん、あんた、もしかしたら、俺と同じことを考えているんじゃないのか？」

光右衛門は無言で世之介を見詰め、微かに頷いて見せた。茜は首を傾げる。

「何なの、同じ考えって？」

「いや……」と世之介は答を濁した。今は言葉に出したくない。

出迎え

浮揚機は【リーゼント山】の山頂に差し掛かり、空中で静止した。

静々と降下して行くと、山頂にばかりと格納庫が開く。内部は掘り抜かれ、空洞になっている様子だ。

格納庫は驚くほど広かった。浮揚機を収容するには大きすぎる。宇宙船一つ、そっくり収容できるほどだ。

浮揚機が着地すると、格納庫の天井が閉まっていく。羽根扉が開いて、世之介たちは格納庫の床に降り立った。

がらんとした格納庫には、あちこち梱包された荷が散在していた。格納庫の片隅に鋭励部威咤^{エレベーター}があり、扉が大きく開かれている。

「その鋭励部威咤に乗りなさい」

出し抜けに拡声器から声が響き、世之介は、ぎよっとなって立ち止まった。

「誰だ！ お前が【ウラバン】か？」

叫ぶが、応えは無い。格納庫はしんと静まり返り、先ほどの声が嘘のようだ。

世之介は下唇を噛みしめた。

「ようし、乗ってやろうじゃないか！」

率先して鋭励部威咤に向かう。そろそろと世之介を先頭に、全員が乗り組んだ。

途端に、扉が閉まった。階数表示はない。鋭励部威咤が降下しているのは、微かな感覚でしか判らない。

イツパチはしきりに唇を舐め、緊張している表情である。茜もまた、両拳をぎゅっと握りしめ、身を硬くしている。

光右衛門、助三郎、格乃進の三人はまったく態度を変えない。泰然として、落ち着き払っている。

やがて降下は止まった。溜息のような音がして、扉が開かれる。

薄暗い室内に、ぽつりと天井から弱々しい明かりが灯り、その真下に背の高い椅子が置かれている。誰か座っている気配だが、背中を向けて置かれているため、姿は見えない。

世之介が近づくと、ぐるりと椅子が回転して、座っていた人物が、こちらを向いた。

世之介は立ち竦んだ。椅子に座り、世之介を出迎えたのは、世之介のよく見知っている人物であった。

閃き

「あんだだっ たのか……」

世之介の言葉に、椅子に座った相手は、軽く肩を竦めた。

「あまり、驚かれていないようすな。世之介坊っちゃん！」

世之介は深く頷いた。【リーゼント山】で最新型の浮揚機を目にした瞬間、今までの疑問が、一挙にある一点に集約したかのような閃きを、世之介に与えていた。

「どちら様ですか？ お二人はお知り合いなのですか？」

光右衛門が口を開く。世之介は相手を睨みつけたまま、答えた。

「そう……。知り合いも知り合い。俺を、この番長星に送り込んだ張本人、但馬屋の大番頭の、木村省吾だ！」

世之介の隣で、 IPPACHI が全身を棒のように硬直させている。下顎だけがカクカクと、小刻みに震えていた。ようやく、声を振り絞った。

「大……番頭……さん！ こりゃまた、いってえ、どうして……？」

ジロリと木村省吾は IPPACHI を見た。省吾の凝視に、IPPACHI は電流が全身に流れたかのように、びくっと飛び上がる。

「お前は少し黙っていなさい！」

鋭い叱声を上げたかと思うと、すぐ柔和な目付きに戻り、世之介の背後の光右衛門、助三郎、格乃進、最後に茜に目をやった。

「よろしく。そちらの四人様は、初めて御目文字しますね」

但馬屋大番頭の木村省吾は、凄みのある笑みを浮かべ、椅子から立ち上がる。

渋い柿色の着流しに、但馬屋の屋号が染め抜かれている印半纏と、前掛けをして、腰には大福帳を下けている姿は、どう見ても実直な商人あきんどにしか見えない。

「但馬屋の……大番頭」

さすがに光右衛門は省吾の正体を知って、驚きの表情を浮かべている。

茜が疑問を投げかけた。

「ねえ、あんた【ウラバン】なの？」

茜の言葉に、省吾は片頬に笑みを浮かべ、ゆっくりと頷いた。

「左様、わたくしが、番長星の【ウラバン】なんです。勝又茜さんと仰いましたかね」

茜は目を一杯に見開いた。

「あたしのこと、知っているの？」

「はい。よく、知っておりますよ。確か、お兄さんの消息をお尋ねになりたいのでしょうか？」

「お兄ちゃんがいるの？　ここに？」

茜は前のめりになって叫ぶ。今にも省吾の前に駆け出しそうになる。いや、実際に駆け出していた。

障壁

が、数歩進んだところで、どすんと茜の身体が何かに遮られる。省吾は優しく声を掛けた。

「気をつけて！ そこには重力障壁^{バリア}が張られているから、強引に押し通ることはできませんよ。まあ、当座の用心ってやつですな」

茜の身体は、何か弾力性のあるものに押し返されたように、あっさり跳ね返された。顔を真っ赤にさせ、目には涙を溜めていた。

「教えてよ！ お兄ちゃんはどこ？」

省吾は宥めるように手を上げた。

「後です！ 今はまず、世之介坊っちゃんとお話があるのです。坊っちゃん、少し見ない間に、見違えましたなあ！」

世之介はふーっ、と大きく息を吐き出した。

「ああ、俺は変わった。あんたのおかげだね。この？伝説のガクラン？が、俺を変えた。教えてくれ。こいつを俺が手に入れるよう細工したのは、あんただろう？」

省吾は「くくっ」と小さく笑った。

「ご名答！ 坊っちゃんが、番長星に不時着したら手に入れるように、手配しました」

「どうやって、そんな芸当ができたんだ。いや、そもそも、俺を番

長星に招いた仕掛けは、なんだ？」

省吾の目付きが深くなる。

「もう推察はついていると思いますが？」

世之介は顎を上げた。

「あんたの口から聞きたい！」

「よろしい！」

省吾は再び椅子に腰掛けた。ちよつと空中に手をやり、ひらひらと手の平を閃かせる。すると全員の背後に、床から椅子が迫り出てきた。

「話は長くなりますから、楽にして頂きたい。どうぞ、お座りなさい！」

光右衛門が、まず座った。茜も、すくと身体力が抜けたように腰掛ける。IPPパチは、へたり込むように尻を乗せた。

立ったままなのは、世之介と助三郎、格乃進の三人である。省吾は眉を顰める。

「お座り下さい、と申し上げたのですが」

世之介は腕を背中に回し、胸を張った。

「俺は、これでいい！」

二人の賽博格も無言で頷く。

省吾は軽く頷いた。両手の指先を合わせ、金字塔ピラミッドの形にして、顎を引き寛ぎの姿勢をとった。

行動予定

「それでは、お話ししましょうか。まずは、どうやって坊っちゃんを番長星へ招き入れることができたのか？ 鍵は、そこにいる IPPACHI です」

省吾の指摘に、IPPACHI は椅子の上で飛び上がった。

「あ、あつしが？」

省吾は世之介に視線を当て、ちよつと首を傾げて見せた。

「坊っちゃんは、それも判っておられたようですね」

世之介は高々と顎を上げたまま答える。

「俺は、^{アマゾン} 尼孫星に出かけるために【滄海】という船に乗り込んだ。その時に、見慣れない小型の宇宙船を見かけたが、あれはお前だったんだな。さあ、続ける！」

「はい」と頷き省吾は言葉を続けた。

「IPPACHI をお供にするよう、申し上げたのは、わたくしです。

IPPACHI には密かに行動予定を組み込み、坊っちゃんの乗り組んだ【滄海】が超空間に入って、ある時点で IPPACHI に非常脱出装置を動かすよう、指示を与えておきました。IPPACHI には自覚はなく、非常脱出装置をきつちりと手順どおりに操作したのです。

いくら IPPACHI がお調子者で、偶然に手が触れたとしても、ち

やんとした手順を踏まなければ、脱出装置は動きませんからね。

その結果、坊っちゃんの乗り組んだ【滄海】の船室は、番長星の近傍に予定通り、出現させることができたのです」

世之介は静かに尋ねた。

「では？伝説のガ克蘭？は？ 俺が番長星に漂着することを予想できたとしても、あの場所でガ克蘭を手に入れることは、予想できなかつたはずだ」

省吾は肩を竦めた。

「簡単なことです。番長星の大規模量販店、美湯灰善は、どこにも存在する連鎖店チェーンです。

いずれ坊っちゃんはこの番長星を脱出するために【ツツパリ・ランド】を目指すでしょうことは、予想できます。そのためには、必ず美湯灰善を利用する。総ての店の店員に、これこれこういう風体の客が来たら、ガ克蘭を勧めるよう指示をしておいて、総ての店舗に、同じガ克蘭を用意させたのです。

番長星では極小機械ナノ・マシーンによる無限の生産能力により、同じ？伝説のガ克蘭？を何着でも用意できるのですからね」

世之介は自分のガ克蘭の裾を、ちよつと摘んで呟いた。

「一着だけじゃなかつたのか……」

省吾は指を一本ひょいっと立てて見せた。

「今は、一着だけです！ 坊っちゃんが手に入れた瞬間、他の店に

あるガクランは総て自己崩壊するよう、指示をしておきました。今では倉庫の中で、一山の埃に成り果てております」

省吾は、得意そうであつた。

正直者

世之介は唇を舐めた。いよいよ肝心の疑問を尋ねる時がきたのだ！

「それで、どうして、俺を番長星におびき寄せたんだ？ 何が目的だ？」

省吾の唇が真一文字にニイーツと、微笑の形に引き伸ばされる。

「坊っちゃんに？伝説のガ克蘭？を身に着けて貰いたかったからです！」

世之介は再び自分のガ克蘭を見た。

「俺に？」

「はい。それで、そろそろ、わたくしにガ克蘭をお返し頂きたいと思ひまして。もう、よろしいでしょう？ それは、わたくしの物です」

省吾は座ったまま片手を差し出す。世之介は怒りの声を上げた。

「返せ、だと？ 今更、何だ！ なぜ、俺に着せる必要があつた？」
「坊っちゃんですか、できなかったからです。そのガ克蘭は、見かけは唯のガ克蘭でも、中身は一種の まあ、知性体とも言えるかもしれません。ガ克蘭と着用者は一体となつて、あらゆる事態に対応します。坊っちゃんが経験なすつたことは、ガ克蘭は着実に学び、成長するのです。もう、すでにガ克蘭は、完全になりました！」

世之介は軽く頭を振った。

「だから、なぜ、俺なんだ？」

「坊っちゃんは正直者……それも、馬鹿と超が付くほどの正直者です。しかも、真っ正直で、正義感もお強い。わたしは坊っちゃんが、こんな赤ん坊のころから見守っておりますから、よく知っております。ですから、ガクランの着用者として理想的だったのです」

狂戦士計画

その時、光右衛門がなぜか一步、前へ歩み寄った。

「そのガ克蘭は、狂戦士計画の残存物ですか？」
バーサーカー

光右衛門の言葉に、省吾はさっと顔色を変えた。青白くなり、眉間がきつく狭まった。

「なぜ、それを知っている？ 狂戦士計画のことは、幕府の極秘事項のはず！ お前の正体は、何だっ？」

光右衛門は含み笑いをして答える。

「何、わたくしは、越後の呉服問屋の隠居で、光右衛門と申す者。ただ、ちよつと昔、小耳に挟んだことがございまして」

省吾は立ち上がり、きつと指を突きつけた。

「嘘だっ！ たかが呉服問屋の隠居が知りえる情報ではないっ！ 但馬屋のように、幕府と直取り引きできる大店のおおだな大番頭であるわたくしでないと、知ることは不可能だ！」

先ほどもでの冷静な態度は吹き飛ぶように掻き消え、省吾の顔には不審と焦りが複雑に織り成していた。光右衛門は澄ましたまま、言葉を続ける。

「狂戦士計画は、理想的な兵士のための強化服を作り出すための研究でしたな。」

着用者の肉体、精神に直接交感し、どんな恐怖にも負けない意思と、賽博格戦士並みの体力を保証する。

しかし狂戦士とは、まさに的確な名称でした。

この計画で生み出された戦士は、一人残らず発狂して、手当たり次第に破壊を撒き散らす狂人となってしまいました。以来、幕府はこの計画の存在を、ひた隠しにして口を拭っていたのです」

光右衛門の暴露に、省吾はぜいぜいと大袈裟に喘いでいたが、やがて手を顔にやり、ぶるんと拭うと、一瞬にして冷静さを取り戻した。

改革

「そつだ……」。

俺は狂戦士計画を古い記録で知り、何としても完成させるべく、密かにこの番長星に持ち込んだ。伝説の「バンチョウ」の存在が、計画の骨子である強化服をガ克蘭に仕立て直すきっかけになった。お前が言つたように、初期の計画実施で強化服を着用した被験者は、一人残らず狂的な戦士に変貌し、手に負えなくなつてしまつた。

俺は原因を探り出した。力を行使する理想的な人格が、強化服には欠けていた。理想的な人格を付与するため、俺は世之介に目をつけた……」

省吾の「坊っちゃん」という呼びかけが、いつの間にか「世之介」という呼び捨てに変化している。さらには「わたくし」というのも「俺」になつていた。

今や省吾は、但馬屋の、有能な大番頭の仮面を脱ぎ捨てていた。

「世之介は文字通りの、坊っちゃん育ちだ。乳母日傘で育つて、一切の悪意というものから遮られ、他人を疑うことを知らず、また世之介自身も、他人を陥れるなどの悪徳から免れている。それを強化服に学ばせれば、理想的な戦闘服になると計算したのだ。ガ克蘭は必要な経験を吸収し、今や、俺の待ち望んだ状態になつた！ さあ、返して貰おうか……」

世之介は叫んだ。

「何の目的で、そんなことをする？ お前は謀反を企んでいるのか？」

「謀反？」

省吾はニヤリと笑った。くつくつと込み上げる笑いを堪えていたが、やがて爆笑した。

「成る程、謀反ね！ そんな阿呆らしいことをするために、わざわざそんな七面倒臭い計画を立てたわけではない！ 俺は、番長星を改革するために実行したのだ！」

光右衛門は眉を上げた。

「改革？ そんなことを仰るあなたは、いったい、何者なのです？」

省吾は胸を張った。

「俺は元々、番長星の人間だ！」

衝撃

衝撃が何度も続くと、徐々に馬鹿らしさを加えるものだ。世之介は省吾との言葉が、何だか夢の中の会話に聞こえていた。

「番長星の人間は、傀儡人や杏菊紹偉童に傳かしずかれ、怠惰になる一方だ。自分では何もできず、ただただ、格好をつけることしか考えていない。」

俺は若い頃、番長星にやってきた幕府の宇宙船に密航して、地球に向かったのだ。地球では、あまりに番長星と違っていて、人は皆、自分の能力で生活している。

俺は衝撃を受けた。但馬屋に奉公するようになってからも、いつも番長星の現状を思い返していた。それでいつか、番長星に帰って、自分の手で改革する日を待ちわびた」

省吾は肩を竦めた。

「俺は、番長星では落ちこぼれた。」

喧嘩など金輪際したくもなかったし、無用な粹がりなど馬鹿馬鹿しいと思っていた。内心、番長星の連中を憎んでいたのかもしれない。だから？伝説のガクラン？を普及させ、番長星の総ての男たちに着用させることを思いついた。

ガクランは着用者を変化させる。世之介の心を、番長星に広めることを願って……」

茜は眉を寄せ、怒りの表情を浮かべる。

「それじゃ、番長星の女は埒外だったの？ 番長星に住んでいるのは、男ばかりじゃないのよ！」

省吾は軽く頭を下げる。

「勿論、女性たちのことも考えておりますよ、お嬢さん。世之介の計画がうまく行った暁には？伝説のセーラー服？計画も着々と進めております」

「まあ」と茜は微かに肩を下げた。両腕がだらりと垂れ、顔には心底、呆れ返ったと言わんばかりの表情が浮かんでいる。

世之介は背中を反らせ、軽く笑った。

「それで、どうやって俺から？伝説のガクラン？を奪うつもりだい？俺は脱ぐつもりは一切ないからな！」

省吾は物柔らかな物腰を取り戻した、すっかり自信満々な様子になっている。

「そんな、無理矢理などいたしませんとも。ガクランはすでに役目を果たし、すべての記憶資料を、この部屋にある計算卓に送信しております。世之介坊っちゃん、わたくしが話を続けていた間にね！」

五人衆

さつと片手を上げると、今まで薄暗い照明しかなかった室内が、いきなり眩しい照明に照らし出されていた。

すると、今まで隠れていた省吾の背後の空間が顕わになった。

そこには直径十間はあるかと思われる、円形の水槽があった。水槽には、真つ黒などろりとした液体が縁近くまで、なみなみと張られている。

と、液体の表面が、どぷりと波立った。

一方の壁の一部に扉らしき隙間ができ、数人の男女が姿を表した。皆、生真面目そうな表情の、どちらかというとな個性な感じの若者だった。

省吾は勝ち誇った。

「さあ！ 新生？伝説のガ克蘭ン？による、真の伝説の始まりだ！今、あなた方の目の前にいる男女は、番長星に新たな秩序をもたらすため、わたくしが長年に亘って訓練してきた人間である」

がばり、ざばりと水槽の表面が波立ち、水面が持ち上がった。ざわざわと無数の触手らしきものが蠢き、何かを形作っているようだった。

光右衛門は、憂慮の表情を浮かべる。

「微小機械ナノ・マシンですな。何かを作ろうとしているようですが……」

液体の表面から姿を表したのは、数着の衣服であった。

しかし、ガ克蘭には見えない。色は原色で、赤、青、黄色、緑、桃色^{ピンク}の五色それぞれの色をした、五着の衣服である。

衣服には、同じ色の、防護帽^{ヘルメット}が付属していた。手袋、長靴が付属していて、全身をびったり覆う形になっている。

現れた五人の男女は、各々着用する衣服が決まっている様子で、迷うことなく各自の色の衣服を身に纏う。

真つ赤な色を身に着けた男が、前へ一歩さつと進むと、高々と叫んだ。

「われら五人の勇者！ 番長星にはびこる無気力、無関心、怠惰を一掃するため、ここに集まったのである！」

青の制服を身に着けた男が後を続ける。

「われわれは、番長星を改革する、いわば生徒会である。その名も【セイント・カイン】五人衆！」

水槽

五人は自己紹介に移った。

「セイント・レッド！」

「セイント・ブルー！」

「セイント・グリーン！」

「セイント・イエロー！」

イエローと名乗った男は、やたら太っていた。五人の中で唯一人の女性は、当然のことながら「セイント・ピンク！」と叫んでいた。

五人は声を合わせ、^{ボース}見得を決めた。

「五人揃って【セイント・カイン】！」

省吾は勝ち誇った笑いを上げていた。

「どうだ！ この五人が番長星に革命を起こすのだ！ 番長星に新たな正義が生まれる……俺の待ち望んだ希望が……！」

突然、水槽の液体に漣が走る。省吾はくるつと水槽に振り返り、驚きの声を上げた。

「何だ？ 計画は終了したはずだ！ なぜ活動をやめない？」

「？伝説のガクラン？を寄越せ！」

大声が轟いた。五人が出現した隙間に、もう一人の男が姿を表す。逆光で顔は見えないが、樽のような胴体に、逞しい身体つきの巨躯

が立っていた。

風祭である。

「俺は、戦闘用賽博格として、最強となった。だが、まだ充分じゃねえ！俺の身体に？伝説のガクラン？が加われば、俺は無敵になるだろう……」

省吾は顔色を変えた。

「よせ！馬鹿な真似をするんじゃない！」

「？伝説のガクラン？を頂くぜ……」

一歩さつと前へ出た風祭はニタリと笑いを浮かべると、素早く空中に身を躍らせ、水槽に向かって飛び込んだ！

泡

風祭の巨体が、水槽に頭から飛び込んでも、飛沫はまったく上がらなかった。

「ずばり、と埋まった風祭の全身は、波一つ立てず、あっさりと微小機械ノーマシンが蠢く水槽に、一瞬にして消えている。」

微小機械は水のように見えて、実は目に見えないほどの粒子の集まりである。だから飛沫など上がるわけがない。

水槽は、ぺたりと鏡のような表面のまま、静まり返っている。縁にじりじりと近寄った省吾は、はあはあと荒い息を吐きながら、恐る恐る覗き込んだ。

「馬鹿な……！ 馬鹿な……！」

同じことを何度も繰り返しながら、両手を戦慄かせた。

五人の原色の制服を着用した【セイント・カイン】は、ぼーっとして馬鹿のように突っ立っている。

「セイント・レッド」と名乗った、真っ赤な制服を着た男が、省吾に話し掛ける。

「あのー、僕ら何かお役に立てますか？」

「うるさい」とでも言うように、省吾は目を水面に釘付けにしたまま、腕を苛立たしく、ぶんぶん振り回す。

レッドは所在無げに、頭を掻いた。

世之介は光右衛門に話し掛けた。

「どうなっちまうんだ？ 風祭の野郎、あん中に飛びこんじまった

ぜ」

「ふむ……。あの男の狙いは、微小機械に組み込まれた？伝説のガ克蘭？の作成記録を使って、自分の能力を高めるための改造だな。恐らく、木村省吾が世之介さんのガ克蘭の記録を微小機械に送り込む時点で、密かに自分だけの行動予定を組んでいたのでしょう」

光右衛門の答に、世之介は首を傾げた。

「あいつはもう、賽博格に改造されちゃっているぜ！ それなのに、まだ改造したいのか？ そんなことして、大丈夫なのか？」

突然、水槽の表面がガバガバゴボゴボと音を立て、泡立ち始めた。瀝青タールのような、真っ黒な液体に似た微小機械が、一斉に活動を再開したのだ。

ボコン、と大きく音を立て、直径三尺はあろうかと思われる巨大な泡が弾け、どぶんどぶんと大きく表面が波立った。

省吾は「ひっ！」と小さく悲鳴を上げ、水槽から飛び退き、へたへたと腰を抜かしていた。

杖

状況を見て取った光右衛門は、表情を険しくさせ、手に持った杖をなにか掲げるようにして歩き出す。

世之介は声を掛けた。

「爺さん！ そこには障壁が……」

光右衛門は手にした杖を掲げ、さっと横に薙ぎ払う。そのままスタと歩いていく。

障壁の存在した辺りを、何らの障害もなく、あっさりと通過した。ちよつと振り向き、口を開く。

「もう障壁は存在しません」

世之介は呆れて、あんぐりと口を開いた。助三郎に向かって尋ね掛ける。

「どうなっちまったんだ？ あの爺さん、何をした？」

「爺さんは……」

言いかけ、助三郎は慌てて自分の口を押さえた。いつの間にか世之介の口調が移ってしまったのだ。顔を真っ赤にさせ、息を整えてから、答える。

「ご隠居の手にした杖には、あらゆる障壁を中和する装置が仕掛けられて^{グラビトン・マトリックス}いる。重力障壁を作る重力子格子は、ご隠居の杖で消去されたのだ」

助三郎の説明に、世之介は驚きのあまり叫んでいた。

「そんなことができる爺いが、ただの隠居なんかじゃあるもんか！
いったい、爺いの正体は、なんだ！」

助三郎は謎めいた目つきになった。

「いずれ、判る……いずれな……」

省吾の側へ近寄った光右衛門は、静かに話し掛ける。

「大番頭さん。ここにいつまでもいては危ない。早々に退散すべき
ではないですか？」

「はあ？」

省吾は馬鹿のように口を開け、光右衛門を見上げた。顔には一杯
に汗が噴き出し、てらてらと光って見えていた。

威厳

光右衛門は、そつと省吾の脇に手を入れる。

「さあ、立つのです！ 愚図愚図はしてられませんぞ！」

省吾は光右衛門の促しに、ギクシャクと出来の悪い傀儡人のように立ち上がる。光右衛門は助三郎と格乃進に鋭く声を掛けた。

「助さん！ 格さん！ さあ、このお人を避難させなさい！」

「はっ！」

光右衛門の命令に、二人は素早く動いた。大股に省吾に近づくと、肩を貸してやる。省吾は二人に運ばれながらも、水槽を未練がましく見詰めていた。

光右衛門は水槽の周りに立ち竦んでいた【セイント・カイン】の五人に声を掛けた。

「あなた方も逃げなさい！」

威厳のある光右衛門の命令に、五人の身体に同時に電流が流れたかのようだった。五人はビクンと飛び上がるように動き出すと、あたふたと水槽から離れていく。

やってきた壁の出入口を目指し、部屋から姿を消した。

「さあ、皆さん、逃げますぞ！」

光右衛門は【セイント・カイン】の向かった先を目指しながら、大声で叫んでいた。世之介は、茜とIPPACHUを従え、光右衛門の後を追った。出入口に足を踏み込む直前、ちらりと水槽を振り向く。

真つ黒な微小機械の群れが、水槽の真ん中から一本の蚊柱のように立ち上がっている。

無数の黒光りする触手が蠢き、中心に何か、人間の形のようなものが垣間見える。風祭なのかどうか、世之介には見分けがつかない。

出入口の扉が閉まり、あとは判らなくなった。

対策

通路を早足で歩きながら、世之介は呟いた。
「何が起きたんだ？」

光右衛門が口早に答える。

「怖れていたことが起きてしまいました。爆嘯スタンビートが始まったのです！」
「爆嘯？ ああ、微小機械の際限ない増殖って、あれか？」

光右衛門は強く頷く。

「左様です。爆発的な増殖と、際限ない資源の濫費が、同時に進行します。何とか食い止めないと、番長星は忽ちのうちに、荒れ野原と化すでしょう」

「食い止める方法は？」

「微小機械を制御する制御室が、どこかにあるはずですが、そこで制御する暗号コードを入力すれば……」

世之介は助三郎の肩を借り、ようやく、よろばい歩いている省吾に注意を向けた。

省吾の顔は真っ青で、目は虚ろである。素早く近づくと、省吾の胸倉をむんずと掴み上げる。

「おいっ！ 省吾！」

「んあ……？」

呆けたような顔つきで、省吾の二つの目玉が世之介の顔に向かう。が、瞳は何も見ておらず、焦点はとろんと合っていない。

「聞いたろう？ 微小機械を制御する場所は、どこだっ？」

世之介は省吾の胸倉を掴み、ぐらぐらと揺すぶった。揺すぶられ、省吾の頭は前後にがくがくと振られる。

制御室

茜が割り込む。

「ねえっ！ お兄ちゃんは、どこ？」

省吾の視線が茜に向かう。唇が微かに動き、言葉を押し出す。

「勝又勝《まさる》のことか……？」

茜は勢いづいた。

「そうよっ！ あたしのお兄ちゃん、勝又勝の行方！ どこにいるの？」

茜の顔が青ざめた。

「まさか……お兄ちゃんも賽博格に？」

サイボーグ

省吾の唇が笑いの形に歪んだ。

「いいや……。あいつは賽博格になることを拒否した。賽博格の力を借りるなど、男らしくないと、ほざいてな……」

茜は明らかに、安堵の溜息を吐いた。

「お兄ちゃんらしいわ……。それで、お兄ちゃんは、どこ？」

突然、省吾はしゃっきりと回復した。猛烈な速度で、思考が回転しているかのようだ。

「制御室へ連れて行ってくれ！ すぐそこだ！ ほら、この先の曲がり角を右に……突き当たったところに、扉がある……！」

腕を挙げ、震える指先を当て所なく前方に彷徨わせる。助三郎はひよい、と省吾の身体を抱え上げ、急ぎ足になった。

省吾の言葉通り、曲がり角の先に扉があった。

格乃進が扉の取っ手を握りしめる。

「鍵が……！」

格乃進の顔が真剣になる。ぐっと全身に力が込められた。服の下から、賽博格の逞しい筋骨がぐっと盛り上がった。

べきんっ！ と音がして、扉の取っ手が弾け飛んだ。格乃進がどすんと肩を押し当てると、蝶番ごと扉が倒れこむ。

鎧武者

内部には、みっしりと、様々な装置が積み上げられていた。装置にはそれぞれ、幾つもの表示装置が接続され、様々な数値や図表が映し出されている。

省吾は倒れこむように中央の操作卓に取り付くと、素早い動作で次々と把桿スイッチを操作する。

中央の表示装置ディスプレイに、水槽のある部屋が映し出される。

水槽からは真っ黒な微小機械が溢れ、部屋全体がてらてらとした黒光りする液体に覆われていた。勿論、液体に見えるのは見掛けだけであるが。

水槽の辺りでは、先ほどちらりと見た無数の触手による柱が立ち上がり、柱を中心に、ぐるぐると竜巻状に渦を描いている。

省吾は猛然と把桿を操作する。次々と打鍵キを弾き、猛烈な勢いで命令を入力した。

画面を見詰めた省吾は、がっくりと肩を落とした。

「駄目だ……手遅れだ……！ 動作中止の命令を出したが、受け付けない」

同時に、表示装置の部屋の眺めが一変した。床に溢れかえった微小機械がぐうつ、と盛り上がり、中央の柱が四方に弾けた。

中央には、一人の男が立っていた。

風祭か？

しかし、まるで別人のように、変貌している。全身が黒光りする鎧に覆われ、顔はまったく見えない。あたかも戦国の鎧武者か、大魔神だ。

ゆっくりと片足を上げ、鎧武者は一步を踏み出した。波立つ微小機械の水面を、のろのろとした動きで歩いていく。

べちゃり、と足底が踏みしめ、一步を踏み出すと、どろりと黒光りする微小機械が糸を引き、ねちゃりとした粘度を示している。

「ぐぐぐぐぐ……」

鎧武者は喉の奥から、ごろごろとした呻き声を上げた。よろり、と上体が泳ぎ、何かに必死に耐えている。

鼾

と、不意に顔を挙げ、吠え声を上げた。

「ぐわああああっ！」

風祭の声に反応したかのように、周りの微小機械ナノ・マシンの群れの動きが激しくなる。びゅんびゅんと大小無数の固まりが四方八方に飛び跳ね、画面は埋め尽くされる。

表示が途切れる。何も映し出してはいない。

「カメラ 撮像機の接続が切れた……」

省吾は、ぼんやりと呟いた。絶望感が、ありありと表情に浮かんでいる。

茜は苛々と足踏みする。

「それで、お兄ちゃんはどこなのっ！ いい加減、答えてっ！」

のろのろと省吾は茜に顔を捻じ向けた。ふっと苦い笑みが浮かんだ。

「いいだろう。教えてやるよ……」

省吾の指先が一つの把桿を弾く。

制御室の内部に「ぐおおおっ」という猛烈な鼾が響き渡った。ポカンとしている茜に向かい、省吾は顔を顰めた。

「あいつめ……一寸でも目を離すと、これだ！　おい、勝^{まろ}！　勝又勝！　聞こえるか？」

省吾の指先が、手早く把桿を弾く。

幾つもある表示装置の一つが明るくなり、中心に一人の男が映った。

男は寝椅子のような物に凭れ、目を閉じて鼾を掻いていた。男が寝入っているのは、かなり狭苦しい空間のようで、ほとんど身動きの余地すらなさそうである。

「お兄ちゃん！」

茜が大声を上げた。

びくつと画面の男は身動きをして、薄目を開いた。向こう側の表示装置に目をやり、目を大きく見開き、叫んだ。

「茜！　お前か……！」

「お兄ちゃん……」

茜は目に一杯の涙を溜めた。

理解

「茜、おめえかあ!」

画面の向こうの勝又勝は、最初驚きの反応を見せ、次いで思い切り顔を顰め、苦りきった表情になった。唇をへの字に曲げ、眉を寄せ、首を何度も振っている。

「何でわざわざ、やってきたんだ？ その様子じゃ、【ウラバン】と一緒にいいな」

怒鳴り声に近い。茜は気分を害した様子で、ぐいっと画面に顔を近づけた。

「何を言ってるのよ！ お兄ちゃんが勝手に家を飛び出して、父ちゃんや、母ちゃんがどんなに心配しているのか、判ってるの？ まったくもう……男つたら!」

画面の中で、勝は「助けてくれ!」とばかりに天を仰ぎ、手の平をぱつと開いた。

省吾は口早に、勝に向け話し掛ける。

「勝！ 今、大変な状況になっている。風祭という男を知っているだろう?」

勝の眉が下げられ、ちよつと考え込む表情になる。

「風祭？ ああ、賽博格志願の奴だな。あんたが、あいつを賽博格に仕立てた、つてのは知っている。奴が、どうした?」

省吾は手短に、現状を説明した。有能な大番頭らしく、少ない言葉数で、しかし的確な説明だった。聞いている勝は「ふむふむ」と相槌を打っていた。

ところが、微小機械の爆嘯に話が及ぶと、口をポカンと開けた。

「つまり、どういうことだ？」

要するに理解できていない。焦りに、省吾の顔から汗がポタポタと滴る。

「番長星の危機なんだ！ 風祭は微小機械に取り込まれ、自分の意思を失っている。だけではない！ 賽博格の身体に？ 伝説のガクラン？の要素を取り込んだ結果、怖ろしい怪物に変貌している！」

「怪物？」

勝は省吾の最後の言葉に反応した。爆嘯などの複雑な話題にはついていけないが、本能的に戦いの話題となると理解できるらしい。省吾は勢いづいた。

「そうだ！ 怪物だ！ あれと戦えるのは、お前だけだ！」

「戦い？ 喧嘩か？」

勝の目が、ぱつと輝く。血色が良くなり、態度も生き生きしてきた。

世之介は口を差し挟んだ。

「おい、省吾。いったい、何を話しているんだ？」

省吾は世之介に振り向き、口を開いた。顔付きは、以前の忠実な

但馬屋の大番頭に戻っている。

「坊っちゃん。あれと戦えるのは、ここにいる勝又勝だけなのです。なぜなら……」

省吾が言いかけた時、制御室全体がぐらぐらと揺さぶられる。微かな物音に世之介は入口を振り返る。

喪失

なんと！ 入口から、ヌラヌラした黒光りする流動体が迫ってきた！ 水槽から溢れた微小機械が遂に迫って来たのだ。

「あれを見る！」

世之介の叫びに、全員ギクリと身を強張らせる。茜は立ち上がり、顔色を青ざめさせた。

画面の中から、勝が声を張り上げる。

「おい！ 今のは何だ？ 何が起きた！」

省吾は悲鳴を上げた。

「あれが！ ここまでやって来た！ 逃げないと呑み込まれる！」

光右衛門が鋭い声を上げる。

「他に出口は、ないのですか？」

省吾は、おろおろ狼狽しているだけで、完全に虚^{うつろ}が来ている状態になっていた。光右衛門は微かに顔を顰めると、助三郎と格乃進に命令する。

「助さん、格さん。あなた方の力で、何とか脱出できませぬか？」

二人は力強く頷いた。格乃進が答える。

「やって見ましょう！ おい、助さん。あんたは、ご隠居と、この

大番頭を抱えてくれ。俺は、イツパチと茜さんを抱える」

世之介の顔を見て言葉を続けた。

「悪いが、世之介さんまで面倒を見ることはできない。しかし、あんたなら、自分で何とかできるはずだな？」

「当たり前だ！」

世之介は素早く頷いた。格乃進はニヤリと笑い返し、助三郎に命令する。

「よし、微小機械に捕まらぬよう、全力で脱出する。しかし、加速状態にはなるな！ 超高速で動くと、生身の人間は衝撃で、生きていられないからな」

助三郎は立ち上がり、答える。

「判っている。では、ご隠居、まいりますぞ！」

助三郎が両腕に光右衛門と木村省吾を、格乃進が茜とイツパチを抱え上げた。

「では、行くぞ！」

助三郎が宣言し、出口へ猛然と跳躍を試みる。微小機械に触れぬよう、壁を蹴り、宙に飛び上がる。格乃進も同じように、両腕に二人を抱えたまま、床を蹴った。

加速状態に入っていないとはいえ、さすが賽博格の動きである。壁を蹴り、空中を飛翔する二人は、まるで無重力の中にいるかのようだ。忽ち二人は出口から外へ飛び出、姿を消した。

世之介は、ぐっと全身に力を込め、目の前に迫ってくる真っ黒な微小機械に立ち向かった。

だつと床を蹴り、飛び上がる。が、すぐに世之介は、痺れるような恐怖を味わっていた。

力が抜けている！

充分飛び上がることができない。世之介は床に叩き付けられるように横たわった。

やたら身体が重い……。まるでガ克蘭が鉛のように思えた。全身がねばねばした疲労に包まれている。

糞っ！

世之介は歯噛みした。体力の喪失の原因を悟ったのである。

風祭との臆病試験で、チキン・ラン力を使い果たしていたのだ！

把桿

だん、だあん！

遠くから、二人の賽博格が壁を蹴り、空中を飛翔して遠ざかっていく音が聞こえている。音は、さらに遠ざかり、遂には聞こえなくなった。

世之介は、がくりと首を垂れた。

全身が鉛のように重くなっている。腹這いになり、びちゃびちゃと音を立て迫ってくる微小機械の群れを、凍りついたように見詰めているだけだ。

「おいっ！ どうした、そこにいる奴！ 何とか返事しろ！」

世之介は、のろのろと首を挙げ、制御室の画面を見上げた。画面には勝又勝の厳つい顔が大写しになっている。

「微小機械が……」

世之介は絶望感に、小声で呟いた。勝は画面に顔をさらに近づける。もはや画面から、はみ出そうだ。

鼻の穴がおっ広げられ、鼻毛が一本一本、見分けられるのを、世之介はぼんやりと見詰めていた。

「茜はどうしたっ！ そこにいないのか？」

「あいつなら、逃げたよ……」

勝は世之介の要領の得ない答えに、苛立つ表情を見せ、唸り声を

上げた。

「もう我慢できねえっ！ 今から俺が、そっちへ行くぞ！【リーゼント山】にいるんだろっ？」

世之介は答える気力を喪失していた。

勝は不意に穏やかな口調になった。

下手に出る作戦になったらしい。

「なあ、お前……。茜とは、どういう関係か知らん。だが、俺は、あいつの兄だ。なんとか助けたいんだ。だから、お前に頼む。制御卓の前に来てくれ！」

脱力感に苛まれつつ、世之介は最後の気力を振り絞り、さっきまで省吾が座っていた制御卓へと近づいた。一步、一步が果てしなく遠く感じる。

卓の椅子に座り込む世之介を、勝が心配そうに見守っていた。

「どうした、酷い顔色だぞ？」

世之介は疲れ切った声で返事する。

「疲れているんだ……。俺は、もう動けない……。眠い……」

ぐらぐらと頭が揺れる。実際、眠りの衝動が、すぐそこまで近づいているを感じる。勝は苛立たしげに叫んだ。

「眠るんじゃないっ！ いいか、お前が協力してくれないと、俺は動けねえ。頼む、お前の前にある赤い把桿レバーを入れてくれ」

揺れる視界の中で、勝の指示した赤い把桿を探す。

あつた。世之介の真ん前にある。把桿には透明な覆い《カバー》があり「バンチョウ・ロボ射出把桿」と説明文があつた。

「これを、どうするんだ？」

世之介の質問に、勝は簡潔に答えた。

「押せば良い！」

ゆっくりと手を伸ばし、指先で世之介は覆いを撥ね上げる。把桿は世之介がぐいと押した瞬間、内部の燈火が点灯し、赤く輝いた。

パイロット

びいびいーっ！

制御室内部に、けたたましい警告音が鳴り響いた。怖ろしいほどの音量に、世之介の睡魔は吹っ飛んでしまふ。はっ、と顔を上げ、他の表示装置に目をやる。

ぱっ、ぱつと幾つかの表示装置の映像が切り替わり、校舎を外から撮影する撮像機の眺めになった。

校舎の中央にある時計台が、動き出している。前面の壁がぱくりと開き、内部の吹き抜け構造が頭わになった。画面下方では、驚き騒ぐ人間たちが、豆粒のように見えている。

画面には、番長星の象徴である伝説のバンチョウを模した立像が聳えていた。

真っ赤なガクランは、今にも足を挙げ、動き出しそうな躍動感に満ちている。

いや！

立像は、実際に動き出した。

ぐい、と片足を上げ、ずしんと地面を踏みしめる。

「わははははっ！ 動いたぜ！」

勝は画面の中で哄笑していた。画面の外から、何かの表示装置らしき照り返しが顔を輝かせている。手許が素早く動き、機械を操作しているようだった。

「俺は、バンチヨウ・ロボのパイロットだ！ さあ、何だか知らねえが、大変な事態が起きていると「ウラバン」の奴は、ほざいていたな！ 安心しろ！ 今すぐ助けに行くぜ！」

そうか、あの立像は、実は傀儡人だったのだ……。勝は傀儡人バンチヨウ・ロボと呼ぶらしい のパイロットなんだな……。

霞む意識の中、世之介はやっとそれだけを考え、ぐらりと倒れ掛かった。画面の中で、勝が驚きの表情になった。

「おい！ 大丈夫か？」

横倒しになる世之介の視界に、徐々に迫ってくる微小機械の、真っ黒な光沢が近づいてきた……。

意識

ぴちゃぴちゃと音を立て、微小機械の群れがゆつくりと、しかし、確実に、仰向けに倒れている世之介に近づいてくる。

世之介は顔を音の方向に捻じ向け、じっと待ち受けた。もう、指一本、ぴくりとも動かすだけの気力も、体力も失われている。

どうなるんだ……。

漠然とした恐怖が込み上げるが、すでに考えることも面倒だった。どうにでもなれ……。世之介は退嬰的な思考に陥っていることを、ぼんやりと自覚していた。

「おいっ！ その奴！ 何、ボケーツとしているんだ？ とつとと立ち上がらねえと、呑みこまれるぜ！」

表示装置の画面からは、勝又勝が目を一杯に見開き、口角泡を飛ばして叫んでいる。

うるさいなあ……。

世之介は大の字に寝そべって、近づいてくる微小機械の黒光りする群れを待ち受けた。

遂に微小機械の、ぬらぬらする触手が、世之介の？伝説のガクラン？に達した！

瞬間、異様な衝撃が世之介の全身を貫いていた。

微小機械と？伝説のガクラン？は、元々が同じものである。微小機械から？伝説のガクラン？は産まれたのだ。

二つの微小機械は、今お互いを認識しあっていた。ガクランを構成している無数の微小機械の先端が情報端末となって、溢れた微小機械の本体と接触を開始している。

一瞬の間に、ガクランと微小機械の間で、大量の情報が遣り取りされていた。

水槽のあった部屋で、木村省吾が用意した計算機コンピュータに向けてガクランが発信した時とは、質的に違っていた。何しろ、直接お互いの端末を接触し合い、量的にも格段の相違を持った情報量が一気に遣り取りしあっているのである。圧倒的な違いであった！

情報の一部は、脳細胞を通じ、世之介の中にも流れ込んでいた。

今、世之介は万華鏡 kaleidoscopeのような視界を、我が物としていた。

微小機械が支配する、番長星のありとあらゆる場所に設けられた、端末の情報^が世之介の中にあつたのである。

世之介の意識は、否応無しに変貌を強いられていた……。

視界

世之介の身体は微小機械に呑み込まれ、どつぷりと真っ黒な流動体に沈んだ。その一方で、世之介の意識は、新たな地平に開かれている。

ああ、あそこに助三郎と格乃進がいる。二人とも光右衛門、 IPPACH、茜、省吾らを抱え、【リーゼント山】から脱出しようと、必死になっている……。

ふと視線を動かすと、いや、この言い方は正確ではない。世之介の意識の先が動くと言いきり直したほうが良い。

水槽のあった部屋に世之介の意識が向かうと、風祭が全身を微小機械に呑まれ、声なき絶叫を上げている。今、風祭は微小機械によって、徹底的に改造を施されている真っ最中であつた。

しかし、予想もしなかつた苦痛に、風祭の精神は全力で咆哮をした。純粹な苦痛、神経を直撃する強烈な衝撃が、風祭の全身を苦痛の業火で炙っていた。

風祭の仮面で覆われた顔が、天井を見上げる。二つの目玉が、憎悪を孕んで、青白く輝いていた。

風祭の両腕が差しのべられた。

「俺を、ここから、出してくれ！」

言葉ではなく、思考そのもので、風祭は叫んでいる。

風祭の差し伸べられた両腕から、真っ黒な微小機械の噴流が天井を直撃した。無数の微小機械が天井の固い岩盤を抉り取り、一直線に【リーゼント山】を貫く。

忽ち風祭の頭上に、大穴が穿たれていた！ 風祭の全身を微小機械が包み、大穴へと持ち上げていく。

世之介の意識が【リーゼント山】の外部に設けられた撮像機を通して、山頂から吹き上げる微小機械の真っ黒な光沢を捉えていた。

風祭が、微小機械の中から、ゆっくりと全身を現した。

今、風祭は巨大化をしていた。風祭の身体に取り付いた微小機械が層を成し、本来の体躯を何倍も増幅させていたのである。

二人連れ

世之介の拡大した視界に、【リーゼント山】に近づいていく人影を認めていた。世之介の好奇心が、人影に注意を振り向ける。

あれは……。

人影は、二人だった。一人は男で、もう一人は女である。女のほうは、怖ろしいほど太っていて、獰猛な顔付きをぶら下げている。狂送団の元首領と、母親の「ビッグ・バッド・ママ」の二人連れであつた。

あんなところで何をしているのか？

世之介の意識に、二人の会話が聞こえてきた。

「ねえ、ママ。まだ歩くのかい？ 少し、休もうよ……」

甘ったれた、首領の声が聞こえてくる。母親は唸り声で答える。

「何、おちゃらけたことを言ってるんだい！ 急ぐんだよ！ なんとしても、【ウラバン】に会う必要があるんだ！」

首領は不満げな声を上げる。

「どうしてさ……？」

ぐいつ、と母親が怖ろしい顔で首領に顔を振り向ける。母親の勢いに、首領は「ひっ！」と小さく悲鳴を上げた。

「お前、あいつのガクランを見なかったのかえ？？伝説のガクラン？を！」

不得要領に、首領は曖昧に頷く。

「？伝説のガクラン？は【ウラバン】にしか作製できないものなんだ！しかも、あれを身に着けると、怖ろしいほどの強さを手に入れることができる！お前、そんなガクランを、欲しくはないのかえ？」

「そりゃまあ……ね」

首領の唇が不満そうに突き出た。母親はさらに苛々と、足を踏みしめた。

「判んない子だね！いいかえ、あのガクランを身に着けた世之介って奴に、お前は恥を掻かされたんだよ！狂送団の首領を追い払われ、しかも、女の子もお前から取り上げられたんだ！悔しくはないのかえ？」

欲望

「女たち……俺の……」

たちまち首領の顔が醜く歪んだ。怒りに、首領の顔がどす黒く鬱血する。

「悔しいよ！ ああ、悔しいとも！ 畜生、世之介の奴！」

母親の顔が綻び、とっておきの甘い声を出す。

「そうだろう？ だから【ウラバン】にお願いして、もう一着の？ 伝説のガ克蘭？ を作って貰うんだよ。お前がガ克蘭を着たら、あの世之介なんてヒヨロヒヨロ優男なんか、敵じゃなくなる……。沢山の女の子も、お前に戻ってくるよ！ 狂送団の首領にだって、返り咲くことができるんだ！」

首領の両目が欲深そうにギラギラと煌いた。大きな頭を、ガクガクと何度も頷かせる。

「うん！ 欲しいよ！ 俺、何としても？ 伝説のガ克蘭？ を手に入れたい！」

その時、二人の目の前の岩壁から、どすん、どすんと何度も何か叩き付けるような物音が近づいてくる。二人はギクリと立ち止まった。

ぼこり、と岩壁が内部から崩れ、がらがらと音を立てて瓦礫が飛び散った。

瓦礫を掻き分け、姿を表したのは、助三郎と格乃進の二人だった。相当に苦勞して岩を掘りぬいたためか、二人の着衣はぼろぼろに干切れ、賽博格^{サイボーグ}の身体が顕わになっていた。

二人の賽博格は、目の前に立ち竦んでいる首領と、母親に気がつき、目を丸くした。

「お前たちは……狂送団の……」

助三郎が声を上げる。母親は「はっ」と仁王立ちになって叫んだ。

「あんたからこそ、こないだの！ 畜生、うちの拓郎ちゃんに、よくも酷いことをしたね！ 許さないからねっ！」

母親の怒りに、助三郎と格乃進は困惑していた。格乃進が、もの柔らかに尋ねる。

「お前たちこそ、このようなところで、何をしているのだ？」

尋ね返され、母親は口籠った。首領はジロジロと二人の賽博格体を眺めていた。

「あんたら、賽博格なのか……？」

首領の質問に、助三郎と格乃進は顔を見合わせた。助三郎が答える。

「まあ、そつだ」

首領は母親の耳に囁きかけた。世之介の聴覚は怖ろしく拡大していて、そんな小声の囁きすら、はっきりと聞き取っていた。

「ねえ、ママ。ガクランなんかより、賽博格のほうが良いな。あっちのほうが、もっと強そうだ……」

笑い

助三郎と格乃進は賽博格の聴覚を使って、今の会話を聞き取っていたらしく、苦笑していた。

「やめたほうが良い。賽博格など、なるものではないよ」

助三郎の忠告に、首領は怒りの表情を浮かべて尋ね返す。

「なぜだ！ 俺は強くなりたい！」

格乃進が首を、ゆるゆると振った。

「賽博格になったら、人間としての喜びは総て失われる。これを見る！」

格乃進は腰の辺りから、一本の透明な挿入函カートリッジを取り出した。首領は挿入函を眺め、首を傾げた。

「なんでえ、そりゃ？」

「我々の濃縮栄養パックだ。これ一つで、我らの脳細胞を半年は生かしてくれる。何しろ、我らの生体組織は、脳細胞しかないのですね。我々は人間の食事を摂ることができなくなっている」

首領の目が見開かれた。

「て、ことは……」

助三郎は頷いた。

「そうだ、それだけでないぞ。我々は、あらゆる人間の喜び、感覚を失ってしまった。もう、春の新緑も、夏の暑さも、更には冬の厳しい寒さも、我々には何の意味もないものとなっている。もはや、

取り返しもつかない！ そんな状況になっても、良いのかな？」

首領は真っ青になり、ブンブンブンと何度も首を振った。

会話が続く中、二人の賽博格がぶち空けた穴から、光右衛門、茜、イツパチ、木村省吾たちが姿を表した。

皆、外の光に、眩しげに目を瞬かせる。

「いや、まいりましたな。助さん、格さんのお二人が通路を作ると胸を叩いたときは、どうなることかと思いましたが、何とか脱出路を確保できました」

光右衛門の言葉に、茜が心配そうな声を上げた。

「でも、世之介さんの姿が見えない！ どうしちゃったのかしら……」

くくくくく……。

世之介は、思わず、笑いを漏らしていた。
ぎくつ、と茜が顔を上げた。

「今の、何？ 誰か、笑った？」

映像

一同は、薄気味悪そうな顔を見合わせる。

IPPACHIが、杏菊^{アンドロイド}紹偉童の人工皮膚を真つ青にさせ、視線をあちこち彷徨わせながら、呟いた。

「今の笑い声は、なんとなく若旦那のお声に似ているような……」

もう一度、世之介は笑い声を上げた。茜は怒ったような表情になる。

「世之介なの？ 悪い冗談は止しなさい！ どこに隠れているのよ？」

言われて世之介は戸惑った。さて、自分は、どこにいるのか？ 微小機械に呑み込まれた後、どうにもさっぱり、自分の身体を認識できていない。

世之介はどうかして、自分の姿を一同に見せたいという欲求に駆られた。微小機械は世之介の欲求に応えるべく、あらゆる接続を試した。

「わっ！」

大声を発し、IPPACHIがぴょんと飛び上がった。へたへたと腰を抜かし、震える両手を合わせて叫び声を上げる。

「若旦那！ 迷わず成仏して下さいよう！」

何事かと、全員IPPACHIの見詰める方向を見る。

「世之介さん……」

光右衛門が驚きに目を見開いた。
助三郎が慎重に声を掛ける。

「もしや、世之介さんなのですか？」

世之介は頷き、自分の身体を見下ろした。手の平を開き、まじまじと観察する。

「妙だ……透き通っている……」

イツパチが泣き声を上げた。

「それどころじゃござんせん！ 若旦那、お足が見えねえ……。こりや、てつきり成仏できずに、迷ってらっしゃるんでしょ？」

世之介の身体は透き通り、足下はふっと薄くなって、地面に消えている。とんと、幽霊である。

助三郎が目を光らせ、口を開いた。

「どうやら立体映像を送っているようだ。しかし距離が遠く、はっきりとした映像にはなっていない」

ホログラフイ

世之介は、にやつと笑った。それなら判る！ 自分の立場がようやくハッキリし、落ち着きを取り戻した。

大津波

「どうも、妙な具合になっちまった。実は……」と世之介は微小機械に吞まれた後の経験を、詳しく語った。

光右衛門は大きく頷いた。

「さもあらん！ 世之介さんのガクランと、番長星の微小機械が、影響し合ったのでしょうか。では、世之介さんは、ご無事なんですか？」

世之介は肩を竦める。

「無事かどうか、良く判らない。なにしろ、自分が今、どうなっているのか、さっぱり判っていないんだ……」

その時、格乃進が空を振り仰ぎ、緊張した声を上げた。

「皆、気をつけろ！」

驚きに全員が格乃進の視線を追う。世之介は即座に、格乃進の警告を理解した。

【リーゼント山】の山頂から、どろどろとした微小機械の群れが、後から後から、まるで鍋から吹き零れる泡のように、盛り上がってくる。すでに山肌を伝い、全員の立っている場所へと近づいてきた。

穿った出口に戻ろうと一瞬、穴の方向を見た助三郎であったが、すぐ断念した声を上げる。

「駄目だ！ こっちからも溢れてくる！」

助三郎の言葉どおり、穴の奥深くから、ぬらぬらとした黒い光沢が迫ってきていた。光右衛門は叫んだ。

「逃げるのです！」

さつと助三郎と、格乃進は、各々光右衛門ら一同を抱きかかえ、微小機械から逃れるため走り出した。

しかし全速力は出せない。抱きかかえたまま高速で動くと、抱きかかえた人間が、衝撃で酷い怪我、あるいは死亡すら懸念されるからだ。

後には、狂送団の首領と、母親がぼつんと残されてしまった。首領は近づいてくる真つ黒な固まりを見詰め、ガタガタと震え出し、母親の巨体に取りすがった。

「ママ！ ど、どうしよう……！」

ぐわっ、と大津波のように真つ黒な微小機械が襲い掛かる。

母親は必死に悲鳴を堪えていた。

だが、首領は恥も外聞もあらばこそ、全身で悲鳴を上げ、喚いていた。どどつと殺到する微小機械が、二人の全身を呑み込んでいく。

疾走

頭上から近づく巨大な質量を感じ、世之介の意識が山肌を見上げた。

真つ黒な雪崩のように落ちてくる微小機械の中に、風祭の変貌した巨体があった。すでに、風祭の姿は人間とはいいがたい。全身を覆う真つ黒な鎧に、憤怒の表情が固まったままの仮面。まるで怒りの化身そのものである。

ぐわーっ、と咆哮を上げ、風祭は山肌を疾走していた。足下は大量の微小機械が津波となり、あらゆる物質を呑み込み、同時に大量の生活必需品を生産していた。

微小機械が通りすぎた後は、無数の衣類、食糧、小物、嗜好品、装飾品などの雑多な商品が残されている。すでに生産計画など無視された、際限無しの濫費が始まっていた。

世之介の意識は、大津波のように押し寄せる微小機械に向けられていた。微小機械は、ありとあらゆるものを貪り、生産するという圧倒的な欲求に駆られている。

世之介は何とか、微小機械の爆嘯を抑えるべく、意志の力による説得を開始した。

やめろっ！ このままでは、番長星がお前たちに総て呑み込まれてしまう。それはお前たちの目的なのか？

微小機械は一斉に、世之介の語り掛けに応える。

呑み込め！ 取り込め！ 急げ、急げ！ 間に合わない！
産み出せ、作り出せ、俺たちは最高の工場だ！

微小機械の意思は、目的地のない無自覚なものだった。世之介は必死になって、微小機械を制御しようと、意志の力を振り絞る。

世之介は気付いた。微小機械の暴走を推し進めているのは、風祭の意志の力であることを。風祭の自己肥大した、強さへの憧れが、微小機械の暴走を後押ししているのだ。

世之介は風祭に近づくと、もう一つの存在を感じていた。

対峙

【バンチョウ・ロボ】であった！

のしのしと歩く巨大な番長の姿をした【バンチョウ・ロボ】は、風祭の前方に立ち塞がり、待ち受ける。

ぐつと腰を低く構え、緊張をほぐすためか、こきこきと音を鳴らして首の辺りを、しきりと廻している。ひどく人間臭い仕草であった。

風祭もまた【バンチョウ・ロボ】に気付いた様子だった。疾走をやめ、慎重に相手を窺う仕草を見せる。

世之介の意識が、【バンチョウ・ロボ】の操縦席に入り込む。操縦席では、勝又勝がこれからの戦いの予感に興奮し、ごつい顔に滴るような笑顔を見せていた。

「面白え……面白え……！ こいつを【ウラバン】から預かったときには、こんな面白え戦いができるとは思ってなかったが、こりゃ、堪えられねえぜ！」

風祭は猫が獲物を狙うように、静かに待ち受ける。すすす、と巨体が、音もなく地面を踏み、あっという間に接近してくる！

操縦席の勝の表情に緊張が走った。ぐつと全身に力を込め、風祭と【バンチョウ・ロボ】の激突に身構えた。

ぐわしゃーんっ！ と、派手な音を立て、二体が猛烈な勢いで激突を繰り広げた。衝撃で、ばらばらと風祭の全身から、微小機械が細かな破片となって転げ落ちる。

ぐわああーっ、と【バンチヨウ・ロボ】は喉の奥から絶叫し、片腕を振り上げ、ぐっと握り拳を作って風祭の顔面に叩き込んだ。

がきーん、と鉄板を殴りつけるような音がして、風祭の顔が横を向く。風祭は一瞬、くらくらとなったようだった。

連射

だが、即座に立ち直り、瞬時に反撃を開始した。風祭もまた、握り拳を固め、【バンチョウ・ロボ】に殴りかかる。が、風祭のほうは両方の拳を猛烈に回転させ、連続して叩き込んだ！

まるでマシン・ガンの連射を浴びたように、【バンチョウ・ロボ】は、ぐらぐらと上体を泳がせ、後方に吹っ飛んだ。

吹っ飛んだ先は、【ツツパリ・ランド】の校舎の建物であつた。

【バンチョウ・ロボ】の巨体がめり込み、建物の壁に放射状に罅が入り、窓ガラスが四散して、建物の中から悲鳴が上がった。

世之介は意識を分散させ、避難していた助三郎たちに集中させた。立体映像を投影し、自分の姿を出現させる。

「助三郎！ 格乃進！ あの怪物は、風祭なんだ！ 風祭をなんとかしないと、微小機械の暴走は止められない！」

世之介の呼びかけに、二人の賽博格は仰天した。

「世之介さん……。どういうことだ？ 説明してくれ！」

助三郎の言葉に、世之介は強くかぶりを振った。

「今ここで説明している暇はない！ とにかく、二人の加勢がいる！」

光右衛門が二人に命令した。

「二人とも躊躇している暇はありませんぞ！　ともかく、世之介さんに従うのです！」

「はっ！」と短く答え、二人は一瞬のうちに加速状態に入っていた。そのまま超高速で、戦う二体の怪物に向かっていく。

サイコ・ダイブ！

加速状態だけに許される引き伸ばされた時間の中で、世之介は手早く二人の賽博格に、状況を説明する。

「微小機械の暴走は、風祭のせいだ！ 風祭の際限ない強さへの欲望が、微小機械の暴走に火を点けた！」

助三郎は叫んだ。

「そうか！ 風祭を倒さなければ微小機械の暴走は止まらない、という理屈か！」

格乃進は疑問を投げかける。

「しかし、どうやって倒す？ あいつは賽博格の身体に、世之介さんの？伝説のガ克蘭？の能力も加えているぞ。俺たちだけで、何とかできるのか？」

世之介は自分の姿を立体映像で投射し、二人の動きに追隨させつつ、答えた。

「俺は今、微小機械と直に交信できる状態になっている。だから、風祭の身体を覆っている微小機械に、俺の意識を同調させてみる！うまくいったら、あんたらが風祭を攻撃してくれ！」

助三郎は仰天したような表情になった。

「そんなことして、大丈夫なのか？」

世之介は、かぶりを振った。

「判らない……。しかし、他に方法はないんだ！」

助三郎と格乃進は肅然とした表情になった。格乃進が強く頷き、口を開いた。

「よし、やってくれ！ 俺たちは、いつでも攻撃できるよう、待機しているぞ！」

二人に頷き返し、世之介は二体の巨大な怪物に意識を集中させた。巨大化した代償か、風祭は賽博格の加速能力を失っているようだった。

一方、勝又勝の乗り込む【バンチヨウ・ロボ】は、風祭の打撃を受け止め、校舎に叩きつけられ、今ようやく起き上がろうとしている。風祭は肘を引き、腰を落とし、第二の攻撃に移ろうとしている最中だった。

世之介の視線が、風祭の巨体に向けられた。意識を投射し、風祭の巨体を形作る微小機械の群れに同調させる。

世之介は意識同調サイコ・タイプを敢行した！

仮想現実

微小機械の無数の？声？が津波のように押し寄せ、世之介は一瞬、我を失っていた。

まるで、百万人も人間が一齐に声を発し、勝手なことを喋っているのを、一度に耳にしているかのようなようだった。

働け、働け、もっと働け！

原料が足りない！ もっと原料が欲しいよ……。

俺は、もっと作りたい！ 誰か、俺に注文してくれ！

世之介は耳を塞ぎたい気分だった。自分の耳がどこにあるのやら、見当もつかない。

ともかく、何かしら世之介と意思を伝え合える存在を求め、ぐんぐんと先に進む。そのうち、世之介の視界に、微小機械が作り出す社会が見えてきた。

しかし、あくまで仮想的なものであり、現実の存在ではないことはわきまえている。

微小機械は無数に繋がった、網の目のような構造を保持していた。網の目の一つ一つが無数の情報を伝え、情報は一気に微小機械一つ一つの単位に伝わっていく。

微小機械一つ一つには、意思はない。だが、ある程度の規模になると、人間のような意識ができていうようであった。

世之介は、それらの意識を丹念に点検していく。だが、どれも、自分だけの作業に没頭している様子で、世之介の語りかけには一切、

答えようとはしない。

世之介は焦りを感じていた。これでは、せつかく意識を投射しているのに、空回りもいいところだ。

どれか一つくらい、世之介と話し合える意識はないのだろうか？

扉

ぼうつ、と霞む意識の中に、不意に一つだけ、くつきりとした何かが見えてくる。見えてきた意識は、ぶつぶつと何か呟いていた。世之介は耳を澄ませた。

強くなりたい！ 俺は、もっと強くなりたい！ 誰にも馬鹿にされない、恐れられる存在になりたい！

切迫した感情が、世之介の意識に突き刺さるように伝わってくる。強さへの渴望が、熱い感情の波となって放射している。風祭の意識であった。

風祭！ お前か？

世之介の呼びかけに、ぎくりと強張る気配が伝わる。

誰だ？ 俺に呼びかけるのは？

但馬世之介……。憶えているか？

ああ、？伝説のガクラン？を着た奴だな……。何の用だ？

風祭の返答には、酸性の毒のような、疑念が纏いついている。世之介は精一杯、真摯な感情を込め、話し掛けた。

風祭、お前のせいで、番長星は大変なことになっているんだ。微小機械が止まらなくなっている。

風祭は憤然となって、返答をした。

それが、どうした？ 番長星がどうなるって、俺には関係ねえ！

世之介は（想像上の）眉を顰めた。

なぜ、そんなに強くなりたいんだ？ 強くなって、どうする？

頑なな風祭の感情が伝わる。

お前の知ったことか！ さっさと、ここから出て行きやがれ！

世之介は風祭の意識にじわりと侵入を開始した。ふつつつと疑問が溢れてくる。なぜ、これほどまでに、風祭は強さを求めるのか。

世之介が自分の意識の中に侵入しようとしているのを悟り、風祭は悲鳴を上げた。

よせ！ 止める！ 俺から出て行け！ 嗅ぎ回るんじゃないやねえっ！

世之介の眼前に、一枚の扉があった。

風祭の記憶の扉であった。世之介は、風祭の記憶を押し開いた！

根性なし！

「てめえら、ちゃんとメンチを切ったら、ガンを飛ばすんだ！ 舐められたら、おしめえだぞ！ さあ、やって見ろい！」

番長星によくある【集会所】の一つである。駐車場には、数人の子供が、がなりたてる一人の大人の男の周囲に集まり、真剣になつて耳を傾けている。

がなりたてる男は、年齢四十代くらいで、頭をちりちりパーマに固め、がっしりとした身体つきをしていた。男は、じろりと世之介を睨む。

「やい、淳平！ なんだ、その根性の入っていないガンの飛ばし方は？ もっと腹に力を入れて、睨みつけるんだ！」

のしのしと歩いてきて、ぐっと腰を落とし、物凄い形相で睨みつける。

世之介は悟っていた。これは風祭の記憶だ。自分は今、風祭の幼い頃の記憶に入り込んでいる！ 風祭淳平……これが本名なのだ。

世之介の……いや、風祭の幼い記憶に恐怖が湧き上がる。世之介は風祭の恐怖を味わっていた。

視界が不意に滲んで、辺りがぼやけた。風祭が両目に涙を溢れさせたのだ。男は呆れたような声を上げた。

「なんでえ……ちっと睨んだら、もう泣き出すなんて、なんてえ根性なしなんだ！」

あはははは……と、周囲の子供たちが大声で笑い出した。風祭は笑い声に、身を小さくしている。

怒り

どすん、と横から子供の一人が風祭の腰に蹴りを入れてきた。風祭はよろけ、よろよろつと地面に倒れこむ。

「根性なし！」

蹴りを入れた子供は、風祭の正面に立ちはだかり、憎々しげに叫んだ。すると他の子供たちも、同調するように囃し立てる。

「根性なし！ 淳平の根性なし！」

ぱつ、と誰かが風祭の顔に砂を投げ掛ける。風祭はわっ、と顔を手で隠した。

しかし仲間の子供たちは容赦しない。わあーっ、と集まってくる、と、手に手を伸ばし、風祭の押さえていた手を引き剥がした。

両手両足を掴んで、地面に大の字にさせる。一人が押し掛かり、風祭の鼻を掴んで穴を塞いだ。たまらず、風祭の口が、ぱかつと開く。

即座に開いた口に、砂が押し込められる。風祭の口にじやりじやりとした砂と小石が一杯に溢れた。

ぺっぺと砂を吐き出すが、子供たちは次々と砂利を詰め込む。押し掛かっている相手は、容赦なく風祭の顔を殴ったり、頬の肉を擦じ上げたりして、苦痛を与えていた。

痛みと怒りに、風祭は猛烈な泣き声を上げていた。風祭は涙に滲んだ視界で、さっきの大人に救いの視線を投げかけた。

しかし、子供たちに喧嘩の仕方を教えていた男は、げらげらと笑って、止めようとすらない。男を見上げる風祭の胸に、絶望が真っ黒に膨れ上がった。

「淳平、舐められたら、おしめえだぞ！　よく判ったか？」

これが風祭の子供時代か！

世之介は風祭の記憶を追体験して、怒りに震えていた。

追体験

世之介の江戸にも、虐めはある。世之介自身も、虐められた記憶も、虐めた事実もあった。

が、保護者らしき大人が、虐めを目撃し、大笑いをして制止すらないという状態は、断固有り得ない。

番長星では「男らしさ」が価値の総てで、一旦「根性なし」と評価されたら、最悪の事態を引き起こす。

風祭の記憶を、世之介は次々と体験していく。子供時代、青年時代と、風祭は様々な同じ年頃の相手に、しつこい虐めを受けていた。助けを求める相手は、唯の一人も現れなかった。目撃したとしても、虐められるほうが悪いと断罪され、救いはまるでなかった。

虐めを受けるうち、風祭の胸に、ふつふつと復讐心が芽生えてくる。

誰にも馬鹿にされたくない！ 舐められたくないという欲望は、自身を賽博格にしてしまうほどだった。

風祭にとって「弱さ」は即、死を意味するものだった。強さだけが総てであった。

世之介は風祭の記憶の扉から離れ、微小機械が形作る仮想空間に漂った。無数の微小機械が接点を繋ぎ、じわじわとある形を取り始めた。世之介は目を見開いた。

微小機械が呈示したのは、風祭の姿であった。最初に出会ったときの、賽博格としての風祭の姿であった。

世之介もまた、自分の姿を仮想空間で顕していた。世之介と風祭は、何もない空間で向き合った。お互いの視線が火花を散らす。

風祭は世之介を認め、怒りの形相を現し、吠え立てた。

狼狽

覗き野郎……！ 判ったか？ 俺は絶対、この強さを手放すつもりはねえ！

世之介に対し、風祭は進ほとほしる怒りを投げかけてきた。言葉と同時に、感情すらも伝わる。

風祭、このままで良いのか？ お前は暴れ回り、破壊を広げるだけだぞ。

世之介は説得を試みた。風祭の返答は、痛烈なものだった。

破壊？ 結構じゃねえか！ 番長星が目茶目茶になれば、いい気味だ！ 誰一人、俺を助けちゃくれなかった。俺が虐められても、黙って見てるだけ、いや、虐めたほうに声援を送る奴すらいた。番長星全部が、目茶目茶になればスッキリすらあ！

風祭は邪悪な笑みを浮かべ、天を仰いで哄笑する。怖ろしいほどの憎悪が形となり、風祭の全身を、めらめらと炎が取り巻く。

そんなに強くなりたいのか……。

世之介はどうやって説得すればよいのか、途方に暮れる思いだった。それほど風祭の強さに対する感情は、頑ななものだった。

風祭は「はっ」と、軽蔑したような声を上げる。

当たり前じゃねえか？ 弱ければ舐められる。馬鹿にされる。俺を見る！ この賽博格の身体なら、絶対に舐められねえ！

世之介は助三郎と格乃進の言葉を思い出していた。

人間らしい感覚を捨て去ってもか？

風祭の表情に、微かに躊躇いが見てとれた。世之介は「ここだ！」と勢いづいた。

風祭、最後に人間の食事を摂ったのは、いつのことだ？

風祭の頬が、ひくひくと痙攣する。

そんなこと、お前の知ったことじゃねえ！

世之介は静かに語りかける。

風祭、好きな娘はいなかったのか？

風祭の顔が、鬱血するかのように、どす黒く変色する。世之介の言葉が切っ掛けだったのか、急激に風祭の記憶の扉が抉じ開けられた。

記憶の奔流に、風祭は周章狼狽していた。

よせ！ 見るな！ 見るな つ！

希望

風祭の前に、一人の少女の姿が映し出される。美人とはいえないが、素朴な顔立ちの、見るものをほっとさせる何かを持っていた。

少女は、哀しげに風祭を見詰めている。少女の唇が開き、語り掛ける。

淳平、どうしても、賽博格になるって言うの？ 本当に平気なの？

どこからか、もう一人の風祭の声が応える。

ああ、平気だ！ 俺は絶対、誰にも馬鹿にされたくないし、舐められたくもない。賽博格になれば、誰にも負けない強さが手に入るんだ！

少女の顔が哀しみに曇った。項垂れ、背中を見せる。

そう……。お大事に……。左様なら。

少女は、ゆつくりと歩み去った。風祭は右手を半ば上げ、口をポカンと開いていた。少女の姿が、ふっと消え去る。

風祭は、ゆるゆると首を振った。

俺は、俺は………！

ぐつと顔を挙げ、世之介を睨みつけた。

覗き野郎！ 満足か？

世之介は首を横にした。

風祭、お前が望むなら、元の人間に戻るんだぞ。

風祭の両目が「信じられない」と、まん丸に見開かれた。

嘘だ！

いや、嘘じゃない。お前は現在、全身を微小機械に埋めている。お前を改造したのは微小機械だろう？ だったら、元の身体に戻すことのできるのも、微小機械だけだ。

世之介の声には、揺ぎない確信が込められていた。世之介は、今の言葉が自分の中から出てきたのか、それとも、微小機械の集合意識から湧き出たのか、区別が判断できなかった。多分、両方なのだろう。

そうだ！ 微小機械に命じれば、賽博格だって、元の人間に戻るんだ！ 細胞の一つ一つ、染色体の一本一本が微小機械の、分子の小ささの作業で実現できるのだ！

風祭の表情が絶望から、希望へと変わった。

世之介。本当にできるんだな？

世之介は強く頷く。

ああ、お前が望むなら。

風祭の背筋が伸びた。

ああ、俺は、そう望む！ 俺は、元の身体に戻りたい！

世之介は周囲に手を振って叫んだ。

聞いたろう？ 今の風祭の言葉を？

世之介の言葉に反応して、周囲の微小機械が一斉に反応を開始した。無数の微小機械が、光の流れとなって、風祭に集中する。全身

を光に浸し、風祭は絶叫した。

決着

世之介は微小機械の仮想世界から、再び現実世界へと戻り、その場で身構えている助三郎と格乃進に叫んだ。

「今だ！ 風祭を覆っている微小機械を引き剥がせ！」

「おおっ！」

助三郎と格乃進は「待つてました！」とばかりに威勢良く返答をすると、身を地面すれすれに倒すように、全速力で巨大化した風祭に突進する。無論、加速状態のままである。

音速を突破した二人の身体により、空気は個体に近いほど圧縮され、猛烈な衝撃波を前面に発生させる。

風祭の身体のスレスレを通り過ぎるとき、圧縮された衝撃波は、まるで鋭利な刃物のように空気を切り裂いた！

二人の賽博格が通過した場所は、一時的な真空状態になっている。猛烈な風速が、風祭の全身を覆っている微小機械を容赦なく引き剥がす。鎌鼬の原理である。

ずばっ、ずばっと硬く密着している微小機械が、賽博格の攻撃によつて切り裂かれた。

賽博格は風祭の周囲を、ぐるぐると円を描いて回っている。世之介に対してとつた戦法と同じだ。

微小機械は、二人が作り出した気流によつて、ばらばらに切断され四方八方に飛び散っていく。

切断された微小機械は、べちゃっと真っ黒な絵の具のように周囲

に飛び散って染みを作っていく。

世之介は戦いの結果を見守っている。

さつと手を挙げ、制止した。

「それまで！」

世之介の制止に、再度攻撃を加えようとしていた二人の賽博格は、急停止のため、両足の踵を地面に突き立てた。

怖ろしいほどの加速が加わっているため、二人の踵は、ずぶずぶと地面にめり込み、がしがしと舗装された場所を深く抉っていく。

助三郎が叫んだ。

「なぜだ！ もう少しで倒せるのに！」

世之介は風祭を指差した。

「もう、決着はついている」

生身

二人は加速状態を解いた。

途端に、二人が巻き起こした局所的な空気の乱流が、猛烈な風となつて、辺りの空気をどよもしている。中心に風祭が、棒立ちになつていた。

二人は目を見開き、注視した。

「あれは……助さん。風祭の様子が変だ」

格乃進の言葉に、助三郎も頷く。

「うむ。風祭の身体が変化しているように見えるな」

助三郎の指摘通り、風祭は変貌していた。

全身を、微小機械が膜のように覆つて、何か盛んに活動をしている。表面に漣のような波紋が広がっていた。

「風祭の変身なんだ……」

世之介の言葉に助三郎は「何だと？」と聞き返していた。格乃進がぐい、と指さし、叫んだ。

「見る！ 風祭が……」

ずるり、と膜のようになっていた微小機械が風祭の全身から抜け落ちた。後には、一人の人間が、虚脱した様子で立ち尽くしている。恐る恐る、助三郎が近づく。

「お前は……誰だ？ 風祭なのか」

立っていたのは、年齢およそ二十歳前後と思える、若い男性であった。ひよろりとした身体つきで、青白い顔をした、とても風祭とは同一人物とは思えない男である。

男は薄目を開け、近づく賽博格を見詰める。視線が下がり、自分の身体を見下ろした。
ぎくり、と男の表情が驚きに变化した。

「俺は……！ 戻った！ 俺は、戻ったぞ！ 生身の身体に戻ったんだ！」

もう一度、助三郎は静かに尋ねる。

「お前の名前は？」

「俺の名は……風祭淳平！」

男は、キッパリと応えた。二人の賽博格は、驚きに顔を見合わせた。

奇跡

直後、がらがらという瓦礫のぶつかり合う音に、二人は顔を上げた。破壊された校舎から、今、やっとのことで【バンチヨウ・ロボ】が這い出してきた。

【バンチヨウ・ロボ】は、のっしのっしと近づき、辺りに轟き渡るような大音声で喚く。

「そいつは誰でえ？ ああ風祭は、どこへ行った？」

世之介は意識を【バンチヨウ・ロボ】の操縦席に接続させ、自分の声を操縦している勝又勝に聞こえさせる。

「あれが、風祭の本当の姿だ。賽博格の身体から、元の生身の人間に戻ったんだ」

驚きに【バンチヨウ・ロボ】は首を振る。

「信じられねえ！ そんなことがあるなんて、奇跡としか、思えねえ……」

世之介は笑いを含んで返事する。

「それが本当に起きたんだ。さあ、あんたも、もう【バンチヨウ・ロボ】から出てきていいよ。戦いは終わったんだ」

勝は不満そうな声を上げた。

「詰まらねえぞ！ 俺は、まだ戦いたい！」

【バンチョウ・ロボ】の視線が、見上げている二人の賽博格に向かう。【バンチョウ・ロボ】から猫撫で声のような勝の音がする。

「なあ、そこのお二人さん。あんたら、俺と一丁、試合をする気はないかい？」

音

「お兄ちゃん！　いつまで馬鹿な真似をしているつもり？　さっさと出てきなさいよっ」

茜だった。茜は【バンチヨウ・ロボ】の前面に飛び出し、憤慨した様子で腰に手をやり背筋を伸ばして睨みつけている。

【バンチヨウ・ロボ】は困惑した様子で、自分の頭を掻いていた。

「ちえっ！　いいところで、お前が出てくるとは……」

それでも【バンチヨウ・ロボ】は洪々と膝を地面に突いた。胸がぱくりと開き、操縦席が顕わになる。

内部から勝が、ひょいと軽く跳躍して外へと飛び出した。茜は胸一杯といった表情で兄の勝の顔を見詰める。

見詰められ、勝はバツが悪そうにポケットに両手を突っ込み、爪先で小石を蹴って、顔を背けた。どう見ても、大人の仕草ではない。

茜の背後から、光右衛門、IPPACHI、木村省吾が近づいてくる。IPPACHIは満面の笑みを浮かべ、口を開いた。

「これで目出度し、目出度しでげすね！」

光右衛門は微かに首を振る。

「さあ、それはどうでしょうかな？」

全員が光右衛門の意外な言葉に「えっ」と注目をする。注目を浴び、光右衛門は何かに耳を澄ませているような仕草を見せた。

「あれは……あの音は、何でしょう」

光右衛門の言葉通り、不意に「どおおおっ」と聞こえる津波のよ
うな音が湧き上がる。

全員が黙り込み、聞こえてくる音に神経を集中させる。
省吾がポツリと呟いた。

「校庭の方角から聞こえますな……」

全員の視線が校舎に向かった。

乱痴気騒ぎ

校舎の建物を回って校庭　　駐車場になっている　　へ出ると、
乱痴気騒ぎが始まっていた。

ただっ広い校庭の真ん中には色とりどりの衣服が山積みになれ、
無数の男女が夢中になって衣服を手に取り、試着している。

時刻はすでに夕刻近く、橙色の空を背景に、蠢く男女は黒々とした影に見えていた。駆け込んだ光右衛門を先頭に、一同は呆然と立ち尽くす。

イッパチがあんぐりと口を開け、叫んだ。
「いつてえ、何がおっぱじまったんで？」

助三郎が両目を光らせ、呟いた。

「奴らが手にしているのは、制服だ！　学生服に、セーラー服らしいな……」

助三郎の言葉通り、山積みになっているのは様々な色、デザインの学生服とセーラー服であった。山に群がった男女は、頬を興奮に真っ赤に染め、手に触れた服を大慌てに身につけている。

木村省吾が「あっ」と叫んだ。

「あれは……わたくしが計画していた？伝説のガクラン？？伝説のセーラー服？計画の制服です！　微小機械に生産させ、番長星の全員に行き渡らせる積りだった……」

制服の山に取り付いている男女は、手にした服を身に着けた途端、ぱつと顔を輝かせ、胸を張り、全身に自信を漲らせて大股で歩き出

す。

服を身に着けた同士、顔を合わせると、ばちばちと視線に火花を散らし、大声で怒鳴り合う。

「俺は？伝説のバンチョウ？だ！」

「何を言う！俺こそ？伝説のバンチョウ？だぞ！」

「なにいつ！」

お互い敵意を顕わにし、歯を剥き出し、^{いが}睨み合う。

男ばかりではない。セーラー服を身に着けた女同士、同じような場面が展開していた。

「あたいが？伝説のスケバン？だよっ！」

「馬鹿あ言ってんじゃないよっ！あたいこそ？伝説のスケバン？だよっ！」

あちこちで取っ組み合いが始まっていた。わあわあと喚き声と、激しい罵り合いの声が入り混じり、阿鼻叫喚の巷である。

破綻！

眼前の光景に、省吾はへたへたと力なく座り込んだ。

「なんてこった……。折角の計画が、これでは何のために努力したのか、判らない……」

光右衛門が疑問を呈す。

「世之介さんの性格を読み込んだガクランなのに、あの大騒ぎは、どうしたことですか？ 身に着けたなら、世之介さんの真面目な性格が乗り移るのではないでしょうか？」

省吾は顔を挙げ、ぶるぶると何度も横に振った。

「違うのだ！ あの後、風祭が微小機械の水槽に飛び込んでしまったので、風祭の性格が上書きされてしまったんだ……。ああ、最悪の結果になってしまった……」

世之介は省吾を無感動に眺めていた。ふとあることに気付き、声を掛ける。

「制服の生産を止めることは、できないのか」

省吾は「えっ」と顔を上げた。世之介は制服の山を指さす。

「見てみると、あの山が大きくなっている。微小機械の生産が続いているらしい」

よろよろと省吾は立ち上がり、頷いた。

制服の山は、世之介の指摘通り、むくむくと膨れ上がり、群がる

男女が奪っても奪っても高さは減らない。どころか、更に大きくなっていく。

「まさに、その通りです……。微小機械が、あらん限りの能力を振り絞って、全力で制服を生産しているんです！ 駄目だ、わたくしには止められない！」

言うなり、両手で顔をがばつと覆い、すすり泣いた。

三つ葉葵

その様子を厳しい目付きで見ていた光右衛門は、無言で杖を手に歩き出す。光右衛門が近づくと、制服を身に着けた男女が、敵意を顕わにして近づいてきた。

「なんだ、爺い！ あっちへ行け！」

近づいてきた一人の額を、光右衛門は発止と手にした杖で叩いた。叩かれた相手は「うわっ」と悲鳴を上げ、飛び退いた。それを見て、周りの人間が怒りに伝染したように、次々と飛び掛っていく。

光右衛門は、杖を揮って次々と打ち払う。助三郎と格乃進もまた、光右衛門の周りを固め、素手で飛び掛ってくる相手を打ち据えている。

たちまち三人の周りには、打ちのめされた相手が、呻き声を上げて横たわった。

光右衛門は助三郎と格乃進に声を掛ける。

「助さん、格さん。もう、宜しいでしょう」

「はっ！ ご隠居様！」

格乃進は力強く頷くと、すつくと光右衛門の前に立ちはだかり、大音声で叫んだ。賽博格のみが出せる、人間離れした音量である。

「控えよ！ 控え、控え っ！」

助三郎も大口を開け、大声を上げる。

「ええいつ！ 静まれ、静まらんか！」

二人の賽博格の出した大声に、その場にいた全員の動きが止まった。皆、ポカンとした表情で、三人を見守っている。

格乃進は、ホロ・プロジェクター立体映像投影装置を取り出し、空中に映像を掲げ叫んだ。

「この紋所もんじょが目に入らぬかつ！」

立体映像投影装置が投射したのは、巨大な「三つ葉葵」の紋所であつた。

威光

「この御方をどなたと心得る？ 前さきの中納言、銀河の副將軍、水戸みづ光邦公にあらせられるぞっ！」

助三郎がずい、と前へ踏み込み叫ぶ。

「ええいつ！ 頭が高いっ！ 控えおろう っ！」

静寂が、その場を支配していた。

全員、目を虚ろにし、じーっと光右衛門、助三郎、格乃進の三人を見詰めている。

一人のガクランを着た男が呟いた。

「あいつら、何を言っているんだ？」

格乃進が投射した三つ葉葵の紋所は、空中にハッキリとした形で浮かんでいる。投射された映像を見上げ、その場にいた全員は、首を捻っていた。

「あのお爺ちゃんが、何なの？」

茜がぼんやりと呟く。世之介は、まじまじと茜の顔を見つめた。茜の顔には、何の驚きも浮かんでいない。

世之介は悟った。

番長星の人間は、將軍家の威光というのを知らない！　これが他の、幕府の支配を受ける殖民星なら、即座に三つ葉葵の紋所が意味する所を悟り、大いに恐れ入るのであるうが、番長星の人間にとつては、全く意味がないのだ。

イッパチと、木村省吾はすでに格乃進の叫んだ言葉を理解し、とつくに土下座をしてガタガタ震えているというのに、校庭にいる全員は、何の感動もなく、ぼんやりと三人を見ている。単に、賽博格の出した驚くべき大音声に、度肝を抜かれただけだった。

加勢

周りから、へへへへ……と、野卑な笑い声が洩れてくる。一人、また一人と肩を怒らせ、番長星の人間独特の、よたりながらの歩き方で近づいてくる。笑い声を上げているが、目はまるつきり、笑ってはいない。

「爺いっ！ おめえさんが中納言だろうが、何だろうが、俺たちには関係ねえなあ……。笑っちゃまうぜ！ 頭が高いだとよ！」

典型的な番長星の身なりの男　ごつてりと髪油ボマードを頭髮に塗りたくり、念入りに梳き上げたりーゼントを決めた、顔には無数のニキビを噴き出せた若い男が下から見上げるような姿勢で近づいてくる。

「あははははは……！」と、背を仰け反らせ、わざとらしい笑い声を高らかに上げる。

「やっちまえ！」

男の声に、その場にいた大量生産の？伝説のガ克蘭ン？？伝説のセーラー服？を身に着けた男女が、わつとばかりに飛び掛ってきた。

助三郎と格乃進は顔色を変えた。

世之介は、二人の賽博格が顔色を変えた訳に思い当たった。

？伝説のガ克蘭ン？は、着用者を賽博格戦士なみの戦闘力に引き上げる。即ち、助三郎と格乃進にとっては、同じ能力の賽博格戦士が無数に敵対する状況なのである。

世之介一人でもあれほど手こずったのに、今、校庭にいる全員が

世之介と同じ戦闘力を持つと仮定したら、「冗談」ことでは済まされない！

その時。

「加勢するぞ！」

出し抜けに、頭上から声が降ってきて、世之介は校舎を見上げた。助三郎と格乃進も、背後の校舎を見上げる。二人の瞳に、希望の光が宿った！

蛮勇

校舎の屋上にすつくと立つ、五人の勇姿！

言うまでもなく、世之介の性格を付与された、五着の制服を身に纏った「セイント・カイン」の五人である。

校舎の背後からは、残照が赤々と空を照らし出し、番長星特有の、低緯度地方でも見える極光オーロラが、複雑な光の模様を映し出し、場面に幻想的な彩りを与えている。

「我ら五人の勇士！」「セイント・カイン！」「番長星の平和を守る使命を帯び……」「今、ここに参上！」

五人は次々と口上を述べ、一々見得ボースを決めている。世之介は「あんなことしないで、さっさと助太刀に来れば良いのに」と思ったが、黙っていることにした。多分、見得を切るのは、五人にとって必要な出陣の儀式なのだ。

ようやく儀式が終わって、五人は校庭を屋上から怖々と覗き込んだ。

お互い「どうしよう？」「顔を見合わせている。飛び降りるのが怖いのだ！

助三郎は苛立った声を上げた。

「何を愚図愚図しておるのか？ その制服を着ているのなら、飛び降りても平気だぞ！」

しかし五人は、中々覚悟を決められない。屋上で、もじもじと、

飛ばうか止めようか、何度も躊躇っている。

格乃進は「どうなっている？」とばかりに省吾を睨みつけた。省吾は顔を赤くした。

「そのう……あの五人には正義感を強くする教育をたっぷりと施しておりますが、蛮勇を奮うというのは……」

後は口の中でもゴモゴと口竅るだけで、下を向いてしまう。二人の賽博格は「やれやれ」と肩を竦めた。

助三郎が格乃進に叫ぶ。

「格さん、ここは、俺たちだけで……」

格乃進も頷いた。

「うむ。こうなれば、遮二無二どうにか頑張るしかないと思えるな！」

「では、参ろうぞ……」

二人は頷き合い、殺到する群衆に向かって駆け出した！

焦り

助三郎と格乃進は、殺到する？伝説のガクラン？？伝説のセーラ―服？を身に着けた群衆に向かって駆けていく。

群衆は皆、敵意を剥き出しにして、何か訳の判らない喚き声を上げながら二人に襲い掛かった！

「こうしちゃ、いらねえ！」

茜の兄、勝^{マツ}が目を剥き出し、顔には戦いへの喜びを顕わにし、くると背を向け走り出した。

校舎の裏手へ駆け込むと、すぐ【バンチョウ・ロボ】がどすどすと足音を響かせ、姿を現した。勝が搭乗したのだ。

「うおーっ！」と【バンチョウ・ロボ】は勝の雄叫び声を轟かせながら、全速力で二人の賽博格の戦いの中へと飛び込んでいく。忽ち【バンチョウ・ロボ】の巨体が、群がる暴徒を蹴散らし、次々と悲鳴が上がった。

「もう、お兄ちゃんったら、喧嘩となると、目がないんだから……」

茜はばやいたが、それでも興奮に頬を染めている。

世之介は焦燥感に、じりじりとなっていた。

自分も何とかしたいと思っていたが、いかんせん世之介の本体は【リーゼント山】の制御室に横たわり、立体映像を投射しているだけである。指一本たりとも、触れることはできない。

「どうすりゃいいんだ……」

呟いた声を、水戸光邦
が聞き咎めた。

いや、今までと同じ光右衛門と呼ばう

答え

「世之介さん、この混乱を収めるのは、あなたしかいませんぞ!」

世之介は「えっ」と光右衛門の顔を見詰めた。光右衛門の顔には、確信が溢れている。

「どういうことでしょう」

世之介の口調は改まっていた。いくら？伝説のガクラン？によって性格が変わっても、江戸でたつぷりと將軍家の威光を味わっている世之介だけに、口調は改まらざるを得ない。

「省吾さんが制御室で微小機械の生産停止を命じたのに、爆嘯は止まりませんでしたな」
スタンビート

「はい」と光右衛門の言葉に、世之介は素直に頷いた。

「それは、風祭が……」

省吾が割り込むと、光右衛門は大いに頷く。

「そうです。風祭淳平なる者の強さへの欲望が、微小機械の停止命令を受け付けなかったのです。しかし、あの風祭は元の身体に戻り、戦いへの欲求は消えているはず。それなのに、微小機械の暴走は止まりません。どういうわけでしょうな？」

光右衛門の目には、謎掛けのような光が湛えられていた。

はて、何を言いたい……。

世之介が睨み返すと、光右衛門は真つ白な齒を見せ、笑った。

「答は一つしかありません！ 世之介さん、あなたのせいなのです
」！

顔

驚きに世之介は仰け反った。ふらつ、と自分の立体映像が揺らぐのを自覚する。

「ど、どうして、そんな結論になるんだ？ 俺は金輪際、そんな馬鹿な考えを持ったことはないぞ！」

光右衛門は静かに首を振る。

「微小機械と接続しているのは、世之介さんしかおりません。微小機械に影響を及ぼすことが可能なのは世之介さん、一人だけ……。結論は、ハッキリしております！」

ぐつと腕を挙げ、指さす。

「？伝説のガクラン？によつて、あなたは今までにないほどの、外向的な性格に生まれ変わりました。何事も積極的で、自信満々。どうです、良い気分だったではありませんか？」

世之介は不承不承、頷く。

「そ、そりゃ、まあ……」

「あれを御覧なさい」

光右衛門は戦っている二人の賽博格を指さす。助三郎と格乃進は、阿修羅のごとく、群がる暴徒を叩きのめし、千切っては投げ、千切っては投げという形容がぴったりだ。

群がる男女の顔を、世之介は眺める。皆、戦いに喜びを見出し、どんなに賽博格に叩きのめされようが、弾き飛ばされようが、飽くことなく向かっていく。

「助さん、格さんの二人に向かっていく人間の顔。あれは、世之介さんが戦っているときの顔、そのものです！」

衝撃に、世之介は地の底に沈むような気分を味わっていた。あれが、俺の顔？

二人の賽博格に遮二無二、我勝ちに突撃していく人間は、一人残らず狂気、とっていい表情を浮かべている。

両目を思い切りひん剥き、唇は笑いの形に歪み、戦いへの期待で、頬はてらてらと輝いていた。

信じられなかった……。

杖

光右衛門は回想するような口調になった。

「初めて会った頃のあなたは、何事にも自信がなく、臆病そうでした。戸惑いが、常にあなたの周りに取り巻いておりましたな。しかし？伝説のガクラン？を着たあなたは、別人に変わった。いや、本来のあなたの性格が表に出た　と、わたくしは思っております」

光右衛門は自分の杖を掲げた。

「わたくしは老人ですから、これ、このように杖を必要とします。あなたのガクランは、ちょうどそのように精神的な杖として役立ったでしょう。しかし、世之介さんはお若い。若いあなたが、いつまでも杖にすぎるのは、どうかと思いますぞ！」

？伝説のガクラン？は、俺にとっては杖なのか……。

光右衛門の言葉に全面的に反発したい気持ちと、心のどこかで深く納得している自分に、世之介は引き裂かれていた。

世之介は、光右衛門を見詰めた。光右衛門の背後には、茜とイッパチ、省吾の三人が、息を潜めて二人の会話に耳を欹てている。

徐々に世之介の心に、ある決意が漲った。

光右衛門に向かい、呟くように返事をする。

「判ったよ……光右衛門さん。いや、御老公様！」

光右衛門は「くつく」と小さく笑った。

「いつものように『爺さん』で結構！」

世之介は笑い返した。

「そうだな。今更、御老公なんて言い難いや！ 爺さん、俺は決めたぜ！」

ふつと、溜息を吐くと、世之介は目を閉じた。自分の精神を、微小機械の電網ネット・ワークに接続する。

不満

無数の微小機械が形作る仮想空間に、世之介は立っていた。いや、漂っていた。

周りには微小機械が無数の結節^{ノード}点を作り、大量の情報^{データ}が津波のよう押し寄せ、微小機械が盛んに活動していることを示していた。世之介は仮想空間で大声で叫んだ。

やめろ！ もう充分じゃないか！ お前たちの役目は終わっ
たんだ！

ざわざわ……と、無数の結節点^{ノード}が不満を訴えるかのようにざ
わめいた。

いやだ！ いやだ！ 我々は永久に活動する！ まだ終わら
ない！

微小機械の感情が、無数の針が突き刺さるように世之介の全身を
襲う。苦痛に、世之介は身悶えた。

違う！ 番長星の人間は、お前たちを必要としていない！

怒りの感情が仮想空間に充滿した。

嘘だ！ 番長星の全員は、我々の助けなしでは生きてはいけ
ない。我々がいなければ、明日から先どうなる？

世之介は、必死に訴える。

自分の力で生きていける！

微小機械は、狡猾そうな感情を込めて囁いた。

？
お前は？伝説のガクラン？で強力になった。そうじゃないか？
ガクランを身に付けていたくはないのか？

蠢く微小機械の結節点は集合し、仮想空間にある形を作り始めた。
世之介は大きく目を見開いた。
何を、俺に見せようとしている？

囁き

結節点が集まり、密度が濃くなり、ある形に纏まっていく。世之介は愕然となった。

微小機械は茜の姿を取り始めたのだ。

世之介さん……。

茜の瞳が、熱っぽく世之介を見詰める。唇が半ば開き、目を閉じ、頬がほんのり紅潮した。

キスして……。

世之介の全身が、かーっと熱くなる。微小機械が囁いた。

？伝説のガ克蘭？を身に着けている限り、世界はお前のものだ。それに、この娘も　娘が欲しくはないのか？　女という女は、お前の奴隷となるんだぞ！

マッド・マックス

微小機械は、狂送団の首領の妻たちの姿を見せてきた。数人、いや数百という女たちが、世之介に向けて色っぽく身体をくねらせ、おいでおいでをしている。

目を背けるのは不可能だった。目を閉じようとするのだが、微小機械は仮想空間での世之介の随意反応を制御し、瞼を閉じるという簡単な動きすらさせてはくれない。

対抗できるのは、意志の力のみ！

世之介は全身全霊を込めて反発した。

俺は 伝説の ガクランなど 欲しくはない！

まるで決壊した奔流を、素手で塞ごうとしているような、頼りない抵抗であった。が、世之介はありったけの意思の力を振り絞り、微小機械の誘惑に耐えた！

僅かではあるが、世之介の腕が動き始めた。指先が、ガクランの釦に掛かる。

指が釦を弄った。

あと少しだったのに……。

微小機械が、悔しそうな溜息を漏らした。

世之介は解放された！

再会

ぼかつと意識が戻り、世之介は制御室の床に寝そべっている自分を見出す。のろのろと起き上がり、周りを見渡した。

微小機械は　影も形もない。辺りは森閑として、静寂が支配している。

自分の身体を見下ろし、世之介は番長星に始めて到着したときの学問所の身なりに戻っていることに気付いた。

立ち上がった世之介は、制御室の計器の硝子板に、自分の顔を映し出した。

髪の毛が元に戻っている。金髪のリーゼントから、真つ黒な普通の髪型である。ようやく世之介は、ガクランから解放された実感が込み上げてきた。

ガクランは？　きよろきよろと見回すと、あつた！

なぜか壁にハンガーで吊るされている。皺一つなく、汚れもなく、新品同様である。

もう一度、着てみないか？

ガクランは世之介に向かって、誘いかけるようであつた。ぶるつと世之介は頭を振り、キツパリとガクランの誘惑を払い除ける。それでもハンガーを手に持ち、そのまま持つて歩き出す。

廊下を歩くと、横穴が開いている。多分、助三郎と格乃進が抜け道を作るために掘り開いた通路だ。大急ぎで掘り抜いたため、足下はごつごつとして歩き難い。

外に出ると、鉄錆色の夕空が広がり、校舎の裏手に出ていた。振り返ると、【リーゼント山】が、どっしりと居座っている。

外に出た途端、世之介の爪先が何か柔らかいものを踏みつけていた。

「ふんぎゃっ！」

奇妙な悲鳴を上げ、踏みつけられた相手が、もぞもぞと身動きをしている。

がらがらと小石を跳ね除け、立ち上がったのは、ビッグ・バッド・ママの巨体であった。

「ふいーっ！ 酷い目に遭った……」

呟き、顔をぶるんぶるんと何度も振った。砂利がばらばらと全身から振り落とされる。

と、そこでビッグ・バッド・ママは、世之介に気付いた。

「なんだい、お前は」

口がポカンと開き、両目が飛び出た。瞬間的に敵意を剥き出しにする。

「あつ、お前は？伝説のガ克蘭？を着ていた、拓郎ちゃんを苛めた奴だね！」

欲望

「ママ……」

頼りない声に、もう一人の人物がビッグ・バッド・ママの隣で身動きする。狂送団の頭目である。母親は歓声を上げた。

「拓郎ちゃん！ 生きていたのかい！」

顔一杯に喜びを溢れさせ、がばつと息子を抱きしめる。

狂送団の母親は、ジロジロと世之介の姿を見つめた。視線が、世之介の手に持っている？伝説のガ克蘭？に集中した。

「お前の手に持っているのは？」

世之介は答えた。

「ああ？伝説のガ克蘭？だ」

母親は囁くように尋ねる。

「何でお前が手に持っている。着ていないようだね？」

「ああ、俺には要らないものだ。もう、着ることはないよ」

母親の瞳が貪欲さを剥き出しにした。

「そつかい……要らないのかい……それなら、あたしにお寄越しっ
！」

叫ぶなり、太い両腕を伸ばし、世之介の手からガ克蘭を引っ手繰った。

「拓郎っ！　これが？伝説のガ克蘭？だよっ！　さあ、お前が着るんだ！」

「ママ？」

拓郎と呼ばれた狂送団の頭目は、ぼけつとした顔で母親を見上げた。母親は苛々と足踏みを繰り返した。

「それを着れば、お前が？伝説のバンチョウ？になれるんだ！　さあ、着るんだ、今！」

「俺が……？伝説のバンチョウ？！」

頭目の瞳も、欲望で煌く。いそいそとガ克蘭に袖を通した。上着を羽織り、ズボンに足を通す。

頭目の背丈は、世之介より頭一つ低い。しかし、ガ克蘭は、ぴったりと頭目に丈が合っていた。きっとガ克蘭は着用者の身体つきに自動的に適応するのだろう。

身に着けた瞬間、頭目の背が急に伸びたようだった。すつくと背筋が伸び、両目がぱつちりと開く。頬に赤みが差し、全身に力強さが漲った。みなぎ

世之介は驚いた。これが？伝説のガ克蘭？を着用していたときの自分か？

まさに別人である！

母親が囁く。

「どうだい？　どんな気分だい？」

変身

ちらりと頭目は母親に目をやる。頭目の視線に、母親は、ぎくつと身を強張らせた。

「な、なんだい、その目は？」

「お母さん……」

頭目は静かな口調で話し掛けた。母親は驚きのあまり、大声で叫んだ。

「お母さん、だってえ！ お、お前、そんな呼び方、一度だってしなかった……」

頭目は、ゆるゆると首を振った。

「お母さん。僕は今まで、とんでもない間違いを犯していたことに気付いたんだ。僕は今、生まれ変わった気分だよ」

頭目は喋りながら、手を挙げ、自分の髪の毛をさつと撫で上げた。今までぼうの蓬髪だったのが、いつの間にか、きつちりとした七三の横分けになっている。

「狂送団、なんて馬鹿な集団の頭目に収まって、今までさんざん他人に迷惑の掛け通しだったことに気付いたんだ。もう、あんな馬鹿な真似は金輪際やめる。これから、僕は、しっかりと更生して、立派な人間になると約束するよ。お母さんにも苦勞は掛けない」

「偉いっ！」

不意に聞こえてきた声に、世之介と頭目は振り向いた。

感動

そこには変身した いや、元の姿に戻った 風祭が立っている。ひよろりと痩せていて、抜けるように色白の風祭は、賽博格の身体を持っていた頃とは別人である。

風祭の頬は、興奮に真っ赤に火照っていた。

「さつきから聞いていたけど、君の言うことに、僕は全面的に賛成するぞ！ 僕も今まで、馬鹿な真似ばかりしていたからね。今日から生まれ変わった気分で……いや、本当に生まれ変わったんだけど……。兎に角、僕も今日から番長星を変えるために、一生懸命、頑張るつもりだ！」

頭目と風祭は歩み寄り、がっしりと手を握り合った。お互い、感動で両目から滂沱と涙を溢れさせている。

「何て気分の良い言葉を聞いたんだ！ ぼ、僕は物凄く感動しているぞっ！ 番長星を変える！ そうとも、それ以外、僕らの目標は、ありっこないんだ！」

頭目は鼻水を啜り上げつつ、叫ぶ。風祭も、しきりに「うんうん」と大きく頷いている。

「番長星を変えるって、本当かい？」

また妙なのが出てきた……と世之介が視線をやると、現れたのは「セイント・カイン」の五人だった。

五人は校舎の裏手にある出入口からのこのこと出てきて、風祭と頭目の話を聞いていたのだろう。リーダーと思しき、真っ赤な制服

を身に纏ったセイント・レッドが、つかつかと二人に近づく。

「我々セイント・カインの五人の使命は、番長星から暴力で総てを解決しようという風潮を無くすことにある。君らも同じ気持ちだと見える。良かったら、協力してくれ！」

「おお、同志よ……」

「何て感動的……」

風祭と頭目は顔を真っ赤に染め、次々とセイント・カインの五人と握手を交わした。

「さあ、今日が番長星の变革の始まりだ！」

朗らかに歌い上げるような口調で、セイント・レッドが宣言する。
風祭と頭目は満面に笑みを浮かべ、両目をキラキラさせ頷いた。

展望

「ちょっと……どうなってるんだい？」

頭目の母親、ビッグ・バッド・ママは不満に唇をへの字に曲げ、唸るように呟く。ギロリと物凄い視線で世之介を睨みつけた。

「息子をおかしな考えにしたのは、あんただね！ あの？伝説のガ克蘭？に、何か仕掛けたんだろうつ！」

世之介は肩を竦めた。

「さあね。俺は、ガ克蘭を必要ないと言った。欲しがったのは、あんたらだ。結果については、俺の責任じゃないよ」

「ぐるるる」と、母親は凶暴な野良犬のような唸り声を上げる。両手が掴みかからんばかりに、持ち上げられた。

やる気かな？ と、世之介はほんの少し、身構えて見せた。

と、ふつと母親は肩の力を抜いた。世之介を睨みつけていた視線を外し、顔を背ける。

「やめとこ。あんたには、勝てそうにないからね……」

忌々しげに呟き、背中を見せ、がっくりと頂垂れる。ガ克蘭を身に着けていない世之介の、何が母親のやる気を削いだのか？

世之介は自分の感情を探った。思い出してみる。ガ克蘭を身に

着ける自分の気持ちを。

思い出せない！

いや、というより、ガクランを身につけていないに関わらず、世之介の感情はまるきり変化をしていない。さっきだって、母親の挑発を受け止め、いつでも喧嘩ができるよう、身構えていた……。

そうか！ 自分はもう？ 伝説のガクラン？ を本当に必要としていないんだ！ 自分の中に？ 伝説のガクラン？ は確乎として存在しているのだ！

新たな展望が開け、世之介はいつまでも呆然と立ち尽くしていた。

焚き火

校舎の裏手から校庭へ出る。すでにとつぷりと日は暮れ、見上げると光帆ライト・セーブルの月が出ている。

校庭から楽しい笑い声が聞こえ、世之介は首を傾げた。

見ると校庭の真ん中に焚き火が置かれ、その周りでは数十人の老若男女が輪になって座り、和やかな雰囲気談笑している。

どつと笑い声上がり、そちらを見ると、なんとイッパチが手足を可笑しい角度に動かし、奇妙奇天烈な踊りを披露している。

ひょこひょこ腰をくねらせ、手足をあらぬ方向に突き出し、顔はポカンと呆けたような表情である。見ているだけで、笑いが込み上げてくる。

イッパチの踊りを見物しているのは、さっきまで助三郎と格乃進に向かつて襲い掛かってきた連中だ。見物人の一番前には、茜が陣取り、イッパチの剽軽な仕草に、腹を抱えけけらと高い声を上げ、笑っていた。

校舎の近くに【バンチヨウ・ロボ】が、ずんぐりとした巨体を休めている。ロボの周りには物見高い群衆が取り囲み、勝又勝が熱意を込めてロボの性能を説明していた。

集団の中に、光右衛門と助三郎、格乃進が座っているのに気付く、近寄る。三人の後ろには、木村省吾が虚ろな顔付きで、騒ぎをじっと見詰めていた。表情は虚脱していて、世之介を認めても、何の感情も浮かばない。

「おお、世之介さん。ガ克蘭を脱いで、元の姿に戻ったのですな！」

世之介の姿を認めて、光右衛門が話し掛けてきた。世之介は頷き、尋ねる。

「この騒ぎは？ えらく陽気だけど」

光右衛門は肩を揺すって笑い出した。

「突然、ガ克蘭、セーラー服を身に着けた人間の攻撃衝動が消え去ったのですよ！ 皆、自分が何をしていたのか、さっぱり判らないという様子でしたな。世之介さんの活躍だと推察するのですが、そうですね？」

最後に念押しするように見詰める。世之介はあやふやに頷き、微小機械の構築した仮想世界での出来事を話した。

が、茜の幻影のことは黙っていた。光右衛門は大いに納得した様子で、何度も大きく頷いていた。

救援

「さもあらん！ 世之介さんが微小機械どもに、もう番長星での役割は終わつたと説得した結果でしょう。番長星の微小機械の生産活動は、今夜を限りに終了したのです」

不意に省吾が顔を挙げ、叫んだ。

「それでは番長星の生活は、今後どうなります？ 二輪車、四輪車は勿論、生活必需品のほとんどは、微小機械の生産で賄ってきたのに。それが突然、なくなってしまったのですぞ！」

光右衛門は厳しい顔付きになった。

「微小機械に頼りきりだったのです！ 生活必需品が欲しければ、自分で作り出すべきです！ 地球の人間は、皆それをしております。番長星でも例外ではない。なに、幕府の援助があれば、番長星でも通常の生産活動が再開するには、そう長くは待たなくても宜しいでしょう。ほれ、その援助の先陣が、やってまいりましたぞ！」

光右衛門が立ち上がり、杖の先を夜空に向けて突き出した。

杖の指し示した方向を見た世之介は、思わず「あつ」と叫んでいた。

夜空に浮かんでいたのは、三つ葉葵の紋所を横腹に浮かび上がった巨大な宇宙船であった。

七十六代目

宇宙船は空中に浮かんでいる。あまりに巨大すぎ、直接の地上着陸は不可能なのだ。三つ葉葵の紋所が描かれている、つまり幕府の御用船である。

宇宙船の船倉扉が開くと、内蔵されている連絡船シャトルが斥力装置を煌かせ、ゆつくりと降下する光景が見えた。

連絡船は「ツツパリ・ランド」を真っ直ぐ目指しているようだった。

「ど、ど、どうして……？」

驚く世之介に、助三郎が笑いながら説明をした。

「御老公様が、木村省吾に命じて、超空間通信機を使わせたのだ。御三家のみが使用できる優先暗号を使用すれば、幕府の御用船を呼び寄せることが可能だ。ま、滅多に使用はしないがな。今回は特別という訳だ」

「へえ……。いつでも、ね。爺さん、あんたこんな隠し玉を持っていて、一言も話しちゃくれなかったな」

光右衛門は、すっ呆けた顔付きで、あらぬ方向を見ている。しかし頬には、うずうずと笑いが込み上げているようだ。

「老中に命じて、番長星にはすぐさま、様々な援助が受けられるようにしましょう。大丈夫、番長星の人間は、一人立ちができるようになりますぞ！ 省吾さん！」

呼びかけられ、省吾は「えっ？」と顔を上げた。

「番長星の事情をよく知っているのは、あなただけです。どうです、省吾さん。あなたが番長星の明日のため、骨を折る気は？」

省吾はすつくと立ち上がり、頷いた。両目には熱意があつた。

「勿論です！ その仕事、身命を架けてやり遂げましょう！」
「結構、結構！」

光右衛門は上機嫌に高笑いをした。

連絡船が着地し、扉が開き、地上に通路が接地して内部から数人の搭乗員が出てくる。搭乗員の先頭に、一人の河馬のように太った男が転げるように出てくると、両足を必死に回転させ、世之介目掛けて近づいてくる。

世之介は呆れた。

駆けてくるのは、世之介の父親、七十六代目の但馬世之介であつた！

土下座

「世之介！」

「お父つつあん！ どうして？」

「御老公様の通信で、お前がここにいることを知らせて貰ったのだ。大慌てで、御用船に飛び乗って、この 番長星 まで来ることができた！ 心配したぞ！」

一息で捲し立て、父親は太った身体を折り曲げ、苦しそうにぜいぜいと荒い息を吐き出した。

ちらりと世之介の背後に立っている杖を手に持った老人を見て、顔色を変えた。

「これは、御老公様！」

ぺたりと膝をつき、土下座する。光右衛門は膝を下ろし、優しく肩に手をやった。

「但馬屋さん。お立ちなさい。わしはこの場では、ただの越後屋の隠居。微しのびの旅でございますからな、そのような大袈裟な真似は迷惑ですぞ！」

「へえ……？」

ゆっくりと父親は顔を挙げ、立ち上がる。光右衛門は思い出した、という顔付きで話し掛けた。

「そういえば、息子さんに十八の春を迎える前に初体験を済ませなければ廃嫡、勘当を申し渡すと申し渡したそうな」

光右衛門の指摘に、父親は顔を真っ赤にさせ、恥じ入った。

「そ、それは……」

「なんでも、息子さんは十七になっても尻の蒙古斑が消えず、初体験を済ませないと消えないと聞きましたが、本当ですか？」

父親は巨体を大いに縮めて見せた。

「は、それが但馬屋代々の体質でございまして……」

「見たいですな。その青痣を」

光右衛門の言葉に、世之介は仰天した。振り返ると、光右衛門は大真面目であるが、背後の助三郎、格乃進は笑いを堪えるのに必死だ。

大人

世之介は怒りに顔が火照るのを感じた。

「そうかい…… そんなに見たいなら、見せてやろうじゃないか！」

勢いで、その場で尻を向け、袴を脱ぎ去り、尻ばしやりをして見せる。ぐいっと禪を降ろし、尻を突き出す。

「さあ、これが俺の青痣だ！ とつくりと拝みやがれっ！」

しいーん、と静寂が支配する。
ぼつり、と光右衛門が呟いた。

「どこにあるのです？ 青痣など、見えませんが」
「えっ？」

世之介は急いで振り向く。父親の七十六代目・世之介は目を丸くしている。

「お父つつあん？」

父親は、ぶるぶると首を忙しく振った。

「無い！ お前の青痣が消えている！ お前、いつ初体験を済ませたんだ？」

父親の目が、その場で呆然と立っている茜に向かった。「ははあーん」と一人で納得した顔つきになる。

「そうかい、そういう次第かい…… お前も、ご先祖様に恥じず、手が早い……」

「ちょ、ちよつと待ってくれ！ あたしや絶対、そんなこと……」

話題の茜は目を怒らせた。ある考えが茜の脳裏に浮かんだようだった。

「あたしも聞きたいわ！ まさか、狂送団の女たち……！」
「馬鹿を言っな！」

世之介は絶叫した。急いで衣服を元に戻すと、両手を広げ喚く。

「俺は、ずつと？伝説のガクラン？を着ていたんだ！ 脱ぐこともできなかった！ そんな真似、出来るわけない！」

光右衛門が「かつかつかつ！」と乾いた笑い声を上げた。

「世之介さんは、大人になったのです！ 初体験をしようが、しまいが、立派な大人に番長星で成長したので、青痣が無くなったのでしょう。但馬屋さん、世之介さんは立派な跡継ぎになりました。違いますかな？」

商売

じわじわと理解が父親の顔に差し上った。世之介を見詰め、話し掛ける。

「世之介、お前、但馬屋に帰るんだ！ お前は立派な跡継ぎとなつた……」

世之介は、即座に返答する。

「厭だ！ 俺は、家には帰らない！」

父親は仰天した。

「何を戯言を……。お前、本気かえ？ 家に帰らず、何をするつもりなんだ？」

世之介の視線が、茜の視線と絡み合う。

「俺も番長星に留まりたい！ そして番長星の人間が一人立ちできる手伝いをするんだ。お父つつあん。ついては頼みがある」

父親は、ごくりと唾を飲み込んだ。

「頼み？」

世之介は笑った。

「そうさ。お上は番長星に援助をするそうだ。しかしお上だけでは心もとない。但馬屋の財力なら、充分な援助が可能だ。援助だけじゃない。これは新しい商売のタネになるんじゃないのか？」

とつくりと考え、父親は頷いた。表情が、商売人のものになっていた。

「そうだね……。お上のお声掛かりとなれば、出入りの商人だって一口噛むのは当たり前だ。それに但馬屋の一番乗りが叶えば……」

につこりと笑顔になった。ぽん、と自分の胸を叩き請合う。

「判った！ 但馬屋、番長星への立ち直り事業に一番乗りをするぞ！」

「目出度い、目出度い！ これで万事、万々歳と相成りました！
ついてはお手を拝借……」

イッパチが、しゃしゃり出る。全員、笑いながら一本締めを用意をした。

「よーい！」

イッパチの合図で、しゃんと一本締め。

指導

がながんがん！ と自棄のように鉄槌^{ハンマー}が二輪車の部品を叩いている。ぐわん、と奇妙な音を立て、部品が折れ、床に転がった。

「あーっ！ また、やっちゃみたい！ 馬鹿、馬鹿！ いってえ何^{ニヤン}度、しつこく言ったら判るんだ。部品を叩くときは、優しく叩くんだって言ったるう？」

甲高い声が作業場に響き渡る。声を上げているのは、子猫そっくりの技術者である。

子猫に叱られているのは、不器用そうな手つきで工具をいじっている若者。頭はつるつるに剃り上げている。

隆志であつた。子猫に頭^こなしに叱られ、隆志は不満そうな顔付きである。

子猫は、とことこと近寄ると、上目^ごしに隆志を見上げる。

「ニヤンだ、その顔は？ 何か文句あるのかニヤ^{ニヤン}？」

隆志の顔が真っ青になった。

「い、いいえ、そんな……」

「舐^{ニヤ}めんなよ……」

捨て台詞を吐くと、とことこと、その場を離れていく。

世之介はその場の光景を目にして、笑いを堪えるのに必死だった。笑ってはいけない。隆志はこれでも真面目にやっている。そんな世之介の顔を見て、隆志は恨めしげな表情を浮かべていた。

番長星のあらゆる場所で、同じような光景が繰り広げられていた。幕府の主導による、番長星住民の独立生産計画である。

ナノ・マシン 微小機械の生産が消滅し、住民の生活必需品を賄うため、ロボット 傀儡人が一部だけ肩代わりをしていたが、全面的な生産拠点を整備するため、微小機械の工場を監督していた子猫の杏菊組^{アントロイテ}偉童が技術指導を任されたのだ。

一本道

「そんな目をしない！　しっかり言いつけを聞かないと、工場を任せられないぞ！」

世之介の隣に茜が顔を出し、隆志に声を掛けた。隆志は「けつ」と肩を竦めた。

茜と連れだつて、世之介は作業場の外へと歩いていく。歩きながら茜に話し掛けた。

「学問所はどうだい。楽しいか？」

茜は、ちよつと首を傾げた。

「どうかな……。楽しいというより、吃驚するばかりね！　あたし、番長星以外の星について、全然、なーんも知らなかったわ！」

幕府の主導で、番長星には次々と学問所が設置されていた。茜も新たに設けられた学問所に通うようになっていたのである。

二人は両側に農地が広がっている一本道を歩いている。時々、道路を猛速度で二輪車や四輪車が通りすぎた。

茜は世之介の前に飛び出すと、くるりと振り向き、真っ直ぐに見詰めてきた。

「あたし、番長星から外に出たいわ！」

「え？」と世之介は茜の顔を見詰め返した。

茜はキラキラとする瞳で、世之介を見詰めている。

衝撃波

「世之介さんだって、番長星に来るはずじゃなくて尼孫星^{アマゾン}ってところに行くつもりだったんでしょ？ あたしだって、他の世界を見てみたいわ」

尼孫星の名前が出ると、世之介はどうにも居心地の悪い気分になる。そわそわして、いたたまれなくなるのだ。

もちろん尼孫星は女だけの星で、男となればどんな男でもモテモテの天国のような星であるというのが、もっぱらの噂であるが……。世之介は一度は尼孫星を目指したのが、今では夢のようだ。

「ね、あたし他の星に行ってみたい！ 世之介さんだって、いつまでも番長星に留まるつもりはないんでしょ？」

「うーん……。そりゃあ、ねえ……」

まともに尋ねられ、世之介は絶句してしまった。

茜は、今まで番長星以外の世界について、自分が何一つ知らないことを悟ったのだ。多分、他の学問所に通う人間たちも、同じ思いが湧き上がっているのではないか？

世之介は、につこりと笑い返した。

「そうさ、俺だっていつまで番長星にいるわけじゃない。番長星がちゃんと自立できる目処が立ったら、別の星を巡る旅に出たいと思っているよ。あのご隠居のように」

「やっぱりね！」

茜は手を叩いた。

世之介は空を見上げた。近ごろ、番長星の空には、地球からの宇宙船が多数立ち寄るようになっていて。今も一隻の宇宙船が大気を切り裂き、着陸してくるところだ……。

「茜、俺と一緒に、銀河を旅しようか？」

世之介の言葉に、茜は真っ赤になって顔を逸らす。が、すぐ顔を戻し、真剣な表情になった。

「それ、プロポーズ？」

答えかけた世之介の言葉を、着陸してくる宇宙船の、大気を切り裂く衝撃波が掻き消した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0919s/>

ウラバン！～SF好色一代男～

2011年7月26日10時45分発行